

ロ、五種の寶物 これも佛典よりとる。  
 ハ、天人の墮落 丹後風土記のいかや姫（井上巽軒博士が「比沼山の歌」にとられたもの）・近江風土記の余吾の天人（坪内逍遙博士が「墮天女」にとられたもの）攝津傳説、交野の天の川（曾丹集にあり）  
 ニ、天人の昇天 漢武内傳よりとる（藤岡博士の説）……漢の武帝仙術を好み柏梁臺を造つてその術に耽る。西王母下つて武帝に五真圖靈光經を授け上元夫人も六甲靈飛十二事を授けた。武帝これを秘藏してゐる中火災に遭つて皆焼失した。  
 （愚考、寧ろ賀茂神社縁起の別雷命昇天の男女性の轉換と見る方近くはなからうか？）  
 ホ、衆男一女を争ふこと

- 1、上代掠奪結婚の遺風
- 2、勝鹿の眞間ノ手兒奈、萬葉三、山邊赤人、同九、讀人不知（或説高橋蟲磨？）同十四、下總歌
- 3、櫻の兒、二人の男に思はれて自刺す、高市郡大久保村娘子塚に葬むつた……萬葉十六
- 4、靈兒、三人の男に云ひ寄られ耳梨の池に身投げ 萬葉十六
- 5、菟會處女 菟原男と智努男に慕はれ生田川に身

投げ、處女塚に葬る。萬葉九  
 信をおくに足らぬ話で從來一個の出典と看做されたものは、

一、詞林採葉抄 これに二つ載せてある。  
 イ、當山縁起（當山とは愛鷹山のことか？）  
 昔富士の山麓垂馬の里に竹取の翁があつて明けくれ箕を作つて身過ぎとして居つた。處が或日竹の中から一少女を得た。容貌端嚴光明照耀、折柄、桓武のみかざが美女を求めしめられた。勅を奉じて田村屋は東に下りこの家に來泊した。夜に入ると不思議の光がさすのを見それが少女の肌から耀くのだと知つて歸つて斯と申上げた。その間に少女は般若山の金輪に入つたので帝も後を慕つて金輪へ入らせられた。後に少女は飼犬明神、翁は愛鷹明神と化身した。  
 ロ、鴨長明巡歴記

昔、採竹翁屋後の竹に鶯の卵を得それから鶯姫が孵りそれを我子として愛育すると光明赫耀あたりを照らし、容貌に百の媚あり見る人腸を斷る聞く者心を動かした多くの公達が執心したがとゞ帝が竹亭で姫と契らせられた。上天之を見て俄に飛車をとばし姫を大空に迎へとつた。その時姫は帝に不死の藥を

「今はとて」の歌とをさしげると、帝も、  
 逢ふことの泪にうかぶ我身にはしなぬ藥も何にかはせん  
 とかへされた。

二、舊本今昔物語卷廿八  
 昔翁竹の中に三寸ばかりの少女を得二度目に行つた時には又竹の中に多くの金を得て富豪となつた。多くの貴公子が言ひ寄ると、姫は之に要求して、

空なる雷  
 優曇華の花  
 打たぬに鳴る鼓

を與へよと云ふ、こんどは帝が聞召してお召しになる姫は實を告げる、帝はそれを信ぜられない、その中大空から迎の天人が来る。

三、國名風土記  
 昔富士山の麓に竹取の翁があつて鶯の卵から一人の姫を得た。處が姫は姫が農事を手傳はぬといつてひどくいぢめた。姫は怒つて富士の頂邊に登つて岩を蹴飛ばし湯を走らかし田をつくる人のところみな焼石と化したので翁姫は逃げて白根が峯に走り家の飼馬は信州駒ヶ峰に走つたが、その馬飼主を忘れず翁姫之を大事に

飼つてやつたのでこの國を「かひのくに」といふ。

四、廣博物志

もろこし義興といふ處に吳堪なるもの若うして地方の吏となり、住宅の附近荆溪に大きな螺を獲て持ち歸る。螺の中から一美女が出る螺婦と名づけて妻にする、上官螺婦の美なき、吳堪を退けて之を奪はうといふので色々の難題を課す蝦蟆の毛の生えたのを持つて來い。鬼の臂を持つてこいななど……その都度吳堪は螺婦の助けによつて、要求通りの物を齎した最後に「ことさへぐやうに禍ばかりを出せ」といふ。螺婦に語ると一疋の火喰犬を連れ行きなさいといふ。それを持つて行くと上官が「これはたゞの犬ではないか」と云つてゐる中にその犬があたりの火を喰つてその火をあたり一面にはき散らして界限は見る／＼中に類焼したといふ。

五、後漢の安世高譯に係る奈女者婆經  
 昔維那離國王苑の奈が美しかつた。王特に信任の臣梵士居士にその一株を分ち與へられた（梵士居士は財富みて聰明傳達才智衆に越ゆるの士とある）居士之を培養するのに百牛の乳を絞り、又一牛の乳を煎じて醍醐味としてそゞぎかけた。奈は美事に成長して一枚の長さ七丈に達した、で梯子をかけてのぼつて見ると梢上

池あり、池中衆花開き、花下奈女年十五の美しきが座して居る。乃ち養うて娘とした。七王子が来て妻にくれよと懇願した、居士がいふ「これは佛の授けられた少女で我が娘にして我意に任せられないのだから皆様自由により寄られよ縁あらばその方に嫁がせませう」と、そこで七王子が熱心に奈女にかたうたが皆拒絶せられた。中に一人萍莎王と云ふは尙も熱心があつて夜に入り密かに奈女の許にとつて返し遂に之と契つた。その間に出来た兒、即ち後來名醫として聞ゆる耆婆である。

以上種々なる説話はなるほど竹取物語とよく似たところがあるが大抵は偶合であつたり、竹取以後竹取に模倣した牽強附會であつたりして、どうもこの物語作者が事實着想の材にしたものとは思はれないといふことに一致して居る。

三、年代作者、之にも異説がある。

I、天曆時代源順の作だといふ(古説)併し源順は、うつほ物語や落窪物語の作者にも擬せられ、何でもこの時代作者不明の書の作者のはきよせのやうに推想される人氣學者であつたからあてにはならない。殊に上述三物語は誰が見ても同じ人の筆致ではない。

2、延喜以後の作なり(本居宣長、玉の小櫛)

3、延喜以前(田中大秀、竹取物語解)

4、貞観以前 松浦宮物語巻末に「貞観三年四月十八日染殿の西の陣にて書き了りぬ」とあるのに一方では通常竹取物語を「物語のおや」といふから竹取はこの松浦宮物語以前即ち貞観三年以前の作であるといふ。三段論法では正しいが前提の松浦宮物語は實は鎌倉時代の作で右の奥書は誤であるといふのが通説になつて居る。

5、弘仁三年以後同十四年頃まで(藤巻櫻軒氏竹取物語新釋)十四年といふ切はどこから思ひついたかといふに弘仁十四年四月に大伴御行が天皇の御諱にふれて「大」の稱呼を削られたので以後大伴氏はたゞ伴氏と稱した。この物語の人物はその「伴氏」とならぬ前の稱呼だから弘仁十四年以後の筆さまではない。次に弘仁三年といふ始めの切りは本文に「六衛のつかさ」とある。その六衛のおかれたのが弘仁三年だからといふので随分考へた説であるが「六衛のつかさ」といふ語はおかれて以後なら弘仁三年に限らず、いつの時代にも云ひ得る語なり。史實の人物として阿部御主人・石上麻呂・大伴御行などが入つて居てもさ

補註・入江昌意の頭書・田中大秀の竹取物語解の三つが収めてある)

たけのさとうたぜんしふ 正岡子規竹乃

里歌全集

齋藤茂吉・古泉千樫の共編で、故正岡子規が明治三十年から卅五年までの味を集録したもので、短歌千三百四十一首・長歌十六首・旋頭歌十二首を収め、子規の歌集としては一番よく整つて居る(子規遺稿中の「竹の里歌」アルス名歌選中の「正岡子規選集」よりは歌數も多い)巻頭に年代別の細い目次があり、巻末に古泉氏の巻末小言一八頁が添へてある(四六判三二六頁、大正十二年三月三日、アルス)

たけのやしゆじん 竹の屋主人

くわうそん「饗庭篁村」を見よ。

たけもとさ 竹本座

固と大阪操人形の劇場で貞享三年(二三四六)竹本義太夫が開いた。位置は今の道頓堀浪花座の南手カフエーホーリスターの邊であつた。開場當時は義太夫の外ソキに竹本頼母・多川源太夫があり、人形遣ひに吉田三郎兵衛・辰松八郎兵衛があり、三絃に竹澤權左衛門があり、そして座附作者に老近松がありして天才揃ひの綜合藝

う一々確實に對照したわけではなく唯讀者をして「ありさうな名だ」と想はせればよろしい譯で、窮屈に史實によつて解くと角を矯める嫌がある。

6、文體と記事から察して延喜より少し以前の作と想はれる。故藤岡博士の説でこれが一般に信ぜられて居る。

四、批評

一、構想の妙 短篇物語だから別に工夫をこらさずとも冗漫の失は免れるものを作者は色々工夫して變化をつけ五人五色の失敗と落ちとをとらせた。加之天女の天女たる崇高を寫しては王侯の貴も之を如何ともする能はずとした。對照もよし昇天の間際を寫す漸層法もうまくいつて居る。

二、秀句趣味を多分に發揮して居る。よばひ・はちをすつ・あへなし・あなたへがた・かひなし・ふじの山など國民の洒落性を遺憾なく表したものだ。

三、行文は簡潔古雅

四、本邦假名文の鼻祖であり、小説・短篇小説・滑稽文學の魁祖でもある。

五、註解 澤山にあるが特に左の一書がよい。國文註釋全書第十三(この中には小山儀の竹取物語抄

術の殿堂とも謂ふべき偉觀を呈した(新群書類従第六竹豊故事)尙「豊竹座」を見よ。

ださいふまうで 太宰府まうで

資料、菅原御傳記・菅神傳・菅家寔錄松五・北野縁起・大鏡二ノ六・大日本史一三三・最鎮記文二六・梅城録二九・廣益俗説辨八ノ一四・和漢三才圖會七二ノ本一八・類聚名物考一ノ五一〇・廣文庫第七册一八七―一九一。

たじやうたこん 多情多恨

尾崎紅葉、廿九年二月の作の小説で、恐らくは彼一代の最大傑作といつてよからう。單調なるべき題材を少しのたるみなく讀者をグン／＼惹きつけて行く處、想も筆も圓熟の極致を示して居る。

物理學校の教師「鷺見柳之助」は妻「お類」を亡つてから婆やの「お光」と二人淋しく暮らして居る。彼は沈鬱で眞面目で無邪氣で正直である。亡妻を慕つて、誰に遇つても「妻が／＼」とお類の話を持ちきつてゐる。學生は彼に「妻が先生」とニツクネームをつけた。お類の母は彼が病氣でも出しちや大變だと思ひ、且あれだけ實意のある人だから何とかして長く親戚になつて貰ひたいと思つてお類の妹のお鳥を連れて留守番に行つた。彼の家は俄に明るくなつた。けれどもそれを彼は

別に悦ぶでもない。不相變「類さんが」を繰返してゐる。婆やは「前奥様のお代りに御坐り下さるとどんなによろしからう」と切にそれを望むが本人は一向そんなことは何とも思つてゐない。彼にはたつた一人の親友がある。「葉山誠哉」と云つて會社員である。極めて快活で通人で柳之助に對しては親身も及ばぬ親切を盡してくれる。で此も彼の身を案じていつそ僕んとこへ來給へと勤める。柳之助にさつては渡りに舟だが一つ嫌なことには葉山の細君「お種」が居る。彼は異性と云つては唯一人のお類が好きなのでそれ以外の女となるとお鳥もお種も嫌ひである。嫌ひと云ふよりは毛嫌ひかする。何となく氣がおけてならない。お種が居ると二口きく處は一口になり、二杯飲むビールも一杯に減る。何故と云つてお種に忌むべき點はない。風采から氣質から家政の手腕から推しては天晴一人前の細君である。實に整つた細君である。柳之助もその點はよく認めて居る。それで居て蟲が好かぬ。此迄度々同居を勧められたがいつも細君が居るから嫌ださ云つた。子供劣りの駄々ッ兒の云ひ分を葉山はちつとも腹も立てずに相變らず三日にあげず慰めに來て居た。凡そ女子と云ふものは柔に温であるべきものである。

「類さん」は十分柔に温であつた。彼は信じてゐる。然るに葉山のお種様は蠟石細工のやうに硬くて冷たい。自分の最も好いてゐる者と正反對である爲に蟲が好かぬ(三〇四)

とも考へて見た。お種の、

年紀は二十五六、髮毛の勝れて濃い類の長い細面の色白の人形的の優しげな顔をしてゐる。秩父銘仙の藍ッばい羽織を着て下は瓦斯糸らしい(三一)

と云つた人で、夫の剽輕ものに比べると氣品が高い。そこで彼女に柳之助を評させるならば、

お類さんのお物故なすつたのを餘り大駭をなさり過ぎるやうぢやございませんか、私は然う思ひます。男子と云ふものは那麼そんなに女々しいものぢやありますまい(三一八)

そのお種に對して夫の誠也が、

お前は昔氣質だから那麼事を言つてゐるのだ。此頃は夫婦の情愛の深いのと綾羅紗の合羽はやが行るのだから爲方がないよ(三二一)

と云ふ。柳之助はヒンドスタンの婦人の繪を出して、「似とるぢやないか……解らんかな妻にさ、死んだ類れいにさ(三二五)」と云つて葉山が「氣の迷だよ」と云つても

いや竹とるよ。竹とるとも、あ、竹とる、餘程竹とるぢやないか(三二六)

とそろ／＼上衣の内ポケットからお類の寫眞を出して對照する。彼が携帯するお類の寫眞は皆で四枚、島田のは見合の時の、後は結婚後の束髮と銀杏返しと圓髻とである。

此三人の調子が終始一貫して日常些細の描寫に精く筆がまはつてゐて、而も柳之助のお種に對する感じが歩一步温かくなつて來るところが此作の面白い點である。柳之助は誠也の切なる勧めを容れてとう／＼彼と同居した。お種は二人の夫に仕へるより以上な身苦勞である。彼女には「保と云ふ男兒もあり夫の老父で可なり手のかゝるものもありするの、又もや柳之助のやうな厄介至極な荷が應柄に居候になつて來た。けれどもお種は夫から云ひ含められて居ることもあるので決して嫌な顔はしない。葉山は又此期間に何とか彼を快活にして再婚の意志を生じるまで心の養生をさせたいと思つて色々心機しんきの轉換法を講じてゐる。或時の如きはお類に似た藝妓を見つけて態々柳之助に引き合はしたりなどもした。而も柳之助の「お類戀し」は依然たるもので此節はその肖像を油畫にして居室の正面に飾つ

ておいて、朝晩起き臥しの度毎は勿論世間噂の何にか  
に一切此油畫に話しかけんばかり。下女のお留が見て  
ふき出した位であつた。或時葉山は留守で語るべき友  
もなく柳之助は獨り居室で泣いてゐる。お種がどうな  
さいましたといふと、

葉山君は善いです。貴方が居つて貴方も善いです。葉  
山君が居るから。僕は此油畫、油畫の外には何も……  
……(五九七)

と又嗚咽する。お種も氣の毒がつて保を寝かせてから  
葡萄酒を持つて来てやつた。

此時彼は一種異様の所感を起して胸の中が漲るやうに  
覺えた(五九九)

お種に對する感じの轉期をとつたのである。  
妙ですな凭して居ると何だか妻が居るやうな心地が爲  
るです。失敬ですけど貴方が妻のやうに思はれるで  
す。大變それで酒が旨いです(六〇〇)

國民生命保險株式會社取締役糸川壽平の園遊會で葉山  
夫婦も招かれて行つた。

(保をさがして)おや此方にも居りませんかとお種は袂  
を啓けたまゝ、内を見込む。其態は繪にでも畫いたや  
うで見違へるほどの美しさに柳之助は思はず軀を捻向

けたのである(六〇四)

實に僕は感服した。  
一番此から行つて日本銀行と背競をして見ようか。  
妻君が實に立派になつた。

いや是は大きに失禮。  
鷺見さん、今日はお人が悪いぢやございませんか。

とお種の方でも感服してゐる。柳之助はなかく眞面  
目でいや本當です。

飛んだ事を仰有る。  
いや實際—大變立派です(六七〇)

其中葉山は社用で長期の留守になつた。柳之助は我居  
室の淋しさに得堪へずしてお種の室に来て讀書をする  
ことも度々あつた。お種は話の片々に後妻を迎へよと  
勧めると、

妻などは要りませんよ。病氣でもしたら貴方にお世話  
して貰ふ意です。僕は貴方を姉と思つとるですよ—實  
際然う信じとる—

お種は可笑しく思つて、  
姉様では酷うございます。妹にしておいて下さい。

と何となく戯談にしてつても柳之助は飽くまで眞面  
目で、

あ、妹でも可いです、何方でも可いです(六二四)

失敬ですけど貴方が妻のやうに思はれるです(六二  
九)

あたりから何でもない細い事が、始終二人を接近させ  
た。もとより二人はごちらもさる不義らしい考はなく  
純粹の親愛—お種から云ふなら寧ろ慈愛で接近したの  
であるが、老人は葉山が歸ると、「こんなことをしておく  
のは間違ひのもとだから柳之助に何處かへ轉宅して貰  
ふ」やうに言ひ含めた。葉山はそれを切出すのに困つた  
が例の圓轉滑脱で割合穩やかに別居を迫つた。「奥様に  
濟まんことをした」と云つて彼も早速下宿した。下宿し

てからも毎日葉山の家を訪れた。そして我居室にはお  
類の油畫とお種が保を連れた寫眞とだけをかけて幅も  
無ければ花もなしに(紅葉全集第二卷六六九—七〇二)

**たゞあき 渡忠秋** 二四四五—二五四一、文化  
八—明治一四、六、一、七十歳

幕末から明治初年にかけての歌人で、桂蔭と號し桂園  
門下の中で殊に名高く、明治に入つてからは一時宮内  
省お歌所にも出仕した。その著に讀史有感集・先入抄・  
研哉抄等があり、家集を桂蔭集と云ふ。

**ただおみ 島田忠臣?**

清和・宇多兩朝の頃の學者にして詩人、田達音とも云  
ひ、清和の御代には少外記にも任じ又伊勢介に任ぜら  
れたこともあるが、學問で藤原基經の知遇を得た。詩  
集に田氏家集(群一三〇)があり、その文は本朝文粹  
に出てゐる。

**ただおん 田達音**

ただおみ「島田忠臣」を見よ。

**ただことうた たゞ言歌**

小澤蘆庵が「和歌は平易率直なことは(たゞこと)を用  
ひて自由に自分の感情を味むべきだ」と云つて自家の  
味に自ら名づけたもので、要するに歌材と歌語との解  
放によつて味まれた歌のこと。

古は大根はじかみにらなすびひるほし瓜も歌に  
こそよめ

とは這般の意をうたつたもの。この歌風は次期の桂園  
派となり、明治の宮中御歌所の歌風と開展した。尙る  
あん「小澤蘆庵」を見よ。

**ただちか 中山忠親** 一七九一—一八五五、天

承元—建久六、六十五歳

平安朝末期の學者で、權中納言忠宗の第二子、夙に和漢  
の學才あり、果進して正二位内大臣に任ず、水鏡・山槐

記・貴嶺問答何れも有名な著述である。

**たぐとも 穂井田忠友** 二四二—二五〇七、

寛政四—弘化四、五十六歳

近世幕末の桂園門下有力の歌人で又考證學者でもあつた。號を蓼莪と謂つて三河の人、初め平田篤胤の門に入り後歌を景樹に學んだ。彼は博識にして殊に考古の學に秀で、命ぜられて正倉院の古文書を整理し、又、埋辭發香・觀古雜帖等の著述がある。景樹も彼の博識を推稱して「忠友は我が書篋なり」と謂つた。

獨のみ忍べばさびし奈良山のむかしの春を誰にかたらむ

ぬさ給ふ二荒山のほととぎす初音や神のかしこまりなる

くれ竹のうつほ柱に五月雨のよこもる音のたえぬ頃かな

螢とぶ堤のうばらかをりきて風面白き夜半にもあるかな

くむ人の少なきほど知られけりかしの葉しづむ山の井の水

長崎に來たるえみしが軍艦とく吹きやぶれ秋のはつかぜ

生きながら苔に埋るゝたましひのあるかひもなき人のかくれが(閑居苔深)

**たぐのり 平忠度** 一八三四—一八四四、承安

四—壽永三、四十一歳

平清盛の弟で白河・堀河・鳥羽の三朝に仕へ、檢非違使左衛門尉・刑部卿・陸奥守等に任じ、源平争鬪の難局に際し、富士川に栗藪谷に度々戦功を顯したが、時非にして遂に一の谷の合戦に岡部忠澄の爲めに討死した。彼は又文雅風流の趣味深く、早くより和歌を藤原俊成に學んだ。

千載集、

さどなみやしがの都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな

の一首にまつはる哀話「野もせにすだく」の艶話。別れ路を何かなげかむ越えてゆく關もむかしの

あと、思へばの悲歌。

行きくれて木の下かけを宿とせば花やこよひのあるじなるらん

の雅味、皆人口に膾炙して居る。その咏千載(一首)・新勅撰(一首)・玉葉(四首)に入り、家集に忠度朝臣集

(群二五七、九、八六七—八七一・續國八四九—八五二)がある。

**たぐひら 大江匡衡(江吏部)** 五一三—一六

七二、天曆七—長和元、六十一歳

維時の孫、重光の子、圓融・花山・一條の三朝に仕へ文章博士・東宮博士・侍從等になり歌も詩も文も上手であつた。歌は後拾遺・新古今・續古今・新續古今・後六々撰等に載り又家集に大江匡衡集一卷(續類四三九、一六ノ上二四九—二五五)あり、詩文は本朝文粹・本朝麗藻・朝野群載一、二、五、九、一三、三十五文集等に載り、又詩集には江吏部集三卷(群一三二)がある。

**ただひら 藤原忠平(小一條太政大臣 貞**

信公) 一五四〇—一六〇九 元慶四—天曆三、七

十歳

關白基經の男で宇多・醍醐・朱雀の諸朝に仕へて關白太政大臣となり、政治上に於ける手腕も大した人であつたが歌文の才にも秀でて後撰(六首)以後の諸勅撰にとられ、貞信公記、一名貞記(歴代殘闕日記卷八・國刊一期續々群五)・清涼記五卷・貞信公教命一卷等の著がある。

**たぐふさ 大江匡房** 一七〇—一七七一、長久

二—天永二、七十一歳

又江帥ともいふ。平安朝末期の學者にして詩人、歌人且つ故實家、幼より穎異、四歳書を讀み、八歳漢史に通じ、十一歳詩を賦し、長ずるに及んで學和漢古今に通ぜざるなく、後冷泉・後三條・堀河の諸朝に歴仕し、參議・中納言から果進して正二位大藏卿となる。歌は詞花・千載・新古今等に各十數首採られ、詩文は續本朝文粹に出で、富士山記・江家次第・江記・江頭文集・江談抄等の著がある。源義家が彼に兵法を學び後三年の役に雁行の亂れを見て伏兵あるを察し、爲めに大勝を得たことは有名な逸話である(村田峯次郎氏編長周叢書中、近藤芳樹編大江匡房卿傳)

**ただふさ 藤原忠房?** 一五八〇、?—延長六

興嗣の子、醍醐の朝につかへ、四位右京大夫に到る。

中古三十六歌仙の一人で、古今・後撰・拾遺・後六々撰等に採歌せられ、別に藤原忠房集がある。

**たぐみ 壬生忠見**

古今集撰者忠岑の子、幼名多々、後忠實と云ひ更に忠見と改めた。醍醐の朝御厨子所に仕へ村上朝に攝津大目となり六位に叙せられ攝津に住み、終身貧乏に苦しんだが咏歌は天性の達者で、即興に優れたものがあ

つた。幼時禁裏より召しありしも「乗物がありませんで」といふと「竹馬に乗つてでも参れ」との仰せに對して、

竹馬はふしかげにしていと弱しいま夕かげに乗りて参らむ

と、たゞその咏歌によりて朝廷に召されたので、恐悦のあまり亡き父を懐うて、

君が世にさかゆくべしと思ひせばとはましものをただみれの道

又父の歌集を奉るまては、  
言の葉の中をなくくもとむれば昔の人にあひ見つるかな

彼一代の秀味は、

秋風の關吹きゆる度毎に聲うちそふる須磨の浦浪

戀すてふわが名はまだきたちにけり人しれすこそおもひそめしか

後のは天徳歌合の二十番に平兼盛の「物やおもふさ人のとふまで」と伍して敗をとり、憤悶の餘り病を發して死んだと云ふ（併しこれはあてにならぬ）後撰・拾遺・新古今・續後拾遺・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新

千載・新拾遺・三十六人撰等に出てゐる外に、家集壬生忠見集一卷（群二六二、九、一〇一五—一〇二二、續國五六八—五七三）もある。

**ただみち** 藤原忠通（法性寺入道前關白太政大臣 一七五七—一八二四、承德元—長寛二、七十九歳

忠實の子、關白太政大臣に至り、鳥羽・崇徳・近衛・後白河の諸朝に歴仕し、詩歌共に堪能、歌は金葉（十五首）・詞華（七首）・千載（七首）以下の諸勅撰に入り、詩集に法性寺御集一卷（群類一三三）がある。法性寺關白記・楚忽鈔二卷（佚）鐵もその著に係る。

**ただみしふ** 忠見集  
「たゞみ」を見よ。

**ただみね** 壬生忠岑 一五二八—一六二五、貞觀一〇—康保二、九十八歳

安綱の子、始め和泉大將（藤原定國）の隨身で、後に仕へ左近工番長から右衛門府生となり、その在任中勅を受けて古今集を撰ぶことに與つた。後、御厨子所定外全部、攝津大目に累遷して六位に叙せられた。

彼は歌道については紀貫之の教を受けたがその歌風は寧ろ小躬恒とも謂ふべく、即興の秀味に富んでゐるか

白河・堀河・鳥羽の三朝に仕へ、殊に鳥羽上皇の御信任を受け、檢非違使・左衛門尉・刑部卿に至る。清盛の父で、平家勅興の兆は早く彼にきざして居た。武勇すぐれて思慮深く而かも文事にも疎くなかつた。その味は金葉（四）・玉葉（三）等の諸集に入る。

はりに語句の洗煉を缺くものがあると謂はれて居る

鶺鴒のわたせる橋の霜の上を夜半にふみわけて殊更にこそ

松の音に風の調をまかせては龍田姫こそ秋はひくらし

久方の月の桂も秋は猶ほ紅葉すればや照りまさるらむ

秋風にかきなす琴の聲にさへはかなく人の戀しがるらむ

風吹けば峰にわかる、しら雲のたえてつれなき君がこゝろか

歌は古今（三〇餘）・後撰（一〇）・拾遺・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・玉葉・續千載・續後拾遺・新千載・新拾遺・新後拾遺・三十六人撰等に入り、家集に壬生忠岑集（群書一覽四一六二、群二六二、九、一〇一〇—一〇一四、續國五四一—五四三）があるが、脱落の多いものだ。

**ただみねしふ** 忠岑集  
「たゞみね」を見よ。

**ただもり** 平忠盛 一七五六—一八一三、永長元—仁平三、五十八歳

**たつみふげん** 辰巳婦言  
式亨三馬、寛政十年（二四五八）作の人情本、お苦を中心

に藤兵衛・喜之助・長五郎の三人を配して脚色したもので續篇として船頭深話船頭部屋といふのも作つた。

**たつぎ** 馬場辰猪？  
文學者馬場孤蝶の兄、明治六年頃小野梓の共存雜誌同人の一人で、同十年代佛の「天賦人權論」を紹介し我

明治文化の先覺として特筆すべき人である。尙「天賦人權論」を見よ。  
**たとへうた** 譬喩歌  
曖昧な歌態語である。萬葉に譬喩歌とあるのは大抵一

首が譬喩的に表現せられた歌である。

輕の池の浦まゆきめぐる鴨すらに玉藻のうへに  
獨りねなくに 紀の皇女

ぬば玉のその夜の梅をたわすれてをらすきにけ  
り思ひしものを 大伴宿禰百代

處が古今集の序に歌麿の六目の第四番目に、  
「四にはたとへ歌

わが戀はよむともつきじありそ海の濱のまさご  
はよみ盡くすとも

といへるなるべし、これはよろづの草木とりけだもの  
につけて心を見するなりこの歌は隠れたる處なむなき

されどはじめのそへ歌におなじ様なればすこし様をか  
へたるなるべし」

といふは略詩經の「興」にあてたもので、英のメタフォ  
ール "Metaphor" 即ち譬喩といふに當るのだが、例歌

の「我戀はしは一向當らない。寧ろ、  
谷風にとくる水のひま毎にうち出づる波や春の

初花  
位をあげるがよい。

要するに「たとへうた」とは、譬喩法殊に譬喩法によ  
つて一首を仕立てた歌で、一帯に戀歌に多いと位のこ

としか斷言出来ない。

**たにしきんぎよ 田螺金魚?**

徳川時代安永頃の小説(洒落本)家、もと神田三河町  
邊の町醫であつた。その著に、傾城買虎之巻・藝者呼  
子鳥・十八大通百手枕・淫女皮肉論・一事千金の五種(各  
一巻本)がある。その中初めの傾城買虎の巻が有名に  
なつた。これは其頃鳥山檢校が新吉原松葉屋の娼妓瀬  
川を根引の顛末をモデルにしたものである。

**たねあき 千葉胤明?**

明治の初年宮中御歌所寄人として有名な人。

**たねかづ 柳下亭種彦 二四六七—二五一八**

文化四—安政五、二、五十二歳

江戸の人、通稱を坂本屋金七といひ柳亭種彦の門人で  
多くの草雙紙を作つた。白縫物語(續帝二八、二九)は  
その代表作とも謂ふべくその他自來也物語・英勇技頼  
政・面白草紙・白縫物語・童謡妙々車・新撰歌俳百人一  
首・雨夜鐘四谷怪談・假名反古一休草紙などがある。

**たねひこ 柳亭種彦 二四四三—二五〇二、天**

明三—天保一三、七、一八、六十歳

實名源知久、祖先は甲斐のさる臈將で代々幕府旗下を  
つとめ祿二百石を食んで家計は豊かであつた。彼れ通

稱を高屋彦四郎と云ひ、年少氣鋭、ともすれば人と争ふ  
より、その父之を戒め、

風に天窓はられて睡る柳哉

の句を示してから、心を入れかへ、柔和穩當の人とな  
り、柳亭と號し、古今集の序によつて「心種俊」とも  
云ひ、當時の住所、下谷御徒士町には彦名名のつくも  
のが三人あつたから、人々彼を呼ぶに「種彦の彦」と  
謂つたので之をつめて「種彦」を號した。暮らして不  
自由なきま、意の向くにつれて畫・和歌・俳句・狂歌・風  
俗の考證・演劇とあまねく手をつけて、文化年間遂に作  
家に伍し、黄表紙を作る、當らず。洒落本を試みる。

これも駄目、讀本を出して見る、これも不可となつて一  
つも思はしくないが根が道樂の手すさびとて少しも失  
望せず、四たび合巻物(草雙紙の長篇なるもの)を思ひ  
つき愴紫田舎源氏を出すに至つて好評噴々。將軍家齊  
まで之をほめ、彼はその居淺草堀田原を愴紫樓と號し  
たが、時恰かも水野越前守の風俗取締喧しき折柄とて  
彼亦讒誣に遭つてこの書の板行を禁ぜられ、組頭の辯  
疏によつてやうやくその身の縲紲の厄だけは免れたも  
の、當時病床に在つて非常に之に屈托し病重つて遂  
にその年七月に亡くなつた。

一代の作百種内外、その中創作として、價値あるものは  
前記愴紫田舎源氏三十八篇(續帝五)と邯鄲諸國物語十  
二編(續帝二三)とで、近世風俗史研究上參考資料とし  
て貴むべきは還魂資料・用箱・足薪翁百話・柳亭筆記・吉  
原書籍目録などである。

彼が述作の特徴は装幀と挿畫の美しいことが一つで、  
所謂「正本製」(巻中挿畫の人物を當時の名優の似顔に  
し、周囲の裝飾調度などは一切舞臺に似せた意匠の製  
本)は彼の創意である。

次には當時の世態人情をよく描寫してゐる。吾人は愴  
紫によつて化政・天保の人間が古典に接近する心的態  
度を察知することが出来る。以上二點はその長所であ  
るが、作者としては今少し學殖の深みを缺いて居る。  
作者部類に、

此の人させる學力も無けれど狂才は餘の作者の白眉た  
ること世の婦幼の評するところなり。  
ともあり。  
舊き義太夫本數十種を藏して戯作の種となし且つ西鶴  
が浮世本八文字屋本なども多く藏めたりと云ふ。  
さもあつてその藥籠は極めて淺かつたことがわかる。  
加ふるにその人順境よく世と推し移つて嬉々遊々する

だけで時代の病的思潮を痛感し、深刻に民衆の前途を豫感し若くは天下の民衆に先だちて將來を洞察するやうな見識はなかつた(尤もこれは彼一人を責むべきではない) 彼亦狂歌をよくし、その平素用ひた硯箱の蓋に自賛して、

名人になれ〜茄子と思へごとにかくへたは  
離れざりけり

と云つた。又俳句も拙くはなかつた。辭世の句に、  
散るものと定る秋の柳かな

我は秋六十帖を名残かな

**たねひら 海上胤平** 天保元、正、元一、大正五、  
三、二九、八十八歳

千葉縣海上郡三川村の人、本居宣長の正系たる諸平の門下に入り石川依平・伴林光平・飯田年平と共に諸平門の四天王と呼ばれ、三人は早く歿して彼ひとり師翁の統をつぎ、椎園會を設けて數千の門下を導いたが家もと武を以て立つたので歌道を以て立つことは彼の本意ではなかつたのでこの方は次代龍子きりて絶つ方針であるといふ。その著に歌學歌範評論・新自讀歌集評論・詠史百首評論・東京大家十四集評論・椎園集等がある。

**たねみち 九條種通** 二二三三―二二五四、天  
正元―文祿三、九十歳

關白兼實の後裔關白滿家の曾孫、柏原・後奈良・正親町の三朝に歴仕し、從一位内大臣關白、氏の長者に進んだ。夙に古今の書をあさり殊に源氏物語は終生の愛讀書で祖父の實隆や右大臣公條、内大臣實枝など指導者にも立派なのがあつた。彼れ自らいふには「われ源氏物語を讀むこと六十餘年身既に延喜年間に在るの思ひあり」その著孟津抄は源氏物語の註釋で、外に紀行嵯峨記(群四八一)がある。

**たねゆき 東胤行(素還)?**

鎌倉時代の歌人、本姓千葉氏だが下總香取郡東莊に住んでゐたので「東」を名のつた。その妻は歌人藤原爲家の女であるゆかりから歌道の秘傳を授けられ、之の子孫に傳へた有名な東常縁は彼の子孫である。その味は續古今(五首)・續拾遺(二首)・新後撰(四首)等に入つて居る。

**たはれぐさ** 一卷

雨森芳洲寛政元年(二四四九)上梓の隨筆で、作者が見聞中、啓蒙に資すべきものを採つて和漢混淆文に綴つたもの(百説一〇)

**たひじ 大口鯛二** 慶應元―大正九、一〇、一三、  
五十七歳

名古屋の人、幼時在郷の時から和歌を先輩について學び、二十三年御歌所録事として奉職以來高崎正風の指導を受け、歌にも歌學にも達し又、筆蹟が美しかつた。人となり温厚謹直、その司會する千種會は會員五萬にも達してゐた。

**たびと 大伴旅人** 一三二五―一三九一、天智  
五年―天平三、七、六十七歳

萬葉歌人、右大臣大紫長徳の孫、大納言贈從二位安麻呂の長子。

和銅三、正、正五位上・同四、四、從四位下・同七、一一、左將軍・靈龜元、正、從四位上・同五月中務卿・養老二、三、中納言・同三、正、正四位下・同三、九、山背ノ國攝官・同四、三、征隼人持節大將軍・同四、六、勅を奉じて筑紫の賊を討つ・同五、正、從三位・同五、三、資人四人を給せらる・神龜元、二、從三位・天平二、一〇、一、大納言・同三、正、從二位。

と閱歴し境遇も順當なりその妻阪上郎女、その子家持と共に萬葉歌壇の明星として輝いてゐる。歌は集の三四、五、六、八、九、十の各卷(その他從來山上億良の味と

したもので實は彼の作に係るものが若干あるといふ)及び新古今以後の勅撰に散見する、長歌は少くて大部分短歌、その形式は平明無技巧、その想は現世的享樂的時に神仙の韻を傳へて老莊の道教趣味に通ずるものもある。

生るれば終にも死ぬるものなればこの世なるま  
は樂しくをあらな(三)

この世にし樂しくあらば來む世には蟲に鳥にも  
われはなりなむ(三)

**たひやていりう 鯛屋貞柳**

ていりう「鯛屋貞柳」を見よ。

**たふのみねのせうしやう 多武峯ノ少將**

たかみつ「藤原高光」を見よ。

**たまかつま 玉勝間** 十四卷(別に目錄一卷)

本居宣長の國學に關する隨筆で、平明な普通文體で書いてある。各卷名と項數は、

一、初若菜六〇・二、櫻の落葉四八・三、たちばな四六  
四、わすれ草八〇・五、枯野のす、き四七・六、からあ  
る六七・七、ふちなみ六五・八、萩の下葉一一八・  
九、花の雪六二・一〇、山菅五九・一一、されかづら  
七一・一二、山ぶき八五・一三、思ひ草一〇一・一四、



つら／＼椿九二 計一〇〇一。  
初め三巻は寛政六年(二四五四)に以下は逐次に書いたもので板本には文化八年(二四七一)十二月八日本居萬磨の跋同九年植松有信の跋がある。近頃中等學校上級用として及び高等専門學校入學受験準備参考書として各種の註解本が出てゐる。

**たまこと 玉琴**

佐々木信綱選、竹柏園同人歌集として第四番目に出たもの。

この玉琴よ、己がじしとりふにかきならず調のいかにか世に響き出づべきわれら詩歌を生命としてとこしへに詩歌の爲に盡さむとする、そが心を汲み知る人もあらばとて

と選者の序があつて石樽千亦・川田順以下凡て十二人の歌集「あけぼの」以後の短歌を載せ、大塚楠緒子長谷川しくれ女の新體詩六篇がある(四六判二二五頁、明治四十一年四月十五日、春陽堂)

**たまほこひやくしゆ 玉銚百首一冊**

本居宣長が古道の大意を古風に詠みなしたるもの。これが註としては本居大平の「玉銚百首解二卷」がある。

**たまものまへあさひのたもと玉藻前儀袂**

ようばつかりに負けるやうに／＼と賽をふる。とぞ初花が負けになる……にもか、はらす鶯塚は「勝負は見えた合點」と姉桂姫を討つ。後室はすぐに長押の薙刀をおつとつて「女と思つて侮つての雑言無禮、右大臣道春が妻、そこ動くな」とばかり鶯塚に斬つてかゝるさ金藤次「何を小癩」とわたり合ひ、後室の太刀筋やや亂れてひけ氣味になつた時「采女これに」と後からガサミ鶯塚をさす、刺されて鶯塚「暫らく……」鳥の將に死せんとするその聲や悲しく、人の將に死せんとするその言や善し……とて桂姫は我が實子なれば義理として初花を殺すに忍びなかつたことをはじめ一切のことを告白する。手負の桂姫と金藤次が親子を名のつて次第に息を引きさつて行く。

さて生残つた初花は詠進の和歌に因つて玉藻前と改め后として御入興。然るに之より先天竺天羅國に數千年を經た白狐、華陽夫人となつて斑尾王を惱まし唐土に渡つて姉妃と慕れ、我朝に渡つて今やこの玉藻前にのりうつたので、それより妖氣朝廷を覆ひ玉藻前は己れに戀慕する薄雲皇子と共に天下を傾けんと謀つたが美福門院に見あらはされ、九尾の狐となつて下總國那須野ヶ原に飛んだが、三浦之介、上總之介に擊退

寶曆元年(二四一一)正月豊竹座上演、作者は浪岡橋平・淺田一鳥・安田蛙桂。

「右大臣道春、奥方(萩の方)との仲に子なきを憂ひ、清水に日參してその歸るさに棄兒を得育てあげたのは桂姫、間もなく又も一女兒「初花」を産み右と左に蝶花と愛育のかひ見えて二人とも美しく生ひ立ち、桂姫は最近鳥羽帝の御兄薄雲皇子に戀せられたが實はそれ以前から安瀨采女之助と戀仲になつて居る。それを聞いて皇子は大層立腹する。而るに薄雲皇子は天下横領の陰謀あり、臣下鶯塚金藤次に云ひ含め「右大臣預りの獅子玉の劍を手渡すかそれがならずば桂姫の首を討つて渡せ」と難題を持ちかける。實は件の劍は疾くに金藤次が奪ひとつたのである(これは劍の徳を以て兵を集めようため)當時道春は已に物故の後、後室萩の方、女ながらも分別して觀音の申し兒といひなさぬ仲の義理といひ、こりやどうでも妹初花を殺さればすまぬ處と決心する。種々折衝の揚句姉妹が双六をして負けた方を打つと手筈をきめる(この「道春館の段」は一番の見場で通常「玉三」といふ「玉藻前三段目の略」である。姉妹の双六場は美しい悲しい含蓄のある一危機として充分成效を収めて居る)桂姫も初花も相手を助け

せられ、尙も怨靈崇りをなす處を玄翁和尚の得度によつて一念亡んでめでたく成佛した。

といふ。これは始め下學集や海藏寺開山傳に見えた傳説を謡曲「殺生石」に採つたそれを更に戯曲化したものである。

**たみこ 荷田蒼生子**

保七―天明六、六十五歳

在満の妹で、始の名を「ふり」と云ひ「楓里」とも書いた。兄に連れられて江戸に下りその家に養はれて和歌に心をひそめ詠歌の才は寧ろ兄より以上といはれた。見し世にも似るべくもあらぬ春ながら月の哀ぞ

變らざりける  
みだれつつ物おもふ頃は常よりもうちまもらるる青柳の糸

嬉しきもうきも思はじ世の中に何かさだめありてなければ  
その歌風は古今と新古今との女性的融和といつた趣で佳味が多い。家集を「杉のしづ枝」と云ひ又「蒼生子歌集」もある。

**ためあき**

安藤爲章 二三一八―二三七六 萬治元―享保元、一〇、五十九歳

伏見宮家の臣朴翁の第二子、名は爲明後に爲章と改められた。通稱新助、號年山、初め兄素軒と共に儒を學び又父の縁故で伏見宮に仕へたが、後に水戸光圀の召に應じて彰考館の寄人となり祿三百石を食み、大日本史・禮儀類典など貴重な編輯の要務に携はつた。後光圀の命を奉じ難波の僧契沖の許へ往復する中、終にその弟子となつて國文にも心を注ぎ多くの有益な述作を遺した。彼は節操の正しい人で家に子があつたが養子などはしなかつたので彼れ一代で家系は斷絶した。彼の筆蹟は無論彰考館には澤山あること、想ふが、大阪の圓珠庵にも可なり珍藏されてある。その著には左の九種がある。年山紀聞・年山打聞・千年山集・紫女七論・手向草・榮花物語考・常陸帶・世繼物語私考・宇津保物語考。

**ためあき 藤原爲明** 一九五四—二〇二三、永

仁二(南朝正平一八、北朝貞治二)、七十歳

近古室町時代の歌人、爲藤の子。後醍醐天皇の朝に仕へて君寵を得、官は左近衛中將に至る。後、北朝後光嚴天皇の勅を奉じて新拾遺集を撰び中途病を以て逝く。頼阿が代つて完成させた。その味は新千載(一五)・新拾遺(九)・新續古今(一一)等に入つて居る。

**ためいへ 藤原爲家 民部卿入道 中院禪**

次の一首をもらした。

玉津しまあはれと見すやわが方にふき絶へぬべ

き和歌の浦風

その他の彼の秀味には、

陸奥の籬の鳥は白妙の浪もて結へる名にこそあ  
りけれ

朝ぼらけ嵐の山は霧はれて麓を下る宇治の川舟  
鐘の音は霞の底に明けやらで影ほのかなる春の

よの月

**ためうち 藤原爲氏** 一八八二—一九四六、貞

應元—弘安九、六十五歳

爲家の長子で、正二位権大納言二條派の元祖である。早く歌の才があつて殊によく難題を咏みこなすといふので一代に重ぜられた。後宇多天皇の時龜山院の勅を奉じて續拾遺集を撰んだ。その味は續千載(三八)・續古今(一七)・續拾遺(二一)・續後撰(二四)等に入つてゐる。

人とは見すとや言はむ玉津島霞む入江の春の  
曙

戀死なむ後の世とても如何ならむ生きてつれな  
き人の心は

**門** 一八五七—一九三五、建久八—建治元、七十九歳  
定家の子で始めは歌の才展びず折々父にも叱られたが日吉社に一七日の參籠をつゞけて歌の幸を祈つた頃から進境頓に著しく、竟によく父が名を墮すことなく歌道師範家の地歩を確立した。即ち後堀河・四條・後嵯峨の三朝に仕へ、嘉祿の頃藏人頭兼右近衛中將、次いで參議となり、從三位に昇叙、嘉禎中正二位權中納言兼民部卿となりついで權大納言に進む。後深草天皇の康元元年に剃髮して融覺と云ひ、後嵯峨帝の勅を受けて二回までも勅撰集を撰んだ(續後撰、續古今)又弘長年間上皇の仰せを受けて藤原實氏、家長等と各仙洞百首を咏じて七玉集と名づけた。その味は續後撰(一一)・續古今(四〇餘)・續拾遺(四〇餘)・玉葉(五十餘)等に入り、歌學の著には咏歌一體(群二九二、一〇、七〇七—七一)八雲口傳などがある。彼が歌道の爲めに熱心したことは多とすべきも彼の三子(爲氏・爲教・爲相)によつて和歌師範家なるものが出来、三派の醜い争が演ぜられたことを思ふと、彼も亦家風樹立の責めを免れない。その性亦狹量で、續古今撰集の時始めは彼一人に御下命にならうとしたのを後嵯峨院の御英斷で基通以下をお加へになつたが、彼はそのことを不平に思ひ

**ためかず 冷泉爲和** 二一四六—二二〇九、文

明一八一—天文一八、六十四歳

爲廣の男、仕へて大納言に至る。歌を以て聞え爲和卿集一卷(群二四一、九、三〇八—三一五)の家集がある。

松退年友

君ぞ見ん老木の松も若がへり限りしらねぬ千代  
の行末

樹蔭納涼

松かげや衣をりはへ河社なみのぬれ衣のかけて  
すゞしも

**ためかね 藤原爲兼** 一九一四—一九九二、建

長六一元弘二、七十九歳

京極爲教の子で持明院系の上皇天皇の御庇護により勅を受けて玉葉集を撰んだ。時に二條家は爲氏の代でこの二人の勢力争ひはあらはには延慶兩卿訴陳狀に見えてゐるが仔細に檢すると其因つて來るところは遠いものがあつて已に王朝末期に於て公任對好忠、基俊對俊頼と舊派と新派の對峙があり、ともすれば(通俊・顯輔なども加はつて)新派が優勢であつたのを俊頼に至つてうまく兩派を調和し、定家亦更に統一につとめその子爲家は父に比べては劣り様ではあつたが、ごうに

か分裂なしに過して来たものなの、その子に至つて種々の情實と相まつはつて遂にこの對峙を見るに至つたものである。すなはち、

皇室	撰者	勅選集	爲兼の入	爲世の入
伏見	爲兼	玉葉	撰歌數	撰歌數
後宇多	爲世	續千載	〇	三〇
後醍醐爲定	(爲世の孫)			

と様になり其他の歌人も兩派のひきぐで出入があつて畏れ多くも勅を承つて撰ぶ神聖な歌集が二條京極勢力分布圖となつてゐる。爲兼は増鏡にもあるやうに氣概ある歌人で、當時二條家が家藏の典籍を誇つて保守の歌のみ奨励するの反對して態々清新の歌態を唱へ、伏見・後伏見・花園の三帝により宮中にもその風が入つて永福門院・犬宮院從二位爲子(彼の妹)以下多くの同派の人を作り得たが新に馳するの餘り稍修辭の妥當を缺くものもまゝあつた。

さゆる夜の時雨の後の夕山に薄雪ふりて空ぞ晴れゆく  
浪の上に映る夕日の影はあれど遠つ小島は色くれにけり  
團の上は積れる雪に音もせて横ざる霞窓たゞく

なり  
つらき餘り憂しともいはで過す日を恨みぬに、  
そ思ひ果てぬれ

尙彼の詠歌集には入道大納言爲兼卿集續群四三二、一六の上(一七一六五)爲兼卿鹿百首(群類一七六)爲兼卿家歌合(群二一三)等がある。

ためこ 藤原爲子?

京極家、歌人爲兼の妹で後伏見院に仕へて寵を得、從二位に叙せられた。彼女も亦兄に背て和歌に秀でその詠玉葉その他の集に散見する。

風の後に霞一しきり降り過ぎて又村雲に月ぞもり來る

せめてさらば今一度の契ありて言はゞや積る戀も恨も

ためさだ 藤原爲定 一九五三—二〇二〇、永

仁二—正平一五、六十八歳

二條家、爲世の實子で爲藤の養子になつて大納言に任ぜられた。元亨三年七月後醍醐天皇爲藤に仰せて勅撰の御沙汰あり着々進行中、正中元年七月病歿、因て爲定代つて後を繼ぎ正中二年十二月八日完成上奏した。その時の悦びは花山院師賢につけて奏した。

今ぞしるあつめし玉のかすくくにみなてらすべき光ありとは

にあらはれ、天皇よりは、

かすくもあつむる玉のくもらればこれもわがよの光りとぞなる

と御返しを賜はつた。光榮至極のことだが撰集の内容そのものは、何等藝術的の進展を認められない。其後延文元年七月、北朝後光嚴天皇の御内命があつて四ヶ年が、りて同四年に完成したのは新千載集で、拜命の悦びをば、

なきかげのたちやそひけんことししもふるきにかへるわかの浦波

と咏んだ。この集は極めて氣高いとも云ひ(近來風體抄)歌よりも歌の詞書がよく出来てゐる(三光院評)とも謂ふが、この頃の評論皆純粹動機からでなく黨同伐異の爲めにするところあつての筆で當てにはならない彼の詠は風雅(一四)・新千載(三〇餘)・新後拾遺(二〇餘)等に入つて居る。

ためしげ 藤原爲重 一九九四—二〇四五、建武

元—至徳二、五十二歳

近古、室町時代の歌人で、爲冬の子、官は權大納言、後

圓融天皇の勅を奉じて至徳元年十二月新後拾遺和歌集を撰んだ。近來風體抄には彼をめでて、

「爲重卿は近來の堪能なり、わかより風骨天性、面白く歌よみにてはべりしなり。頓阿・慶雲は異風なるやうに申し侍りしかども、よき歌をばほめ申き玉津島の歌合に「また初草の和歌の浦浪」偏執の爲忠、爲秀もよくよみたと申しき。わかより爲定卿にそひて、右筆せられしかば、さだめて口傳故實もはべらん。生得の骨のある歌にて、詞心はたらきて當座面白かりしなり」云々

彼又書畫を能くし嘗て歌仙の像を畫いたこともある。(續本朝畫史、扶桑畫人傳)

その詠は新後拾遺(二〇餘)・新續古今(七)などに入つてゐる。

ためすけ 藤原爲相 一九二三—一九八八、弘

長三—嘉歴三、六十六歳

爲家の第三子で冷泉家の始めて、母は有名なる阿佛尼この爲相に所領を與へよう爲めに態と十六夜日記の旅をした。彼亦幼より家の風と母の感化によつて歌道に熱心した。けれども別に創意もなく又強ひて異を立てることもしなかつた。その詠は玉葉(一三)・風雅(一

八)新千載(一一)等に採られ、家集に權中納言爲相卿集(續群四三一、一六の上―一六)がある。

**ためただ 冷泉爲尹** 二〇二―二〇七七、康

安元―應永二、四、五十七歳

爲邦の子、正二位權大納言、歌は新後拾遺(二)・新續古今(五)等に入り家集に「爲尹卿千首和歌」(群一六三、七、五七〇―六〇八)がある。

**ためただ 藤原爲忠?**

丹後守と稱し爲藤の子爲隆の父に當る。北朝後光嚴天皇の御代に仕へ、その貞治六年(二〇二七)に官は權中納言に至り頓て之を辭し、後圓融天皇の御代にまで仕へをつづけたが生歿の年は未詳である。歌は新續古今集に六首入り、外に藤原爲忠朝臣集一卷(群類二五五、九、八一七―八三〇)爲忠朝臣家百首の作がある。

**ためとき 藤原爲時?**

北家冬嗣の六男良門、その孫堤中納言、その子雅正。この雅正に三子があつて爲時は實にその三男である。地位は正五位下越前守(その前には越後守)三男一女あり惟規・惟通・定通・紫式部と云ふ殊に式部が有名だ。或は云ふ。うつぼ物語の作者だと(細井貞雄うつぼ物語玉琴)

又云ふ源氏物語は彼が重な分を書いて細かいところを娘の式部に書かせたのだと(宇治大納言物語)

けれどもこれ等は確かな根拠がない。むしろ娘式部が餘りに有名となつたが爲めにその親も何か作つたらう位の反射的臆測を觀るがよろしからう。

**ためとほ 藤原爲遠** 一九九二―二〇四一、元

弘二―弘和元、八、二七、五十歳

近古室町時代二條家の歌人、爲定の子、官は大納言、後圓融天皇の永和元年六月勅を奉じて後に謂ふ新後拾遺集の撰に着手したが七年かゝつて未完成のまま、病歿した(その子爲重が後を繼いで完成した)その味は新千載(六)・新後拾遺(八)等に出てゐる。

**ためなり 藤原爲業?**

崇徳の朝の歌人、國文家。權中納言長良の裔、丹後守爲忠の子である。崇徳天皇に仕へて藏人に補せられ、後に皇太后宮大夫まで進んだ。後、薙髮して大原山に閑居し、名を寂念と改め、時の人二弟の寂然、寂超と併せて之を大原の三寂と謂ふ。

世に大鏡は彼の作と云ふ説もあり(大日本史・群書一覽)又榮華物語は彼の作だとする説もある(尊卑分脈・本朝書籍目録・伴信友等)がどちらも確證がない。

彼の歌は千載新拾遺に各一首の外、仁安元年重家歌合・嘉應三年住吉家歌合・安元元年右大臣家歌合などに散見してゐる。

**ためり 藤原爲教** 一八九九―一九三九、延

徳元―弘安二、四十二歳

鎌倉時代の歌人。爲家の二男、母は兄爲氏と同じく宇都宮彌三郎蓮生の女、彼の家を京極家(後には毘沙門堂家ともいふ)といふ。けれども彼は歌才に於て兄の二條爲氏よりも劣り、壽命も短命であつたが爲めにより振はなかつた(その子爲兼に至つて此派は榮えた)その味は續後撰(三)・續拾遺(七)・玉葉(七)等に入つて居る。

**ためり 源爲憲?** 一六七一、?―寛弘八、

光孝天皇の皇子是恒の曾孫、忠幹の子遠江、美濃、加賀の國守になつたことがあつて位は從五位上、源順に入門し漢學者として文章家として聞えた。その味は拾遺にとられ、詩文は文粹・本朝麗藻・類聚句題抄等に散見してゐるが、尙左記各種の作もある。

一、天祿歌合序並跋 (扶桑拾葉三)

二、空也上人諫一卷 (續類二一四)

三、童蒙誦韻一卷 (群一三七)

四、口遊一卷 寛政十一年 (續類九三〇)

五、世俗諺文一卷 (續類八八五)

六、圓融院御授戒記一卷 (群四二七)

七、本朝詞林 (佚) (赤堀又次郎氏日本文學者年表 一一九上段)

**ためひさ 冷泉爲久** 二三四六―二四〇一、貞

享三―寛保元、五十六歳

徳川時代上冷泉家の歌人として有名、中御門・櫻町の兩朝に仕へ權大納言に任ぜらる。その味は「新續題林和歌集」に出て居る。

**ためひで 冷泉爲秀** ?―二〇三二、?―

應安五、?歳

爲相の子、北朝後光嚴の朝に仕へて權中納言に任じ歌は風雅(八)・新拾遺(八)・新續古今(五)等に入る。

**ためひら 藤原爲衡?**

近古・室町時代二條家の歌人で同家の良基等と共に斯界に奮闘した人。

**ためひろ 冷泉爲廣** 二一〇―二一八六、寶

徳二―大永六、七十七歳

室町期の歌人、和歌師範家に生れ文詠歌に巧みであつた。官は權大納言民部卿に至り後柏原天皇の永正五年

から出家した。

**ためふち** 藤原爲藤？——一九八四、？——正中元、七、一七、

鎌倉時代、二條家の歌人。爲世の子である。増鏡の記事をあさるに、十四巻「つげの小櫛」の章、龜山院御葬送の時には唯殿上人とあり、同院の御忌中、時雨はしたなく風あら、かなる夕暮に後醍醐天皇が歌を召されたので、

もみぢばになくればたえず空蟬のからくれなゐも涙とや見む

と詠進した。その時の肩書は中将とあり。十六巻(秋のみ山)の章には父爲世が新撰集を撰んだ時、爲藤が手傳つたので出来榮えがしたことを時の人が褒めたことと、

爲藤の中納言父よりは少し思ふ所加へたるぬしにて、今すこしこの度は、心にくさまなりなどぞ時の人々沙汰しける。

とある。十七巻「春のわかれ」の元享三年の、ことを「なとまし」として勅撰(後拾遺)の沙汰を受け中途にして病死したことを、をさしげばかりより又重ねて撰集のこと仰せられしを

爲世の大納言二度になりぬればにや、爲藤の中納言にゆづりしを、いくほごなく、かの中納言惱みてうせぬ。いと、いとほしうあはれなり。

と書いてある。養子爲定、實子爲冬も亦歌を以て朝に仕へた。彼の味は續千載(一七)・新千載(一二)・新拾遺(二〇餘)などに採られてある。

天の川まさる汀は知られども雲の波立つ五月雨の空

はその秀味。

**ためふゆ** 藤原爲冬？

權大納言爲世の子、後醍醐天皇の御代に仕へて正四位下左近衛中将となつたが足利尊氏が鎌倉に叛旗をあげ中務卿尊良親王が御東征の時従軍して佐野原で討死した。尊氏は彼の舊知であつたから之をきいて大層哀しんだといふ。家は代々和歌を専門にしてゐたから彼も詠歌の方には精しく、爲冬家集一卷二百餘首を遺した。

**ためまさ** 善滋爲政(善學士)？

賀茂保章の子、保胤の姪、四位民部大輔に至る。和歌詩文をよくし歌は拾遺・後拾遺・千載・新古今に採られ、詩文は本朝麗藻・類聚句題抄、續本朝文粹八・九等に出てる。その作に行幸高陽院應制和歌序(扶桑拾葉三

群一八一)がある。

**ためむら** 冷泉爲村？

徳川時代上冷泉家の歌人。桃園・櫻町の雨朝に仕へて右兵衛督・参議・權中納言・民部卿等に歴任し明和六年(二四二九)引退した。その味は「新續題材和歌集」に出て居る。

**ためやす** 三善爲康(槐市老翁) 一七〇九

一七九九、永承四—保延五、八、四、九十一歳  
越中射水の人、夙く京師に出で算博士三善爲長に就て數理を究め傍ら記傳の學にも通じた。堀河天皇の時擢でられて算博士に任じ、三善の姓を賜はつた。後冷泉—崇徳の六朝に仕へ、諸官を経て遂に諸陵頭越前權介を兼ね正五位に進んだ。詩文集「朝野群載」三十卷(傳本二十三卷)は彼の撰に係り、彼の詩もこの中に入つて居る。その他の著には左記數種がある。

- 一、續千字文(群一三五)
- 二、童蒙頌韻一卷(天仁二年成群一三七)
- 三、拾遺往生傳一卷(續群一九六)
- 四、後拾遺往生傳二卷(延寶二年續群一九七)
- 五、世俗往生釋疑
- 六、金剛般若驗氣

七、懷中曆十卷

八、掌中曆一卷(續群九三一)

**ためよ** 藤原爲世 一九一〇—一九九八、建長

二 南朝延元三 八十九歳  
北朝曆徳元

鎌倉時代、二條家の歌人で同期京極家爲兼と歌の闘を争うて有名な人。父爲氏の後を受けて家藏の典籍を楯に舊風を固守した。朝に仕へて正二位權大納言を授けられ、後二條帝の時後宇多上皇の院宣により新後撰集を撰進し、後醍醐帝の時にも同じく院宣によつて續千載集を撰び、當時の歌人としては最高の名譽を荷つた嘉暦四年剃髮法號明釋と云つた。歌は(新後撰一一)・續千載(三〇)・續後拾遺(二一)・新千載(四二)・新拾遺(二四)等に入れてある。

伏見の院位におまし〜ける時、

月十五首歌めされし中に

暮るゝまの空に光はうつろひてまだ嶺こえぬ秋

のよの月

暮るゝより露さ亂れて夏草の繁みにしげく飛ぶ

螢哉

浮雲の一むら過ぐる山おろしに雪ふきませて霞

ふるなり

せめて又惜む心を盡せとや花より後に春のゆく  
らむ

(尙、爲兼・延慶兩卿訴陳狀参照)

たんか 短歌

我邦韻文の一形式で、

五七五(上句)三句 七七(下句)二句

の三十一音より成る詩形、早く記紀に見え、萬葉に短歌・反歌として多く載せられ古今集以後は和歌といへばこの短歌を意味するやうになつた。時には五句のうち音数が五言七言よりも餘計になるものがある。これを「字餘り」といふ(古類文學部一、五三五―五四〇)

たんかいくわら 淡海公

ふひと「藤原不比等」を見よ。

たんかせんかく 短歌撰格 三卷

橘守部の著和歌の起源・種類(片歌・旋頭歌等)を論じ短歌の句格語脈助辭修句等に古今正邪の別あることを記紀萬葉三代集を引證して論じ「作歌についての心ばへを指示したもの、長歌撰格・文章撰格と併せて守部の三撰格といふ。明治十八年(二五四五)徐道守の出版に係る(國書刊行會第八期橘守部全集第十一册尙單行本として吉川弘文館より發行)

だんきやう 斷橋

文學者田村義雄が、樺太の事業に失敗して、更に資金を調達して、捲土重來的に活動しようとする意氣込で、北海道まで歸つて教師をしてゐる舊友の宅に寄食し、雑誌記者氷峰の許や、遊廓の敷島の處で「耽溺」してゐる中、段々浪人じみた生活におちて、メーブル社の爲めに旅行記を寄せたり、北海實業雜誌に「金」と云ふ小説を掲げたり、遠藤と云ふ道會議員の隨行をして、着なれぬ背廣を新調して貰つて、北海道を巡視したりする中に、事業熱がムラ／＼起きて伐木を計畫して見積書を作つたり、田地の話を書きいてはそれも買占める仲間に加はらうとしたり、畑中新藏と云ふ山師に樺太の空屋買占の相談を持ちかけたり、牧場を視察してはいつそ馬を飼つてやらうとも思つたり、アイヌの部落を見まはつては、此は面白いこゝでミッシリアイヌ語の研究に没頭して見たいと思つても見たり、する中にも樺太からは「大事起る直ぐ來い」と來電する。東京からは以前から關係のある「お鳥」といふ女が彼から傳染された梅毒の病を抱いて扶助を迫りに來る。こちらの敷島との關係は益々深くなる。而も義雄は相變らず自己一流の哲理觀から割出した刹那主義的自己充實を押し通さう

とする。併し反みれば今や我境遇は放浪を通りこして斷橋そつくりだと痛感する(泡鳴全集第二卷一五一―八二、四十三年作、四十四年一月より毎日電報(後に東京日日と合併、大正八年泡鳴五部作の一として改訂)放浪「憑き物」の一部混入)

だんじやうるり 段淨瑠璃

短篇の端淨瑠璃(古淨瑠璃は大抵これ)に對し長篇の數多の段に別れた淨瑠璃をいふ。新淨瑠璃は凡てこれである。例、假名手本忠臣蔵、大平記忠臣講釋等

だんしよくおほかゞみ 男色大鑑 八卷

井原西鶴、貞享四年(二三四七)作の浮世草子で、始め四卷は士民の若道、後の四卷は野郎の賣色を寫してゐる。これは西鶴がこれまで一代男や二代男や一代女などで好色の材盡きて局面を一轉換させるために男色に筆をそめたものだといふ。序文には眞の美人は男にあり、眞の色の美しさも男にありとの意を述べてゐるが、これは作者が根本的の主義といふよりは寧ろこの書だけのためにつけた自己吹聴のことばと察せられる。

だんする 北條團水 二三二三―二三七一、寛

文三―寶永八、四十九歳

京都の人、橋堂又は白眼居士と號す。椎本才磨につい

だんそらう 廣瀬淡窓 澹窓、淡窓 二四四

二―二五一六、天明二―安政三、七十五歳

て併を、井原西鶴について浮世草子を學び、資性恬淡生涯清貧を娛しみ、名利に走らず西鶴の歿するや七年間留つてその廬を守り筆硯依然として在ますが如くであつたといふ。その著に左の十種がある。

新永代藏・武道一覽八・怪談諸國物語五・團袋一・くやみ草一・心の紫一・獨鈷錄論二・秋津島一・特牛一・狂言躍一・正月揃六・彌み助人形一・未曾有格一・塗笠三(帝文三一、三二)

名は建、字は子基、通稱を求馬と云ひ、近世漢詩人として鎮西に雄視した。故郷は豊後日田で、漢籍を龜井元鳳に學び唐詩宋詩を涉獵し遂に一家の態を成し、門戸を張つて子弟を教授し、家塾の盛なること九州一と謂はれた。歿後門人諡して「文玄先生」といふ、その著に老子摘解・淡窓小品・遠思樓詩鈔などがある。

謁ニ加藤公廟

寸木難レ支大廈類 丹心抵レ死未レ會灰

遺孤可レ託眞君子 夙誦會參一語來

たんそらうしわ 淡窓詩話 二卷

廣瀬淡窓の詩話を集めたもので明治十六年(二五四三)

に刊行された。

だんたらしせん 談唐詩選 一卷

市河世寧(寛齋)の著、唐詩選は通常李于鱗の撰といふが、實は後世書肆の偽撰だといふことを論じたもので、文政二年(二四七九)五山池桐孫の序がある。

たんたん 松木淡々 二三三四—二四二一、延寶二—寛曆一、一、二、八十八歳

大阪西横堀阿波屋の息子、幼名熊之助後傳七と改め半時庵・勃宰と號した。弱年江戸に出て其角に學び自らその高弟を以て誇り、後上京の下河原又大阪、ついで泉州堺の港又々大阪島之内鰻谷に住み到るところその所謂「洒落風」を以て多くの門人を取り、勢力侮るべからざるものがあつた。その俳諧史上の功績は其角の風を承けて俳材を擴張し、あらゆる事象を採つて之を俳化するの風を起した一事にある。その句別に秀吟とまではゆかぬが後世に見るやうな野鄙賤劣の風はなかつた。

としの内に日光はさぞ初霞

蒸殺す飯にもあらず女郎花

茶の花のほしの林や雨の中

その著は八百三十番句合・淡々文集・かいつの海・以下

二十五種今淡々句集(俳諧文庫一〇)の中に大部収まつて居る。

たんでいせうせつ 探偵小説

明治二十年だいに一時流行した小説で、専ら探偵事件を取材したものの「犯罪事件あり犯人は巧にあとを暗まし犠牲者は悲境に沈み冤を被つたものも亦思はぬ災難で囹圄の裡に呻吟して居る。名探偵あり百方苦心の結果些細の手が、りから迷宮を辿つて遂に件の犯人を逮捕して善人は救はれる」といふ、凡そ大抵の探偵小説の構想は以上に盡きるがそこに歩一歩真相をつきとめようとする好奇心が湧いて讀者を最後まで引つ張つて行くものである。つまり昔の大岡裁判に明治の科學的釋明を與へたものがこの探偵小説だと思へばよろしからう。

黒岩涙香はその代表作家で、鐵假面・非小説・大金塊・死美人・人耶鬼耶等は多くの版を重ねた(併し探偵小説はいつの代にも通俗小説の一部として生命のあるもので近頃の新聞・雜誌・小説にも見られるし、かの森鷗外の譯にかゝるエドガー・アラン・ポーのそれなどは文藝作品としても優秀なものと謂はれてゐる)

たんでき 耽溺

岩野泡鳴四十一年八月作の小説。文學者田村義雄は、一夏を國府津の海岸のしろうと下宿に暮らし、宿の隣の藝妓吉彌と云ふのに關係して段々熱くなつた。女には彼の外にまだ、青木と田島と云ふ二人の男もあつた。始めての旦那(青森の人)との間には今年十二になる子もあつた。此年増藝者を中心にして三人の耽溺殊に田村の氣分を描いたものである。吉彌は決して美人ではなかつた。が、すぐ隣合に泊つてテラホラ眼につくのと、英語を教はりたいなどと宿の女主人を通じてたのむのと、或日彼の墓口を拾つて肩けてくれたことなどで、つい彼女が彼の室へ行くやうになつた。その始めての晩の抑々から「墓口のお禮に僕が玉をつけませう」と云つて止め、話が段々打解けて「ぢやあおれの奥さんにしてやらうか?」とからだを引ツ張ると「はいよろしく」と笑ひながら寄つて来て……やがて電球の球に「やまと」のあき袋をかぶせはしご段の方に耳をそばだて……と云つた風に情交はその夜に成立した。美人ではないが、すなほなものは大猫でも可愛いのにまして……さ云ふ心地で彼も二度が三度、三度が五度と引きつけるやうになつた。踊りが好きだつたと聞いて、行は自分の先輩の劇團に關係してゐるのに頼んで、一

個の女優に養成しようとして、思つた。所が或日近所の銭湯に行つて見ると、女湯の方から「旦那、しやぼん」といふ吉彌の聲がして、こちらの男湯でそれを受取る男——後に、それが青木だつたと云ふことがわかつたが——があるのを見た。二人はやがて、湯から上つて番臺の所で立話をした。男は腰巻一つで團扇をつかひながら、女は白い寒冷紗の髪つきの西洋寝巻をつけてゐた……とそこを出て近所の蕎麥屋で嬉々として歸るのであつた。それでも田村はまだ彼女に未練があつた。その後又井筒屋の筋向のうなぎ屋では、襖一重を隔て、彼女が田島と云ふ土地の銀行員と密會してゐるのを見た。

「ぢやア、もう、歸つて頂戴よ、何度も云ふ通り貰ひが、かゝつてゐるんだから」

「歸すなら、歸す様にするがい、」

「どうしたらいいのよ?」

「かうするんだ」

「いたいぢやアないか?」

「静かにせい!」この一言の勢ひは抜き身を以つて這入つて来た強盗でもあるかの様であつた。

「……………」僕はあた、まらないで二階を下りて来た。

暫くしてはしご段をさんくおりましたものがあるので、下座敷から、ちよつと顔を出すと、吉彌が便所に這入るうしろ姿が見えた。

彼は誰にでも肌を許す彼女が淺ましく、又その女に關係する自身迄も淺ましくなつた。さりとて又、堅氣に女優道に精進するやうに嗜めると、素直にその意に従ふ彼女を見ては、しほらしくも思つた。東京から彼女の老母が来て、一身上の相談をした。田村は身受け一切のことは此母に心配させて、彼は唯それ以後の女優として仕立てあげる方だけの責任を負はうと思つてゐたが、中々うまくは進行しなかつた。老母と吉彌と田村と三人で膳について酒興の揚句に、吉彌を踊らせてみた。老母の三味は流石に昔とつた撥音しるく確かなものだ。「何だかきまりが悪いわ」と羞かむ彼女には、まるで處女の思無邪があつた。

「待つ身につらき置炬燵」と舞ひ終つて一禮するのを見ると、實に娘らしい、しほらしきを感じた。結局全責任を負ふことにして東京の自宅から金を呼んだ。宅には妻―千代子と云ふので、彼より年上で、始末家で、最早や男は精神的には離縁したやうな冷たいその妻が居て、「どうしても工面はつきません」と云つて来た。事

實彼の宅には、目ばしいものと云つては妻の着がへより外には何もなかつた。彼の目當もその妻の持物にあつた。さうしてその妻がやつて来て「わたしが、あなたに代りに、人質として、ここに居るから、あなた自身東京へ歸つてお金を工面してあらつしやい」と大變な權幕である「悪いのは吉彌、馬鹿なのはあなた。可愛相なのは身代りの藝者だ」とも云つた。で、彼はしぶしぶ上京して老父母の手前をごまかし入るだけの金に妻の衣裳を替へた。彼も千代子もまだ若く、睦まじかつた時の思出が入質する晴衣から湧いた時は流石に寂しかつた。でもさうく入質したり賣代したりして、再び國府津へやつて来て、吉彌はその兩親に引きとらせ、自分分は妻をつれて歸つた。歸つてから豫定の女優の方は「本人成業の見込なし」で斷られたが、婿曳は相變らず續けてゐた。その中彼女を始め、彼の老爺などが花を引いてゐる所へも行つた。最早すつかり彼女に對する興味を失つた彼は更に友に誘はれて吉原へも行くやうになつた。

彼は生活費の一部にあてる爲めに或商業學校の英語の教師をしてゐたが、近頃著した「デカダン論」の爲めに危くその地位を失はうとしたのを、幸にも先輩の取

なしで事済みになつた。又彼は國府津滞在中メレヅコフスキーの「先驅者」を抄譯した。そして主人公たるレオナード、ダビンチの清淨な孤獨をなつかしんだこともあつた。今となつては「借金山」だけが耽溺の唯一の記念のやうなものだ。にも拘らず彼は此耽溺氣分を以て自己の眞生命とした。此なくては自分は到底生きて居れないとさへ思つた「冷淡だか、殘酷だか知れないが衰弱した神經には、過敏な注射が必要だ」と思つた（泡鳴全集第一卷一一二―一二二・單行本大正四年五月新潮社版）

**だんのうらかぶとぐんき** 壇浦兜軍記  
享保十七年（二三九二）九月豊竹座上演、元文三年春、江戸河原崎座歌舞伎に上場、松田文耕堂・長谷川千四の合作で景清物の一つである。

「頼朝上洛の途次根の井館滞留の處を景清は大工に化けて之を害せんと近寄り、左官に身をやつした箕尾谷に組み伏せられて入牢、間もなく牢を破つて行方を暗ました。景清の戀ひ女五條坂の遊君阿古屋か、はりのものなればとて堀河御所の白洲に召されて、判官秩父庄司重忠が梶原と同席で問ひ糺す「その方申したてに偽りなくばこの處にて一曲を弾け」とて三曲責め（琴

と三絃さ胡弓）にする。阿古屋はいはれるまゝに一絲亂さず彈奏して満座の感動する處となり「是心に邪なき證據として許される」といふ筋で、この阿古屋の琴責めは出世景清の「小野姫拷問」から脱化して出藍の脚色で今も切狂言に演ぜられる（余も嘗て秀調の阿古屋を觀たことがある）

**たんばく** 安積澹泊 二三一六―二三九七、明曆二―元文二、八十二歳  
徳川時代水戸藩の儒學者にして又史學家として有名な人で、名は覺字は子先、通稱覺兵衛、幼時已に朱舜水の教へを受け長ずるに及んで博學多才且つ能文、光陰あげて大日本史編修總裁とした。彼が文學史上の偉績はこの史書一つでも偉大なものがある。彼は程朱の學を奉じたが必ずしも拘泥しなかつた。その著に大日本史論贊烈祖成蹟・澹泊齋文集・湖亭涉筆・朱文恭遺事・老圃詩牋・神祖遺事などがある。

**たんばよさく** 丹波與作  
近松が寶永四年（二三六七）六月竹本座に書下した作、始め丹波與作關の小萬待夜小室節と題し、正徳二年三月に改題したものである。  
「丹波の城主小留木家の御湯殿子調姫（十歳許）今回高



家入間家へ、養女の談議調ひ、先方からは奥家老本田彌左右衛門以下二百人の出迎へ、いざ出發の間際となつて、姫君「江戸はいやぢや」と駄々をこねられる。困つた矢先へ東海道中双六の繪を賣りに、じれんじよの三吉といふ馬士の子がやつて来る。これは思ひつきとて三吉を御殿へあげ、姫とお乳の人重の井と奥家老と女中と馬士の子が一座して双六をすると姫が一番先へ江戸に着いて上り、それで機嫌が直つて「江戸に行かう」と仰せられる。そこで重の井が姫の機嫌を直した褒美にとて菓子や堆く盛つて三吉に與へ、だん／＼その子の身の上を聞くと三吉は實は重の井が戀人與作との間に儲けた一子であることがわかつた。與作はその後悪人の爲めに殿の金預りの役で不調法の爲め追放の身の今馬方とまでおちぶれて居るのであつた。母子の名乗はしたが色々思ひめぐらして重の井は三吉を歸らせる。さて與作は石部の馬借先で名代のおじやれ、小萬と馴染み段々借金がかさんで女に迷惑をかけるに忍びず、折から來合せた三吉（早くからもとの乳母の許へ預けてその後の生立を知らず）がたつてわたしが助けてあげようといふので折ふしとまり合せた調姫一行の御用金を盗みとらせようとして見あらはされ、最早絶體絶

命とて小萬と共に駆け落ちし、こゝらの野邊で心中といふ刹那本多重の井が家來をつれてあとを追うて來て之を止め、一切が判明し姫の御言葉が、り今回のおめでたに免じて與作は首尾よく歸參を許される」といふ筋で「重の井子訣れ」の一段が腰巻とされて居る。丹波與作といふのはもと江戸初期俗話の主人公で「與作丹波の馬追なれど今はお江戸の刀差ぢや、しやんとさせ與作」など語られた。後延寶五年十一月に京北側芝居で嵐三右衛門主演の「丹波與作」といふ歌舞伎があり、元祿二三年頃、京の村山座で富永平兵衛作の「丹波與作手綱帯」といふのを大和屋甚兵衛が與作に扮して演じた。近松がこの作は以上の歌謡や脚本から材を採つたもので後の「戀女房染分手綱」や「けいせい重の井」の源流となつた。

**たんびしゆぎ 耽美主義**  
きやうらくしゆぎ「享樂主義」を見よ。

**だんりんは 談林派**  
だんりんふう「談林風」を見よ。

**だんりんとつびやくあん 談林十百韵**  
西山宗因が延寶三年（二三三五）その門弟田代松意の招

きに應じて江戸に下り、自身の立句として談林風の百韵十卷を擧げ延寶四年に板行したもの、この宗因の東下は當時の俳壇に可なり大きな印銘を與へたものだが、それを具體的に示すものは本書である。

**だんりんふう 談林風（檀林風）**

徳川期古風について西山宗因の立てた俳風で、之を談林と名づけたのはこの派の徒で、一ばん早く江戸に下つた田代松意の家號「談林軒」によつたものだと、又「談林十百韵」の序にあるやうに江戸神田鍛冶町に雪柴以下八九人が時々會合して俳交し「此席は我等の俳諧談林なり」と云つて折ふし下向した宗因を首座に十百韵を擧行し爾來この一派を談林派と呼んだものだと云ふ。後宗因法體して「檀林」と號したので佛家の檀林に附會して談を檀ともした。

明暦二年（二三一六）宗因は大阪天満宮境内の碁盤屋に轉宅して向榮庵を結び、

神やうけしついによるべの菊の水

とよんだのが抑々この派の産聲で爾來元祿の芭蕉が出てからも多くの門弟があり、佛系八世に及んで門戸は可なり廣まつて居る。水田西吟・北條團水・椎本才磨・田代松意・岡西惟中等はその主なる弟子で、その俳風は

「談林十百韵」が最もよく表してゐる。一帯に奇想と奇調とを好み、字あまりや詠曲が、りの句が多いが中には温藉優雅にして後來蕉風の芽生えを想はせるものもある（さうゐん「西山宗因」を見よ）

**ちの部**

**ち地**  
一、諸曲の地の文、即ちシテ、ツレその他の人物の獨語・對話・朗吟以外・景色・事件・感想等を述べた部分で語り方については種々の心得がある。

二、能の太鼓の手の名稱で「ヤ、ドン、ハハドンドン、ヤハドン」と打つ（ドンは大鼓を打つところ）

**ちうこぶん 中古文**

「雅文」を見よ。

**ちうしんすゐこてん 忠臣水滸傳 十册**

山東京傳卅八歳文化元年（二四六四）の作、赤穂義士の事蹟を水滸傳になひませた讀本で、北尾政演の挿畫が入つてゐる。その義士噺も大部分歌舞伎の忠臣藏から採つたもので、いはゞ芝居と小説との折衷のやうな構想である。高師直がかほよ（妍娘嬢と支那風にいふ）

を懸慕し、判官をして入るべからざる白虎の間に入らしめて「彼れ謀叛の企てあり」と讒言して罪に陥る、趣は水滸傳の林冲が冤になやむ筋をしくんだもの（尤この趣向は已に高尾船字文にあるから、或は孫引かも知れぬ）その他凡てこの類である。

ちうぼん 中本

徳川時代滑稽本を云ふ。製本の體裁——殊にその大ききからきたもので半紙二つ折横綴の讀本と半紙二つ切の二つ折横綴の小本との中間の大ききで糊入のみよし紙（美濃紙型）二つ切りを二つ折にして横綴にし厚表紙をかけ所々に略畫を挿み本文を假字交りにし漢字に振假名をつけたもので、十返舎一九の東海道中膝栗毛にはじまるといふ（國刊一期新群七、大久保龍雪中本書目一）

ちうむきやう 中務卿

「兼明親王」を見よ。

ちかげ 橘（加藤）千蔭

二三九四—二四六八、享保一九—文化五、九、二、七十五歳（一説二二九—二四六八、享保二〇—文化五、九、二、七十四歳）

姓は橘、氏は加藤、通稱要（後に又左衛門）字は徳興磨トコヨロ

（又常世磨）號は芳宜園・菫園（別號、耳梨山人・逸樂窩江翁・橘八衢）父を枝直と云ひ江戸町奉行大岡越前守に仕へて與力をつとめてゐた。始めは父について歌文を學び、ついで眞淵の門に入り歌文筆札の巧を以て門下にはめられた。後、父の業を襲ぎ、吏務繁忙の裡尙歌文の研究を怠らず、天明八年病を以て辭職、八町堀の自宅を塾に歌文を教へた處、門下の集るもの數百人に及んだ。

彼の本領は歌と文とにあつたが書も巧みで松花堂又入木道の風を模して一派千蔭流を立てた。その假名がきは今も世に行はれてゐる。又畫を建部綾足に學んだ。その揮毫に係るものは扇子一本でも人争うて之を珍藏した。名聲海内に喧傳するに連れて方々の諸侯より聘せられ（殊に濱田侯の如きは最も彼を慕つた）たが應ぜずして一介の民間の學者として終つた。

その著の中殊に世を益したのは萬葉集略解三十卷である。寛政元年、彼は在職中怠慢の罪を以て祿高二百の内五十石減俸の上百日の閉門を仰せつけられた。當時は樂翁公定信が銳意幕政を釐革しつゝあつた時で、その爲めに彼は思ひもよらぬ奇禍にあつた譯である。がこの百日の閉門中に略解の著を思ひ立ち、それから引

續き資料を集めて筆を執りかけたのが寛政三年二月、

脱稿したのが同八年八月十七日、四ヶ年と七ヶ月十七日間の勞作であつたが、いよゝ／＼淨書を終へたのは十二年正月十日であつた。此より前萬葉集全部の解を附したものは北村季吟の萬葉集拾穂抄あるのみ。それに比べるとこの略解は簡明適確で殊に初心者によろしい。中に往々誤謬もあるが眞淵や宣長の意見も加はつてゐるので大體正確にして信をおくに足ると謂はれてゐる。で、舊幕時代中已に數次の改版があり明治以後にも盛に復刊されてゐる。宮之を賞して銀錠若干を賜はつた「うけらが花」にその時味んだ、

みめぐみの露にしぐれに神な月ならの落葉も色  
やそふらん

といふのがある（尙、この書成立の由來と此書の價値さは關根博士帝文八の六の記事がくはしい）次に價値のあるのはその「荒が花」五巻で、これは彼の文と歌との家集である。彼は春海のやうな漢文の深い造詣がないので文に於ては一步を輸してゐるが、それでも温雅優麗の詞致誦すべき佳文に富んで居る「洒々舎に蓮を愛づる詞」隅田河のほとりなる石濱の庵にて雨の中に作れる文」などはよく引用されて居る。

歌は雅情を第一義とし優麗平明温雅を悦び中世振の調べに做ふなど要するに江戸派の歌味はこの千蔭に至つてその最高頂に達したかの趣がある。尙又彼の得意とするところは叙情よりも叙景の方面にあつたらしい。

二見湯こちふく風に明けそめて神代のまゝの春は來にけり

瑞枝さす端廣熊柹露ちりて月おもしろき夜半にもあるかな

内日さす宮路の雪にあぢまさの車しづげきあさぼらけかな

幾世々の宮木にもれてみやま木の老木ながらに若葉さすらむ

かはほりのとびかふ軒は暮れそめて猶暮れやらぬ夕顔の花

よど川を下す夜船の枕よりあとより名のる郭公かな

旅人の朝行く胸のひづめより雲たちのぼる足柄のやま

（國學者傳記集成七〇一—七二三）

ちかふさ 北畠親房 一九五三—二〇一四、永仁元—正平九、六十二歳

具平親王の後裔、權大納言師重の子で學和漢を兼れ才文武に秀で、伏見・後伏見・後二條・花園・後醍醐・後村上の歴朝に奉仕し、殊に南朝の忠臣として文勳も武勳も識見迄も高かつた人である。その仕官昇進の次第は、

- 永仁元年 從五位下
- 正安二年 從四位下
- 同 七月 兵部大輔
- 嘉元元年 左少將
- 同十二月 右中將
- 同 三年 權左少辨
- 徳治元年 左少辨
- 延慶三年 參議
- 同 四年 兼左中將
- 應長元年 左兵衛督別當
- 同十二月 權中納言
- 正和五年 從二位
- 元應元年 正二位
- 同 二年 淳和院別當
- 元享二年 右衛門督別當
- 同三年正月 權大納言
- 同 五月 獎學院別當

元徳二年九月十七日 出家、宗玄と號す  
元弘三年 後醍醐天皇隠岐より還幸につき再び出仕、從一位、准大臣  
正平六年 准三宮

彼は斯くも永年に亘つて奉公の誠を效し兵馬の小閑を孜孜として多くの有益なる述作を遺した。蓋し古往近來左劔右筆の生涯を辿つた人の中の第一人者であらうその著、職原鈔二卷官職の沿革、補任の次第等を記して斯道の必讀書となり後世之が註釋・抄出・評論等約二十種内外を計へる程である。

神皇正統記六卷は上神代より下後村上天皇の踐祚に至るまでの評論體の國文の史筆で、文章は達意なり論旨は堂々たる尊皇愛國の思想を根調とし、南朝の正系たることを強調したもので之亦後世に廣く行はれてゐる其他尙、元元集、東家秘傳・二十一社記・古今集註等の著がある。當時廟堂の博識として彼以外藤原宣房・源定房があつたので世人之を三房と稱へたと云ふ。

**ちかまさ** 蛭川親當 ? — 二〇八 ? — 文安五  
足利將軍家に仕へて伊勢の守に任ぜられ和歌をよくした。後に出家して智蘊といふ。

**ちかゆき** 源親行 ?

鎌倉時代初期の國文學家にして傳記は未詳、その著に東關紀行(群三三一、一一、一〇〇五—一〇二一)あり、その味三首續拾遺集に入る。東關紀行は和漢混淆文體で東海道の旅を綴り當期の代表紀行文とされてゐる(尙二三所見を左に補つておく)

扶桑拾葉集作者系圖によると彼は攝津源氏多田滿仲の弟滿政六世の裔正五位下右衛門尉光遠の子で海道記の著者として知られてゐる大監物正五位下、光行、その光行の子であつて地位は從五位下式部丞河内守である東鑑に散見する彼の閏歴は、

- 一、承久三年以前已に鎌倉方に仕へて同年八月二日には父光行が院方味方について金洗澤で刑に處せられる處を命請ひして免され。
- 二、貞應三年閏七月廿三日には武藏に騷動が起きて多くの將士が征伐に向つた時親行は別に命は無かつたけれども參加した。
- 三、同年十一月十四日には相公羽林上洛の扈從をした段不都合とあつて出仕を止め、所領を沒收された。
- 四、文暦二年正月廿六日將軍方違の爲め周防前司親實が大倉の家に入られた時、詠歌の席に仕へて懷紙を進めた(題は竹間鶯、寄松祝)

五、同年六月廿日には來月には間があるといふのでごちらの月に大祓をしようかとの下間に答へてゐる。(ノチノミソカチミソカトハセヨ云々の證歌をあげて)

六、嘉禎二年四月四日には將軍方違のため若宮大路なる小山下野入道生西の家へ御入につき同家先年焼亡新築の邸宅につき初めての御成りに方違如何あらんとの儀につき御下問(彼以外二三の人と一緒に御答へした)

七、同三年三月廿九日新御所の歌會。題、梅花盛久・花亭祝言で詠進。

八、同四年十一月十七日夜に入つて大雪。和歌の小集に召さる。

九、仁治二年九月十三日將軍家柿本ノ影供に參列。

一〇、寛元元年九月五日將軍家管絃の催に參會。要するに一時のお咎はあつたにしても、始終鎌倉の大小名に伍して有職と歌道とによつて重んぜられて居たことがわかる。

光行は又古書校勘の上にも特筆すべき業績を遺した。藤原頼經は源親行に命じて萬葉集一部を校調せしめ、三箇證本即ち松殿入道殿下本・光明峰寺入道本・鎌倉右

大臣家本を以て比較せしめたり（佐々木信綱氏帝國歌學史）

とあつて萬葉をも校訂したし、又古今集も異本八種を對校したものが遺つてある（故大口鯛二氏所藏）

更に又國語學史上行阿假名遣にも關係がある。行阿は親行の孫に當る人で假名文字遣一卷（即ち行阿假名遣）の著者であるが、その序に、

京極中納言家集拾遺愚草の清書を祖父河内前司千時大炊助

親行に誂へ申されけるとき親行申云をおええへいひゐ等の文字の聲かよひたる誤あるによりて其字の見わきがたき事之、然問此次を以て後學の爲めに定めをかるべき由黃門に申す所に、われもしか日來思ひよりし事なり、さらば主墨が所存の分書出して進すべき由仰られる間大概如此注進之とて盡其理相叶へりとて則合點せられ畢ぬ。

とあつて主なる假名遣は親行が定めたことを明らかにしてゐる。

**ちくさん 中井竹山** 二三九〇—二四六四、享保一五—文化元、七十五歳

儒學者。登庵の子、名は積善、字は子慶、通稱善太。弟の履軒と共に宋學を五井蘭洲に學んで出藍の譽があつ

た。その旨とするところは朱子學にあつたけれども敢て拘泥せず採長補短の雅量をもつてゐた。後父の經營に係る懷徳堂書院の長となり、よく數多の學徒を導いた。諸侯禮を厚くして聘したが、彼は何れにも應ぜず自ら處士を以て自重した。彼又詩文を能くし、その著草茅危言は和漢混淆文體で佳作と謂はれてゐる。その他著には逸史・詩律兆・非論語微・浣陰志・洛陽志・社倉私議・竹山文鈔・西上記などがある。

**ちくしやうばら 畜生腹**

廣津柳浪「明治三十年十月病中未完稿」とある小説。

其火災保險會社員「丹治重三郎」（廿七歳）が出張先の小間使「おもよ」を見初めて結婚を申込み、首尾よく華燭の典を擧げてから一年半の月日が流れた。おもよは「丸顔のどちらかと云ふと美人の方で、而も云ふばかりもなく愛くるしい……丸髷に緋のてがらを掛け、いかにも初々しく見受けられる（五八〇）重三郎は「才氣面に溢れると云ふ方ではないが、何處かに締のある面立で、而も落着があつて語調も至極靜穩である（五八〇）夫婦仲は至つて圓滿でおもよは早くも妊娠臨月で、その産期も數日と醫師の宣告のあつた矢先、主人は社用で名古屋の方へ出張を命ぜられた。主人も心配

だが妻の心配つたら無い、まるで死別のやうに悲しんだが幸にも召使の「お近」は此迄出産に經驗があるので「わたしは居ますからには大船に乗つたつもりで居て下さい」と云ふ。それに今一人馬鹿正直の「力造」もついて居ることだからマアどうにかならうと云ふので明日の旅装を整へた。話の序に「婆やの方では子供をまびくと云ふことがあるか」なぞ聴く（まびくとは双生兒が出来たら一人を暗に葬ること）「いいえ、今はお上がやかましいですからそんなことは致しませぬ」と婆やが云ふ「まびくつてな」に「とおもよが聴く、言ふまじきことを言つたと主人も婆やも話を他へそらした。

主人出發後幾日かたつた。徒然の暇におもよは婆やから「まびく」の講義を聴いた「双生兒の中一方が男兒で一方が女兒であつたら畜生腹と云つて最世間で忌む所だ」と云ふことも聴いた。産氣がついて分娩するところはもいかに一人は男兒一人は女兒、オヤと思ふまに婆やのお近が呑込顔に女の兒を殺してムザ／＼と床下に葬つた。おもよがせめて一目見せて……と言ひかけるとこはい眼をして「いけません」とサツサと持つて行つた間なく主人が歸つて来て産兒は「重二郎」と名づけ、又

樂しみが一つ殖えたと云ふので會社では子煩悩の噂をとつたが、それ以來おもよは非常に泣く泣くしめつづくなつて何かにつけてホロ／＼と泣くやうになつた。お近は奥様の秘密を一つ握つてゐると云ふもので段々増長して主人の日本酒や葡萄酒をガブ／＼飲み出す。主人も見かれて「あんな婆やは暇を出さう」と云ふと、おもよが百方辯解して宥める。そんなことが度重なるに連れて主人は段々妻を疑ひ出した。何か自分に對する秘密で二人がぐるになつてした事があるに違ひないと思ひ出した。

此顛末を最よく知つてゐるのは力造であつた。彼はもと「大宮では相應な身代の總領に生れたのであるが馬鹿力と云はれる程正直過ぎるので、父親が死んだ三年目に繼母と異母弟の爲めに家を横領され、其上に難癖を付け世間を拵へて追ひ出されたのである（五九二）三年の昔「重三郎が會社の用で武州の秩父地方を旅行した時大宮へ掛からうと云ふ道端に病に苦しんで倒れて居た（五九二）のを重三郎と車夫とで介抱して大宮の宿屋へ連れて来て、身の上を聴いて更に氣の毒になつて、とう／＼家へ連れ歸つて其儘居候させてゐるのだが正直律義で變人で「自分の意に落ちぬ事は何と嚴命

を下しても決して従はぬ。それで素より一點悪意があるではなく(五九一)唯一つ道樂にはよく講談を聴きに行きこまのだが、此講談がまた少からず彼の性格に影響して居る。一度思に感じては身を殺しても仁を爲さうと云ふ意氣込は彼の堅固一徹の氣性に深く根ざして居る。頼まれもせぬ悪事を自分勝手に働いておいて奥様を強迫しては小遣をせびつたり酒をのんだり我儘三昧をするのを見ては憤慨に堪へない。今や主人の疑惑もおもよの當惑もお近の我儘も其極に達した時、そしてお近が事實を主人にさらけ出して「これでもわたしを追ひ出す勇氣があるか」と悪度胸を据ゑた時、忽然力造の犠牲心が動いた。更開けた丹治家に唐紙をスーッと開けてホイッと紙包をほふるものがある。確かに力造であつた。主人がその紙包を取上げると、それは實に彼の遺書と戒名とであつた。

ごしんさま何もしらぬ  
にくいのはこの鬼婆 いこんで力造ころす いぬじに  
ならぬやうなにも云ふことならぬ こればかりたのみそろ  
いつまでも なかよく ぼつちやん おほきくなるのを  
あのおよからみてゐる

くれぐれいぬじにならぬやう、なにもいつてならぬ。いこんでころしたにくいば、アめツ おもひしつたかじしゆする  
かみやうたのんでかいてもらつた おてらは こいしかはの——寺はかある(七一五—七一六)  
此はと驚いて女中部屋に行くとお近は細引で喉を締め殺されてゐた。自首した力造は其後有期徒刑の宣告を受けた(柳浪叢書前編五七九—七一一)

**ちくどう** 齋藤竹堂 二四七五—二五一二、文  
化一—嘉永五、廿八歳  
名は磐磐、字は子徳、通稱を順治と云ひ、家は代々仙臺伊達家に仕へた。彼は早く江戸に出て増島蘭園に學び、次いで昌平齋に學び、進境顯著衆皆驚異した。終に下谷相生町に門戸を張り、多くの子弟を教授した。その著に藩祖實錄・盡忠錄・鴉片始末・竹堂文集・奥羽舊事・讀史叢議・蠢々傳・佔畢餘音・蕃史・洋風孟浪語・竹堂詩鈔等がある。

**ちくはくゑん**は(なぎのそのは)竹柏園派  
佐々木信綱を中心とする歌人の一派で、その選集に竹柏園集があり、その機關雜誌を「心の花」といふ。その歌風の新に偏せず舊に泥まぬ穩健なこと、その會員に上

流婦人の多いこと、その集團の大きく且つ永續せることなどが特美で石樽千亦・川田順・木下利玄・片山廣子橋系重子などはその初期に聞えたこの派歌人である。

**ちくふう** 登張竹風 明治六、二〇、二一  
廣島縣の人、名は信一郎、三十年東大獨逸文學科を卒業し山口高校・東京高師・二高に教鞭をとり現に二高の教授である。

小説「あらひ髪」は小説作家としての氏の才能の片鱗を示したもののながその後創作に筆を絶つた。又樗牛など盛にニイチエを紹介したり宣傳したものが、今は極めて冷靜温藉である。そのツアラトウストラの譯は譯とよりは寧ろ氏自身の體驗記録である。ニイチエと二詩人・氣焔録・舌筆録・賣國奴等も相當に名高く獨和・和獨の兩辭典には半生の努力が結晶して居らう(尙餘計なきだが大の酒豪でビールは一打、日本酒は斗酒尙辭せず、日東の李白が石川丈山なら氏は現代の李太白であらう)

**ちくぶしま** 竹生島  
諸曲 前シテ 漁翁 後シテ 龍神 ワキ 臣下  
ツレ 姫 ツレ 天女 處 近江

延喜の聖代に仕へた臣下、鴉の海なる竹生島に詣づる

中途辨財天(姫)と龍神(翁)とに遭ひ、天女は宮中に入り龍神は水中に入る。  
文詞優麗、脚色神祕を以て優る。

**ちくらさんじん** 竹羅山人  
なんぼ「太田南畝」を見よ。

**ちくれい** 角田竹冷 (聽雨窓・神田閑人・  
閑々人・半閑人・未閑人・頓々房) 安政四、  
六、一五—

静岡縣の人名は眞平、七年上京、法律を研究して代官人となり、爾後政治・實業の方面で立派に成功者となり、随分忙しい中を俳句に腐心し、秋聲會を組織し雜誌「秋の聲」を發刊した。その句は多少月並めいて居るが一味清新の情趣を湛へ、一面檀林風の味もあり、又よく時事吟をも試みた。その著に「俳諧木大全」がある。

鶏のうしろ吹かる、春の風  
卯の花や古驛の娼家一二軒  
茶を焚きて童子待つあり夏木立  
旅に寝て足袋乾かする圍爐裏かな

**ちげふう** 地下風  
徳川時代の歌壇に於て堂上風に對して公卿階級以外士農工商の人々の咏出した歌の風をいふ。もと堂上派歌

人の悪語から起つたものだが、新し味は寧ろこの方に多かつた。

**ちげつに 智月尼** 二二九三—二三六六、寛永一〇—寶永三、七十四歳

元祿五俳女の一人で近江に住んでゐた。その子を乙州と云ひ、母子ともに蕉風の門に入つて雅懐を暢べてゐた。晩年芭蕉が訪づれた時「何か記念の一筆を」と所望すると「このお婆さんから記念を請はれるとは心細いなあ……」と云つた調子で書いて與へたが、その年芭蕉は亡くなつたといふ。

鶯に手元やすめん流し本

盆に死ぬ佛の中の佛かな

我形も哀れに見ゆる枯野かな

木枯や色にも見えずちりもせず

**ちさと 大江千里?**

延喜前後の歌人で中古三十六歌仙の一人。父を音人と云ひ朝に仕へてその官歴は美濃守・六位・兵部大丞とある。漢學は家の學問で彼亦漢詩漢文の着想を以て和歌を吟んだ。有名な、

てりもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき

は白樂天が「不明不暗臘々月」から脱化したものである。「月見れば千々に物こそ」の詠も白樂天が「燕子樓中霜月夜秋來唯爲一人長」の譯歌とも謂ふべきものである。家集に大江千里集(寫本一卷)があり、別に大江千里句題和歌一卷(群一七九、七、一〇一〇—一〇一六)があり、古今・後撰・新古今・新勅撰・續古今・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新續古今・後六撰等にも散見してゐる。

**ちすけ 櫻田治助** 二三九四—二四六六、享保一九—文化三、六、二七、七十三歳

堀越榮陽の弟子で、本名は中村平吉、號は狂言堂(又左交)江戸の有名な狂言作者である。一代の作百餘種新曲高尾懺悔・隅田川對加賀紋・恭盤忠信雪黒石・明烏花濡水・於玉ヶ池三人娘などは殊に名高い。彼は世話物に得意で又狂言名題の角藝題などを巧に書きおろし、世に櫻田風と稱せらるゝやうになつた。

彼の名句は高尾懺悔の  
年があいての樂しみは、やがておの字の名を付て、むり酒吞まぬ身とならば、すあしもやばな足袋になりと云ふので、これを山東京傳に見せた處「句々珠の如し」とほめ「むり酒吞まぬ」を「二日酔ひせぬ」とし

てはどうか?と云つたら、治助も膝を打つて「妙々」と悦び早速改作したと云ふ)

彼死に臨み遺言するには「吾後佛事追遠を望まず。只江戸狂言を滅すべからず。今より三十年を経なば、狂言は當に俳優の手に出づべし。努めてこの弊を防げ」と。道に忠實にして且つ先見の明ある言と謂ふべきだ。

**ちたて 城戸千楯** 二四三八—二五〇五、安永七—弘化二、九、二一、六十八歳

京都錦小路室町の本屋で、國文學者で又歌人でもあつた。荒木田久老にも教へを受けたが、後主として本居宣長について學び、鐸の屋で學徒を教へた處、ついで學ぶものが甚多く後には本業よりはこの方が主になつた通稱は蛭子屋範次、號は靈堂又は紙魚屋。その著「和歌ふるの山ぶみ」四卷は初學者の爲めに歌題や例歌を集めたもので、廣く世に行はれた。その他雅言通載抄四卷・勅撰和歌初句類聚・紙魚室雜記等の著もある。

**ちちのやしふ 千々酒屋集** 二卷

〔ありこま〕(千種有功)を見よ。

**ちとうてんわう 持統天皇** 一三〇五—一三六二、大化元—大寶二、一、二、二二、五十八歳

天智天皇の第二皇女、御母は蘇我遠智娘、天武天皇の

妃として内助の御功績著しく天皇御即位と共に立后せられ、その崩御後天武天皇御即位までの御代を知ろし召して、難局に善處せられ「深沈にして大度あり節儉にして禮を好み母儀の徳に富ませられた」ことを史家は齊しく稱へ奉つて居る。御製は萬葉一、二、三、及び新古今・新勅撰等に出て居る。

春過ぎて夏來るらし白妙の衣ほしたり天のかぐ山(萬葉)

春過ぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山(新古今)

有名なこの御製は多分萬葉のが本當であつて新古今のは後人の書きかへであらう。

**ちなみ 加藤千浪** 二四七〇—二五三七、文化七、一一、一九—明治一〇、一一、一八、六十八歳

通稱彌三郎、號は萩園明治初期の歌人として有名な人、奥州白河の人、家貧くして幼時早く江戸の某呉服屋に丁稚奉公にやられたが、性來讀書が好きで暇には古本屋の店頭になつてひやかすまねをしてその嗜欲を満たして居つた。丁度その家の息子が岸本弓弦に通つてゐたので、彼もそのお供をして行く申弓弦翁に認められてその入門を許された(せめて酒を一升だけ束脩に

持つて来いと云はれたので彼は自分の古着を代に替へて酒をさとのへて持参したといふ)

人しれぬ野中の里の埋れ水すゑは野守の鏡とも

なれ 弓 弦

人しれぬ野中の里の埋れ水くまるゝ折にあひに

けるかな 千 浪

はその時の贈答歌である。やがて彼の歌名が一世に高くなつて宮中から禮を厚うして聘せられた(明治五六年の頃)が彼は、

高きにもものぼらんものを心がら里のかきれにな  
る、鶯

と述懐し、飽くまで民間歌人を以てその分とした。彼の風采は頗る上らない、背が低くて鼻が大きくて一見田舎老爺のタイプであつたが、それでもその才と徳とは幾多の崇拜者があつた。その門人には可なり名流輩出したが殊に伊藤祐命・中島歌子・木郷銚子・伊東千勢子・吉野義卷・池田勝輝・鶴久子・本堂親久・笹村良昌・須賀子などが名高い。その著には萩園歌集・詠史百集一卷などがある。その詠の一斑をあげると、

心して見れば教へとなりにけりみちをたがへぬ  
ありのゆききも

思へかしうるを心のかり人も袖にかくるゝ鳥は  
とらぬを(仁)

ふみわけてなど見ることのかたからんかきのこ  
したる人もあるよに(書)

ほさゝぎすなきつるあとに駒さめてむなしき空  
を仰ぎつるかな

蛙の自畫自賛

酒のみはとかくにあとをひきがへるかへるかへ  
るさいへどかへらす(國學者傳記集成一五一三—  
一五一八)

ちはうぞくえう 地方俗語

徳川時代地方に流行した俗語をいふ。多くは戀歌か、職業歌だが、中にはその地の人情言語風俗を反映して素朴な地方色の拘すべきものもある。盆踊歌・船唄・馬子唄・田植歌・鞠唄・子守唄・追分節・磯節・米山甚句・木遣崩し等は皆この種に屬する。

ちはやじやう 千早城

資料、太平記七ノ九・史籍新田老談記中ノ一七・三楠實録上、三ノ一〇・河内名所圖會二ノ二・近世文河内國名所鑑一ノ三三一・類聚名物考二ノ四二・玉石雜話一ノ二二・同續編一ノ一一・國花萬葉記四ノ一・三國傳記

一ノ一二。

千早城趾に關しては、宗祇諸國物語一ノ八・全集南遊紀行下ノ一二九・南木誌三ノ三〇・河内名所圖繪二ノ五・日本地名大辭書。

ちびき 大石千引 二四三〇—二四九四、明和

七—天保五、九、一三、六十五歳

元、龜井戸の湯屋の主人だつたが、性來學問風流を好み、穩雅にして人と接しては謙讓の美德あり、名利の念薄く損益のことは絶えて口にせず。早く千蔭の門に入つてから贊を執り、後徒を集めてその宅で教授した。彼れ、名は貞見、通稱傳右衛門、字道和、號は野々舎又星廬とも云ふ。その著言元梯は非常な熱意を以て書かれたものだ。蓋し彼れの抱負は「今の學者のなすところ古書の註釋か、古言の義解か、古歌の意を喩すかの三つで毫も自家創意の存する處なし。自分は何でも我と考へ出した語釋を書いて見たい」といふにあつた。彼の長所は王朝文學と今様歌・琴歌の創作と萬葉振の咏歌とで又物語隨筆にもたけて居た。その一女又嗜好を父と同じくし、商家の繁を避けて藥研堀の某氏の地を借りて住み、今様の歌を作りて琴にあはせみづからも歌ひ興じて暇ある折々の心やりとしたと云ふ。彼の著

は尙八種あつて何れも世を裨益して居る。

大鏡系圖・大鏡短觀抄・御即位記・梅合榮花物語抄・水鏡短觀抄・日中行事略解・野々舎隨筆。

ちへゑ 津打治兵衛 二三四〇頃?—二四二〇

延寶八年頃か?—寶曆一〇、正、二〇、八十餘歳

江戸演劇に於ける狂言作者の鼻祖。元、浪華に生れ、父は同姓同名の親父形役者であつたが、彼は元祿の頃より脚本に筆をとり已に浪華の梨園に謳はれて居たが、後江戸に下り寶曆三年市村座に大當りを取つて以來毎作大入、作者としての問歴前後五十七年世皆その才をめでた。蓋し彼の特技は時代を世話にくだき、世話を時代からまかせて巧に觀客の興を惹くにあつて、純創作と稱すべきものは少い。「二河白道」「淡島榮花舞」は出世作と傑作だがこれとても折衷劇である。彼亦俳諧をよくし俳號を英子と云つた。

(嘗て雜司ヶ谷の鬼子母神奉納額に地獄の天秤棒を畫き一方に治兵衛を載せ、一方に座主俳優一まとめに載せ而かも棒は治兵衛の方に傾いてゐると云つた諷刺戲畫があつたと云ふ以て彼の聲望を推すことが出来る)

彼の辭世に云ふ

玉の緒のありたけ腔をかきつくし今ぞ冥途の道

ちまた 石樽千亦

愛知縣の人、名は辻五郎、帝國水難救濟會本部の要務を執つて勤続三十餘年、傍ら心を和歌にひそめ、佐々木竹柏園の高弟として雑誌「心の花」を事實上一人で編輯して居る。潮鳴、鳴等の歌集があり、職掌柄海に關する秀味が多い。

ちやうらうそら 聽雨窓

ちくれい「角田竹冷」を見よ。

ちやうえいしきもく 貞永式目 (御成敗式條) 一卷

後堀河天皇貞永元年(一八九二)八月執權北條時頼の命により、評定衆清原教隆以下十一人が源頼朝より守邦親王までに行はれた成敗式目を輯録したもので「可下修三理神社・専祭祀事」以下凡て五十一條あり、文體は當時東鑑などにも見らる、和奥を帯びた漢文である(群四〇〇、一四、二―一三、續史四六、四七、四八、貞永式目抄、國刊一期續々群七御成敗式目注)

ちやうか 長歌

五七、五七、を二回以上並べて最後を五七七でとめた歌體で、萬葉集に一ばん多く又一番優れた作が集まつ

てゐる。古今集では雜體の一部に「短歌」とみだしして數首入つて居るが風格が遙に落ちる。それに萬葉では、

あめつちの 別れし時ゆ 神さびて たかくたふとき。するがなる ふじのたかねを……と様に節が五七調で抑へがごつしりしてゐるのに古今集のは、

……のばへまし。あはれ昔へ ありきてふ。ひとまるこそは うれしけれ。身は下ながら ことの葉を。あまつそらまで きこえあげ。……

と様に七五調になつて抑へが浮かび、何だか明治初期の拙い新體詩といつた趣がある。其他大鏡の註や伊勢の集や十六夜日記などにも長歌が散見して居るし、徳川期に入つては多くの人々によつて可なりすぐれた作も出たが矢張、これは萬葉の獨壇たるやの觀がある。

(古類文學部一、五二〇―五三三)

ちやうかう 望月長好 二二七九―二三四一、

元和五―延寶九、三、一五、六十三歳

信濃の人、京都に出て和歌を松永貞徳に學び、同門の宮川松堅と歌名相並んで稱せられた。嘗て山城廣澤池

畔の風趣を愛してこゝに幽栖し、廣澤長好と稱したことがある。家集を廣澤輯藻といひ外に桂雲和歌集類題がある。又その門人には和歌血脉道統譜の著者平間長雅がある。

春なれや霞むとまではなけれども遠山のはぞまづほのかなる

山川の岩うつ浪もむらさきにくだけてうつる秋はぎの花

つらかりし睡覺のおとも忘られてあくれば拾ふ庭のさき栗

みどりなるひとつみ空の月影も秋はいるくの露の花ぞの

ゆめさそふ夜半のあらしの山寺に川音きよき月を見るかな

ひろさはちやうかう 廣澤長幸

ちやうかう「望月長孝」を見よ(山城廣澤の池畔に住んでゐたので「廣澤」を名のつたのである)

ちやうこん 芍薬亭長根 二四二八―二五〇五、

明和五―弘化二、二、一〇、七十八歳

實名は菅原長根、本阿彌光悦七世の孫、始め明誠堂喜三二について戲作狂歌を學び、淺黄裏成、二世喜三二

の號を譲られたが、戲作はさほどの成功を見ず、狂歌を以て世に立ち狂歌判者の大家となり。又狂文をもよくした。その著に狂歌人物志・芍薬亭文集・一字題百首及び數種の草雙紙がある。

ちやうかせんかく 長歌撰格 二卷

橋守部の著、古今の長歌を引例してその句格・修飾等を詳論した書物(橋守部全集第十一卷 吉川弘文館長歌撰格)

ちやうさぶらう 目貫長三郎?

澤住の門に入り戯曲作者となり、西の宮の傀儡師引田某と結托し、自作の淨瑠璃を操人形劇として演出した。是れ我邦操人形の原始的なもので他日大阪の竹本・豊竹二座の備をなすものである。

ちやうざん 石川丈山 二二四三―二三三二、

天正一一―寛文一二、九十歳

徳川初期の儒學者、三河碧海郡の人、京に出て藤原惺窩の門に入り林羅山・堀杏庵・菅原得庵・野間三竹等の名家と相往來した。詩文を能くし朱子學に造詣深かつた。母老い家貧しきより孝養の爲めに紀州侯淺野長晟に仕へて十三年母の歿後早速致仕して寛永十八年叡山の麓一乘寺村に小庵をかまへて詩仙堂と號し、漢魏よ



り唐宋に至る詩人三十六人を選んで狩野探幽に肖像を寫して賞ひ自から詩を題して公任が三十六歌仙に倣ひ六々山人と號した。一生妻を迎へず子もなく後は一弟子安尾某に譲り「日東の李白」と呼ばれて終生詩酒を樂しんだ。彼初の名は重之、後「四」と改名、通稱嘉右衛門、字は丈山、號には四明山人・六六山人・四西高・大拙・烏鱗・山村・藪里・東溪・三足等。著書としては詩仙詩・本朝仙註・朝鮮筆語集・正續覆轡集・東溪翁隸法・祝壽長篇等がある。

**ちやうしうえいさう 長秋詠藻 二卷**

藤原俊成、その官、皇太后宮大夫であつたから、自家集を皇后宮の漢名「長秋宮」に因んで長秋詠藻といふ。(續國一―二七)

**ちやうすゐ 常世田長翠 ?―二四七三 ?**

―文化一〇、八、一二、?歳(一説に文化八年癸)下總國匝瑳郡木戸村の人、椿海又は小袋庵と號し白雄門下の名俳で二世春秋庵を名のつた。晩年出羽袖ヶ浦にも居して故床庵といひ、又酒田に移つて殘露庵といひ奥羽四天王(乙二・素卿・五明)の一に數へられ、その著に「ふりつむ花」といふのがある。

**ちやうすゐ 白井鳥醉?**

江世浪華の俳人、其角の流れを汲んで洒落の俗調を帯びてゐた松木淡々の門に入り、元祿の正風、寶永・正徳の洒落風と後に起きた安永・天明の蕪村調との過渡期を代表する享保俳人で(彼と、希因と、也有と外二三の人々)其門から白雄や百明が出た。

天の際にちらばる人や汐干狩

閑古鳥舟は向ふの岸にあり

**ちやうせうし 木下長嘯子 二二二九―二三〇九、永祿一二―慶安二、六、一五、八十一歳**

近古室町に於ける徹書記の如く、近世の始め洛東の庵の風月に嘯いて清新な秀味に詩懷を遣つた木下長嘯子は武士としては失敗したが、歌人としては立派に成功した。

彼れ本名は木下勝俊、豊臣秀吉の姻戚(北政所の甥)で始め豊臣氏に屬して若狭に封ぜられ、後徳川氏の麾下に屬して伏見の城に居る。時に豊徳二家の關係日毎に悪化し遂に大阪陣となる。勝俊君臣の義理と血族の恩愛に挟まつて依違決せず、遂に戈を棄て京に走り東山に逃れそこに居を結んで幽栖し、花鳥風月に心を慰め、詠歌詩作に俗勝を清めた。細川幽齋や、藤原惺窩やその親交する所は皆當代第一流の人々ばかりであつた。

彼の歌文中、四生うた合一・うなひ松一・戀の歌合二は門人山本春正が集めて舉白集十卷とした。外に東山山家記一・武用辨略八・若狭少將勝俊朝臣集一などもあつて、歌が殊に優れて居る。

出でぬまの心づくしを山の端に取り返すまで澄める月かな

秋の野に千箱の玉をなげ捨て、取る人なしと見ゆる白露

うぐひすの聲のひゞきに散る花のしづかにおつる春の夕暮

古郷のまがきは野らとひろくあれてつむ人なしになづな花咲く

夕されば雲吹きみだる山風に一聲すこく雁なきわたる

よしやたゞうき世に何か久方の月をのみこそ花をのみこそ

尙散文には九州の道の記(群三三八、一一、一二六八―一二七四)さか衣(群四八一、一七、四二八―四三三)の著もある。

彼の新調は従来保守派歌人の池に投じた巨石となつて可なり大きな波紋を起した。之を非難した尋舊坊の難

舉白集、それを更に攻撃した舉白集難々(長嘯子の門人某の著で一に舉白心評ともいふ)などが續出した。之を難するものは、

先達の制を敗り古き新しきぬしある詞をとり用ゐ、異體俗語をよまるれば破戒偷言集、邪魔俗風集などいふべきをや

などと悪口した。

彼が花の深き愛好者であることと、藤原惺窩との交情密であつたことは述懐の、

山深くすめる心は花ぞ知るやよいざ櫻物語りせや、惺窩が花の頃大原に遊んだ序に彼を訪うた次の七絶によつて知ることが出来る。

君是護花護花君 介花此地久留君  
入門先問花無恙 莫道先花更後君

又「玉かつま」一〇には「見もしらぬ人の柴の戸をさしのぞきて心あるかなとほのかにいへりければ」と詞書して、

あはれしる我身ならねど山里にすめば心のありげなるかな

とあり「假名世説」には短檠の歌とて

なむ目もや、くれ竹のともし火はよるの玉づ  
さ猶てらせとや  
とある。

ちやうせつしふ 聽雪集

「雪玉集」を見よ。

ちやうづまる 長頭丸

ていとく「松永貞徳」を見よ。

ちやうばいぐわい 長梅外 二四七〇—二五

四五、文化七—明治一八、七十六歳

本姓長谷氏豊後國日田郡五馬市村の人、名は允文、字は世文、梅外などと號し、初め醫と書とを學び、後廣瀬淡窓の門に入て儒學を受け、最も詩書易左傳に精通し、詩をも文をも書をもよくした。天保中豊前彦山に登つて山主に仕へ、ついで諸方を遊歴して衆生を教へた。時方に幕末尊王討幕の議論沸騰し彼亦尊王の志を抱いて窃に爲すあらんとし、早くも幕府の忌諱に觸れ走りて長州に赴き侯の優遇を受けて藩の學政を助け、明治維新の後東京に移りて斯文學會の講師を囑託せられ、十八年明治天皇伊藤博文の邸に行幸の時召して詩を御前にて作らせられ、畏くも賞賜の御沙汰を賜はつた。是を彼が畢世の光榮でやがて同じ年に長逝した。

著書は詩書評釋・左傳彙纂・左通録・梅外詩抄・隨筆詩話等で、書家として名高い長三洲は實にその子である。

ちやうはく 有賀長伯 二三二—二三九七、

寛文元—元文二、六、二、七十七歳

京都の人、號は以敬齋、歌を平間長雅に學び、拮据勉勵、業大に進み遂に一家を成す。著書と相俟つて後進指導の上に功績ある人、家集を「長伯集」「秋葉愚草」と云ひ、歌學書には「初學和歌式」「歌枕秋の寢覺」「和歌八重垣」(尙古堂博文館合同發行)「濱の眞砂」などが名高い。その他和歌八重垣分類・歌林雜木抄・和歌二葉草・世々のしなり・同追加・源氏掌故等の著がある。

ちやうめい 鴨長明 一八一四—一八七六、久

壽元—建保四、六、八、六十三歳

鴨縣主の後裔で、幼名菊太夫(又南太夫)早く父母に訣れて父方の祖母に養はれ、二條帝の應保年間從五位下に叙せられ、高倉の朝、父の後をついで賀茂の社司たらむことを乞うて許されず、別に鴨の氏社を建ててその廟宜に任せられようとしたが、辭して就かなかつた。同帝安元三年四月廿八日(彼廿四歳頃)大火に遭ひ、安徳帝治承四年四月廿九日(廿七歳)大風に遭ひ、同年六月福原の遷都があり、養和元年同二年(廿九歳廿歳)

の飢饉に遭ひ、後鳥羽帝元暦二年七月九日(廿二歳)に大地震に遭ひしたが、土御門帝の建仁元年(四十八歳)後鳥羽上皇が和歌所を復興されたのでその寄人の一人として召され始めての味進に三體(肥大・拮据・豔雅)を味んだ。同帝建永年間に職を辭して大原山に閑居し名を蓮風と改め、ついで日野山に移り住んだ(五十歳から五十七歳頃まで)順徳帝建曆元年(五十八歳)後鳥羽上皇が再び和歌所寄人に召されたが辭退した(沈みにき云々の歌)同じ年、參議藤原雅經の推薦で鎌倉に下り源實朝に謁して歌道を説いた。

以上は記録に表れた彼が外面的閑歴であるが、その著と謂はれてゐる方丈記その他の數書により溯つて彼が辿つた人生の足痕を考へるとその性格已に隱逸の萌芽があり、氣位の高い處がありましたが彼は生れて以後も必然的に孤獨なるべく境遇づけられて居た。幼にしてみなしごであり、一時妻帯もしたが早く訣れて鰥となり、一人の子もあつたがこれにも先たれて子なし親となつた。この「親なし子」で「妻なし夫」で「子なし父」たる彼が廣く神典・佛典・國書を涉獵して、深い自覺に眼を開いた矢先に、繼嗣問題が起きて社司となる望みも絶えてしまつたので彼がこれまで内に潜んでゐた厭

世、憎人の思想は直ちに點火されて爾來彼の思惟は益々この方に傾いて深入したのにかつて、加へて大火に飢饉に、遷都に大風に大地震と天變地妖の頻發に「浮世のはかなさ、人間の弱さ」をしみく痛感し、さてこそ大原の閑居となり日野山の幽栖となつたのである。彼が學殖は和漢梵の古今に亘つて頗る廣く、而かも何れもよく消化して生々しい趣味がない。隨筆方丈記は趣味・厭世・憎人・人間味各種の長明の自畫像となつてゐる。彼の趣味は和歌と自然美と清遊と音樂と冥想と讀書と法悦の陶醉とにあつた。彼の人間味は天災に當面しての人情美・人情醜の描寫や戀歌や贈答歌に窺はれる。彼の歌は千載和歌集の撰に始めて一首採られ、

隔海路戀

思ひあまりうちぬる宵のまぼろしも浪路をわけ  
て行きかよひけり

新古今には十首も採られ以後代々の歌集に散見してゐる。家集に鴨長明集(歌學全書七・群二五七、九、八七六—八八〇、續國八五六一—八五九)にある。その數百四首、不審に思はれることは彼の味には彼自身の人生活の體驗が充分に滲出してゐるとは見られないことである。歌の大部分約四分の三が題味で多くは想より

は形の巧緻なものが多い。

父みかりてあくる年花をみてよめる

春しあれば今年も花は咲にけり散ををしみし人  
はいづらは

世は捨つ身はなき物になしはてつなにを恨むる  
たが歎きども

住みわびぬいざきはこえむしでの山さてだに親  
の跡をふむべく

などが縁かに實感味があるだけで、  
石川やせみの小川の清ければ月も流れを尋ねて  
ぞすむ

よし野山高根に花や咲ぬらんはれゆく中にとま  
るしら雲

ながむればいたらぬくまもなかりけり心や月の  
影にそふらん

などは詞は綺麗だが着想に於て彼が獨自の世界を示し  
てゐるとは観られない。

尙彼の歌學の書には無名抄(歌學全書一)があつて、  
當期歌人の逸事や雑談を記し、歌學史の資料ともなり

歌心啓培の助けともなるものだ。  
また彼の作といはるゝものに發心集・瑩玉集・文字鏤な

どがあるが疑はしい(方丈記も近頃は彼の著ではない  
といふ説もある)

**ちやうれんが** 長連歌

れんが「連歌」を見よ。

**ちやくたらひやくしゆ** 着到百首(着到

和歌)

ちやくたらわか「着到和歌」を見よ。

**ちやくたらわか** 着到和歌(着到百首)

一定の歌人の集團があつて、一人中心となり各歌人は  
百日間毎日題を變へて一首宛その所詠を送り届け、百  
首揃つた上で之を集めたものをいふ(古類文學部一、六

六八―六七〇)

**ちゆあみ** 珠阿彌

もとのもくあみ「元木阿彌」を見よ。

**ちゆういうわう**(なかをわう) 仲雄王?

平安朝初期の詩人で、嵯峨天皇の勅を奉じて文華秀麗  
集を撰んだ。その詩はこの集並に凌雲・經國の諸集に  
出て居る。

**ちゆうぐわい** 後藤宙外 慶應二―

羽後國仙北郡拂田村に生れ、通稱を寅之助といふ。貧  
苦の裡に知人の補助を得て早稻田專門學校政治科に入

り後文學科に轉じ前期早稻田派の一名家として心理小  
説・田園小説の佳作を出した。ありのすさび・闇の顯・  
思ひさめ・裾野・月に立つ影・五日市などの作がある。又  
その新小説編輯時代諸家の訪問記を集めた「唾玉集」は  
明治小説史の好資料である。又一時文士の田園生活を  
奨励し、自ら實行したこともあり、四十年前後には非  
自然主義を擁護したが時流には容れられなかつた。ど  
ちらかといふと不遇の文士である。

**ちゆうこう** 志賀重昂 文久三、一一、一昭和  
二、三、一、六十五歳

三河岡崎の人、土地の矢作川に因んで「矧川」と號し、  
札幌農學校出身で文の人・口の人・頭の人として政治  
界・操觚界・文學界に活動し、最もよく趣味と實益とを  
併行させた生の軌道を辿つた人と謂ふべきである。中  
にも「日本」や「日本人」紙上に椽大の筆を揮つて國粹  
保存論を唱へたこと、流麗な筆致で正確な地理的描寫  
をして日本風景論を出したことは注意すべきである。

**ちゆうしんぐら** 忠臣藏

「假名手本忠臣藏」を見よ。

**ちゆうしんすゐこてん** 忠臣水滸傳 十卷

山東京傳、寛政十年(二四五八)三十八歳の作にかゝる

小説(讀本)支那の水滸傳を我邦の赤穂義士に繋けて翻  
案し(例へば水滸傳に林冲が宛に頼む一條を採つて、師  
直が判官の妻を戀ひ、わざと判官を白虎の間に入らし  
め、「こゝは帶刀禁制の室」として罪に陥れると様に作りな  
せるが如き)た水滸傳物の一つ。

**ちゆうれい** 島田重禮 二四九六―二五五八、  
天保七―明治三一、六十三歳

字を敬甫、號を篁村といひ、武州大崎の人。安積長齋  
に従學して昌平塾に入り鹽谷岩陰に愛せられ、造詣漸  
く深く、衣食を薄うして購書の費に宛て、家藏二萬卷、  
常に云ふ「六經の旨を尋ねるには兩漢經師の説による  
べく、義を説き理を尋ねるには宋儒の説がよい」と。  
下谷長者町に私塾を開いて子弟に教授し、ついで明治  
十九年文科大學教授に任ぜられ、又二十一年には文學  
博士の學位を授けられた。今の第一高等學校教授島田  
鈞一氏はその令息である。

**ちゆうあんぜんもん** 中院禪門

ためい「藤原爲家」を見よ。

**ちゆうがく** 儒學

「儒道」を見よ。

**ちようげつ** 澄月 二三七四―二四五八、正徳

四一寛政一〇、八十五歳

備中玉島の人。本姓を西山と云ひ始め叡山に入つて佛學の蘊奥を極めんとし、後武者小路實岳について歌を學び出してから、段々その方に趣味が傾いて遂に歌専門となり、洛東岡崎に住んだ。歌學の著に和歌爲隣抄、家集に垂雲和歌集がある、彼は蘆庵・蓑溪・慈延と共に平安和歌の四天王と謂はれたが、咏歌の才よりも後進啓蒙の手腕にたけて居た。隨てその門下には桃澤夢澤・小寺清光等有名な歌人を出した。桂園門下で鳴つた木下幸文も一時彼の教を受けた。

大原や昔の夢のあととへばむすびしま、の庵はありけり  
すまれすばすまでぞあらむ此世にも濁る江ながら蓮さくなり

ちよかく 如覺

たかみつ「藤原高光」を見よ。

ちよくせんしふ 勅撰集

天皇上帝の勅を奉じて撰んだ歌集をいふ。古今和歌集以下廿一種あつて之を廿一代集といふ。萬葉・新葉などは純勅撰ではないが準勅撰とせられて居る(存採叢書第一二二―一一六、吉田令世歴代和歌勅撰考)

ちよくせんるゐだいわかしふ 勅撰類題

和歌集

「類題和歌集」を見よ。

ちよさくだらう 著作堂

曲亭馬琴の別號、彼は「良書を買はんが爲めに悪書を書く」と謙遜し、その居に名づくるにこの號を以てした。

ちよだらう 栗田樗堂 二四〇九―二四七四、寛延二―文化一、八、二一、六十六歳

伊豫松山の素封家で大年寄役を勤めた。名は政範、通稱は廉屋三左衛門、後專助と改めた。息隠居・昆宜庵等の別號がある。俳諧俳句を好み曉臺に入門し、松山では風雅の交り意に任せずとて安藝の御手洗に庵を結んで幽栖した。家集を「萍窓集」といひ廣く世に行はれた。

ちよぢよ 千代女 二三六二―二四三五、元祿

一五―安永四、九、七十四歳(或は云ふ七十五歳なりと、此方ならば生れは二三六一となる)

元祿の五俳女の一人に計へられてゐるが、事實彼女が多く句作したのは享保・元文・寛保の頃と推せられる。加賀國松任村の表具師福増屋六兵衛の女で、同じく表具師彌八に嫁いたが、夫は彼女が二十五歳の時に病死それより直ちに尼となり、素園又は妙林と號し、俳句や

繪畫を以て自ら慰めた。俳句の師匠は始め蘆元坊と云つて美濃の人(支考の門流)後に支考につき遂に乙由に學んだ。畫は越後の奥俊明に學んだ。千代尼句集は今俳文一〇に容れられてある。彼女の句は(とかくの評はあるが)實感味に富めること、象徴的技巧の勝つてゐること、入口に膾炙せる吟の多いことなどが特徴である。

朝顔に釣瓶とられてもらひ水

仕事ならくるゝをしまじ若菜摘

足跡は男なりけり初櫻

早をとめや若菜つみたる連もあり

紅さいた口もわする、清水かな

白きくや紅さいた手の恐ろしき

髪を結ふ手のひまあいてこたつ哉

一かゝへあるも柳は柳かな

(其角發句集附千代女句集、吉川弘文館)

ちよら 三浦樗良 二三八九―二四四〇、享保

一四―安永九、五十二歳(五十六歳といふ説あり、これより逆算すれば二三八五生となる)

實名は三浦冬郷、通稱は勘右衛門、もと志摩の國稻垣侯の家臣であつたが父は疾と稱して仕へを退き、父子共に伊勢の岡本の甲に移住した。彼、俳諧を乙由に學びつ

いで蕪村にも就いたが、名聲をあげることに熱注したので名を知られたのは蕪村よりも早かつた。始めは伊勢の處々方々を冠附の宗匠をしてまはつてゐる中、段段額が廣くなつて、明和四年無爲庵といふを結び俳諧の門戸を張つた。彼は書を能くし、畫も巧みであつたがその句は平淡にして當期の俗惡軟弱の失なしと雖も、まだ清新と云ふまではいかなかつた。謂はゞ彼は天明調の先驅的一名俳であらう(正岡子規編召波樗良全集)

梅が香に驚く梅のちる日哉

山寺や誰もまゐらぬ涅槃像

佛や梅に悲しき笛太鼓

冷水にせんべい二枚樗良が夏

朝露や薄はたわみ萩はふし

朝顔にあふなき棒の稽古哉

兄弟が同じ聲なる鉢たゞき

(尙、山田河崎町の寶珠院にある彼が碑文(一斗庵逸瀛作)は伊勢一國の小俳諧史とも謂ふべく、

我郷俳諧麥林舎叟歿後梅路季覽によりて盛んに流行して遺風を遺す。中頃何聲出で、一風變化して後風調區々なり。時に無爲庵白頭鶴集を撰み、始めて翁の正風を出されしより世上俳諧の襟を直すことになりぬ

と、つまり伊勢の俳句は岩田涼菟に始まり、麥林舎乙由之が發展させ後美濃派の俗調軟弱に墮してゐたのを再び正風眞の風雅にかへしたのが樗良だと云ふので、つまり樗良は伊勢俳諧史上中興の名俳であるとの意であらう。

ぢよらいし 如備子?

近世初期の假名草紙作者だが傳記は未詳である。その作可笑記は寛永十三年正月月中旬の奥書があつて同十九年に開板し、百八丁記は承應四年秋の作とあつて(後の方は武心士業居士の補筆がある)共に作者の隨筆めいた假名草紙で文體は徒然草を學んで及ばざるもの、思想は神儒佛の三教一致を標榜しながら、内容をよく見ると儒をばけなして佛をあげ、佛の中でも法華・淨土を不可として禪を推稱してゐる。この二書何れも廣く流布し、その作意を踏襲したのも續々出て遂に假名草紙全盛期を見、ついで浮世双紙となり、つまり、徳川時代小説史のさざしはこれ等の作品に含んで居ると謂つてよろしい。

ちりひぢ 塵泥

小澤蘆庵の歌論を書いたもので、彼の「たゞことゝた」の主張を見るには一讀を要する書である。尙るあん「小

澤蘆庵を見よ。

ちゑのななし 智恵内侍

徳川時代の狂歌師元木綱の妻で、彼女も亦狂歌をよくした。

ちんざん 大沼枕山 二四七八—二五五一、文

政元—明治二四、一〇、一、七十四歳

幕末から明治初年にかけての漢詩人として有名、名は厚、字は子壽、幼名は捨吉、父は竹溪と云ひ、尾張侯の儒者であつたが家道赤貧眞に洗ふが如く、彼が菊池五山の門を敲いた時、先方では乞食かと思誤つた位であつたが、この五山翁に認められて詩才がめきくと上り、一躍して名家の班に列し下谷吟社を起して多くの後進を教へた。その著に枕山詩鈔・房山集・江戸名勝詩・咏物詩選・絶句詩鈔・歴代詠史百律・日本咏史百律等がある。

ちんせつゆみはりづき 椿説弓張月 三十卷

瀧澤馬琴の讀本中、八犬傳と並び稱せらる、傑作で、六條判官爲義の八男鎮西爲朝が一生を叙説し、九州の征服、保元の奮戦、八丈島の流謫、琉球の島入りと層々篇を重ね配するにその妻白経姫の貞烈を以てす。前編六・後編七・續篇六・拾遺五・殘篇六を合せて三十卷、前編第一卷は文化三年(二四六六)の作、殘篇の終巻は

文化七年の作に係る。明治に入り金松堂、野村書店などから單行本として發行、又幸田露伴氏校訂文藝叢書第二卷(博文館)にも入る。

ちんだう 徳田椿堂 ?—二四八五、?—

文政八、一一、一八、?歳

伊勢古市の人、通稱長太夫、東竹庵と號した。井上士朗の門人となり俳をよよくした。

ぢんでんあいならせう 塵添埃囊抄

あいならせう「埃囊抄」を見よ。

ツの部

つう 井上通女 二三一九—二三九七、萬治二—

元文二、六、七十九歳

讃州丸龜、京極家の臣、井上儀左衛門元固の女、幼時家においてよく嚴父慈母の行き届いた躰けを受け、加ふるに資性敏慧、十六歳の時、長篇「處女ノ賦」を作つて衆を驚かした。藩主高豊公の母堂養性院、その才を愛して遙々江戸屋敷へ呼びよせられ爾後九年間忠實な奉公をつゞけ、母堂逝去の翌年國へ歸つた。その頃は彼女の文名頗に喧傳して藤堂家の儒臣雨森但陽・跡見

光海の母柳生松女・林大學頭・水戸の儒臣などと絶えず應酬贈答した。斯くて同藩の士三田宗壽に嫁ぎ、二十一年間圓滿な家庭生活の裡に三男二女をあげ、

一氣終時 萬事休 樂天 知命 又何憂  
子孫有孝能思我 常在聖賢書裏求  
我もまた正しき道に斃れなばかくのみなりと思ふばかりぞ

の辭世を遺して平和の裡に生涯を閉ぢた。東海紀行・歸家日記・括囊集・往事集・和文集・秋燈集・續往事集・和筆記・宗川子歌談・三鳥傳考・三草三木考・家訓などの著があつて詩と歌と文と三拍子揃つた才媛として遙かに王朝の紫清兩女にも拮抗し得べき名流であつた(久保田辰彦氏日本女性史六二五—六三三)

つう 小野通 二二一九—二二七六、永祿二—

元和二、三、五、五十八歳

世系未詳、傳も未詳、今應問錄第二輯六六—六七の記事を抜抄して終に考證を附しておく。初め織田信長に仕へ、信長討死後一時田舎に退引、間なく淀君に召されて侍女となり、博學多才、よく文を屬し書畫に秀でてゐた。書の方では他の侍女などもその流を學ぶ位であつた。畫の方では狩野光信の筆法

をまなび、始終天神の像を畫きその他人物が多くて花鳥は少なかつたが、世人皆之を珍重した。嘗て淀君が彼女に向つて「昔の才媛は皆文筆の上に千載のかたみを遺して居るから、そなたも何か書いてはどうか」と勧めた。けれども彼女は「到底そんな才徳はありません」と辭したが尙も熱心に勧められて、それではとて源義經が奥州下向の途次、三河矢矧の宿で長者が娘淨瑠璃姫と契つた情事を十二段に綴つて「淨瑠璃十二段双紙」と題した。淀君一讀大に感歎し、盲人の澤注檢校を召して節づけさせた。是れ後世淨瑠璃なるもの、起りである。後その女「おその」について信州松本に下り、その地に晩年を送つたと云ふ。生歿の年は名人忌辰録の死歿の日附から逆算したものであるが果して正確かどうかはわからない。雜司谷大行院（鬼子母神堂子院）仕物中には彼女の揮毫があつて、その日附は寛永八年五月廿三日とある點から推せば元和二年歿とあるは嘘で三代將軍家光の頃までも居たことになる（こゝまでは應問録の記事を抄したもの）。異説には

母となり寛永八年に死んだ。  
二、聲曲類纂  
淨瑠璃は山中山城守が彼女と岩船檢校とに合作させたもので、詞は皆檢校が作つた。  
三、安齋隨筆三〇、九四七  
信長の右筆である。一説には秀吉の母公の侍女だとも云ふ。  
四、本居宣長全集賤者考六七、八  
信長公（秀吉公とも、秀次公ともいふ）の侍女。  
五、嬉遊笑覽六ノ上、三、二、  
信長公の侍女  
なごまち／＼である。通女が織豊二家に關係のある女であることだけが共通である。尙「淨瑠璃」の項を見よ。  
つうきすゐこてん 通氣粹語傳 一卷  
山東京傳、天明九年（二四四九）作の洒落本で水滸傳をもぢつたもの。  
つうげんそらまがき 通言總籙 一卷  
山東京傳天明七年（二四四七）作の洒落本で、人物は彼が以前黄表紙の名作「江戸生艶氣權燒」と同様艶次郎（普通自惚客の隱語）と近所の北利屋喜の助と輪留井思庵の三人で、構想は唐來三和の聖遊廓三教色などに

一、莠史雜抄、天祐上人記等

小野政秀の女で、渡瀨某に嫁ぎ、松代の眞田信政の義

模したものの。第一節に喜之助の宅へ三人落合つて話すこと、第二節に三人打連れ吉原に遊ぶことを綴る。

つうせう 市場通笑 二三九九—二四七二、元文四—文化九、八、二七、七十四歳

徳川期安永天明の際明誠堂喜三二等と並び稱せらるゝ作家で、主として教訓草紙を作つたので俗に「教訓の通笑」とよんだ。名は寧一、字は子彦、通稱を小平次と云ひ、橋雲といふ別號もあつた。安永天明の交に最も多作し以後は寛政二年と六年と享和二年とに各一本あるのみであつた。青本年表に「年代記云喜三二はしやれたる事を作り通笑は人の常にする事の穴さがしに妙なり」とある。寛政期教訓物は通笑に萌して居ると見ても可い。作品は一升酒底抜男・通駕籠奢牛勘以下六十餘種もあるが、とりたて、有名なものもなく又目立つて劣つた作もない。

つくしぶねものがたり 竺志船物語

村田春海の作つた雅文小説で、始め「大井の三位物語」と題してもつと長篇にするつもりであつたのを中途未完のまゝで中止したので、一の巻の名をとつて竺志船物語といふ。大井の三位といふ才覺の人を主人公とした物語で、高田與清が旁註を施したのもある。文化

十一年（二四七四）太田元貞・菊池五山その他數家の序や跋がある。今帝文三三に入る。

つくばくわい 筑波會（大學派）

明治三十年だいに東京帝大出の人々が組織した俳團で佐々醒雪・大野酒竹・藤井紫影等が中心で、その句論と句作は「帝國文學」や「青年文學」に掲げられたが學餘の上品な手すさびといつた風の微温的なもので句界に及ぼした影響は大したものではなかつた。

つくばこ 筑波子

しげ「進藤茂子」を見よ。

つくばしふ 菟玖波集 二十卷

北朝後光嚴天皇文和の末二條良基が撰んだ（事實救済が一番多く手かけた）連歌集で我國連歌の撰集の始めである。書名は日本武尊と日燒翁との連歌の「にひばりつくば」の「つくば」からつけたもので、勅撰にも准ぜられ、撰者自身も連歌道に於ける古今和歌集を撰む抱負で集めたものと見えて、序文も部立も歌の量も優れて居る。序は文和五年（二〇一六）二月の眞名序、同三月の假名序があり、部立は四季・神祇・釋教・戀・雜・羈旅・賀・雜體・發句等に別ち、採つた歌の數は二千首、作者は上下貴賤の各階級に亘り（但し北朝の人々が多い）斯

道必讀の書となつてゐる。

**つくばもんだふ** 筑波問答 一卷

二條良基の著で、連歌の故實風體作法等について問答體に記述したもの（群三〇三、一〇、一〇〇一—一〇一八）

**つけあひ** 附合

一、連句を連続しゆくこと  
二、俳諧の連句即ち俳諧のこと

（大島蓼太付合小鑑（俳文二））

（同 付合作法全集同一七）

**つたからまる** 蔦唐丸 二四一—二四五七、

寛政九、四十八歳

江戸の地本問屋で通稱を蔦屋重三郎と謂つた。又狂歌をよくし、その方でも有名であつた。その著に夷歌百鬼夜狂一卷（國刊一期新群一〇）がある。

**つちみかどてんわら** 土御門天皇 一八五五

一八九一、建久六、一二—寛喜三、一〇、三十七歳  
御諱は爲仁、後鳥羽天皇第一皇子、御母は承明門院源在子、第八十三代に當らせられ、性質温雅、父帝と御性格合はぬ節あり、在位十二年、父帝の御考へから御位を御弟君順徳天皇に譲らせられ、内心御不平であつたが

色にもあらはされない。嘗て御述懐に、

秋の色を送り迎へて九重になれにし月も物忘れすな

とあつて點を頼まれた定家が恐縮したと云ふ。已にして順徳帝位を仲恭天皇に御譲りになり此上皇を中院と申上げて居た。本院新院承久の御企てあるや、中院は切にその不可なるを説いて諫められたが用ひられなかつた。役後泰時が父義時の指圖を受けて本院と新院とは配流の旨を傳へたが中院の始めからこの事に御不同意であつたのを徳として、何等の沙汰も申上げなかつた。けれども父君弟君の難儀をよそに自分一人都に止まる法がないからとて御白から申し出られて餘儀なく土佐へ御遷した。御到着の日は雨まじりの雪がひどかつた。

うき世にはかゝれとてこそ生れけめことわり知らぬ我涙かな

と御述懐になつた。これよりして世に土佐の院と申す。ところが鎌倉方では餘り御遠方で畏れ多いといふので更に阿波へお遷りを願ひ、つひにこの地で崩御あらせられた。で、後世又阿波院とも申す。

性來温雅な方な上に御境遇と相まつて和歌の道に御心

を傾けさせられ、御退位後は和歌のみが御生命かの觀があつた。御製は續後撰に二十餘首、續古今に三十七首、續拾遺に十餘首その他の諸集にも入り、御家集に「土御門院御集」（群二二八、九、一—二一）がある。

秋

村雨のたえま〜に星見えて時雨を拂ふ夜半の

秋風

旅

白雲を空なるものと思ひしはまだ山越えぬ都なりけり

蟲名十首の中

冬がれのよもぎがもとの蚕いけるばかりはげにぞかひなき

御百首昔

むかし誰住みけんあとの捨衣岩ほの中に昔ぞ残れる

（大日本史料第四篇一一九）

**つつみちうなごんものがたり** 堤中納言

物語 十帖

中納言兼輔の作といひ傳へられ本邦短篇小説の嚆矢といはれてゐる。十個の短篇すべてをかしみを含んだ奇

行・逸事・失策等の作話で、その題目は

花櫻折る少將・このついで・蟲めづる姫君・ほどほどのけさう・逢坂こえぬ権中納言・貝合・思はぬかたにあまりする少將・縹女御・はいすみ・よしなしこと

けれども、この排列も無意味ではなく寧ろ一個の聯作小説といふ趣がある（續群五〇四、日文四）

（本書をよむと兼輔の歿年（千五百八十年代）よりも後の永承六年（一七〇〇）の根合の記事もあるから、もつと後世の作ではないかと思はれるので、清水瀆臣は後鳥羽天皇の頃の作かといつて居る。とにかく作者と年代についてはまだ考證の餘地があらう）

**つづらぶみ** 藤篋冊子

上田秋成の歌文集で友人昇道人やその他の故舊が彼の古稀の記念にとて集めたものらしいといふ。享和二年秋成六十九歳の時に序を作つて刊行は四年おくれで文化三年七十三歳のことであつた。この書刊行の顛末は右の昇道人の序にあるやうに秋成自身七十歳といふ聲に臨終のいそぎを自ら墓所を定め、棺桶まで作らせて「けふより後は昨日の我にはあらで縁子のわきまへ知らぬ遊びして世をのどかにも終らばや」と云つた。そこで昇道人始め二三の知人が訪れて家集出版の企てを

諸ると「怪しからんこと、自分は不承知だ」とかぶり  
をふる。道人すかさず「いなや此ぬしは既に世を見棄  
て、今はおはさずとこそ聞きつれ我物顔にのたまへる  
いと怪しき」とやりこめたので、秋成も苦笑して「と  
う／＼自分の刀に傷を蒙つた」と云つて承諾をした。と  
ころがその出版が遅れたのは肝腎の昇道人に差支があ  
つて歸國してゐた爲めで、その次第は秋成が太田南畝  
に宛てた次の消息に詳しい。

「昇道人本國備後ノ府内ト云所へ俄ニ下向老僧七十四  
齡ニテ病牀イヅレ吉凶ヲ見終ラズバ上京アルマジキ也  
藤篋冊子モ彫中ナガラ道人上ラズバ校正ナリガタシ冬  
ニモナルベシ老ガ願ヒハ閉目後ト思フ後ニ延ルガ欣喜  
也」

今圖書刊行會第六期中上田秋成全集に入る、又明治  
に入つて宮崎三味氏が奇籍大觀第一編として日吉丸書  
房から出した。

**つねあきら** 橋本經亮 二四二〇—二四六六

寶曆一〇—文化三、四十七歳

山城、梅宮神社の祠官で、故實にも精通して居つたが  
又和歌をよくし歌人として聞えて居る。

**つねき** 橋常樹 二二六四—二四二二、寶永元

一、寶曆一二、五十九歳

土佐の人、江戸に出て眞淵について和歌を學び秀味少  
くないが、性來寡欲にして事物に拘泥せず、世に奇人  
と稱せられた。「六無翁家集」といふがある。

**つねのぶ** 源經信 一六七一一—一七五七、寛弘

八—承徳元、八十七歳（一説に八十二歳歿とあるに  
よれば一六七六年生）

世に桂大納言と謂ふ。王朝末期後拾遺・金葉時代の歌人  
で又漢詩・漢文・歌學にも秀でて居つたし音樂にも堪能  
で「三船の才」の名譽を得た。彼は道方の子で、後一條・  
後朱雀・後冷泉・後三條・白河・堀河の諸朝に仕へ、位は  
正二位に至り、官は太宰權帥・權中納言・民部卿を経て  
權大納言に至る。

その歌は金葉（二〇餘）・新古今（一〇餘）・その他詞花・  
千載・續古今・續拾遺・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新  
千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今・永承六年後冷泉院  
根合等に出で、

家集に「大納言經信卿集」一卷があつて、今丹叢一三一  
に收められてゐる。

彼一世の歌人として斯壇に權威があつた所から度々判  
者に撰ばれてゐる。その判詞としては寛治三年皇后宮

扇合判・寛治八年高陽院歌合判などがある。殊に後者は

彼が無上の名譽とも謂ふべく、一座には拾遺集を撰ん  
だ藤原通俊も時の鴻儒大江匡房も、新進歌人の俊頼（尤  
も之は經信の子）も一世の才媛周防内侍も皆列席して  
彼の審判に耳傾けたのである。

尙拾遺集の不出来を非難して「難後拾遺」を書いたのは  
この經信ではなからうかとの説もあるが確かでない。  
その他彼の漢詩は「永承六年侍臣詩合」や「天喜四年殿  
上詩合」に出、漢文は續木朝文粹に出で居る。

**つねより** 東常縁 二〇六一—二一五四、應永

八—明應三、九十四歳

源頼朝の功臣千葉胤行（素還法師）の後裔で、父を益  
之（一説に胤綱）と云ひ美濃の人、家代々歌人を出し、彼  
亦當代唯一民間歌人の先輩として生まれ、古今傳授の  
始めとなり二三の歌書を遺し、室町時代の短歌界に特  
に目に立つ人である。

一、彼が家系は左に一覽的に上げる。

代祖、名、法名、その詠歌の入つて居る歌集

八代の祖（以下同之）六郎胤行 素還 續後撰集及び  
それ以後の諸集

七、六郎行氏 素道 續拾遺——

六、時常 素阿 續後拾遺——

五、下野守氏村 語阿 續千載——

四、東六郎師氏 素果 新後拾遺——

三、東式部少輔胤綱素明

二、東六郎氏數（作者部類には師氏の男とあり）素欣

新續古今——

一、東野州常縁（下野守であつたから野州と云ふ）

二、彼が閱歷と歌話。

彼が美濃に祖先以來の領地を有し、足利九代將軍義尙  
に仕へて下總の千葉の騷亂を退治に行つてゐた留守に  
美濃の領地は齋藤妙椿の占領する所となつた（當時は  
應仁の兵亂で京都は亂脈の状態にあつた）

妙椿は常縁の舊知で、怠念と號し歌もなか／＼隅にお  
けない達者であつたから、彼はその舊領の恢復を歌で  
申込んだ。

あるが中にかゝる世をしも見ざりけむ人の昔の  
なほもこひしき

我世經んしるしと今もたのむかな美濃のおやま  
の松の千歳を

外、八首がそれだ。妙椿もこのみやび心に感じて快く  
舊領を返したので、彼は大變よろこんで、



故郷の荒るゝを見ても先ぞ思ふしるべあらずば  
いかゞわけこん

そこで妙椿の返しは、  
このごろのしるべなくとも古里に道ある人ぞや  
すくかへらむ

とある。實に武人の一佳話である。  
三、古今傳授

彼は將軍義尙の命を蒙り歌道の師範となつた。處が  
その家には先祖代々歌に關する書類が澤山あり、古  
今集に關する秘説も少なからずあつたので文明三年  
に之をその弟子の宗祇に傳へた。是れが所謂古今傳  
授の始めである（この點に於て彼が歌學史上傳統の  
弊を作つた責めは免れることは出来ない）

四、彼の著書

- 家集 東常縁集(群二六〇、九、九六三—九七七)
- 歌話 東野州聞書 群二九八、一〇、八五九—八八八
- 東野州消息(群一四三、六、一二三—一二三四)

つばら 小出榮 天保四、八—明治四一、四、一

五、七十八歳

明治初期の歌人、家は石見國濱田藩主松平家に仕へ、

松田が本姓で、二十歳の時に小出家をつぎ、明治十年御  
歌所に奉職した。蓋し、彼は十六歳の頃から斯道に興味  
を持ち、鳥原藩の瀬戸久敬の門に入つて居つたのであ  
る。斯道に盡すこと十餘年、上流縉紳にして就いて學ぶ  
ものが可なり多かつた。その歌風は即感即味着想亦奇  
警飄逸の姿趣がある。彼亦多能、晝は荒木寛畝に學び、  
彫刻や手先の技も巧みなり、殊に槍は寶藏院流の皆傳  
までもとつた。最も得意の味は

暮るゝまで柳に見えし春風は梅の匂になりにつ  
るかな

我がために水汲む妹があさかげのやせたる姿見  
ればかなしも

の二首だが、次の味なども優れてあよう。

玉

あまりにも瑕あらせじと思ふにぞま玉はちさく  
なりにけるかな

蛙

青柳のかけ行く水は見えれども蛙鳴くなりおぼ  
る月夜に

(小出榮翁家集三册聚精堂)

つま 妻 四十六回

「生」の吉田銑之助はこの篇の中村勤、彼の「お梅」はこ  
れの「お光」、「お桂」は「お三輪」と大體見當がつく。  
勤はその親友貞一の妹お光を妻に貰つた。それは彼の  
希望でもあつたが貞一の熱心から厭がる母親を説得し  
てヤット成立したものである「琴も奥傳まで習はせ、支  
度も立派な三枚襲までしてやり、行儀作法家事萬端(尤  
も飯焚などはあまり上手でなかつた)一通り仕込んで  
朝夕の出入にも氣をつけて一寸でも傷物にされぬやう  
まるでお嬢様育ちにした寵娘をアンナ貧乏文士にやつ  
てたまるものか」と母親は頑固にさう思つてゐたの  
であつた。萬事應揚育ちの彼女は十七歳にして人妻と  
なり、何等理解のない小説家の生活にソロ／＼飽きが  
來て、こんな氣むづかしい夫よりかあの時荷物の宰領  
までして世話を焼いてくれた夫の親友の大学生のお嫁  
にでもなればよかつた、とボンヤリ思ふこともあつた。  
「夫は西洋の本を買つたり借りたりして來て、よくそ  
れに讀耽る癖がある。筆を執つて居らぬ時は必ず机に  
向つてそれを讀んで居る。時には寢食を忘れることす  
らある。一人で面白がつて居る。そして退屈すると妻  
を一人打捨てて置いて勝手に出かける。  
妻の身にしてはこれが何より物足らなかつた。時々は

長火鉢の前に來て坐つて妻の淹れた茶を旨さうに飲ん  
で態々使に行つて買つて來た餅菓子食つて埒も無い  
世間話でも爲て貰ひたかつた。それは何うせ面白い話  
は出來ぬ。高尚な話に調子を合せること難かしいが、  
さし向ひになつて莞爾と楽しさうな顔を見もし見せて  
もして互に打解けるのが夫婦ではないか。  
お光は本を憎み、筆を憎み、立て廻す屏風を憎んだ。  
やがてお光は懐妊した「子供が出來ればもう一生」あ  
の氣むづかしやの夫の妻としてゐなければならぬ……  
……そんなことを思ふと何となくつまらなさうな寂し  
いやうな心地がした。  
開けつ放しのやうなお人よしの妻お三輪はよく弟の家  
へやつて來てはキャツ／＼とはしゃいだ。それで勤は  
散歩で想を纏めて「ヤレ嬉しや」と歸つて書き綴らう  
とする腰を折られて「チョツ」と舌打をして仰向けに寝  
そべつたりもした。お光を勤に熱心にすすめた兄の貞  
一は嘗て小僧にやられた寺——田地が四町と檀家が二  
百戸程あつて食ふには不自由のない——その寺に法系  
を嗣ぐものがないから是非あとを繼げと元の師僧の臨  
終の希望を容れて「これもみんなが文壇落をした時の  
隠れ家によからう」とて承知をした。そのことの報告

旁久し振に妹を訪づれた。それはお光が妊娠の通知をして間のないことであつた。久し振に逢うた兄妹、勤それ〴〵に話の興は盡きなかつた。間なく貞一はこの家を辭して件の平和な境涯に入つた。勤の家ではとかく夫婦間の圓滿を缺いて喧嘩勝であつた。

「勿論喧嘩と謂つても暗闘が多い。勤は神経家ではあるが自己の感情を自己で抑へて了ふ方の性質だし、お光は無意識に夫に従つて居る方であるからそれが火花を散らす様なことは殆ど無い。けれどふす〴〵と燃えもせず、消えもせずに燻つて居るのは稻妻のやうにびかつと光るのよりも一倍つらかつた——」

そこで、始めは夫婦で對の有田焼の茶碗を揃へてお取膳で食事をしたものが、この節はお光が茶碗をこわしたからでもあるが、勤の方は粗末な春慶塗の茶碗を買つて膳を別にして食事をするやうになつた。

若い人妻はよく同級生と我身とを比べて高ぶつたりしよげたりするものだがお光にもさうした感じはあつた。「……里に行く時の嬉しさ歸る時の悲しさ、朝はいそ〴〵として行き、夕はホツ〴〵として歸つた。途中に陸軍の大尉に嫁いだ學校友達の門構の家があつて二階には新しい硝子戸がはまつて居る。ある日其友達が立

十七回は全部彼が心のターニングポイントの告白である。「新しき奮闘—新しき努力」落想は遂にかゝる目標を産んだ。

或時親子三人連れて貞一の寺を訪うた。貞一は全くの結構人で大層色々もてなしもし四方山の話もした。自作の新體詩など見せもした。が、勤の今の心持からはそれ等がひゞく時勢に後れて居るものばかりであつたから一寸その心持をほめかすと、心よしの貞一は「さうかも知れん何しろ刺戟のない境涯だから」とをさまざまかへつて居つた。

……と間なく勤は原町の通から奥に鍵の手に曲つて入つて行くところに儼しい借宅をして、書生と女中とを置いて文士としての陣形を備へた。地方の女學生で彼を崇拜して居る「てる子」といふのが女子大學に入らうといふのに「どうか先生のお宅において下さい」とたつての依頼にとゞ承諾をした。着替への小包が先へ着いてやがて父同道で本人もやつて來た。應對をしてゐる頃はお光は第二回目の産褥について居つた。若くして美しい女弟子——それを彼女は一寸不安に思つた。近所では更により以上に色々うはさをした。勤の社では日露戦争の従軍記者派遣の話が持上つた。「中村君な

派な夫と盛装して門から出て來るのに逢つたことがあつた。羨しいといふ情が燃えわたつた。學校に居る頃には學問は自分よりずつと出來なかつたし、容貌だつてさう大して好い方ではなかつた。お光は其身の不運を悲んだ。此間黙つて家を飛び出した時には其門前で思はず涙を零した……」

やがてお光は産氣づいた。勤は始めて親になる夜を不安な心持で通過した……そして「男女一緒にある年月同棲さへして居れば、戀などが無くても子が生れるといふことが何だか不思議のやうにも思はれた。社へ出勤するとそこは、

「大家の訪問、原稿の催促、何の掛でものんきに煙草をふかして居るものはなかつた。机の上には原稿の校正刷だの雑誌の綴込だのが一面に散らばつて糊と缺とが誰の手からも離れない」

といふ忙がしさ、出來た子は女の兒であつた。「咲子」と名づけた。お光は實家の方が次第に弟（政次）の嫁「おきよ」の勢力範圍に屬しつゝあるのを「心のふるさとの廢墟」のやうに淋しんで、もうこの上は咲子一人がわがものだとばかりめでつくしむ心持になつた。勤はこの間に段々ニイチエの思想に搖かされた（第二

ら體も脚も達者だから大丈夫だ」と社長始め一同がいふ。勤はてる子のことを氣懸りに思ひながらもすぐそれを抑へて「戦地へ、戦地へ」と奮ひたつ心持で引き受けた。と以上がその梗概で作者の内面生活の轉期——それは消極より積極へ、感傷より奮闘へ、小なる同情より大なる理智へ、ロマンチズムよりナチュラリズムに轉向する徑路を如實に寫した名作として注意すべき作品である（花袋全集第一卷二二一—五一七）

**つむりひかる 頭光** 二三八七—二四五六、享保二—寛政八、七十歳

本名岸誠之、桑楊庵と號し、蜀山人に師事して狂歌に長じ、判者に立てられなどして斯方面の一家家となつた。

**つゆだんだん 露團々**

幸田露伴二十二年作の小説。今から觀れば作意は古いが、氏がこの期に於て已に他日の傑作を出す素質の萌を示したものとて名高い。敬虔なる「しんじあ」と純潔なる「るびな」とが奇妙なる紆餘曲折の後に芽出度く結婚すると云ふ筋で、背景は亞米利加合衆國にしてある。毎回俳句を題にして簡潔なる脚註がしてある。第一回 古池や蛙とび込む氷の音

此心知り難し、仙家の秘録か將た禪宗の公案か

か「るびな」の父ぶんせえむは立志傳中の人で、赤手から起つて二億の富を贏ち得たので今は愛嬢の好配を定めて隠栖せんものと、或日左の求婚廣告を出した。余に最愛の女子ありこれが爲に幸福なる婚姻を結ばんと欲す。有意の諸彦は左記の件々御承知にて御申込ありたし、但し之を謝絶すると承諾するとの全權は全く余にありて諸彦は少しもこれを強ふること能はざるべし。

求婚者の資格

- 第一、教育は高等の普通教育を受け且つ音楽・繪畫・縫箱等の美術は皆其専門家に就きて充分に學得せり
- 第二、性質は温順良貞にして敏捷活潑にはあらざれども、常に其朋友の間に敬愛を受く
- 第三、容貌は文章を以てあらはし難けれども、衆人の云ふ所によれば現今米國第一なり。某詩人は嘗て曉天の白薔薇と評せしことあり。
- 第四、財産は結婚の時に臨み一億九千萬圓を余より讓與して必らず其の所有たらしむべし
- 第五、系統は清潔にして各種の遺傳病等決して無し

- 第六、宗教は「ゆにてりあん」なり
- 第七、家族は余と唯二人なり
- 第八、年齢は十九歳なり

被求者の資格

- 第一、教育職業等は全く無きもよろし
- 第二、性質は人の敬愛を受くるに足らざるもよろし
- 第三、容貌は畸形者に非れば非常の醜陋なるもよし
- 第四、財産は皆無にてもよろし多少の負債あるも妨げす
- 第五、系統は清潔ならざるべからず
- 第六、宗教は何にてもよろし無宗教にてもよろし
- 第七、年齢は二十歳以上三十五歳までの間たるべし
- 第八、家族の多少に關せず
- 第九、特に望む所あり即ち決して不愉快の感覺を抱かずして常に愉快なる生活をなし得る者なることを要す

- 第二回 長き日を囀り足らぬ雲雀かな  
其舌動き易き痴人の妄評と野夫の雜談

じよん、れおなあと、じやつくそんなどが彼の廣告を見て「ぶんせんむ」は發狂したのでないか。若し眞面目に言つてゐるのだとすれば我々は崇拜せるしんじやあ君にとつては、ゆゝしい事だ早く告げなければならぬと言ひあふ。

第三回 疑ふな潮の花も浦のはな

宮も藁屋も千里同風天地の中は一ツ人情例の廣告で新聞が大騒ぎして中には論說欄で批評をするものがあること、参考の爲にぶんせえむの傳をあげてあの廣告が發狂沙汰からではないとあかす。

第四回 海暮れて鴨の聲ほのかに白し

逆捲く浪のおそろしき世の人を救ひの法の船長しんじやあの人と爲りを紹介する。年は三十一二ボストン大學で神學を修め、風俗の轉季を歎き聲醒演說會を起して熱心に世道を説く、衆尊んで第二のむうでいと云ふ。今日も其演說日で「肉の利害心の利害」と題して大に聴衆を感動させた。

第五回 玉河の水に溺れなをみなへし  
寫りし影のいと美しきも落ちなば惜しき名こそ流れぬ  
始め九行に氏の簡單なる戀愛觀の告白あり。  
じやくそんがしんじやあの演說終るを待つて相携へて

歸途に就き途上廣告一件を告げて對策を講ぜよと云ふしんじやあは准憮然たるのみ。

第六回 芳野にて櫻見せうぞ槍笠

麻を着て稻をとられば淵明も俗袈裟を切り刀を捨て、文覺の悟りしんじやあは煩悶を寫す。たとひあの廣告に應じても多くの候補者のこととて合格は覺束ない。合格したとしてもしんじやあは道德の名を借りて美人と巨富とを釣つたと世間に云はれるのもつらい。

第七回 簞蟲の音を聞きに來よ草の庵

鬼の子とは清女のさがな口泣く聲をあはれとし給はぬにやぶんせいむ長者のせねらす村の下屋敷にるびな煩悶じやくそん夫人慰撫。

第八回 藻にすだく白魚や問はゞ消えぬべし

あはれ深くも沈みし思を餘所に見なしてもゆる不知火しんじやあ世をはかなんで英領かなだのおんだりお州こうぼるぐに移り相思花(忘れな草)を見て歎く。

第九回 蛸つばや果敢なき夢を夏の月  
潮に乗地になる自惚の利口ぶるはいつも馬鹿なり

茲に支那の大都南京に羽振よき熊鷹官員の田仲蛆の子に田亢龍と云ふもの滛報の記事に依て遙々あの廣告に應じようと思つて無名翁に卜つて貰つた。翁ながく易經を説いて「蓋し洛書は三の陽を三たび重ねて純陽の數を極む。これ天盤なり。吾が得たる神碑は四の陰を四度重ねて純陰の數を極む。これ地盤なり。吾天地の二盤をとつて人事の成敗を見るに誠に兩端を叩いて其中を知るがごとし。これぞ即天地の二盤なる（此二盤は本篇の末に圖示せられてある）……（六九九）と功德を述べ、さて封を觀ると、

純袴公子齡青春 歌ニ彼關雎ニ枉苦辛  
欲ニ週ニ銀河ヲ訪ニ織女ヲ 須ニ傲風流閑篤人

第十回 道ばたの木槿は馬に喰れけり心すべきは足のつけ所 巖の下に居ぬぞ賢人

亢龍の部下唐伯、七つの不利を説いて主人の一喝を喰ふ。食客吟蝸子はもと日本人にして卜に所謂風流の閑篤人に當るので之を連れて應試し亢龍の名義でうまく答へてくれよと頼む。

第十一回 馬ほくく吾を繪に見る枯野哉 心の猿の狂ひ出で 啼くも淋しきあり明の空  
るびな嬢夢を見てはかなむ（氏が英詩の一素養を窺ふ

資料は七一三頁夢よくのくくだりにあり、又七一七頁終から、四行目は縁語の古修辭が達者にこなせてゐる）

第十二回 木枯に岩吹きとがる杉間かな  
こうくと啼く狐の聲は怖氣付いたる耳におそろし

應募者十七ヶ國に互り亢龍の申込もさるとれきしていの停車場から届いた。ぶんせえむるびなを訓しむ。

第十三回 景清も花見の座には七兵衛 日頃は兎に角人前つくる慇懃面  
應募者集まる。家宰しむぶる主人面會謝絶の旨を告げる。受験者は立腹して大分歸る。

第十四回 葱白く洗ひ上げたる寒さ哉 醜事千里に流れ渡りて慙をかいたる顔の赤ツ葉  
第二次試験問題は「不愉快」吟蝸子ぬらりくらりとうまくあてる。一人四尺五寸位の小男は三十四五枚の論文を書いたが定刻の十一時が来たので取上げられた。

第十五回 荒海や佐渡に横ふあまの川 と渡る舟の櫂の掣か 雨ふりかゝる袖のなみだは  
しんじやあとのびなの愛の通信を寫す。

第十六回 白露をこぼさぬ萩のうれりかな 柔よく

剛を制す道理か 荒らき猪の子の臥すも  
をかしや

第三次試験 父は過日の答案につきい々をかしいのがあつたと云つて娘に語る。

第十七回 棧や命をからむ葛かつら  
危い哉々々古人のたまはく御用心々々々  
しんぶる夫婦亢龍の合格にるびな嬢の本志違ふを恐れて長の暇乞ひに来るところ。

第十八回 ものいへば唇寒し秋の風 赤く熱せし柿も淋しく 眞個も虚言に見え勝のもの  
亢龍をぞむらす村の別邸におく世評囂々警醒會員ぶんせえむに忠告す、きかず。

第十九回 春もやゝ氣しきとゝのふ月と梅  
さりながら寡婦眉を畫くに懶く 寒威未だ去らずして菱鏡に残る

るびな嬢出奔を企てゝじやつくそんにとめられ、じやつくそんしんじやあを拉してぶんせえむに遇ふ。

第二十回 つくり木の庭をいさめる時雨哉  
無理で行けぬ天地の道に則る裁判の法

亢龍子偽名一件がばれて裁判沙汰となり、唐伯や通譯官がよばれて事の真相始めてわかり判決文には唐伯に

は三十棒を喰はせ亢龍は追放吟蝸子は無罪となる。

第二十一回 あら尊青葉若葉の日の光り さき草の  
新殿に 宜も富けり徳も寶も  
しんじやあとのびなの結婚は許されぶんせえむは一千萬圓を取つて隠居し蝸子を滑稽の伴侶とし萬事めでたし〜に終る（露伴叢書六五六―七九一）

つらき 春道列樹？―一五八〇？―延喜二〇  
醍醐天皇の延喜二十年六位に叙し壹岐守に任ぜられ後文章博士となる。歌は古今・後撰に二三首づゝ入つて居る。

つらゆき 紀貫之 一五四二―一六〇六、元慶  
六―天慶九、六十五歳  
延喜より天慶にかけて朝廷につかへ和歌國文を以て稱へられその書も美事であつた。

一、官歴  
文書に記載の限りを上げると

延喜年間 越前權少掾・内膳・典膳・小内記・大内記・從  
五位下・加賀美濃介

延長中 大監物・右京亮・土佐守

承平中 滿期歸京

天慶中 玄蕃頭・從五位上・木工權頭・從四位下

二、編・書・作。

- 1 古今和歌集(他三人と合撰)
- 2 續萬葉集五卷(今傳はらず)
- 3 新撰和歌集(群一五九、七、四四〇—四四七)

(一) 歌

- 4 家集、紀貫之集十卷(延喜八年迄の歌(群二四七、九、五五三—五七八、歌仙家集(續國四六一—四八七・歌學全書)
- 5 古今集序
- 6 同歌の詞書
- 7 大堰河行幸和歌序(古今著聞集、扶桑拾葉集二)
- 8 土佐日記

(二) 國文

- 9 新撰和歌集序(本朝文粹一一)
- (尙他に扶桑拾葉集二に「蟻通ノ神ニ奉ル和歌序」といふのがあつて彼の作だと云ふ。

三、國文學史上の功績

土佐日記その他の文によつて國文發達の機運を促したこと、

同日記によつて紀行の典型を示したこと、

古今和歌集を撰んで勅撰集の模範を示し、歌人の啓蒙

と奨励と、古歌の保存とに資したこと。  
同序によつて歌論や歌學の端緒を開いたこと。  
多くの秀味を創作したこと。

この五大功績は我邦文學史上いつの代にも特筆さるべきである。

四、彼の歌態

彼の歌は古今集の歌風を代表し大きく云へば一代の歌人の趣向を代表してゐる。その特徴としては、

一、辭様に富んでゐること、尾上柴舟博士の説によると彼の家集中、全く辭様のない裸體詩とも謂ふべき味が三百九十五首で残り四百九十三首は皆何等かの修辭的技巧を含んでゐて之を統計的にあげると、

一、直喩 三七

同じ色に散りしまがへば櫻花降りにし雪のかたみとぞ見る

二、隱喩 六三

水とのみ思ひしものを流れつ、瀧は多くの糸にぞありける

三、縁語 一〇五

今はとてのこれる岸の藤波は春の港のとまりなりけり

世をうみて我がかす糸はたなばたの涙の玉の緒とやなるらむ

散りぬべき山の紅葉を秋霧のやすくも見せず立ちかくすらむ

四、自然現象に自己の主觀を投影して情景融合詩の傾向をとれるもの多きこと。

うすく濃く色ぞ見えける菊の花露や心をわきて置くらむ

君を惜しむ心の空に通へばや今日とまるべき雨の降るらむ

河風の涼しくもあるかうち寄する波とともにや秋は立つらむ

年ごとに來つ、聲する杜宇花橘やつまにはあるらむ

啼きとむる花しなれば鶯もはてはもの憂くなりぬべらなり

三輪山をしかも隠すか春霞人にしられぬ花や咲くらむ

五、推敲詩人型であること、どちらかと云へば彼の長所は歌論にあつて咏歌にはなかつた。躬恒が即興詩人型であるのに對して彼は一字一句洗煉された表現によ

四、懸詞 三二

よる人もなき青柳の糸なれば吹きくる風にかつみだれつ、

五、擬人 一一二

綠なる松にかゝれる藤なれどおのが心と花は散りける

六、序詞 四二

七、對照 三九

春の色はまだ淺けれぞかかれてよりみどり深くも染むる松かな

八、枕詞 二二

九、引喩 一六

一〇、反覆 二五

二、聲調の流麗 これも當時の歌人のこがれた技巧で貫之の咏には無内容であつて調子で感服させると云つた風の歌が随分ある。

野べみればわかになつみけりうべしこそ桓れの草も春めきにけれ

春日野の若菜つみにや白袴の袖ふりはへて人の行くらむ

三、詞形 想路が推測疑問に傾き、斷言句の少いこと

つて歌をよむとよりは寧ろ歌を製作した。豊かな想像とか、鋭い直覺と云つた風の閃きは、餘り見出されなかつた(「人はいさ心も知らず」の咏などは彼としては珍しい出来である)

六、實感を味んだものは(少いが)皆惻々として讀者の胸臆に迫るものがある。

あす知らぬ我身さおもへど暮れぬまのけふは人こそかなしかりけれ

君まさで煙絶えにし鹽籠の浦淋しくも見えわたるかな

朝露のおく手の山田かりそめにうき世の中をおもひけるかな

七、推敲を重ねるの極稍理窟に墮ちたもののあることとふ人もなき宿なれど来る春は八重葎にもさはらざりけり

ねぬる夜の夢は浪にもあらなくにたちかへりても人を見るかな

わかれてふことは色にもあらなくに心に染みて佗しかるらむ

君まし、昔は露かふるさとの花見る毎に袖のひづらむ

絲まのならなくに別れ路の心細くもおもかな  
(後)書については、枕草紙蟻通明神の額のことがあり、尾上柴舟博士の「歌と草假名」に評論せられたものもある)

(好古類纂第二編二、宮崎幸麿氏紀貫之朝臣の碑好古事集第一、二集米山宗臣氏紀氏攷、國華三九一號一八九岩佐勝以筆紀貫之圖二九九號二七一傳筆寸松庵色紙三七一號三七三傳筆古今和歌集)

つるひやくみん 鶴百韻  
はつくわいし「初懐紙」を見よ。

つれづれぐさ 徒然草

兼好法師の作で、我邦隨筆の代表的な名作である。兼好終焉後、今川了俊家僮命松丸を雙ヶ丘(兼好晩年の居の草庵にやつてその遺物を收めさせた處、壁紙に張つた反古を剥ぐと何だか草紙のやうにあつたから、全部をそつとまとべて持ち歸つたのを綴つて二百四十三段としたもの)是が即ち後世の徒然草だといふ(同時に了俊は別に伊豫太郎光貞を兼好會住の居、伊賀田井の庄の庵室に遣した處が、では五十枚ばかり詠草を手に入れて歸つた。これは今日の兼好法師集の大部分をな

すものだともいふ)

この書は兼好が道學的・儒教的・佛法的・學究的・趣味的各觀照を披瀝したものが、終始を通じて一貫するものは彼れ自身の生活態度「つれづれ主義」とも謂ふべき主義の表現である。已に巻頭「つれづれなるまゝに」の語があるが段々奥に行くにつれ「そのものを以て人生最上の生活態度のやうに云つて居る。そこで兼好の所謂つれづれとは無聊とか退屈とか寂寞とかいふのではなくて「寂然不動他に求むる無き」の意だとも謂ふ(南部宗壽徒然草諺解、加藤盤齋もこれに近いことを謂つてゐる)のみならず、この書全部を讀んで目をつぶるとどうも兼好は「人生に對して不即不離」といふ處を庶幾して居つたと思はれる。一方に名聞苦しいことを否定しながら一方には男女の趣味、親子の情といふやうな人間味をも強調して居る。

この書を通じて兼好の學殖を推すと少くとも次の諸書を涉獵した迹が見える。

枕草子・源氏物語・古今集・新古今集・和漢朗詠集・周防内侍歌集・四季物語・梁塵秘抄・三體詩・白氏文集・文選・家長日記・讀岐典侍日記・北山抄・西宮記・李部王の記・北山抄・西宮記・延喜式・律令・政治要略・摩訶止觀・梵網

經法事讚・論語書經・曲禮・莊子・漢書三國志・玉造小野小町壯衰書・高野大師御作目錄・一言芳談。  
本書中短命や無妻主義をほめた思想をのければ他は大抵現代に於ても好教訓とならう。殊に唯美主義や常識道徳を説いた各段は概して趣味深いものや適切なものが多い。文章はよくこなれた擬古文で殊に枕草子にまねた筆つきが多い。

本書に對する現代文學史家の評をあげると。

- 一、藤岡博士 王朝の情緒的時代から室町の厭世時代に移る過渡的時代相を表したものと
- 二、芳賀博士 記事が雜駁で作者が無節操
- 三、三上・高津兩氏 大體ホメタ方
- 四、尾上博士 半僧半俗の思想を盛つたもの
- 五、大町桂月氏 文奇にして高し

註解の書はさらに多い、二三種とり合せて對照的に見ることがよるしい。

つみく 對句

對語によつて成立した句のこと。對語とは對照法によつて成せられ、音調に於ても相對する語をいふ。尙

つみく 對句法

對句によつて音調を流麗ならしむる修辭の法、蓋し對偶を悦ぶは東西を通じて吾人聽覺の通有性とも謂ふべきだが、我邦人が殊に之を好んだことは夙に天地開闢之章に於て高皇靈・神皇靈以下天神七代の御名を多くは對句仕立としたことによつてもわかるが、萬葉集の長歌には、

もゆる火を 雪もてけち  
ふる雪を 火もてけち

とか

天雲の向伏すきはみ 谷蟻のさわたるきはみ  
など至る所にあり、祝詞にも、

下より往かば下を守り・上より往かば上を守り夜の守り日の守り谷蟻の狭度る極み鹽沫の留る限狭き國は廣く峻しき國は平らけく  
などあり宣命にも、

悔しかも惜らしかも今日よりは大臣のまをし、政は聞しめさずやならむ、明日よりは大臣の仕へまつりし儀は見そなはさずやならむ日月累り行くまに〜悲しき事のみし彌起るべきかも、歳時積り行くまにまにさぶしき事のみしいよ、まさるべきかも。  
など可なりに多い。王朝期以後には一々列挙するに暇

がないほど多く用ひられて居る。

テの部

ていう 林檎字 二四五三―二五〇六、寛政五―

弘化三、五十四歳

儒家、述齋の第三子、名は就、字は川翰、通稱は又三郎、禮字又は培齋と號した。佐藤一齋・松崎慊堂に師事して學業頓に進み、文化五年將軍に謁し、天保九年大學頭となり、同十年侍講に任ぜられ、十二年家を嗣ぎ、天保の末學政改革の樞機に參して大に貢獻するところあり、父の遺稿を繼いで實地誌を完成し、又命によつて官家系譜をも撰んだ。その他駢題詩・攀晃山記・觀光集等の著がある。諡して恭恪先生といふ。

ていか 藤原定家 一八二二―一九〇一、應保

二―仁治二、八十歳

俊成の子で、鎌倉の初期に榮えた有名な歌人であり、國文學者でもあり國語學者でもあつた。高倉・安德・後鳥羽・土御門・順徳・後堀河の歴朝に仕へ、官は權中納言に至つた（彼の邸宅の所在によつて彼を京極中納言と云ふ）

一、撰集

彼は和歌の家に生れてその才は父以上と稱せられ、後鳥羽上皇の殊遇を蒙つて和歌所復活と共にその寄人を命ぜられ、次いで新古今集撰者の一人として、與り撰んだが、中途父俊成の喪に遇ひ、心ゆくばかりの撰をすることが出来なかつたと云ふので自から申し請けて更に後堀河の朝に單獨で新勅撰集を撰んだ。この外に中院入道蓮生（定家の子爲家の妻の父、宇都宮彌三郎頼綱の法名でつまり定家とは相舅の人）の小倉山莊の色紙に書いた小倉百人一首も彼の撰だと云ふ（これは蓮生が撰んで揮毫だけを定家が頼まれたのだとも云ふ）

二、家集と入選歌

拾遺愚草 三卷（續國二二八―三〇一）

同 員外 二卷（續國三〇三―三二九）

新古今に四十餘首、新勅撰集に十五首、新後撰集に四十餘首入つてゐる。

三、歌學と歌についての意見

イ、近代秀歌（群二九二、一〇、七〇四―七〇七）又承久和歌式とも云ふ。承久三年八月源實朝に答へた歌道論で、詞古想新（詞は古きを慕ひ心は新しきを求め）を目標とし、典雅にして妖艶加ふるに餘情の深い歌態を

推奨し大納言經信・俊頼・顯輔・清輔などを歌の正風としてその作例をあげてゐる。

ロ、詠歌大概 歌道の修養觀を述べたもので、和歌に常師はない、唯古の歌を手本にし、古へ歌人の心境に深く思をひそめ、古の歌語の雅諳なものを採りて之に自家獨得の工夫をせよ……妄に近代歌人の造つた一節をかきし詞を借りて軀を整へるやうなことはするな」との意を述べたもので、後來二條家の人々や細川幽齋の抄を始め多くの人々によつて寶典視された。

ハ、毎月抄一に定家卿御消息とも謂ふ（群一四三、六、一一一―一二二八）歌弟子衣笠内大臣（藤原家長）の百首詠草を添削して付け加へて詠歌秘訣を注意したもので、之によつて彼の後進指導の懇切であつたこと（丁度香川景樹の桂園奥書と似通つたところがある）もわかり、歌態に十種の目を立て、

初心 一、幽玄様・二、事可然様・三、麗様・四、有心様  
中段 五、長高様・六、見様・七、面白様・八、有一

節様・九、濃様

蘊奥 一〇、鬼拉の鉢

としたこと、始めから第十の高い所をならふのは修業の邪道であることを論じた様子がわかる。

以上三書は後世二條派の流れを汲むものが金科玉條―否な寧ろ聖書のやうに貴んだもので、徹書記のやうな創新味のある歌人すら、

そも〳〵歌道において定家をなみせん輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり(徹書記物語)と云ひ、室町時代の耆宿一條兼良も、

歌の道におきては定家卿の説を離れては頗る傍若無人なり(古今童蒙抄)

と云つた。其他彼の著といふに未來記・雨中吟・三五記・愚見抄などもあるが眞偽不定である)

尙又、彼の萬葉に對する考は右の毎月抄にも出てゐるが「非常に結構だが初學の徒はまれば可けない」といふにあるらしい。

萬葉はげに代もあがり人の心もさえて、今の世に學ぶことも更に及ぶべからず。初心のときおのづから古體をよむことあるべからず。但稽古年重なり、風骨よみ定まる後は又萬葉を存ぜざらむ好士は無下の事とぞ覺え侍る(毎月抄)

一體彼は長歌よりも短歌に力點をおいた。彼の日記(明月記)には唯一度慈鎮和尚の長歌の返しをせよと命ぜられて作つて「神妙也」と敬感に與つたさあるが「われ

いまだ曾てこの歌を詠ぜざればその體をなさじとおもふ云々)とも云つて事實彼の咏んだのは短歌ばかりであつた。又一面に於て彼は「反貫之派」を標榜したことも見られる。貫之はどちらか云ふと華よりも實を尙んだ(古今集序今の世の中色につき云々)定家は詠歌大概や近代秀歌の處々で貫之のこの點を難じて華麗第一的の説を吐いてゐる。

四、諸種の寫本―定本校訂上の貢献

彼は非常な筆まめで、暇さへあれば佛典や古本を筆寫して居たらしい。明月記を繰つて筆寫統計をされば誰しもその精力に驚くことであらう。佛典の方では法華經八卷を七回、金光明經十卷を三回、阿彌陀經・寶篋經・止觀・地藏・十輪經・尊勝陀羅尼・無量壽經・双觀經・觀無量壽經・心經・涅槃經・千手經・却溫神呪經なども寫してゐる(一つには當時の學者の好みでもあつたらう。外にも寫經の例はある)其他

二、舊記 六

三、漢籍 三

四、物語草子 一一

五、歌集 一五

の多數に上り、土佐日記・伊勢物語・古今集・更級日記

等何れも彼の正確な筆寫(所謂青表紙本)が定本として尊重されて居る(尙この第四項は玉井幸助氏の更級日記錯簡考二五八―三一九に詳説されてある)

五、彼の歌

父俊成と等しく非常に推蔽に重きをおいた。歌を按ずる時はいつでも居間の南面の障子を開いてその方に向つて端座し、白樂天の句「故郷母あり秋風の涙。旅館人無し夜雨の魂」と云ふのを口誦し、さて徐ろに腹案をめぐらしたさ云ふ。左に秀味數多の一斑をあげる。

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに

大空は梅の匂にかすみつゝくもりもはてぬ春の夜の月

春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるゝ横雲の空

誰すみて心のかぎりつくすらむ花にかすめるを

ちの山きは

霜まよふ空にしをれし雁がねのかへるつばさに

春雨ぞ降る

西行法師すゝめて百首歌よませ侍りけるに

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

月清み四方の大空雪消えて千里の秋を埋む白雪見渡せば松より西になりにけりかけはるかなる明方の月

駒とめて袖うちばらふかげもなしさのゝわたり

の雪の夕暮

行きなやむ牛のあゆみに立つ塵の風さへあつき

夏の小車

いかにしていかにしらせむともかくも言はよな

べての言の葉ぞかし

要するに彼は學者として歌人として遺傳と境遇とに恵まれ、才と財と長命とを具備した愛書家・讀書家・精力家であつた。

ていかきやらせうそく 定家卿消息 (毎月抄 和歌庭訓)

ていか 藤原定家」を見よ。

ていかん 藤井貞幹 二三八二―二四四九、享

保七―寛政元、八、一九、六十八歳

京都の人(日野家の落胤たといふ)通稱叔藏、字子冬、無佛齋と號し又好古ともいふ。最も考證の學に精しくその著の大部分も亦考證學に屬するものである。

衝口發(これは本居宣長から國體に害ありとして攻撃



せられ、それが爲めに名聲が下つたもので彼にとつては名譽の著ではない)

國朝著目・逸書・逸號年表・天智天皇外記・金石遺文・好古小録・好古日録・好古雜錄・歷代外印鑄造考・集古圖・古瓦譜・金石圖考・無佛齋文集等。

**ていきやうしき 貞享式**

芭蕉翁二十五箇條に同じ。その項を見よ。

**ていきんわうらい 庭訓往來 一卷**

僧玄惠の著、書牘十二月往來で、正月から十二月までの消息が漢文の書牘體で書かれ、

孟春之吉慶 元朝之嘉祥 最先向貴方申儀候畢 抑福祿之懿美 家門之繁昌 猶以不可有盡期候 幸甚幸甚

と様な調子で書かれてある。習字臨本等として徳川時代に流行し、左の諸註もある。

狩谷望之 掖齋庭訓往來 一卷

部徳風 庭訓往來具註抄 一卷

永井如瓶 庭訓往來諺解 五卷

山崎美成 庭訓往來證註大成 一卷

伊勢貞丈 庭訓往來諸抄大成扶翼 一卷

庭訓往來抄 三卷

(群一四〇、六、一一二四—一〇五、異制庭訓往來)

**ていくわいしゆみ 低徊趣味**

「餘裕派小説」を見よ。

**ていしつ 安原貞室 二二七〇—二三三三、慶長一五—延寶元、六十四歳**

近世初期古風の俳人。始め正章と號し後貞室と改めた。

松永貞徳の門に入り大層師翁に愛せられた。句集に正

章千句(俳文二)があり、その弟子には榎並貞因・乾

貞恕・乾淵貞山・神田貞宣等が出た。

これはくさばかり花の吉野山

早蕨や深山の雪に懐ろ手

名のれ月の弓杖つきて時鳥

涼しさのかたまりなれや夜半の月

**ていしゆ 程朱**

支那宋代の大儒二程(程明道・程伊川)及び朱子を云

ひ、時にはそれ等三家の儒學を指してもいふ(古類文

學部二、七五八—七八三程朱學)

**ていしんくわう 貞信公**

ただひら「藤原忠平」を見よ。

**ていちよう 伊勢貞丈 二三七五—二四四**

四、正徳五—天明四、六、五、七十歳

近世の有職故實家として有名な人、平氏で、號を安齋と云つた。父貞益は幕府に仕へて千石を食む。兄貞陣後を嗣ぎ間もなく天死、二男の彼は封を返上したところ内三百石だけは引繼ぎ與へられた。彼は幼より博覽強通殊に有職故實を以て一家を爲し、中古以後の記録で眼を通さないものは無い位であつた。その著數十種數百卷、就中貞丈雜記・安齋隨筆は有名で、故實叢書にも收められてある。

**ていちやうさつき 貞丈雜記 十六卷廿二册**  
有職故實の篤學者伊勢貞丈の隨筆で、寶曆十三年(二四二三)から終焉まで稿を續けたものを、天保十四年(二五〇三)六月に孫貞友・門流千賀春樹等相謀つて板行したが、今は故實叢書にも入つて居る(索引の恒利なものさへついたら非常に有益な書だと思ふ)

**ていとく 松永貞徳 二二三一—二三一三、元**  
龜二—承應二、一一、一五、八十三歳  
近世初期の俳人で、その功績は、

- 一、俳諧の法式を定めたこと。
- 二、方に衰頹に瀕してゐた俳諧を復興したこと。
- 三、發句獨立の先蹤を成したること。
- 四、多くの名俳を門下から出したこと。

五、和歌を堂上から民衆におろして普及させたことなどで、作句そのものは守武・宗鑑時代と比して何等進境を見ない。

彼の先祖は攝津高槻の刺史(代官のことか?)入江九郎盛重で、

盛重—政重—永種—貞徳

となつてゐる。幼名勝熊、老名延陀丸又は長頭丸(老後

盲目となり再び髻を束れて童服をつけて改名したも

の)早くより和歌を好み細川幽齋・九條玖山・菊亭右相

を始め次々師事せしもの五十餘人、その内紹巴や昌叱

については連歌を學び、連歌の席の後で言ひ捨てる俳

諧などを聞きはつり段々之に興味を覺え、壯年に及ん

で遂に之を以て一家を立てた(彼は又嘗て京の町に徒

然草を開講して好評を博した)慶長二年八月花咲翁の

稱を賜はり(俳諧宗匠の免許彼に始まる)を受け「花の

本」の號を許された。

その著御傘十卷俳諧の法式を説き、淀川(一名新增犬

筑波集、俳文二)は宗鑑の犬筑波集を評し併せて「三句

の移り」を教へ、油糟(俳諧文庫二)は彼の家集で俳諧發

句を載せてある。俳諧の方は前代に比して大差なく唯

附味に從來のなかしみのみならず優美にして高雅の趣

要あるこさや、用語に俗語が多くなつたことや内容に人事を多く取材したことなどが變つてゐる。俳句の方は何等前代と變りはなく相變らず秀句と縁語の舊技巧を一節にしたものばかりであつた。

霞さへまだらに立や寅の年

鳳凰も出でよのどけき酉の歳

鶯よかけて卵をうめの花

しなるゝは何かあんずの花の色

山や故郷歸着て行く入日影

彼は文藝復興の氣運に善處した幸運兒とも謂ふべく、「畸人談」載する所を見ると當時幾多の権門と弟子とに敬愛せられ、平和に豪華な生活であつたことがわかる。その弟子を貞門と云ひ野々口立圃・松江重頼・安原貞室・山本西武皆有名で、つまり近世俳文學史は彼から開展する。

ていけん 角藤定憲

明治二十二年大阪で始めて新派劇を演じた人（新派劇の始祖と謂つてもよい）

ていもん 貞門

松永貞徳の聞いた俳諧の一派即ち古風をいふ。

ていりう 貞柳 二二一四—二三九四、承應三—

てうかくしふ 調鶴集 三卷

江戸派の殿將井上文雄の家集で、慶應三年（二五二七）佐々木弘綱の序を附して版行、明治以後續歌第十一編にも入る 文雄参照

てうみん 中江兆民 弘化四—明治三四、一一、一三、五十五歳

土佐高知の人、名は篤介、十九歳藩の留學生として長崎に遊びフランス語を修め、居ること二年後藤象次郎に認められ、金二十五兩を貸與せられて江戸に村松英俊の塾に入り佛語を修め、明治四年廿五歳岩倉大使に隨行し滞佛三年、歸來元老院少書記官を拜し次いで外國語學校長に任じ、それより野に下つて番町に佛學塾を開き、自由平等思想を普及した。二十年大阪に東雲新聞を起し、二十三年に衆議院議員に當選、爾後雜誌「政論」「經濟雜誌」「百零一新聞」「立憲自由新聞」「民權新聞」「北門新報」等を経営し三十三年喉頭癌に罹り「もう一年半しか持たまい」と醫師の宣告を受け、「一年有半」といふ（これは佛のオウギュスト・コントの唯物的實證哲學を作者自身の體驗で消化した唯物論的哲學的感想論文）を公にして一時洛陽の紙價を高からしめ更に筆を呵して「續一年有半」「無神無靈魂」を著し、同

享保一九、八十一歳

近世、關西に於ける狂歌作者の先輩。家は浪華の菓子屋で、號は珍菓亭言因・信乘又は油煙齋とも良因とも號し（尙「月の鏡」には霜露軒・精雲洞・生庵・通船子・放曠子・傘魚などの號も出てゐる）通稱を鯛屋善八といつたが性來狂歌を嗜み玉雲翁信海について指導を受け之を文學の一種類として普及させた。その著に「家づと」國刊一期新群一〇、「拾遺家づと」がある。彼は圓滿なる人格者で上流紳士にも、中下流同好者にも愛敬せられた。その門人には栗柯亭・永日庵・桃緣齋・貞佐・林郎・貞古・廉卿等多くの狂歌師がある。

百人一首にどうありとても元日の曉ばかりよきものはなし

世の中よ何と將棋のこまりものはるもよしなや捨てゝつまらず

ぢぢは山しばしが程に身は老いてむかしくの咄戀しき

金銀はあるも猶よしなしとても人間萬事宗桂がこま

ちら／＼と音羽のさくらちりつんつてんと三すぢのたきの白糸

ごく多数に愛讀せられた。

彼の功績は早く佛蘭西文化を我邦に紹介したこと、その奇勁清高とも謂ふべき文章（三醉人經綸問答・佛蘭西革命前二世紀事・理學鈞玄・泰西理學小史等の著）を以て警世の叫びをあげた點とにある。その譯にかゝるルツソーの民約譯解は最も喧傳せられ、ユウ、ジェーヌ、ウエロンの維氏美學、フワイエーの理學沿革史（哲學史）も當時には類の少い名譯と稱せられて居る（昭和二、四、一、早稻田文學二—三一—中江兆民の「理學沿革史」その他高須芳次郎氏）

てうやぐんさい 朝野群載 三十卷

三善爲康（一七〇九—一七九九）の撰、平安朝に於ける諸家の漢文を文筆・朝儀・佛事・諸國雜事・諸國公文等に分類して集めたもの。永久四年（一七七六）著者の編書がある（史一八・校）本朝野群載、尙この書の事實をいろは順に分けて巻数楮数を繋記したものに朝野群載類標一卷がある

てがらをかもち 手柄岡持

明誠堂喜三二の狂歌號「めいせいだうきみじ」の項を見よ。

てきさい 中村暢齋 二二八九—二三六二、寛

永六—元祿一五、七十四歳  
 京都の人、名は之欽、字は敬甫、通稱七左衛門（後仲二郎と改め）幼より學を好み儒學は勿論天文地理量衡に至るまで通曉し、盛名伊藤仁齋と頡頏した。儒學は朱子學を奉じ専ら禮樂に通じて居つた。その著數十部何れも有益の文字に富む。

四書鈔說・近思錄鈔說・周易程傳鈔說・西銘鈔說・性理學鈔說・孝經示蒙句解・四書示蒙句解・近思錄示蒙句解・筆記周易本義・孝經集解・律呂新書・三器考略・三器通考・五緯行度圖譜・天文考要・日鈔・文集・百官稱呼・學制考・古今州郡圖・親尊服義・追遠通考・易學啓蒙翼傳・筆記易學啓蒙・筆記書經集註・筆記大學或問等。

**てきは** 野田笛浦 二四五九—二五一九、寛政一一—安政六、七、六十一歳

丹後牧野家の臣、名は逸、字は子明、通稱希一。夙に古賀精里に學び、艱苦勵精殊に文章に巧みで、文政九年清國の商船が長崎に護送する時彼選ばれて同乗し筆談縦横、清人舌をまいて驚き、その時唱和の文も詩も海内に喧傳した。「得泰船筆話」「北越隨筆」等の著がある。

**てつかん** 與謝野鐵幹 明治六、二、二六、—  
 京都の人、父は歌人として重んぜられ、その血をつい

で氏も生れながらにして詩人の素質があつた。上京後落合直文・森岡外兩家に師事し殊に落合氏の指導によつて詩眼を開き、後自家独自の詩才を融合させて一家をなし、三十年後ローマンチック運動の魁として新詩社を起し「明星」を發刊し東西南北・天地玄黄・鐵幹子・相聞等の集を出し、夫人晶子と共に新詩歌の鼓吹に努めた。四十四年佛蘭西に遊び歸來譯詩「リラの花」を出し、大正十年十月「明星」を復活し（四十一年第百號を以て廢刊した）たが、現代の詩人が我國古典の素養の乏しいことを慨き、目下は日本古典全集の連刊に努力を捧げ傍ら舊師の鳴外全集完成に世話をやいて居る。

**てつかんし** 鐵幹子

與謝野鐵幹、三十年以後の詩歌集、中には童謡もある。多少の稚氣ある事は作者自身巻頭に斷つた通りだが、「詩」に精進しようとする作者の意氣は歌にも詩にも溢れて居る。

古香（三十年の十二月戯れに舊稿を石函に藏めて僧に托し北漢山に埋めさせける時）

のち二萬年するの世に  
 ほれたくまじき人の子が

よろづの書にあきはて、  
 さらにこの血にかつゝ  
 神にいのりてあめつちの  
 たけき生命をもとめつ、

あめかぜすさぶ常闇に  
 巖が根づたひ咒をとなへ  
 このたかやまに登りきて  
 打ついなづまのほかげより  
 躍りあがりて高らかに  
 ひとり其子の讀むを許さん。

こほろぎはわぶる實方すゝむしは老いし小町の  
 のちも  
 後身かと思ふ  
 ありあけの月のみやこの殿造りさながら見する  
 霜ばしらかな  
 手にまきて古き歌かく涼しさよ大蛇のきぬの二  
 丈ばかり

またぎても踰ゆべき海の北のかた他人の國あり  
 浦鹽斯徳  
 鐵幹が旅する錢にこゝろかきて心にもあらぬ唱歌  
 集賢る

（菊判半截二三四頁、明治廿八年七月六日、矢島誠進堂）  
**てつちやう** 末廣鐵腸 嘉永元—明治二九、二五、四十九歳

伊豫の人、名は重恭、明治の初年暫らく官に仕へ、後辭して曙新聞に入り、次いで朝野新聞に轉じ、二十一年歐米を漫遊、歸國後東京公論・大同新聞・國會等に執筆したが舌瘡の爲めに病歿した。氏は政治小説・滑稽小説の作家としてすぐれて居つた。雪中梅・二十三年未來記・花間鶯は一般に愛讀せられ「啞の旅行」(二十四年六月作)の如きは今日に於ても滑稽小説の一珍であらう。

**てにきは** 天仁遠波

それ自身獨立しては用を爲さず、他の品詞に添つて種種なる意味をあらはし語尾に活用なき品詞をいふ。もと漢文訓讀から起きた語で、實に我國語特有の品詞である。中古より近古にかけては専ら歌人の作歌上の注意として之を認めてゐたのを徳川期に入つて多くの語學者が出てその本質・種類・沿革・用法等を明らかにした。今日の文法に所謂助詞とか靜助詞といふにあたる（拙著綜合日本文法講話三六二—四二三）

**てふはながためいかのしまだい** 蝶花形  
 名歌島臺

寛政五年(二四五三)豊竹座上演、作者は若竹笛躬と中村魚眼、清正物の一つだが寧ろ小阪部兵部が主人公と謂ふべき作。

小阪部兵部音近は四方に聞えた勇將、之に二人娘があつて姉葉末は(實は兄の遺孤)加藤正清に嫁いで笹市を生み、妹眞弓は大内家の忠臣出海宗貞に嫁いで松太郎を生んだが、生憎眞柴久吉は大内義弘と確執し和睦せよと勅命まで下されたが、どちらも頑として應じない。そこで正清も宗貞も天下の勇士音近を味方になるやう説きつけよ、この事成らば即座に離縁と各その妻を里方へかへすが、音近はとかくの返事をしない。するとこんど両方の子供がそれ／＼父の名代で来て又々味方になるやうと頼むので「ではこゝで二人勝負をせよ、勝つた方に味方する」さて殘酷にも二人に眞劍試合をさせると笹市の方が勝ちになつた。それもその筈亡き兄への義理として葉末の産みの子を殺してはすまじとて本當の孫には態さ双引の鈍刀を持たせたのであつた。やがてその同じ双に音近も自刃してその苦衷を物語ると蔭に立ちぎく正清・宗貞もその誠意を感じて各妻の離縁を許す」といふ筋、今も歌舞伎や淨瑠璃に行はれて有名なもの。

(淨瑠璃通解三)

てふむ 蝶夢 二三八九—二四五二、享保一四

—寛政四、一、二、二四、六十四歳

徳川時代の俳僧、名は幻阿、五升庵、又泊庵の號あり。京、中川阿彌陀歸白院の住職。後引退して洛東岡崎に幽居し専ら俳を樂しむ。その句別に師傳なく唯芭蕉翁の遺著を搜り又二柳九菫と風交して自ら體得した。その著には左の十數種がある。

蕉翁繪詞傳・芭蕉翁發句集・祖翁百回忌・類題發句集・新類題發句集・芭蕉翁文集・名所小鏡・蕉門俳諧語錄・芭蕉翁俳諧集・去來犬草發句集・乙酉墨直し。

又その秀吟には、

なまなかにき残されて苜の花

朝寒や關の扉の開く音

馬の尾を引ずつて行く爽かな

風や壁からつく油筒

てんこう 江馬天江 二四八五—二五六一、文

政八、一、三—明治三四、三、八、七十七歳

近江國阪田郡下阪中村の舊家下阪幸内の六男、十八歳の時京都仁和寺の宮家の侍醫江馬權之助の養子となつて改姓、それから醫を學び次いで緒方洪庵について

洋學を修め、又詩作を嗜み柴川星巖の門に入つた。王政復古の際には仲兄板倉筑前介と共に正議を唱へ、一時太政官に奉職したが明治二年官を退いて風雅に優遊し、傍帷を下して諸生に書と詩とを教へた。幼名貞吉名は聖欽、字は永弼、通稱は正人。

てんきせうせつ 傳奇小説

全く想像によつて作られた小説で、事實あり得べからざる神秘・怪奇の想を盛つたもの。例へば竹の中からかぐや姫が生れてしまひに昇天するといふ竹取物語や、八ッ房といふ犬の屍骸から八顆の玉が散つてその玉の一つ／＼が英雄として生れ變つてくるといふ八犬傳のやうなもの、英の「ローマンズ」に相當する。

てんこう 豊田天功 二四六五—二五二四、文

化二—元治元、六十歳

水戸藩の人、名は亮、字は天功、通稱彦次郎、號を松岡といつた。弱冠江戸で藤田幽谷の教を受け、歸藩後烈公に拔擢せられ彰考館編修を兼ねた儒官となり、中頃罪を得て一旦退官、復び用ひられて彰考館總裁となる。最も史學に精通し又文章をも能くした。北島誌・烈公行實・靖海全書・明夷錄・鷄鳴錄・論語時習錄等の著があり、大日本史中佛事・氏族・食貨・兵・刑法の五志亦彼の執筆に

係る。明治廿五年十一月朝廷從四位を贈られた。

てんぐわい 小杉天外 慶應元、九、一九—

羽後の人、名は爲藏、始め法律を學び後轉じて文學に志し東京専門學校・中央學院・國民英學會等に學んだ。後綠雨の門に入り「改良若殿」を出したが多分に綠雨張の所があつた。ついで蛇苜を出して大分著名になり、ソライズムを提唱して「小説は美醜の別なく唯あるがまゝの眞實を寫すべきだ」といひ、自然主義運動の先驅者となり、その主張に相當するはつ婆、はやり唄・新學士・新夫人・女夫星・魔風戀風・コブシ・長者星等を出したが、後創作の主流を遠ざかつて通俗作家になつた。

てんげん 片上天弦 明治一七、二—

伊豫の人、早大文科出身、大正四年同大學留學生としてロシアに行き、七年夏歸朝、爾來露西亞文學の大家として昇曙夢と並び重んぜられ、早稻田文學に評論を書き又文藝教育論を唱へなごした。生の要求と文學・思想の勝利・草の芽・ロシアの現實・無限の道・ドンキホーテ・自然論・藝術教育論等の諸論文集があり、他に翻譯隨筆もある。

てんずゐ 久保天隨 明治八、七—

東京下谷で生れたが家は元信州である。名は得二、三

十二年東大漢文科出の秀才で、不幸にして口訥なるが爲めに出でて社会的に活動せず、一室にこもつて始めは雜著に従事したが昨今では森槐南以後に於ける漢詩の名家として斯壇の聲望日々に加はりつゝある。

**てんせい** 佐野天聲 明治一〇、五一

駿河富士郡大宮町の人、實稱は角田喜三郎、三十年頃から小説を作つたが、有名になつたのは四十年都新聞に脚本「大農」を發表してからだ。その他の劇作に不死の誓・賢き人・日本丸・由井正雪・天才などがある。

**てんたつおん** 田達音

たゞおみ「島田忠臣」を見よ。

**てんち** 星野天知

雜誌「文學界」の同人で、詩や小説に長じ、小説の作には文學界に載せた磯物語、文藝俱樂部に載せた破れ蓮、太陽誌上のどんぶり、往生・小笠等がある。

**てんちいうじやう** 天地有情

土井晩翠の第一詩集で、當時の詩壇の大なる驚異となり、氏を一躍斯界の最上位に引上げた名詩集である。殊に當時の男學生や青年に歡迎せられ、少し文學を好む者はその一言一句をも暗誦した位であつた。同じ西詩の園に集立ちながら鳥崎藤村とは別途の方面に詩野

を擡げた氏の功は、文學史的に見ても没却すべからざるものがあるが、その特徴は多くこの一集に備はつて居る。

「希望」と題して港入江の春を行雲流水に味到して「人の心にのぞみあり」と結び、「雲の歌」には、

ゆふべは崑崙の谷の底

けさは芙蓉の峰の上

と雄大な想を寄せ「星と花」には極めて可憐な小曲十二句を以て天地の融合感に味到し「鷺」には、

背には無限の天を負ひ

縁雲はねにつんざきて

飛び行くはてはいづくぞや

望のあした持ち來る

高き薫りのあさこめて

大空めぐる鷺一羽

あらしはつらし道すこし。

「萬有と詩人」はミルトン・ナルヅラルス・ロセツテ・シエクスピヤー・ダンテ・ゲーテを引いて萬有到る所詩あり、詩人隨處に之を高唱することを謳ひ、「はるのよ」には梅花臘月によせる静かに優しき鑑賞を歌ひ「哀歌」は作者知人の令嬢の死を弔うたものだが、實感惻々人に

迫るものがある。

暮山一朶の春の雲

緑の鬢を拂ひつゝ、

落つる小櫛に觸る袖も

ゆかしゆかりの濃紫

羅綺にも堪へぬ柳腰の

枝垂は同じ花の縁

花散りはてし夕空を

仰げば星も涙なり。

等ある「詩人」は詩家の誇りを美しく歌ひ「夕の思ひ」は聰明な哲人の高き冥想「光」も同じく瞑想的な理想詩で

愛と自由と平等の

まことの光かゞやきて

天の王國來るまじき

嗚呼其時をまちわぶる

友よもろとも手を引て

薄暗の世をたどらまし

など云ひ「廣瀬川」に「郷里に打寛いだ心の姿を見せ、  
「馬前の夢」に、「アレキサンダー・ゴール・ナボレオン等の英魂を弔ひ、「青葉落」に郷土の先君を忍び、「紅葉青山水急流」「秋風星落五丈原」のやうな七字句を題に聯珠

の詞藻を綿々と飾りつられ「造化妙工」は自然美享樂の歡喜をうたつて、かの「美しき天然」さいふ流行曲よりも高雅「暮鐘」は詞藻絢爛、落想別に幽玄の哲理を含まずと雖も、

友高樓のおぼしまに

別れの袂重きとき

露荒涼の城あとに

懐古の思しげきとき

聖者静けき窓の戸に

無象の天を思ふとき

大空高く聲あげて

今はと叫ぶ暮の鐘。

に囑して、

天の莊嚴地の美麗

花かんばしく星てりて

「自然」のたくみ替られど

わづらひ世々に絶えずして

理想の夢の消ゆるまは

たえずも響けとこしへに

地籟天籟身に兼ぬる

ゆふ入相の鐘の聲

といふ處、實にこの集の歴巻とも謂ふべきである(菊判半載二一〇頁、明治卅二年四月十三日、博文館)

**てんとく** 水間沾徳 二三二四—二三八六、寛文四—享保一一、六、晦日、六十三歳

江戸の刀研師、名は友兼、通稱次郎左衛門、合歡堂と號した。歌俳諧に興味を持ち、始め福田露言の門に入り露葉さいつたが、飛鳥井雅章卿が磐城平へ下られるお供をして行く途すがら和歌を教はり、剃髪して友齋と名のり江戸に歸つてから、磐城平の城主内藤義英に仕へた處、義英公は談林派一方の俳星としても聞えた人のこと、て主君ではあるが之に師事し、その號露沾の一字を貰うて沾徳と號した。その著に一字蘭集・文蓬萊・船便・俳度曲・枝葉集・餘花百句・秋花千句等がある。今「沾徳句集」と題し、俳文一〇に入る。

**てんとくうたあはせ** 天徳歌合 (天徳四年内裡歌合)

村上天皇の天徳四年(一六二〇)三月卅日に催された歌合。始めに漢文の序があつて、次にその次第を略記しそれから各番の歌が出て居る。

題は、霞・鶯・柳・櫻・秋冬・藤・暮春・首夏・卯花・郭花・夏草・戀、

歌人は左方、朝忠・坂上望城・大中臣能宣・少式命婦・壬生忠見・源順・本院侍従。右方は、平兼盛・藤原元眞・中務藤原博古・清原元輔。

講師は左方、延光・右博雅。

判者は左大臣、念人(方人即ち應援者)は左方中將更衣外二十六人、右方辨更衣外廿六名、都合二十番の取組で左方が勝。

歌合の體の備はつたのはこの歌合の頃からと推定せられて居る(日歌二、群一八一、八、一九—三〇)

**てんとくよねんだいりうたあはせ** 天徳四年内裡歌合

「天徳歌合」を見よ。

**てんぶじんけんろん** 天賦人權論

馬場辰猪十六年一月の著。「人ノ權利ハ天賦ナリ自然ニ起因ス……各人ハ宜シクコノ天賦ノ權利ヲ遺憾ナク發揮スベシ」との趣旨を強調し、この思想を暴威を以て抑へようとしたものに羅馬帝ハスパシアンヤフランス路易第十六世あり、學理辯説を以て攻撃したものにマキアベリ・ホップス・ベンザム・オースチンあり、されど何れも失敗に終るか多分の謬見を含むかして居る。近くは我官學の帝大總理加藤弘之氏の如きも「進化主

義」を標榜してこの説に反對して居るが、それは看過すべからざる一大誤解であるとして「達賓ノ進化説ヲ駁ス」を題する英の無名氏の著を引譯してその根柢たるダーウキンの説から攻撃し、筆鋒鋭く破邪顯正の筆法を以て論歩を進め、最後に一篇の主旨を左の如くに要約してある。

- 一、進化主義ニ從ヘバ妄想モ確説ノ基礎トナル者ニシテ必ズシモ有害ニ非ザルコト
- 二、天賦人權主義ヲ唱道シタル鼻祖ハ紀元後ノ、ウルヒヤン氏ニ非ズシテ紀元前ノ、ゼノ氏ノ説ニ基クコト
- 三、性法學派ノ起原ハ西曆千五十六年頃ノ哥路志氏・哈比氏等ニ非ズシテ紀元二百二十八年頃ニ於テ既ニ羅馬ニ行ハレシコト
- 四、佛國ノ革命ハ人類自然ノ競壓セシヨリ起リシコト
- 五、優勝劣敗中ニ良正ノ者ト不良正ノ者トチ區別スルノ基本明瞭ナラザルコト
- 六、生存競争ハ邦國ノ種類ト時代ノ異同トチ以テ區別ス可カラズ故ニ歐洲中古人民ノ生存競争ヲ以テ可トセバ我邦今日人民ノ生存競争ヲ以テ不可トス

可ラザルコト

七、我邦現時人民ノ智識は概シテ歐洲中古ノ人民ノ智識ニ比較スルモ敢テ劣ル所有ラザルコト

八、天賦人權主義は宇宙の萬物ト共ニ不消不滅ノ自然力ヨリ生ジタルコト

九、著者の引證シタルイーリング氏ノ説ニヨレバ我邦人民ハ益々進ンテ其權利ヲ伸暢ス可キモノナルコト

一〇、新説(加藤弘之氏人權新説ノコト)第二章ノ意ハ生存競争シテ其權利ヲ伸暢ス可キニ第三章ニ至テハ却テ之ヲ抑制セントシテ前後相撞着スルコト(明治名著集一六八一—一八九)

**てんのあみじま** 天網島

「心中天網島」を見よ。

**てんみん** 並河天民 二三三九—二三七八、延寶七—享保三、四、四十歳

丹波桑田の人、名は亮、字は簡亮、その死後門人平素好むところの稱號により「天民先生」と謚した。若い時兄と一緒に伊藤仁齋の堀河塾に入つたが、先生の仁義性情に關する説に不服で師の歿後東涯から別れて別派を立て、常に經世の大義、治道の要訣を論じ又經濟に

心をひそめ古樂を考へ、問襄錄一篇を作り兵書醫學・本草學和學皆相當に通じて居つた。その著に天民遺言・かたそぎの記・松山語語などがある。

**てんりやう** 菊岡沾涼 二三四六―二四〇七、

貞享三―延享四、一〇、二四、六十二歳

伊賀の人(一説には江戸の神田の經師屋)名は房行、通稱藤右衛門・崔下庵・南仙齋等の號がある。江戸に出て初めは一品、後には露沾の門に入り俳諧を學んだが、又和漢の學に通じ江戸砂子(俗諺誌)近代世事談等有益の述作がある。又俳書には藻蘆袋・綾錦・懷寶規矩・鳥山彦・三十六番句合・百福壽・俳諧故事談・奈良土産等の著がある。二世清涼は彼の遠縁に當る人を養うて嗣がせたもの亦俳諧をよくした。

トの部

**どうえう** 童謡

上代にも童謡があつたが、それは多くは一種の諷刺歌で、所謂「之をいふもの罪なくして之を聴くもの以て戒しむるに足る」底の時勢粧諷諭であつた。崇神天皇の時皇庶兄難波通安王謀叛の企てありて微賤の一少女

が童謡にうたつたとあり、皇極天皇の二年十月蘇我入鹿が上宮王を廢して古人大兄を立てようとたくらんだ時にも、  
岩の上に小猿やくこめだにもたげて通らせかましし 羚羊  
のをぢ  
さいふ童謡がうたはれた。天智天皇が韓人に官を授けられた時には、  
橋は己が枝々なれども玉に貫く時同じ緒にぬくといふがあり、續いて近江遷都の際にはそれを諷諫する童謡が多く出たといふが詞は傳はらない。歌詞の傳はつてゐるのは記紀を通じて二十首にも上る。  
王朝時代催馬樂の中にも童謡が混じて居るが、最早政治的諷刺などの意はなく、唯、  
酒飯(さけをたうべて)  
酒をたうべてたべ酔うて、たふと懨りんぞや、まうで来る、なよるぼひそ、まうで来る、タンナ、タンナ、マリヤ、ランナ、タリチリヤ  
と子どもが酔ひどれの千鳥足を手拍子面白く打興じたり、  
大宮  
大宮の西の小路に漢女子産んだり タリ、マリ、タンナ

と漢人の遊女が歸化して平安京の西の小路に住んで子を産んだのを珍らしがつて唄ふと云つた様の風俗歌となつてゐる。續日本後紀に童謡を銘打つてのせた「天には琵琶を打つなる」や「大枝をこえて走りこえて」などは矢張り諷刺歌であるが大人までもうたつたとあるから純童謡とはいひ難い。古今和歌集中の風俗歌には

彼の行くは 雁か鶴か、雁ならば ハレヤ、ト  
ウトウ、雁ならば、名のりぞせまし、なほ鶴なりヤトウトウ

と様な無邪氣なものもある。王朝末期「梁塵秘抄口傳集」所載中雜藝の歌にも「舞へ〜蝸牛」とか「居よ〜蜻蛉よ」とか「簾篠の先に馬の尾より合せて」とか「懨り果てぬ、作り道の四塚に」など随分多い。近世の子守唄や手毬歌の大部分は童謡で、歌詞はだんだん文學的・教訓的・童心的になつて來た。明治に入つて文部省で撰んだ小學唱歌卷一「かり〜わたれ」とか「ありを見よ」とか「えのころ、い〜ま、喰はせう」などは以前のに比してずっとあどけないものになつたが口語唱歌が流行すると共に幼稚園や小學下級用唱歌にはだん〜佳作が出た。けれども「ホ、ホ、ほたるこ

い」を「ほたるこい〜よい乳のませう」としたり「てふ〜、てふ〜、なのはに生まれ、なのはにあいたらさくらにとまれ」を「てふ〜、てふ〜、なのはなにとまれ なのはなにあいたらさくらにとまれ」と訂正したのは何となく童謡味を薄らげた感もあつた。大正に入つて大戦前後兒童文學の勃興と共に童謡は俄に盛んになつて第一流の詩人が筆を染めるやうになつた。併しそれは西洋文學に培はれ兒童の心理に鑑み詩の本質に反みて童心は即ち詩心といふ立場から童謡を以て詩壇の主流としよとする企てからであつた。目下の童謡は詩人の教育的童謡、教師の文學的童謡、兒童自身の創作した童謡、大人の爲めの童心藝術としての童謡など一口に「童謡」といふ中又々分派しつゝ、ある傾向がある。

**とうおんぷ** 東音譜 一卷

新井白石享保四年(二三七九)の著、我邦文字の音韻を説明したもの、國書刊行會第一期本新井白石全集第四冊に入る。

**とうが** 東雅 二十卷

新井白石、享保二年(二三七七)の作、一種の語源辭書とも謂ふべく、爾雅の體により、和名類聚抄に據つて

天文地輿神祇人倫等の分類により、我邦事物の名稱中不明なものと、知れきつたものとをのけて他一切を解説したもの。室直清の序をそへて享保四年に版行（十册本）明治に入つて吉川弘文館から單行本として出版又國書刊行會第一期本中新井白石全集第四册にも入る。

とうかいいうしぎん 東海遊子吟

土井晩翠の第三詩集で「あけぼの」以下廿九篇を収め、亞細亞大陸懐古の歌・日本の女性・セイヌ江上の別離・歐羅巴回顧の歌などが殊に名高い（改訂版菊判半截一九四頁、大正七年十一月卅日、岡崎屋書店）

とうかいさんし 柴東海散士 嘉永五、一二、二―大正一一、九、七十歳

會津の藩士柴佐多藏の四男、幼より漢學を修め又英佛の語に通じ、渡米して桑港商業學校を卒業しヒラデルヒヤ大學で經濟學を修め、理財學士の稱號を得て歸朝。政治界に出て二十四年以來殆ど毎回代議士に當選し、官途について農商務次官や外務省參政官に任ぜられた。その作「佳人之奇遇」は文稍生硬な漢文直譯體ではあるが、亡國の志士を拉し來つて巧に悲壯美を表し當時多大の賞讃を得た。或は言ふ。これは他に代作者がある。

ると）後年大橋乙羽が「累卵之東洋」に脈を曳いてゐる作品である。

とうがい 伊藤東涯 二三三〇―二三九六、寛文一〇―元文元、六十七歳

古學先生伊藤仁齋の長子で、父の學風を守つて名教に心を注ぎ、經義第一、詩文餘事を標榜し、温厚篤實、博聞強記、自ら諡して「紹述先生」と謂ふ。蓋し最も好適の稱號である。その著約四十種、古今學變・用字格・助字考・作文眞訣・操觚字訣・學問關鍵・東涯漫筆・制度通・東涯談叢・東涯詩話・文集・詩集等何れも有益の文字である。

とうかいだうちうひさくりげ 東海道中 藤栗毛 十五卷

十返舎一九が滑稽本の傑作で、その初篇は享和二年（二四六一）に出で一篇出づる毎に洛陽の紙價を高からしめた。主人公彌次郎兵衛喜多八といふ氣まぐれもの、江戸から大阪までの紀行を綴つたもので、在來の狂言その他の滑稽の趣向をも同化し到る處滑稽を演ずるやうに寫されてある（椀屋の單行本、帝文九・饗庭篁村校訂文藝叢書、第四卷、博文館・大川屋商店・松陽堂本・有朋堂文庫本・幸田露伴氏校訂大盛堂發行・三田

村高魚氏 東海道中 藤栗毛輪講 二、駿遠之卷 大阪屋號。

とうかいだうめいしよき 東海道名所記 六卷

淺井了意の著、江戸から京都までの紀行で沿道の風俗景色等を滑稽的に寫す（後の藤栗毛の先蹤とも謂ふべきもの。内藤恥叟、小宮山綏介二氏近古文藝温知叢書第一編に入る）

とうくわんきから 東關紀行 一卷

仁治三年（一九〇二）秋八月中旬都を立つて十餘月を経て鎌倉に下つた紀行で、文體は駢儷體の和漢混淆文で處々記事の不精確や修辭の拙劣な點はあるが、海道記と共に當期新興文學の一種として注目すべきもので、本文中隨所に出てくる佛典と古歌と古傳説とは作者の地位も教養も相當であつたことを想はせる。著者は古く鴨長明とも云ひ、源親行とも云ひ、夫木集光行の歌として出てゐるものがあるところから或は光行であらうとも云ひ、否なこれ等三家の外に別に作者があつたのだらうとも謂つて定まらない（これ等のことについては鳥野幸次氏の東關紀行詳解の卷末や野村八良氏鎌倉時代文學新論に詳論してある）本文は群二三一、扶桑拾葉集一一、國文大觀七などに入る（鳥野幸次氏東

關紀行詳論、明治書院・吉川秀雄氏新東關紀行精解 精文館・島中龜之助、辻橋文吉二氏、東關紀行註釋 誠之堂）

とうくわばら 東華坊 しかう「支考」を見よ。

とうこ 藤田東湖 二四六六―二五一五、文化三―安政二、一一、五十歳

水戸藩の儒者岡谷の子、名は彪、主君徳川齊昭を輔けて君臣水魚の知遇濃やかに、相共に大義名分を明らかにし、尊皇勤王の藩風を養成することに努めた。その著弘道館述義・謫居詩存・回天詩史・正氣歌皆名教の好資料であり、諷誦の裡士氣を鼓舞するものがある。その書亦その人格を表して端嚴にして生氣あり、水戸風と云ふ特殊の地方色を作つた先覺者の一人である。

とうこく 北村透谷 明治元―明治二七、五、一六、廿七歳

相模の人、名は門太郎、寂しい家庭に育つて數寄屋橋の泰明小學校を卒業（透谷の號はスキヤから出たもの）十五年岡千仞の塾に入り、十六年三月東京專門學校に入り、始め政治に志したが性格と境遇とは遂に文壇の人とならしめ、廿六年一月雜誌「文學界」を創刊して文



境に大きな波瀾を上げた。一體が詩人肌の人で、「蝶のゆくへ」「蓬萊の曲」など名什が多い。而かも生活の脅威は屢々不本意な筆を執らせ、極度の神経衰弱の爲め發作的に病室を出て庭の樹に縊れ死んだことは先驅者の悲哀をしみく痛感せしめる(透谷全集二冊)

とうこくぜんしふ 透谷全集 二冊

北村透谷の廿五歳から廿六歳までの論議・時評・美文・韻文・小説・斷篇類・劇曲・日記とあらゆる執筆に係るものを逆叙的に排列したもので、これ以外透谷の筆を執つたのは唯一つ「エマアソン」があるだけで透谷研究の上には是非見るべき良書である。編者は故人生前の親友たる星野天知・島崎藤村・平田禿木・戸川秋骨の四人で、巻頭各自の序及び星野氏の跋も参考資料になる(四六判、七九八頁、大正三年十月廿日、松榮堂)

とうさいあんなんぼく 東西庵南北?!

二四八七、?—文政一〇、?歳

通稱朝倉藤八(或は力藏)芝の金杉町で彫刻を本業にし、旁ら浮世繪を能くし文化より以來數多の草雙紙を出したが、多くは贋案で學問文藻二つながら缺け新味に乏しいものであつた。けれどもその作六十餘種之多

數に上り當時遍く世に知られて居つた(双木園主人、戯曲小説通志四四二—四四四)

とうさいずるひつ 東齋隨筆 三卷

我邦で「隨筆」と標榜するものの始めだといふ。一條兼良が和漢の辭書を涉獵中抄出したもの。音楽・草木・鳥獸・人事・詩歌・政道・佛法・神道・禮儀・好色・興遊の各類に分つて抄出してある(群四八八、一七、七二〇—七四六)

とうさいゆうき 東西遊記 二十卷

橋南翁が醫學修業の爲め四方に旅行した時の紀行で、國々の奇觀異聞・孝子忠僕的美譚・人情風俗の差別・氣候産物の巨細に至るまで平明簡潔なる和漢混淆文體を以て記したもの。東西遊記前編十卷は寛政七年(二四五五)に、東遊記續篇五卷は同九年に、西遊記續篇五卷同十年に刊行せられた。近頃有朋堂文庫その他に收められ盛に愛讀せられて居る。

とうさく 平秩東作 ?—二四四九、?—

寛政元、

又近松東家とも云ふ。江戸狂歌界の先輩である。通稱を稻毛屋金右衛門と謂つて江戸で煙草屋を營んで居たが、元來學問好きで、始め漢學を以て世に立たうとし

たが、うまく行かず、そこで狂歌に不平を紛らし一世を茶氣でこまかした。その門下に唐衣橋洲・四方赤良などが出て、やがて江戸狂歌の全盛時代となつた。

何某侯の城下を過ぎて

御城下の月見て罷通るなりせめて枝豆丹羽左京

殿

竹馬行列

乳母がもち五ツだちなる行列は日も竹馬の伏見

泊りか

越後のしらが海苔を囉て

とし波もよりくる濱のしらが海苔磯菜とや言は

んおきなとや言はん

どうじくん 童子訓 五卷

貝原益軒の著「窮郷村童の師なく學なきもの」の啓蒙と徳性涵養に資せんが爲め、平易な和文で書いたもの今益軒全集卷三に入る。

とうそん 島崎藤村 明治五、二、一七、一

信州筑摩郡神坂村の人。明治學院を廿六年に卒業して「文學界」同人に加はり、二十九年頃若菜集・夏草・落梅集を出して詩壇の第一人者となり、爾後暫らく文壇を去つて明治女學校や、小諸義塾に教鞭を執り、三十四

年頃苦心の長篇「破戒」を作り、さる富豪の補助で自費出版した。折しも自然主義文學主潮と合致するものがあつて多大の歡迎を受け「春」家」を續いて出し、爾來小説界第一流の作家として今日に及んで居る。大正二年の末渡佛して歐洲戰爭に遇ひ、種々苦楚をなめつつ佛蘭西だより・巴里だよりを寄せ、歸來長篇「新生」二巻を出し「エトランゼ」に異國情調を盛り、幼き者に・故郷など児童文學の清新なものを提供し、現に昨大正十五年の如きも小説中の最大收穫ともいふべきは氏の「嵐」と秋聲氏の「もとの枝に」とだともて稱讃され、生命の長い作家である。

とうじゆ 中江藤樹 二二六三—二三〇八、慶

長一三一慶安元、八、二五、四十一歳

近江國高島郡小川村の農、吉次の子、祖父吉長(大洲の藩士)に養はれた。名は原、字は雅命、通稱は與右衛門、彼幼にして敏慧、書を能くしいつも祖父の代筆をして心を聖經に注ぎ、二十七歳(寛永十一年)老母に孝養を盡さうといふので藩主の許しのないのに強ひて挂冠して歸國し、それより心ゆくばかり老母をいとほしみ、益々經學に専念し、三十七歳陽明全書を讀むや

うになつてから従来の程朱の學を去つて専ら陽明學を奉じ、實踐射行を旨とし一郷一村一郡一國と次第に徳化を及ぼし近江聖人の名海内に洽く、熊澤蕃山の如き遙々笈を負うて來訪し熱心教を乞ふに至つた。

小川村の東北玉林寺(徳本堂又は藤樹書院)の舊址は今も祭祀の香華を絶たず、旅行く人も憩々杖を留めて敬意を表しつゝある。藤樹の如きは蓋し村夫子中最も偉大なるものである。その著約二十種、翁問答・藤樹先生家集・藤樹文録・大學啓蒙・孝經啓蒙等名高い(これ等の多くは、岡田季誠の藤樹先生全書三十五卷に收められてある。尙萩原裕氏編鹿鳴園叢書第一集に藤樹先生年譜がある)

**とうしよ 伊藤東所** 二四〇二—二四六四、寛保二—文化元、六十三歳

名は善留、字は忠藏、大備東涯の長子、よく家學を修めて堀河學派の名聲を墮さなかつた。著書には古義鈔翼・中庸發揮抄・翼詩解・詩名物・古學十論・本實雜論・訣林・訣原助字考小解・四聲彙辨・集帖姓名・修成先生文集・同詩集等。

**とうほ 藤岡東圃** 明治三、七、一九—四三、二、三、四十一歳

に與つて力があつた。東野遺稿三卷、上は諸體の詩百四十餘首・中は序八、記六、下は論說三、説啓各一編づゝ入つて居る。

**とうやしうききがき 東野州聞書** 一卷

東常縁、文安寶徳の頃の執筆に係り、和歌について當時の名家の談話や逸事や自分の考へを書いた歌話の隨筆。尙つれより「東常縁」を見よ。

**とうり 中根東里** 二三五四—二四二五、元祿七—明和二、七、七十二歳

伊豆下田の人、名は若思、字は敬夫、通稱貞右衛門。幼くして父に訣れ出家して郷里の一禪院に入り、ついで宇治黄檗山の悦山禪師に學び後又江戸の下谷の蓮光寺に入り徂徠の門に古文辭學を修めたが段々疑ひを懐いて室鳩巢に師を替へ、やがて帷を垂れて講説したが諸家と争論するを好まず、家で竹の皮の草履をつくり少し貯へを得れば戸を閉ぢて讀書したので時の人呼んで「竹履先生」といふ。延享中下野國天明に移り、志を離して陽明學を唱へた。その臨終の地は浦賀である。著書に東里遺稿・親瓦などがある。

**とうり 伊藤東里** 二四一七—二四七七、寶曆七—文化一四、六十一歳

金澤の人、名は作太郎、廿七年東大國文科を卒業し、三十九年文學博士の學位を授けられた。温厚篤學、宿痼の喘息に苦しめられつゝ、もせつゝと研究をつづけた。國文學全史平安朝篇・國文學史講話・近代小説史はその力作で、又美術の鑑識に長じ、近世繪畫史は今もその道の好資料となつて居る。尙又外國文學や現代文學にまで目を通し、三十九年頃には堂々たる新體詩論を發表した(東圃遺稿)

**とうやしう 東野州** つれより「東常縁」を見よ。

**どうぶんつうから 同文通考** 四卷

新井白石の著、和漢の文字論で、神代文字や片假名・伊呂波・新字等の論も其門にある(國書刊行會第一期新井白石全集四)

**とうや 安藤東野** 二三四三—二三七九、天和三—享保四、四、三十七歳

名は煥圖、字は東壁、通稱は仁右衛門、下野那須郡に生れたので世間で東野先生と稱した。家は醫師であつたが、幼にして父を亡ひ、江戸へ來て中野搦謙・物徂徠に就て儒學を修め、又詩文音律に長じた。徂徠が古文辭を唱へてからは彼は門人中の巨擘として之が宣傳

名は弘美、字は延藏、大備東涯の第二子で兄東所の世嗣となつた。その著に恭敬先生詩文集がある。

**とうりさんじん 東里山人** 二四四六—二五一九、—安政六、九、七十四歳

近世江戸の戯作者、本姓は細川氏で通稱は浪二郎、號は九陽亭とも鼻山人とも云ふ。麻布三軒家に住んで幕府の家人であつたが、人となり放縱にして家事を顧みず、京傳の門に入つて戯作に従事し、年々の執筆七十種近くで、その中出世作は「娼妓美談鐘の花」「契情肝粒志」の二書である。何れも洒落本より人情本に轉化する過渡的的代表作で、爲永春水の先驅をなす瀧浪の小冊子であるが時の聲價を高めた。晩年所々に流浪し、芝切通しに卜居して奇方抄術などを傳授して僅かに身過ぎを營み、後又四日市の店に移つた。

**ときなが 葉室時長?**

鎌倉時代の人なること、地位は従四位大納言であつたこと、平家物語・源平盛衰記・保元物語・平治物語の著者に擬せられてゐる人であるといふこと以外何等纏つた傳記がない。その系圖の如きも尊卑分脈と柳菴隨筆と別々になつてゐる(山田孝雄氏平家物語につきての研究前編五七三—五七八)

ときはづぶし 常磐津節

京都の人文太夫(二三六九—二四四一)がその師宮古路豊後掾と共に東下し、豊後節禁制の後に一派を立てた歌淨瑠璃の一種で、始めは義太夫風の語り物を用ひたが次第に江戸歌舞伎に和合して所作事の地に缺くべからざるものとなつた。蓋しその曲節が時好に投じて居る上に、拍子が明かで踊に適してゐたからであらうといふ。その曲の現存するもの祝言物・道行物・踊物・段物を通じて百四五十番、關扉や戻橋や葱賣は殊に名高い(高野辰之氏日本歌謠史九八二—九九七)

ときぶみ 紀時文?

貫之の子で村上の朝に仕へて内藏助をつとめ、梨壺の五人の内に加へられ萬葉の古點を入れ、天曆五年には後撰集勅撰の撰者の一人にも加へられてゐるが傳記は不明。歌は後拾遺・續後撰・續古今などに散見してゐる。

どくぎん 獨吟

一作者の單獨に行つた連歌又は俳諧をいふ。例、荒木田守武の獨吟千句。

どくぎんせんく 獨吟千句 (守武千句)

荒木田守武天文九年(二二〇〇)の著。彼が獨吟(獨して俳諧した)の千句を記す。本邦俳諧史上「獨吟千句」

のはじめと謂はれ、最もよく彼が俳風を示して後來の蕪風と一脉相通うた句振を示してゐる。

飛梅やかうくしくも神の春

われもくくからすうぐひす

のどかなる風ふくろうに山見えて

めもとすさまじ月のころかけ

が巻頭である(俳文三、芭蕉以前俳諧集の内)

どくげん 齋藤徳元 二二一九—二三〇七、永

祿二—正保四、八、二二、八十九歳

徳川初期の俳人、名は利起、通稱齋宮、帆亭と號して岐阜の城主織田秀信(信長の孫)に仕へたが關ヶ原の役に主君は三成方であつたので、彼は連れて江戸に出て和歌指南をし、更に京に上つて貞徳の門に入り又江戸に歸り、次いで若州小濱に移り又丹後に移つた。その著に俳諧初學抄・帆亭千句などがある。

どくご 獨語 一卷

太宰春臺の隨筆、和歌・茶道・俳諧・三絃・淨瑠璃・猿樂・俳優・歌舞風俗等の事を論辯し明確なる和漢混淆文で表はされてゐる(百説一)

どくご 獨語

謠曲・狂言・淨瑠璃・脚本等に於て地の文でも對話でも

なく、人物自ら己れの意向感情開歴について表白する語をいふ。又獨自とも云ひ英のモノログ「Monologue」に當る。

とくさう 近松徳三 二四一四—二四七〇、寶

曆四—文化七、八、二六、五十七歳

大阪、坂町大榭屋勝右衛門と云ふ娼樓の息子、夙に近松半二の教を受けて司馬徳叟、芝屋徳叟など示ひ又雅亮とも號した。彼の作にかゝる戯曲は少いが皆好評であつた。箱根靈驗壁仇討・花上野譽の碑・敵討優曇華龜山・唐錦艶書合などがそれで外に、太平鳴戸の船諷と云ふのもある。生寫朝顔日記の原始的な草案も彼の作で、熊澤蕃山の今様「露の干ぬ間」をうまく翻案したものである(戯曲作者に近松を名のるものが澤山あるが、先づは門左衛門を大近松、半二を中近松、徳叟を小近松と云ふが適當であらう)

どくしよろん 讀史餘論 十二卷三冊

新井白石が正徳二年(二三七二)春夏の間將軍に進講した史論の稿本で、國史の中甘餘項について評論したものである。文體明暢・立論正確を以て稱せられ、當期和漢混淆文中出色の作である。享保八年(二三八三)十一月十一日の自記及び同九年(二三八四)の漢文の自跋がそへ

である(國書刊行會第一期本、新井白石全集三)

どくほ 國木田獨歩 明治四、七、一五—四一、

六、二三、三十八歳

下總國銚子に生れ、二十年東京專門學校英語政治科に入り、廿二年植村正久氏によつて洗禮を受け、同年友人數氏と共に青年文學を發行し、廿六年九月矢野龍溪氏の推薦で豊後佐伯鶴谷學館教頭となり、翌年九月國民新聞に入社、同十月千代田艦に乗り組んで日清の戦役に従軍、爾來傳奇的な開歴を経てとにかく事業には失敗し作家としてはその眞價を認められない中に夭折したが、今日では氏の作品は年毎により高く評價せられ獨歩集・武藏野・渚・濤聲などは幾回か重版して居る。蓋し氏の作は餘りに時世に先んじ過ぎたもので、それだけ氏の天才的な處が知られる「欺かざるの記」はその内面生活の披瀝で氏が如何にシンセリテイを理想として精進したかがわかるし、愛弟通信を見ると友愛の情誼如何にもあた、かで、人間味の横溢を覺える(文豪國木田獨歩、獨歩全集二冊)

どくほく 平田禿木 明治七一

東京の人、高師の英語專修科を出て英のオックスフォード大學に入り、歸來英文學の著譯に従事、又若い時

は透谷等と共に「文學界」の運動につとめた。

とさにつぎ 土佐日記

紀貫之が土佐の國守の任満ちて歸京の途についた紀行で、我邦國文の紀行の嚆矢である。承平四年（一五九四）十二月廿一日に土佐の國府を立つて翌年二月十五日に京に着いて居る。之についてはかつて拙著口譯土佐日記の巻頭に述べたこともあるし、又何にでもよく出てゐることだから省く。唯註釋として岸由豆流の著を故鈴木弘恭大人が校訂せられた土佐日記考證が善本であること、つい一昨年高知高等學校の新築落成記念として頒たれた土佐日記は別に新しいものではないが流布本としては本文の校正が嚴正であることを附言する。

としごひのまつり 祈年祭

毎年二月四日（今の曆に八十八夜とある種蒔きの季節）天皇の御宅田より始めて人民の耕作する年穀を豊かにらしめんことを廣く天神地祇三千一百三十二座に祈らせらるゝ祭祀で、中祀の一つでもあり、四事祭（神嘗祭・新嘗祭・賀茂祭）の一つでもあり、朝廷では重要な年中行事の一つである。その起源は遠く高千穂の宮の頃にあり、ついで

天武天皇の四年二月十日

天武天皇の大寶三年二月十三日

仁明天皇の承和九年二月四日（祭式この頃より確定したるものか？）

清和天皇の貞觀九年二月四日

之を行はせられた記録があり、儀式次第は貞觀式に委しく見えて居る。

二、祈年祭の時に誦讀する祝詞のことで、祝詞文中の優秀な作品の一つと謂はれてゐる。眞淵の考證によるまこれは奈良初期に作られたものだといふ。さる明確な時代を指定することは出来ないにしても、何さま祝詞中でも古めかしいもの一つであらうことは確かである。その文段は略左の通りである。

一、冒頭

二、神祇官祭神八座―造化の神 創造の神 侍御の神

三、座摩祭神五座―井戸ノ神御薪木ノ神 竈神

四、御門祭祭神二座―磐門別命

五、生島祭祭神二座―大國主命

六、伊勢大神宮一座―大日靈尊

七、御縣祭神六座―豐受比賣神

八、山ノ口ニ座ス神六座―くらなかみの神

九、水分ノ神四座―速開都比咩神

一〇、附言

としなり 藤原俊成

しゆんぜい「藤原俊成」を見よ。

としぶんしふ 都氏文集

平安朝の學者都良香（一五〇四―一五三九）の文集で、現存するものは三、四、五の三巻だけである（群一二九、六、七七四―八〇四）

としゆき 藤原敏行 ?―一五六七、?―

延喜七。 ?―一五六一、?―昌泰四、

王朝歌人として喜撰や康秀以上譽る彼こそ六歌仙の中にも入るべき秀味の多くを遺した人だが傳記は不詳である。唯清和・陽成・光孝・宇多・醍醐の五朝に仕へた人であること、父は奥陸出羽按察使藤原富士麻呂であつたこと、地位は醍醐天皇の御代、近衛中將藏人頭を経て従四位上右兵衛督に至つたこと、それから大變能書家であつたことなどがわかつて居る。歌は古今（一八）後撰（三）續古今・玉葉・續千載・新千載・新後拾遺等に入り、家集に敏行朝臣集一卷がある（群二四八、九、五八二、歌仙歌集（續國四三五―四三七））彼が書に巧であつたことは、村上天皇が嘗て小野道風

に「古來書道の名手は誰か」と御聞きになつた時「空海と敏行」とお答へしたことや、高雄神護寺の鐘銘を書いて三絶の譽をとつたこと（銘文は菅原是善の作、序は廣相の作、文字は敏行の書）でもわかる（今昔物語巻十四には彼が精進潔齋もしないで法華經を寫したので死んでから地獄に墮ちたといふ俗説を載せてゐる）彼は業平の姻戚で義理の明に當る（紀有常の姉妹業平の室、妹娘敏行の母）その歌も亦業平の風に模したものがあつた。

秋立日

秋きぬと目にはさやかに見えれども風の音にぞ

おどろかれぬる

寛平の御時菊の花をよませ給ふに

久方の雲の上にて見る菊は天つ星とそあやまた

れける

住の江の岸のよるなみよるさへや夢の通ひ路人

目よくらむ

寛平御時殿上人におほみきなど給はせて

御あそびせさせ給ひけるに

老ぬ連などで我みをせめきけんおいすばけふに

あはまし物か

賀茂の臨時のまつりにうたふべき哥とめし  
しに

千はやふるかもの社の姫小松よろづよまでも色  
はかはらじ

これさだのみこの家の哥合によめる

しら露の色はひとつをいかにして秋の山べをち  
ぢにそむらん

としゆきしふ 敏行集

としゆき「藤原敏行」を見よ。

としより 源俊頼?

經信の子、堀河・鳥羽・崇徳の諸朝に仕へ、左近衛少將・木工権頭・左京権大夫等に歴任、性質温厚にして一代の歌範と仰がれ、白河院の勅を奉じて金葉集を撰び、歌は金葉(三〇餘)・詞華(一〇餘)・千載(五〇餘)その他歴代の集に採られ、家集に散木奇歌集十卷(群書一覽卷四、六九丁、群二五四、九、七三九―八一六)がある。量も多く質も新奇な趣に富んで居る。唯少しく奇矯に失して殊更らしい。用語や着想の交つてゐるのが缺點だと謂はれてゐる。彼の歌風は彼の人となりとは正反對に清新の趣致があり生彩に富んだもので歌風だけについて云へば彼と其俊との對照は曾根好忠と藤原公任との

對照によく似てゐる。この歌風は千載にも入り流れて鎌倉時代の歌風をも基調づけた。今その清新な歌態例をあげると、

木枯の雲吹き拂ふ高嶺よりさえても月の澄み上る哉

白河の春の木末を見渡せば松こそ花の絶間なりけれ

明日も來む野路の玉川萩こえて色なる波に月宿りけり

風吹けば蓮の浮葉に水こえて涼しくなりぬ茅蜩の聲

鶉鳴くまのの入江の濱風に尾花浪よる秋のゆふぐれ

山櫻咲きそめしより久方の雲ゐにかゝる瀧の白絲

夕まぐれ戀しき風に驚けば萩の葉そよぐ秋にはあらずや

夕されば萩女郎花なびかしてやさしの野邊の風の景色や

紫陽花の花の四ひらにもる月を影もさながら折る身ともがな

その奇矯に失する例歌は、

これ聞かむこせのさ山の杉の梢に雨もしみ、にくきら鳴くなり(「くきら」はほととぎすのこと)

信濃なる木曾路の櫻さきにけり風のはふりよすきまあらずな

彼の判者として判を下したものは、

一、長治元年俊忠朝臣家歌合判

二、天仁二年師時郷家歌合判

三、元永元年内大臣家歌合判

四、保安元年無動寺歌合判

五、大治三年永縁奈良房歌合判

などである。

又彼の著と謂はる、歌論の書に莫傳抄一卷(古語深秘抄)無名抄二卷(山木髓腦とも云ふ、五家髓腦の一つ)俊頼口傳(國刊一期續々群一五、俊頼口傳集二卷)等があるが果して彼の作か疑はしい。

とつびやくみん 十百韻

連歌俳諧に於て百韻十、をいふ。つまり「千句」といふに同じ。

とろろ 都々逸

徳川期の末、都々逸坊扇歌の始めた俗謡の曲節又はそ

の歌詞をいふ。七七五の廿六音歌で坊間男女の口々に愛誦する所となり、現代に入つてもこの音律が俚謡の正調たるかの觀がある(今日情歌といふもの即ちこの系統である)

例、荒い風にもあてまい様をやるか信濃の雪國へいたこ出島のまこもの中にあやめ咲くとほしほらしや

とねりしんわう 舍人親王 一三三六一―一三九五、天武四―天平七、一一、一四、六十歳

天武天皇第三の御子で、御母は新田部の皇女、文武・元明・元正・聖武の四朝に仕へ、歌文をよくし殊に修史の事業に功績が多かつた。その官歴は、

一、持統九、正、一 淨廣式

二、慶雲元、正、二品(此より先)二百戸封を益さる

三、養老二、正、一品

四、同三、一〇、内舍人二人、大舍人四人、衛士三十人を賜ひ、封を増して二千戸とせらる。

五、同四、二、兼れて勅を奉じて編輯中の日本書紀成る

六、同四、八、知太政官事

七、神龜元、二、封を益さるゝこと五百戸

八、天平七、一一、一四、薨去、太政大臣を贈られ第  
について宣命を賜はる。

九、寶字三、六、諡號を「崇道盡敬皇帝」と賜ふ。

御歌は萬葉の二、九、二十各卷に散見し、別に藥師寺塔  
擦銘があつて集古十種や古京遺文に收められてゐる。

**とはすがたり** 一卷

中井楚庵(誠之)享保十三年(二三八八)の作。自己の見  
聞所感を和漢混淆文に綴つた隨筆、寛政三年(二四五  
一)著者の子積善が跋と楚庵の傳をなつて刊行した。  
今温知叢書第六編に入る。

**とほりん系** 遠輪廻

連俳禁條の一つ、連句に於て前に出た句とよく似た心  
の附句をすることをいふ。

例へば一度花の句に風又は露の句を連れ、又同座で再  
び風又は露の句を連れることで、連句上忌むべきこと  
となつて居る。

**とほる** 源融

「河原左大臣」に同じ、その項を見よ。

**とみもとぶし** 富元節

初代常磐津文字太夫の門人小文字太夫(福田彈治)が寛  
延元年(二四〇八)分離して一派を立てた歌淨瑠璃の一

つで、文化から天保頃まで約四十年歌舞伎にも出入し  
て常磐津と相拮抗して居つたが、何分にも稽古がむつ  
かしいのでその後だん／＼下火になつた。この節の特  
徴は常磐津よりもはでで、歌の文句がはつきりと聴き  
分けられ、歌詞は一層世話にくだけ、その着想は遊里趣  
味中心の傾があつた。語り物は約五百篇矢張常磐津同  
様祝言物・道行物・踊物・段物の別があつた。座敷淨瑠璃  
としては歳朝嘉例壽(長生)が繰返され淺間・高尾懺悔・  
忠信なども亦名曲としてはやされる(高野辰之氏  
日本歌謡史九九七—一〇〇三)

**とも** 供

能狂言に於てシテ、ツレ等の従者をいふ。  
例「土蜘蛛」のトモはツレの頼光の従者。

**ともいへ** 藤原知家 一八四二—?、壽永元—?

鎌倉初期の歌人、順徳より四條の御代まで仕へて歴仁  
元年(一八九八)五十七歳で病氣の爲めに出家し連性を  
號した。歌は新勅撰(一二)・續後撰(一七)・續古今(二  
九)・續拾遺(一六)等に入り、別に知家卿二十一番自  
歌合(嘉禎元年十二月廿四日、日吉社歌合とも九條三位  
入道知家自歌合ともいふ。群二一八、八、一〇六七—  
〇七〇)がある。

**ともきよ** 小山田與清 高田與清 二四

四三—二五〇七、天明三—弘化四、六十五歳

武藏國多摩郡小山田村の人、後に江戸の豪商高田家の  
養子となり、國文を村田春海に、漢學を古屋普陽に學び  
晝夜寢食を忘れて勉學し廣く和漢の古今に通じて名聲  
次第に高く、文政十一年には召されて華頂宮に仕へ、つ  
いで水戸侯齊昭に知られ、その命によつて八洲文藻を  
撰び、又御臺所の御内意によつて扶桑拾葉集の註釋を  
作る。弘化二年九月病篤くなつて、家藏二萬餘卷を水戸  
侯に献じ間もなく逝いた。今の元文部大臣高田早苗氏  
はその曾孫に當る。

著書と別號の多いことも驚くばかりである。著書は百  
二十餘種、

和文、相馬日記・鹿島日記・玉川紀行

隨筆、松の落葉・松屋叢話

歌學、俳諧歌論・歴史歌考・歌蘆論

註解、十六夜日記殘月抄・竺志船物語旁註

その他は何々考と題するものが多く、金毘羅考神祇稱  
呼考・雅言考・鄙言考・粥飯考・都鳥考・女去眉考・男  
子鬘髮考等題目を見ても考證家の好奇心を惹きさうな  
ものばかりである。彼れ通稱は六郎左衛門、字は文備、

家の名は松の屋・知非齋・樂山堂・玉河亭・書庫を擁書  
倉・報恩舎・報國恩舎などいつた。

**よのこ** 鶉殿餘野子 二三八九—二四四八、享

保一四—天明八、六十歳

幕府の士左膳孟一の妹で、縣門三才女の一人、兄は服  
部南郭の弟子であつたので彼女は又兄に學んで漢詩を  
も能くし、縣門に入つてからは旨として萬葉振に古今  
集初期の歌ぶりを加味した點を目標にした。出でて紀  
伊侯に仕へて瀬川さよげれ、後仕を退き出家して涼月  
院と謂つた。家集には佐保川・涼月遺草等がある。  
長らへてことしの空の月もみつ又こん秋は命な  
りけり

かきそへてやりやしなまし我もしか言よきに、  
そはかられてしな

**ともただ** 藤原朝忠 一五六九—一六二六、延

喜九—康保三、五十八歳

三條右大臣定方の男、村上天皇の御代に仕へ從三位中  
納言に至る。世に土御門中納言と稱す。歌は後撰以下  
の諸勅撰並に三十六人撰などに出てゐる又家集を權中  
納言朝忠卿集(群二三五、九、一七五—一七七、續國五  
三一—五三四)といふ。

ともつな 大江朝綱 一五四六—一六一七、仁

和一一—天徳元、七十二歳  
玉淵の子、村上の朝の漢學者で又漢詩文を能くした。地位は正四位ノ下參議に至り世に後江相公と云ふ。その詩文は本朝文粹や和漢朗詠集に散見し一般に愛誦せる句も尠くない。

夏夜於鴻臚館<sup>二</sup>餞<sup>三</sup>北客<sup>一</sup>序

前途程遠、馳<sup>二</sup>思於雁山之暮雲<sup>一</sup>。後會期遙、露<sup>二</sup>纓於鴻臚之曉淚<sup>一</sup>。(本朝文粹卷九、和漢朗詠集雜)

内宴詩序

果則上林苑之所<sup>レ</sup>賦、含自消。酒是下若村之所<sup>レ</sup>傳、傾甚美(本朝文粹卷十一、和漢朗詠集雜)

ともり 八田知紀 二四五九—二五三三、寛

政九—明治六、七十五歳

鹿兒島藩士で京都の留守居役を勤め、後近衛家の貞姫に仕へ、明治に入つてからは宮内省歌道御用係を拜命し、その弟子に高崎正風・黒田清綱などがあつて、彼は徳川時代の桂園派を明治時代の宮中に移した中繼役となつた。

彼が景樹と相知つたのは文政九年で、入門したのは天保元年のこゝで桂園門下としては後進だがその歌才は

直好幸文等と相並んで稱せられた。

歌學の著には調の直路・千代の古道・古今正義總論補註論等があり、家集にはしのぶぐさ・桃岡集がある。又別に都城にさすらへて居た時の詠草を集めた都鳥集もある。彼の門弟中沖繩の人宜野灣朝保といふのがあつて、實に彼は桂園の歌風を上は宮廷から下は琉球のはてまでもひろめた人であつた。今この翁の上述諸歌集を見るには令孫理學博士八田三郎氏の出版に係る鎌田正夫・金丸俊胤共編八田知紀歌集がよろしい。

よしの山霞のおくはしられども見ゆるかぎりは櫻なりけり

大比叡やなびえの雲を踏分けて横川の奥の花を見しかな

うつせみの吾世の限見るべきは嵐の山のさくらなりけり

播磨湯明石の門なみ月てりて夜船うれしき旅にもあるかな

村鳥の梢はなるゝ心地して有明の月に散る木の葉哉

大船の帆かげの上に出でにけり鹿島の海の秋の夜の月

ともり 紀友則 一五〇五—一五六五、承和

一一—延喜五、六十一歳

宮内權少輔紀有友が男で紀貫之の甥に當るとも又從兄弟に當るとも云ふ。宇多・醍醐の朝に仕へ、寛平九年土佐掾、同十年少内記、延喜四年六位大内記。その時貫之等と勅を奉じて古今集を撰んだ。彼自身の歌は小貫之とも謂ふべく典雅優麗・繊細巧緻の四語を以て形容し盡されるやうなもので、古今集を代表する歌人と謂つてよろしからう。古今(約五〇)後撰(九)拾遺・續古今・玉葉・續千載・續後拾遺・新千載・新拾遺・三十六人撰等に入り、家集に紀友則集一卷がある(群二四八、九、五八九—五九一)

歌仙歌集一二(續國五三六一—五三八)

ひさかたのひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

夕されば佐保の河原の川霧に友まどはせる千鳥鳴くなり

飛び通ふ鶯鶯の羽風の寒ければ池の水ぞさえまさりける

ゆきふれば木ごとに花ぞさきにけるいづれを梅とわきて折らまし

秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらにならむ

宵のまもはかなく見ゆる夏蟲にまどひまされる戀もするかな

笹の葉におく霜よりもひとり寝る我衣手ぞさえまさりける

ともりしふ 友則集

ともり「紀友則」を見よ。

ともひらしんわら 具平親王(後中書王・

千種・六條宮)一六二四—一六六九、康保元—寛弘六、四十六歳

村上天皇の御子で中務卿に任ぜられ(中務卿の唐名中書王で前に醍醐天皇の御子兼明親王も中務卿であつたから之を前中書王と申し、之と相對して具平親王を後中書王と申し上げる)歌も詩も文もよくせられ、御歌は千載(四)・新古今(八)・玉葉(七)その他勅撰集に入り、詩文(讚)は本朝麗藻・本朝文粹・類聚句題抄等に入る。六帖三卷弘訣外典録の著があり、眞名伊勢物語二卷金玉積傳集二卷の著者に擬せられて居る。

とよかい 本居豊頼 天保五—大正二、二、一五、

八十歳

寛長の孫、内遠の子、母藤子は賢夫人で其感化によつて立派に家學を繼承した。明治二年後諸種の官職を経て東京女子高師教授・二十九年東宮侍講・三十年御歌所寄人・三十三年東宮帝大講師・三十九年帝國學士會員・四十年東宮侍講職高等官一等・四十一年富美宮泰宮御用掛・四十二年文學博士正三位勳二等に次々任ぜられ、その門下には萩野由之・松本愛重・關根正直等多くの名家を出して、國文に關する著も少くない。

**とよたけぎ 豊竹座**

元祿十五年(二二六二)豊竹若太夫が建てた操り劇場である。若太夫はもと義太夫の弟子で竹本座にかゝつて居たが性來の音聲頗る美妙、加ふるに經營の才があつて機を見て一座をたてようとの野心勃々たる折柄、元祿十二年擧つて安藝の宮島參りをした。その留守に居残つて紀海音を語らうて「傾城懷子」の新作を乞ひ、之を旗あげの抑々として遂に一座を建て、海音を座附作者に聘し語り手も彈き手も作者も設備も竹本座の向ふを張つて一同が大車輪になつて奮闘した。豊竹座の位置は竹本座と川(道頓堀)一つへだてて西の櫓(竹本)東の櫓(豊竹)と呼ばれ、兩々相對して觀客の視聽を集め

た有様は實に浪華藝壇の偉觀であつた。作品の上でいふと左の對偶は皆互に相拮抗したものであつた。

竹本座 近松 十二段長生島臺・會根崎心中・用明天皇職人鑑・梅川忠兵衛冥途飛脚  
豊竹座 海音 末廣十二段・新版歌祭文・播州會根松・油屋お染袂白絞

(新群類從第六竹豊故事「竹本座」を見よ)

**とよとし 賀陽豊年** 一四一一—一四七五、天

平・勝寶三—弘仁六、

桓武・平城・嵯峨の三朝に歴仕し、東宮學士・式部大輔・播磨守等に任ぜられたが、病氣の爲めに辭職し、宇治に閑栖して靜に餘生を送つた。一世の儒者として詩人として重きをおかれた。詩は「凌雲集」「經國集」等に出てる。

**とりかへばやものがたり 取替婆哉物語**

四卷

權大納言に男女二子あり、男は女の如く、女は男の如きより親は「とりかへばや」と思はれた。そこで調度服装何くれ男女をとりかへて育てた處、男は宮仕へして宣耀殿の女御となり、女は累進して中納言となり、男女の性に眼ざめるにつれて色々のまぢがひが起きて、

とどもさもとの性にかへるといふ筋で、作者も年代も不明であるが、構想と行文とから察して源氏狭衣より以後のもので定家の明月記に引かれてあるところから推して鎌倉時代より以前のもので結局王朝末期の作であらうと謂はれてゐる。そして多くの學者この物語に新古二通りあつて、現存するものは新とりかへばやの方であらうといふことに一致して居る。無名草子にこの兩書の併存したことを記し、大體に於て新本は古本よりも優れて居るやうに云つて居る。黒川春村翁は最初二十葉ほどは古本であるといはれたが、藤岡博士はこのことは必ずしも信ぜられないと詳論せられた。安藤爲章の年山紀聞には「作者未詳彰考館御本合冊にて四冊」とある。それについて山岡明阿がいふには、

いにしへ今の物語の歌計を集めたる書あり其の中に此のとりかへばや新舊二本の歌を擧ぐ彼の爲章のいはれしは新のかたなり歌にしてしりぬ舊本は見たりといふ人いまだきかずさだめて世に傳はらぬなるべしと。

尙その着想については藤岡博士は源氏物語模倣の跡あきらかなことを指摘せられ(全史六三四)作蓄疑は閑

田耕筆四に「草子の作意唐山の小説にあるべかしき」となり」といつて居る。つまり源氏以後物語作者の想源が潤れて強ひて怪奇の構想によつてその弱點を補けようとして彼の電氣應用十二段返しといつた風の趣向の表れそれがこの物語であるとも謂ひ得よう。

この書の善本は乏しく、文學全書第四編に入れられる時にも左の通り巻頭に斷つてある。本書はもと四卷なり寫本にて版本なし、又註釋せしものもなしたゞ小中村博士の藏本に書入本ありいまだ備はれりしものとも見えす遺憾といふべし  
尙、國文大觀三・校國一二・全譯王朝文學叢書一二などにも入る。

**とりもの 採物**

神樂を奏する時、手に物を採つて歌ふその物、並にその時の神樂歌の歌詞をいふ。採物には神・幣・杖・篠・弓・劍・鉾・杓の八種ある(尙「神樂歌」を見よ)

**とんあ 頓阿法師** 一九六一—二〇四四、正安

三一元中元、三、一三、八十四歳

近古室町時代和歌四天王の一人で、俗稱を二階堂貞宗と云ひ二條殿の末に師實と云ぶ人の子孫だと云ふ。二十四歳の時出家して叡山に入り(彼が詠に山の歌多き



所以)後高野山に登つても修業したが都に歸つてから歌名頓に高く、その方の交際と用件とに明け暮れて長い生涯を風雅に豊かに暮らした。

彼の歌論は「三十番歌合判詞」や愚問賢註(光嚴帝の仰せによつて歌道につき二條良基と問答したもの)によつて察するに、大體二條派の域内を出でず唯制の詞などは事實に於いてさう重きをおかなかつた(近來風體抄参照)當時彼は良基と相協力して二條派の勃興にとめたので冷泉派は頓に勢力が墜ちた。彼の吟んだ歌について見ると一番多いのは古歌の換骨奪胎でそれにも雅諷なものが多い。一帯に叙景に秀味が多く、純創新味のものはいくつか、あれば清新な趣致をそなへてゐる。彼は近古から近世にかけて非常に賞ばれた定家・家隆・西行と並べられその家集は直に三代集につぐべきものだとも謂はれ、彼の味に對する讃辭は生前から死後にかけて夥しいものだ。撰集としては、爲明の後を以て新拾遺の戀雜を撰んで完璧たらしめ、歌論の書には井蛙抄(續群四六二)水蛙眼目(群二九五、一〇、七八九―八〇二)があり家集には草庵集がある。(尙彼が兼好法師と親交ありしこと及び彼の趣味は古

雅を愛して華麗を厭ふたことは、徒然草に螺鈿の軸は貝がおちて古びたのが面白いと云つた記事で察せられる)

かへるかりたつをみすて、ゆくかたもなほこそかすめ春のあけぼの  
たづねこん人をぞいとふよの中を厭ふしるしの  
松たてるかと  
山ふかし松は昔の友ならでなれゆく風のおとぞ  
さびしき

(以上三首は何れも本歌どり)

流水浸雲根  
かしこきや谷に夕ある白雲の中にぞおつる木會  
の山河

旅泊雨  
あしのはに夜の雨きくみなと江のなみのまくら  
をいかであかさん

山家  
淋しさはおもひしまゝのやどながらなほき、わ  
ぶる軒の松風

曉述懐  
思ひこし身のあらましのはかなさもわがよふけ

ゆくれざめにぞしる

蒼苔満山徑

くれぬより日かげも見えずみ山木のうへはしげ  
れるこけの通ひ路

月やどる澤田のおもにふす鴨のこほりよりたつ  
明方のそら(この秀味によつて「澤田の頓阿」の稱  
を得た)

とんからほふ 頓降法

突然想詞を遙か降次の調子に變化させることによつて文に滑稽の趣致を帯びせる修辭法、蓋しこの法はその前聯の句と僅かに局部一線の契合があつて、その契合が警句法のやうな奇想天外式のものである場合に於てその効果を發揮するものである。

例「光陰矢の如し 雪隠もうたまり(川柳)  
富士の山が白くなると甘藷かうまくなる(夏目漱

とんとんばら 頓々房

ちくれい「角田竹冷」を見よ。

ナ の 部

ないよう 内容

形式の對語で、詩歌文章に歌ひ込まれ綴り込まれる人物・事象・感想・光況をいふ。

なおこ 大塚楠緒子 明治八―明治四三、一一、九、三十六歳

士佐の人、東京控訴院判事大塚正男氏の息女で、その入夫は今の大塚保治博士である。才色兼備の婦人で、殊に小説をよくし始めは紅葉の作風を好み、後に漱石に親炙してその指導を受けた。露・晴小袖・相合傘・空柱その他多くの作品があつたが、惜しいことには夭折した。

ながらた 長唄 (江戸長唄)

江戸歌舞伎に用ひる長篇の歌の意で、此より以前からあつた長歌(上方にも江戸にも)や萬葉集の長歌と混じてはならない。寶永元年(二三六四)山村座の頼見世番附に「江戸長歌香川吉右衛門・岡本源之丞・鈴虫勘兵衛」とあるのが早い所見で貞享・元祿の頃上方の三絃弾き杵屋が東下するに連れて益々盛大となり寶曆・明和にかけて基礎を確立させ、安永天明の交に至り圓熟の極に達し文政から天保にかけて廣く世間的に流布し、明治の末から大正、昭和の今日更に盛大となつた

(但、今日盛大といふのは中上流の家庭で稽古する者がふえたといふ意味で、樂節歌詞そのものの進展には關係はない)

普通長唄を廣義に解するものは「めりやす」「唄淨瑠璃」「大薩摩」をも入れるが、之等を除いて純粹長唄の歌詞だけでも千餘篇もあつて、それが作者の主なるものは金井三笑・濠越菜陽・櫻田左交・並木五瓶・笠縫專助・松井由輔等で時には富士田吉次のやうに唄手自身の作歌もある。大抵は淨瑠璃やその歌謡のつぎはぎで、その上俳優・作曲・振附などの要求で文句を變へたりしたので、歌詞としての傑作はあまり見られない。吾々が今日之を聽いての感じも歌詞よりも寧ろ節、否な三絃や聲や振事に魅せられる分子の方が多い。名高いものは道成寺物・石橋物・草摺曳物・丹前物(これ等はそれ〴〵又多くの題材を含む)を始め二人椀久・吉原雀・吾妻八景・淺妻・禿・伴奴・越後獅子・浦島等である(高野辰之博士日本歌謡史九四五―九七二)

**なしつぼのこにん 梨壺の五人**

村上天皇の時宮中梨壺に召された五歌人源順・大中臣能宣・清原元輔・紀時文・坂上望城をいひ、勅を奉じて後撰集を撰んだ「後撰集」及び各人名の項を見よ。

**なかがはしんちゆう 中川心中**

廣津柳浪三十九年一月作の小説。梗概は

善夫(廿七八歳)と千鶴子(廿歳)とは相思の仲であつた。善夫が正式に結婚を申込むと千鶴子の母が斷つた。善夫は一旦は失望したが其頃丁度上木下川村の素封家から養子に望まれて、その内娘の賤子(廿歳)に配せられ親子別居して善夫は村役場の書記に出て居た。夫婦は至極睦まじく今宵も賤子は遠い田圃路を懇々夫の好きな酒を買ひ足しに出かけた。其留守に千鶴子が尋ねて来た「善夫は二世を契つて居る賤子よりも其實既に關係を斷つて了つた千鶴子の方を一層深く愛してゐた(九四七)今やその愛人は中へもようはいらず窓の外から聲をかけて「あの時とめた母はもう亡くなりました。わたしは今も獨身です、一生涯たつた一人のあなたを精神上の夫としてそれをせめても心ゆかしに致します。左様なら随分お達者で」と一封の文を投げ込んでサツサと何處かへ行つた。何かと披いて見るとしまひの方に「今宵中川に身を投げて」の文字、コリヤ大變と飛び出したが其ま、善夫も歸らなかつた。翌朝水死の男女と聞いて賤子は若やま駈けつけて見ると果せるかな善夫と千鶴子の眠れる様な死骸が中川の

土手に引上げてあつた(柳浪叢書後編九三七―九五四)

**なかつかさ 中務?**

父は醍醐天皇の皇子敦慶親王で中務卿であつたから、「中務」と云ふ。母は女流歌人「伊勢の御」で、彼女も亦母の歌才を傳へて多くの佳味をよんだ。後撰(七)・拾遺(一〇餘)等に採られ、家集に中務集がある(群二七三、二〇、一八七―一九六、歌仙歌集、續國五七三―五八一)

**なかつかさしふ 中務集**

なかつかさ「中務」を見よ。

**なかつかさないし 中務内侍?**

宮内卿藤原永經の女、龜山・後宇多・伏見の諸朝に仕へて文章を能くした。嘗て禁中奉仕の日毎を寫したものに「中務内侍日記」と云ふ(文學全書第五、群三二四、一一、七二七―七六六、扶桑拾葉集にも)又彼女の歌は玉葉集に二首採られてある(國華三六〇號・三九七「中務圖」)

**なかつかさないしにつき 中務内侍日記**

一卷

なかつかさ「ないし」「中務内侍」を見よ。

**なかとみのよこと 中臣壽詞**

大嘗會に神祇官中臣氏が奏誦した壽詞で、内容は自家の祖先天兒屋根命の功績に繋けて御代を謳歌する意の想が盛つてある。

**なかぶみ 藤原仲文 一五六八―一六二八、延喜八―安和元、七十一歳**

公葛の子、村上・冷泉・圓融の朝に仕へて五位上野介たりし人、歌は拾遺(三首)・新古今(一首)・新千載・新拾遺・新後拾遺・三十六人撰等に入り、家集を藤原仲文集一卷といふ(群二四九、九、六一七―六二一、續國五六六―五六八)

**ながまさ 平間長雅 二二九六―二三七〇、寛永一三―寶永七、七、二七、七十五歳**

京師の歌學者として、二條家流の歌人として有名の人、始め望月長好の門に入つて風觀堂と號した。從學の徒多く、その著には富緒川長雅集・詠歌大本秘訣・百人一首秘註・題讀曲切紙・風塵記・片岡山などがある。

**ながまちをんなはらきり 長町女腹切**

近松が元祿十三年(二三六〇)に竹本座に書下したものの「京の刀研師石見屋の手代半七は四條井筒の遊女お花と馴染をかされ、百兩の金に詰つて重代の家實信國を賣代したとも知らず、大阪長町の叔父加羅屋甚五郎

は「信國は火性の者に危い」といふので、さるお大名に賣る手筈にして持参した。それは半七がすりかへた「下阪」であつた。大名からは贖物を擱ませたとのきつい立腹、我甥いとしきに叔母が罪を貢ひ下阪で割腹して申し開きする」といふ筋で、此より前元祿十一年十二月廿一日大阪道修町刀屋の手代半七と石垣町井筒屋抱遊女お花との心中あり、翌十二年には女の腹切あり、この二つを結合して劇化したもので、これは近松にとつても我が淨瑠璃界にとつても世話物の濫觴として劃期的の作である。

**なかまろ** 藤原仲鷹(惠美押勝)?—一四二

四、?—天平・寶字八、

奈良朝の學者、政治家にして且つ歌人、孝謙天皇の寵を得て大納言にまで昇進したが、後に弓削道鏡に寵を奪はれ叛を謀り誅に伏した。歌は萬葉の三、四、八にあり又その著に大織冠傳一卷がある(武智麻呂傳一卷も彼の著に擬せられて居る)

**なかまろ** 安部仲鷹 一三六一—一四三〇、大寶

元—寶龜元、七十歳

奈良朝の漢學者にして漢詩人、十六歳遣唐留學生として彼地に渡り、ひどく唐朝の文化に心酔し、仕へて玄

宗皇帝の殊遇を得、止まること三十餘年、孝謙天皇の天平・勝寶年中遣唐使歸朝の便船で歸朝しようとして明州の波止場で送別の宴に臨み、その時「天の原ふりさけみれば」を詠んだのだが、不幸にして中途難船安南に漂着して東海岸の大陸傳ひに又もや唐に入り肅宗皇帝に仕へて光祿大夫兼御史中丞兼北海郡海國公に封ぜられ遂にあの地で終つた。彼れ詩をよくし時の李太白・杜甫・王維の徒と詩酒相徵逐した。歌は土佐日記・古今集・續後拾集等へのり、詩は文華秀麗集・文苑英華・唐詩品彙等に出て居る。別名は仲滿・朝衡・暁衡・晁臣・晁卿・胡衡。

**ながやのおほきみ** 長屋王 一三五—一三

八九、天武三—天平元、五十五歳

天武皇子高市皇子の御子、官は左大臣に至り世に佐保大臣と稱してゐたが謀叛の企てありとの讒によりて罪を問はれ自殺せられた。御歌は萬葉集の一、三、八及び續古今にあり、詩は懷風藻に三首出て居る。

**ながよし** 藤原長能?

長良—高經—維岳—倫寧、その倫寧の子で妹には右大將母道綱や菅原標女の母などがあつた。圓融・花山。一條に歴仕して從五位上伊賀守に叙任せられた。「勅撰

次第」では彼を以て拾遺集の撰者に擬して居る。十訓抄や古今著聞集には「彼れ嘗て三月盡の歌を

心うき年にもあるかな二十日あまり九日といふに春の暮れぬる

と詠むと、公任がけなして「春は二十九日あるものだらうか?」といつたので快々として樂します、遂にそれをもとで病氣して亡くなつた」とある。彼の詠の特徴は、

體言どめを多くつかつて新古今ぶりの先がけをした一點にあるといふ。

佐保姫の珠おちにけり唐錦おれる木の葉の上の

白露

一重だにあかぬ心ないとどしくやへ重なれる山

吹の花

又彼が能因法師に歌道を授けたのは斯道に於ける師弟道の始めだといふ。曾根好忠が、

鳴けや鳴け蓬が柚のきりくす過ぎ行く秋はげにぞ悲しき

と詠んだのをきいて「好忠は狂惑のやつなり」蓬が柚」といふことや「はある」と罵つたといふ(袋草紙)其味は拾遺(七首)・後拾遺(二首)以後の諸勅撰並に後

六々撰等に入り、家集に藤原長能集一卷(群二五二、九、六八七—六九三、續國六七—六七六)がある(藤岡作太郎氏國文學全史平安朝篇、三〇三、三八四、三九二、四〇一、四一三、四一五、七一)

**ながる** 下河邊長流 二二八四—二三四六、寛

永元—貞享三、六、三、六十三歳

近世古典派の歌人は幽齋・長嘯子・東曆・長流・契沖を開展して詞華益々繁茂した。

長流は本姓を小崎氏と云ひ、生國は大和宇陀、(彼の述懐に

つひにわが着てもかへらぬ唐にしき龍田や何の

故郷の山)

始め長龍と稱し、後、難波の堀江に移り住むやうになつてから長流と改めたが、又長嘯とも云ひ(長嘯子に私淑した故か?)通稱を彦六とも呼んだ。

天資聰明にして強記・萬葉・古今・伊勢などはスラ／＼と暗誦して居つた。性狷介にして隱逸趣味あり生涯權門に入らせず、妻帯せず、獨居讀書を樂しんだ。

其歌は長嘯子の風に近い所もあり、反二條派(爲兼・正徹・心敬等)とも一脈を曳いてゐるが秀味とも謂ふべきは矢張彼の天才と學殖との光つたものである。

天つ星落ちて石ともならぬまやしばし海邊の螢  
なるらん  
關こえて打出の濱にけさ見れば近江は霧の海に  
ぞありける  
富士の嶺にのぼりて見れば天地はまだいくほど  
もわかれざりけり  
里中に夕あさりせし鶏のとぐらに入れて日は山  
の端に  
くらゐ山峯なる人も麓とはわがみよしの、奥よ  
りぞ見る  
かつら川心にかけてし一枝も折られぬ水に身は沈  
みつゝ  
家集を晩花和歌集(續歌一)と云ひ、又萬葉集管見十卷  
は未完本ではあるが貴重な研究である。その他彼の編  
著に歌仙抄・萍水和歌集・續歌林其材二卷(國刊二期、續  
々群一五)・累塵藻水草・林葉累塵集・枕詞燭明抄等凡て  
和歌に關するものばかりがある。  
彼は又漢文に精しく、長歌をもよくした(近々、佐々  
木信綱博士等の努力によつて大阪朝日新聞社でその全  
集が刊行される筈である)

ちゆういうわう(仲雄王)を見よ。  
**なぎのその 竹柏園**  
のぶつな(佐々木信綱)を見よ。  
**なぎのそのしふ だいつべん 竹柏園**  
集 第一編  
竹柏園主佐々木信綱門下の短歌・新體詩・美文を集めた  
もの。人としては小花清泉・大塚楠緒子・川田順・片山廣  
子・三浦守治・石樽千亦・吉田又七・長壽吉・印東昌綱・清  
水寅治・阿部貞二・峰ゆり子・大橋文三・井關照子・橋系  
重子・山崎とれ子・佐々木信綱の十七名の作品が收めて  
ある。(菊判半裁五〇四頁、明治三十四年二月十日、博  
文館)

**なかつぼのこかせん 梨壺の五歌仙**

赤染右衛門・和泉式部・紫式部・馬内侍・伊勢大輔の五女  
流歌人のこと。  
**なしのもとしふ 梨本集 一卷**  
戸田茂睡が歌論の書で、傳統の「制の詞」や種々なる制  
限の無意味なるを痛論したものの。近世和歌革新の嚆  
矢とも謂ふべき名著である(國刊一期續々群一六のは三  
卷)なほ、もすぬ(戸田茂睡)を見よ。

**なきのそのは 竹柏園派**  
ちくはくふんは「竹柏園派」を見よ。  
**なぎのそのしふ 竹柏園集 第二編**  
竹柏園主佐々木信綱門下の短歌・美文・新體詩を集めた  
もの。作者の顔觸れ、第一集になくて初めてなのは長  
紅雪・村岡典嗣・茅山生・横山碩・關屋祐之・上眞行・新井  
兩泉・松寺久雄・高見憲治・大村八代子・池田愛子・有賀  
晴子・森雅子・片山柳子・淺井鏡子諸氏である(菊判半裁  
五五〇、明治卅五年五月廿七日、博文館)

**なぞ 謎**  
奇想天外的な契合に興味の中心をおいた詞の遊戲で、  
その着想は頓降法とよく似て居る。  
例 雷といふ謎を  
神様の鈴と解く  
心はふらならぬ  
(國刊二期雜誌叢書第二冊、謎語彙抄一)  
(古類、文學部一、五八八―五八九謎歌)

**なつの 清原夏野 一四四二―一四九七、延暦**  
元一承和四、五十六歳  
又、繁野とも、雙岡大臣とも、比寺大臣とも云ふ。王  
朝初期の故實家漢文家で、淳和天皇の勅を奉じて令義  
解十卷を撰んだ。歌人深養父・女流文學家清少納言の  
先祖に當る。

**なつくさ 夏草 詩、十四篇**  
三十一年夏、鳥崎藤村が郷里の木曾へ旅をして姉の家  
に滞在中に纏めた第三詩集で、これまでの詩風と變つ  
た處は積極的樂天的人生觀を寓し、實生活謳歌の明る  
い着想が次第に萌しつゝあるといふことである「晚春

**なにもる 茂呂何丸 二四二―二四九七、寶曆**  
一一―天保八、一〇、二七、七十七歳  
本名茂呂一元、信州で醫師をしてゐた。小澤氏、通稱  
治郎右衛門、高桑關更の善光寺參りを機として入門し、  
文化の初め江戸へ出て俳諧の師匠をし門人森村抱儀の  
扶助で居を構へたが、博學宏識他宗匠の忌憚するところ  
となり、二條家に召されて宗匠號を印可され有益な  
る俳書を遺して逝いた。  
芭蕉翁句解大成・七部集大鏡・今俳諧叢書中に收まつて  
ゐる。その他酒茶名目一覽・藥品叢海・異名大全等の著  
もある。

**なはまる 内藏忌寸 繩麿?**

**なはまる 内藏忌寸 繩麿?**

萬葉歌人、集の十七、十八、十九にその詠があるが傳記は不明である。

**なびこ 楫取魚彦** 二三八三—二四四二、享保

八—天明二、三、二三、六十歳

本名、稻生茂右衛門、その郷、下總國香取の地名を採つて姓とした。六歳にして父景榮に訣れ、母土子氏の手一つに養育せられた。後江戸に出て眞淵の門に入り古典の研究と詠歌に興味を覚え、明和二年家督をその子景序に譲つて、師翁が濱町の縣居近く一庵を設け、名づけて茅生庵といふ。師翁歿後、その門人にして彼の門に歸するもの二百餘人、又上野の法親王や酒井侯・奥平侯・戸田侯等は禮を厚くして聘せられた。

彼の歌は調と用語とを萬葉に則つて而かも自家独自の風格を失はず。徳川期に於ける萬葉振の歌人として出色の譽があつた。その家集は茅生庵災火の爲めに零本しか残つてないがそれによつても彼の歌才の非凡さが想見せられる。その中楫取魚彦歌集は清水濱臣が縣門遺稿中に採録したもので、安永五、六年間の詠草である(續歌二)他に大船楫取魚彦雜集及び、香取四家集中の魚彦遺稿がある。

父のみのち、おまさすて五十年に妻あり子あり

その妻子あり  
天雲のむかふす遠のわたつみの霞の方舟ぞ見え來る

大なむち少彦名のつくらし、大八洲國は廣らに厚らに

とほじろく清くさやけき山川の變らず絶えず常にもがもな

五百つ鳥ふみおどろかし御狩人朝けの風に袖ふきかへす

九萬里に飛びかふ鳥すらも鶴鶴なすらむ天つみ空かも

彼は又、様々の歌態の習作をも試みた。長歌・旋頭歌・催馬樂等皆機用に詠みこなせてゐる。古典の造詣を深めるに連れて、假名用格の混亂に氣づき、記・紀・萬葉から和名抄に至るまで古い假名を尋ねて「古言梯」を著した。これは萬葉を註した「櫓の孺手」と共に後進を裨益した。その他萬葉集千歌・雨夜の燈火・筆のさきこと・冠辭のかけ緒・續冠辭考等の著もある。

尙彼は俳諧をも好くし畫をも好くした。殊に畫は寒葉齋綾袋に學び、梅と鯉とを描くに妙を得、庭前に多くの梅花を栽ゑ、庭の小池に多くの鯉を放ち、暇ある毎

にその姿態を凝視してゐた。

彼歿後、その門人千賀眞恒同友と相議り、師の草稿を集め、橋場の總泉寺境内に埋めて一碑を建て「茅生塚」と稱した。

**ないぶちようしやう 内部徴證**

作品の作者や年代の不明なものを本文から推定する法で現今盛に行はれつゝあるものだ。たとへばその文體から「べら」を多く使つて居るので延喜の御代を去る遠からぬ作品だと推定したり、内容上「ことし萬壽二とせ云々」とあるから大鏡の出來たのは後一條天皇の萬壽二年であると推定するやうなのが一例で、本文を微細に検討すれば有益な暗示を得るが、内容上の推測は時々創作心理(作意)を誤解して意外の錯誤に陥ることもある。

**なほぶみ 落合直文 (萩の舎)** 文久元、一

一、二二、一三六、二二、一七、四十三歳

仙臺の人、藩士鮎貝盛房の次男、養はれて國文學者落合直亮の嗣となり、十三年宇治の本教館の館費生として大學古典課國書課に入った外、國文は堀秀政・漢文は内藤恥叟の教を受けた。その功績は明治の國文學教育家たるの點にあつて第一高等中學教授ともなり、三

十一年辭職後新に國文教科書の編纂もした。又語學の方面では日本文典・ことばの泉を出し、文學史的功績としては淺香社を起して始めて明治の短歌らしい短歌が

詠まれる機運を産んだことで、與謝野鐵幹・金子薫園・尾上柴舟以下、多くのすぐれた歌人は皆その門から出た。氏自身も亦短歌をよくし、その上新體詩も文章も上手であつた(萩の舎歌集・萩の舎遺稿 落合直文集)

**なほよし 熊谷直好** 二四四二—二五二二、天

明二—文久二、八十一歳

桂園門下の優れた歌人で、家は代々周防岩國侯に仕へ、早くから文學の趣味があつて景樹の添削を乞ひ始めたのは十六歳、景樹はこの時から彼に望を囑してその詠草の奥に、

みにならむ秋を思へば小山田のいれがたきまで嬉しかりけり

と書いたと云ふ。家集を「浦のしほ貝」浦のしほ貝拾遺」と云ひ、單行本でも、續日本歌學全書(五)でもも廣まつて居る。達吟で秀味多きこと、優麗で聲調の美しいこと、さる代りには平板で雄勁味に缺けてゐることなどよくこの派の歌風を代表してゐる。

ひとりして我くむ酒に限なき春のこゝろはこも

りけるかな  
流れ来て松の木かげになる時は水の心もすゞし  
かるらむ  
いまで知る草にも木にもおく露はみな旅人の涙  
なりけり  
別れつる涙のひまに一目見し松原ごしのあけ方  
の浪

浪花いでて武庫の泊の明方にこれより遠き船路  
をぞ思ふ  
花も見つ月をもめでつ世中にあるかひなしとい  
ふは誰が言

尙、歌論の著に「古今正義序註追考」「古今正義總論補註」などがあつて何れも師の説を補つてゐる。彼は又管絃の道にも心をひそめ「梁塵後抄」(神樂歌、催馬樂に註を施したもの)の著がある。

**ならでんじゆ 奈良傳授**

歌道傳授の中牡丹花宵柏から宗二に傳へたもの。宗二は奈良の餓頭屋であつたから世に之を「奈良傳授」といふ(尙「歌道傳授」を見よ)

**なりつぐ 姉小路濟繼** 二一三〇—二一七八、

文明二—永正十五年、四十九歳

又有名な「伊勢物語」も彼の作だと謂はれてゐるが、その眞偽はとにかく、彼の味を中心にした歌話や小説が大部分であるから彼の内生活の考察には確に興味ある一資料である。彼の人物・性行・所味については色々の批評があるが要するに、その體貌は閑雅瀟洒で、その性行は放縱無拘束で、その味は想の豊かなこと、含蓄に富めること、即興詩人的なること、等の數項は動かぬところであらう。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして  
忘れては夢かと思ふ思ひきや雪ふみわけて君  
を見んとは

思ふこそいはでぞたゞにやみぬべきわれとひと  
しき人しなれば  
ねぬる夜の夢をはかなみまどるめばいやはかな  
にもなりまさるかな

つひにゆく道とはかれてきしかど昨日今日とは  
思はざりしを  
白雲のたえずたなびく峯にだに住めばすみぬる  
世にこそありけれ  
名にし負はゞいざこととはん都鳥我思ふ人はあ

基綱の子、室町時代の歌人として有名、西三條實隆に學び古今傳授を受けた。後土町・柏原の二朝に仕へて正三位參議まで進む。その味續三玉和歌集類題又は續撰吟和歌集類題に載り、家集に濟繼卿集一卷もあるが、この家集には冷泉爲廣の味も多くまじつてゐるといふ。

**なりひら 在原業平** 一四八五—一五四〇、天

長二—元慶四、五、二八、五十六歳

平城皇子阿保親王の第五男で世に在五中將と云ふ。王朝初期有数の歌人で六歌仙の一人である。清和帝貞觀中、右馬頭に任ぜられ、渤海よりの使者の來朝した時救を受けて鴻臚館に接伴し、右近衛中將に任ぜられ、元慶中、相模、美濃權守に歴任した。

彼は天才肌の歌人で着想豊富・形式自在、加ふるにその多感にして奔放なる性格と相俟つて到る處、人口に膾炙する秀味を遺した。その味を載せた諸集は、古今・後撰・拾遺・新古今・新勅撰・續後撰・續古今・續千載・續後拾遺・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今・三十

六人撰。  
などで、家集を在原業平朝臣集と云ふ(群類二四八、九、五七九—五八一、歌仙歌集卷二、續國四二—四二二)

りやなしやと

なごは何人の口にも愛誦せらる、佳味である。

(國華二四四號五、九、に筆者不詳の業平の畫像、同三一五號に光琳筆業平東下圖がある)

**なりひらしふ 業平集**

なりひら「在原業平」を見よ。

**なるとちうじやうものがたり 鳴門中將**

物語

作者未詳、鎌倉時代中頃以後——多分は後醍醐の御門の御代を取材したものであらうといふ。才色すぐれた妻を持つた少將、時の帝にその妻を献じて中將に昇進したので時の人鳴門中將とあざなした。蓋し鳴門は「よい海布」を出すから「美しい妻女」を上つたことを寓したものであるといふ(校國大十九卷、群四八二・一七、四四九—四五五)

**なるべし 南留別志** 五卷

萩生徂徠寶曆十一年(二四二二)の著、文字音訓・事物の名義などを考證評論し、而かも斷定的でなく毎事「……なるべし」と結んだ隨筆で、和漢混淆文體で書いてある。文政十一年(二四八八)字惠の校訂で(寶曆十一年同人の跋もついで)刊行、明治に入つてからは單行

本としても百説の一部としても発行された。尙ほ之れを反駁したもので富士谷成章の「非南留別志」といふ書も出た。

**ならまる** 橘宿禰奈良麿?

諸兄の男で母は淡海公の女従三位多比能ノ朝臣、叙任次第は

聖武 天平一二、五 従五位下

同 一、一 従五位上

同 一三、七 大學頭

同 一五、五 正五位上

同 一七、九 攝津大夫

同 一八、三 民部大輔

同 一九、正 従四位下

孝謙 勝寶元、四 従四位上

同 四、一 侍從

同 七 參議

同 二、正 朝臣の姓を賜ふ

同 四、一 但馬因幡の按察使に任じ兼て

伯耆出雲石見等の國の非違の

事を檢校せしむ

同 六、正 正四位下

寶字元、六 左大辨

同 六、甲辰 叛逆の首謀と看做され召し囚はる

その後どうなつたものかはつきりしないが、公卿補任に「天平勝寶九年七月二日謀叛伏誅或説遠流者如何」とあるが多分は誅せられたものであらうといふ。そして續後紀に承和四年八月に無位橘朝臣奈良麿に從三位を贈られ、同十四年十月更に太政大臣正一位を贈られたのは彼が當帝(仁明)の御外曾祖父に當つて居たからとのことである。

彼は歌に巧でその味は萬葉の六、八、一九、二〇の各卷に出てゐる(萬葉集古義人物傳朝臣の部)

**なんかい** 祇園南海 二三三七—二四一一、延

寶五—寶曆元、九、八、七十五歳

元紀州藩士で、名は瑜、字は白玉、又は汝珉、號は南海又は鐵冠道人、十四歳父に連れられて江戸に出府、木下順庵に從學し、殊に詩才を以て聞え、當時白石・蛻巖と共に漢詩の三大家と稱せられた。その著に一夜百首・南海詩集・詩學逢原・湘雲瓊語(廿叢二)同附録(同六)等があつて何れも世に行はれた。

**なんがく** 南學

谷時中が土佐で唱へた儒學で、その根本とするところは程朱學である(「時中」をも見よ)

**なんくわく** 服部南廓 二三四三—二四一九、

天和三—寶曆九、七十七歳

京都の人、名は元喬、字は子還、小右衛門と稱し、南廓又は芙蓉館と號した。物徂徠の門に入り、師匠の詩文學を承けて大成し、徂徠歿後讓園の名望凡て彼一身に集まつた。よく人を教へ好んで和歌を咏じ又畫に巧で諸國遍歴の途次名勝あれば隨て之を描いた。南廓文集・文筌小言等の著がある。

**なんけい** 橋南谿 ?—二四六五、?—文化

二、四、一〇、?歳

京都の人宮川氏、名は春暉、字は惠風、梅仙又は南谿と號し、家は代々醫を業としたが彼は家學の外に文學を嗜み兩方ともに世に稱せられた。隨てその著述も醫・文兩方面にあるが國文學上彼の存在を鮮明ならしめるものは和漢混淆文の紀行・東遊記・西遊記並に隨筆「北窓瑣談」である。

**なんすゐ** 須藤南翠 安政五、一一—大正九、二、

四、六十三歳

伊豫の人、通稱光暉、流離數年の後、十一年有喜世新

聞記者となり、それより文壇の人となつた。綠翠談は當時反響多大であつた。その後も歴史小説・冒險小説など世と推移つて多くの作を出したが幾らか傾向作品の嫌があつた。

**なんせんせうそまんど** 南仙笑袖人(楚滿

人) 二四〇九—二四六七、寛延二—文化四、三、

九、五十九歳

江戸の人、通稱楠彦太郎(その職業については割腕師・醫師・書道指南・鞘師など諸説あり)寛政年間頻りに敵討物の草紙を述作し敵討物流行の先驅を爲した。一代の作無慮三百種内外、唯その教養淺きが爲めにあまり大した深みも高みもないが「敵討三組盃」だけは確かに傑作として世間に認められて居る。

**なんそらさとみはつけんでん** 南總里見

八犬傳 百五卷

瀧澤馬琴が苦心の傑作で、又徳川文學の一偉觀である。南總里見義實公戯れにその愛娘伏姫を愛犬八ッ房に許し、姫は八ッ房と共に富山洞に同棲し、犬の精氣に感じて妊娠して、割腹すると手中の珠は散つて八方に別れ、そこから仁義禮智忠信孝悌と各々一個の徳を具現する英雄八犬士が現れて各所に生ひ立ち、奇遇や

邂逅によつて最後に一處に落ちひ、折筋逆臣権を專にせる主家(里見家)の爲めに健闘奮戦し、遂によく撥亂反正の實をあげ、善人榮えて悪臣誅に伏し、八犬士はめでたく登仙するといふ筋を流暢優美なる行文を以て綴り層々巻を重ねて倦くことなく、實に作者が該博の識見と老練な作話の程を推想すべき大作である。蓋し文化十一年(二四七四)に第一輯を出し、天保十三年(二五〇二)に完結するまで前後二十八年中途眼を病んで嫁女に聴書せしめその苦心慘澹實に言語に絶するものあり、述べて第九輯「回外剩筆」といふに詳かである。今日から見ればこの作品は歴史小説(馬琴は讀本を銘打つたもの)といつても餘りにロマンチックに偏する嫌があり、已に支那水滸傳に作意を似せたあとが確かだから、創作的價值は幾分うすく且つ寫實主義の見地から酷評を下す人々もあらうが、その構想の雄大と學殖の該博と行文の流麗とその執筆に熱心なことは誰しも口を極めて稱讃するところとなつてゐる(帝文六、七、八、に入れてあつて巻頭に依田學海翁の詳論がついて居る。又同じ博文館本で幸田露伴氏の校訂に係る文藝叢書六、七、八、の三冊物もある)

**なんぼ 太田南畝(蜀山人、四方赤良、四**

**方山人、寢惚先生、竹羅山人)** 二四〇カ  
一四八三、寶延二—文政六、七十五歳  
本名は覃、徳川時代の狂歌師・狂文家・雜學者として有名な人、もと江戸幕府の士で性質磊落機智に富み、和漢雅俗の學に通じ、殊に狂歌の方面では中興の大家と謂はれて居る。

生酔の禮者を見れば大道を横すぢかひに春は來にけり  
一つとり二つとりては焼いて喰ふ鶉なくなり深草の里  
世を捨てて山に入るとも味噌醬油米の通ひ路なくてはかなはじ

その狂歌の集には南畝帖・千紫萬紅・萬紅千紫などがある。狂詩文には寢惚先生文集あり雜著には浮世畫類考・假名世説・二話一言などがある(新百家説林、蜀山人全集全五册索引一册、尙新群一〇、に彼の著狂言鶯蛙集一名古今の馬鹿集二〇徳若後萬載集一七が入つて居る)  
**なんぼく 鶴屋南北(四世)** 二四一—二四八九、寶曆五—文政一二、七十五歳  
鶴屋南北は三世までは俳優であつたが、彼は性來の嗜好に任せて脚本作家となり、四谷怪談(帝國文庫一

六)・お染久松色讀販(同)・隅田川花御所染等約廿餘篇何れも佳作と稱せられ、四谷怪談の如きは今も盛に上揚せられ確かに怪談物の傑作である(春陽堂發行大南北全集)彼、別號を姥厨介と云ひ、初め勝儀藏と稱し後、伊之助と改名、大南北の「大」は疑問だが近世江戸の脚本作家としては第一人者と謂ふべきであらう。

**なんれい 多田南嶺** 二三五八—二四一〇、元祿一一—寛延三、九、一二、五十三歳  
名氏義俊(一に義寛)號は桂秋齋南嶺、神道・有職故實・甲州流軍學等各方面に通じ博學多識なことを、才筆自在にして詞句の靈妙なると、健想、健筆なるとは稱すべきも、人格低劣にして他人の筆を剽竊し、作品を借りて知人を毀るなど非難も少くなかつた。

江島屋其積・八文字舎自笑と衝突中、及び元文元年其積の歿後八文字舎本に筆を執つたのは主として彼で鎌倉諸藝袖日記 寛保三年

は滑稽の趣致を以て八文字舎本中出色の作と評せられは趣向に殊更奇を衒ひ、才筆にまかせて文の爲めに意を害した嫌があると謂はれてゐるが、尙氣質物の一傑作たるを失はぬ。その他、彼の作武遊双緞巴・福壽草を

始め、神道や、有職故實の述作を併せて約五十種近くもある。

ニの部

**にとりえ 濁り江八回**  
樋口一葉、二十八年七月作の小説。

「新開地の銘酒店菊の井の一枚看板「お力」は年も若く容色もよく、別に手管を仕ふ譯でもないが客好きがし「石川さん村岡さんお力のお店をお忘れなされたか」と一寸きく口に客足を止めて居た中に、山高帽子の三十男結城朝之助といふ好い旦那がついて、繁々通ふにつれて深間となつたが、身の行末を考へると到底添はれぬ仲と見抜き、  
「相手はいくらもあれど一生を頼む人が無いのでござんす」  
とて寄る邊なげなる風情をすることもある。

「私に酒氣が離れたら座敷は三味堂のやうになりませう」  
とてガブ呑することもある。果ては朝之助に我が生ひ立ちから、戀人源七のことから一切を打ち明ける。源七



はもとお力とは一つ長屋の、のけもの扱ひに見下げられた境遇の男で、お初といふ女房もあり太吉といふ子もある男なのに、お力は同情が嵩じて戀となり此方より寄れば彼方も慕うて、今では切るに切られぬ腐れ縁、戀ひ男といふには不似合な朴訥人を一日逢はれば気がかりでならぬといつた仲、これは男にも不爲めと思ひ精々菊の井に遠のくやう意見はしても又しても向ふからやつて来る。こつちからもつい忍び逢ふ。太吉を見ると流石に縁ある兒のこととて目の出屋のかすていらなごをやると、歸つて斯くと母親につげると「マアあの白鬼にか、あんなものには貰つてはいけない」として罪のない兒にまで罪なことをきかす。段々夫婦仲が險惡になつてとどお初は去られてしまふ……と、魂祭りが過ぎて幾日目の時、この新開町を出た棺が二つあつて一つは源七一つはお力で、世間の取沙汰では女は退はへられて無理心中をさせられたのだともいひ、いや始めから納得づくであつたのだとも謂つた。

この作は一葉が従來小説の舊い型を破つて新に寫實小説の創作に腐心したころの習作とも謂ふべく、闇に咲く花お力の描き方はこれまでに比のない優れた女性描寫だといはれ、新開町の空氣もよく滲出して居るとは

められた(一葉全集下二四〇)

にしう 尾藤二洲 二四〇五―二四七三、延享

二―文化一〇、六十九歳

伊豫の人、名は孝肇、字は志尹、二洲は其號で一に約山と號し良佐と稱した。大阪に来て片山北海に學び程朱の説に深く詣り、幕府に召されて昌平學の教官となり、その境内に住んだ。文は歸震川、詩は陶柳を慕うて二つながら當時の妙選と稱せられた。その著に靜寄軒文集・正學指掌などがある。

にしきぶんりう 錦文流?

大阪、座摩神社の近くに住んで俳諧をも淨瑠璃をも小説(浮世草紙)をも能くした。殊に小説は西鶴の流を酌み、當時西澤一風・櫻塚西吟等と並び稱せられた。棠大門屋敷五巻は寶永二年の作、淀屋辰五郎のことに一部取材したもの。熊谷女編笠五巻は同八年の作、その頃因州鳥取に女仇討があつたのを種に採つたもので、どちらも好評を博した。その他作品十種内外ある。

にしのみやさだいじん 西宮左大臣

たかあき「源高明」を見よ。

にじふいちだいしふ 廿一代集

勅撰集全部で、最初の古今和歌集から最終の新續古今和歌集まで廿一種ある。今その書名だけをあげておくから各書の項を検索せられたい。

- 一、古今・二、後撰・三、拾遺・四、後拾遺・五、金葉・六、詞花・七、千載・八、新古今・九、新勅撰・一〇、續後撰・一一、續古今・一二、續拾遺・一三、新後撰・一四、玉葉・一五、續千載・一六、續後拾遺・一七、風雅・一八、新千載・一九、新拾遺・二〇、新後拾遺・二一、新續古今。

にてうけれいせんけのたいぢ 二條家冷

泉家の對峙

二條家對京極家の對峙は延慶兩卿誣陳狀・爲兼、阿佛尼等の諸項に述べた通りであるが、二條家對冷泉家の間にも冷泉家が京極家に接近した關係上、代と共に甚しくなつて室町期に入つては段々感情問題化した氣味がある。簡単に表示しておく

二條家

冷泉家

- 一、古今集貞應本による 嘉祿本による
- 二、三部抄を大切にす 重んじない
- 三、うたといふ文字 歌 詞
- 四、短冊 春秋には紫を 春秋には青を上にし夏冬上にし夏冬には青を には紫を下にする

上にする

五、懷紙 三行三字に書 三行四字に書く

く折目をつける 折目はつけないで巻いたまゝにする

六、文臺 筆返しのある 筆返しのないのをつかふのをつかふ

(福井久藏氏、大日本歌學史、一二三―一二四)

にんじやうぼん 人情本

洒落本の轉化したもの、一方には滑稽本となり一方には人情本となる。徳川期小説史中、人情本が一番殿をなすもので、洒落本が小本で洒落を本位として、斷片的にして粹や通に力を入れて居るのに對して人情本は中本(糊入のみよし紙を二裁にし)で人情(殊に男女の痴情)を本位とし一つの纏まつた談話の體を爲して旨と「穿ち」に力を入れたものである。安永七年田螺金魚が「契情買虎の巻」に濫觴し、寛政十年三馬が辰巳婦言や、顯れ、文化十四年鼻山人(東里山人)の籬の花、文政元年廓鶯(前の續篇)同二年清談峯の初花、曲山人天保二年の假名文章娘節用等何れも名高く、天保三年爲永春水が春色梅曆で當りをとつた頃が盛りの絶頂で二世春水となつて明治期に入つた。

にしやまものがたり 西山物語 三卷

建部綾足作の雅文小説で、中古の物語を採つたもの、明和五年(二四二八)の出版(帝文三二)

にせむらさきみなかげんじ 修紫田舎源氏 三十八卷

氏

柳亭種彦が合巻物小説の傑作で、八犬傳・膝栗毛・浮世風呂と共に本邦四大奇書と稱せられて居る。趣向は源氏物語を室町時代に翻案し、王家を將軍家とし歌を俳句にかへ光氏を中心に女の色々戀の様々を寫したもので、構想大きくしてしかも緊密に行文優艶にして聊かのたるみなく、文化十二年(二四七五)初編を出して以來、作者の名聲頓に上り、士女争うて之を見、將軍家齊も之を讀んで佳作だと褒めたが、天保十三年(二五〇二)風俗匡正の爲め幕府の禁に遇ひ未完結のまゝで中止したのは惜しいことであつた(續帝第五編の外、單行本として今古堂、野村書店などから發行した)

につき 日記

毎日の生活や事件を綴つた文章。

にてうけ 二條家

藤原爲家の長男爲氏の子孫代々をいふ。和歌師範家の一つ(二條派)並に「和歌師範家」を見よ)

にてうてんじゆ 二條傳授

宗祇——三條實隆——細川幽齋と傳はつた歌道傳授の一つ(「歌道傳授」を見よ)

にてうは 二條派

定家の子爲家、その長子爲氏の歌系を云ひ、定家の歌論を金科玉條とし、之をさながらに墨守しようといふ師範家の中でも保守派に屬するものである。

爲氏は續拾遺を、その子爲世は新後撰・續千載を爲世の長男爲通、二男爲藤(續後拾遺)爲通の子爲定(續後拾遺)と續いて三派の中一番繁榮し、室町期に入つては二條良基や宗祇の授護によつて殆ど唯一師範家のやうになつた。

にてうるんさぬき 二條院讃岐?

源三位頼政の女(一説に頼政の孫女、頼政の子和泉守仲綱、その子彼女)二條の朝に仕へたので世に彼女を二條院讃岐と云ふ(愚考、二條院の稱呼はそれによるしいが讃岐の稱呼が判明しない。彼の父・兄・夫などの誰かが讃岐守であつたものであらう)

一世の才媛でその秀味、

我袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそしらねかわ

く間もなし

によつて「沖の石の讃岐」稱へられ、千載(四)・新古今(一六)・新勅撰(一三)その他の諸集にも入撰し、家集に二條院讃岐集がある(群二七九、一〇、三五四—三五八、續國八三四—八三八)

山高み嶺の嵐に散る花の月にあまざる明方の空

春霞分け行くまゝに尾上なるまつの緑ぞ色まさりける(春)

さもこそは短かき夜半の友ならめ臥すかさもな

く消ゆる蚊遣火(夏)

契あれや野邊の刈萱うつし植ゑて思ひ亂る、友となしつ、(秋)

にじぶとげん 二十五絃

さうへい「森田草平」を見よ。

にんにびくに 二人比丘尼 二卷  
鈴木正三寛文四年(二三二四)の作の假名草紙で、下野國住人須田彌兵衛が討死の事を骨子として綴つたもの。文辭流麗、假名草紙中の傑作である(國刊二期近世文藝叢書第三册)

にひまなび 新學

賀茂眞淵が歌論を書いたもので、歌意考ま共に翁の和歌に關する意見を見るには必讀の書である(日歌一二及び註和歌叢書七、三六三—三七六に入る。尙「眞淵」の項参照)

にひまなびいけん 新學異見

賀茂眞淵の「新學」の説に對して香川景樹が批評を下したもので、桂園派の歌風を見るにも古典派・桂園派の對照觀を得るにも必讀の書である(日歌一二註和歌叢書七、三七七—三九二)

にふどうさきのだじやうだいじん 入道

前太政大臣  
きんつれ「藤原公經」を見よ。

にほひのつけ 句の附

芭蕉が俳諧の附けの上に始めた俳風で、前句と後句とを外面的な字句で繋ぐが、前句の餘韻を味得して後句の餘韻が一味相通するやうにつけることを云ふ。つまり字面の聯接をさけて情趣の聯接にしたもので、この點が在來の俳諧よりも一步を進めて居る。

例、おかしらに菊賞はる、迷惑さ  
娘をかたう人にあはせぬ

前句は自分の親方から菊を所望とあれば何がなせお世辭にとれらひすまして居る才子ならば、もつげの光榮として悦んで進上すべきだのに、これは又「折角丹青した菊をくれるなんて随分迷惑な話だ。欲しくば自分でつくつたがよい」と正直一徹の菊つくりブリ／＼不機嫌な風貌が餘韻となつてゐる。その餘韻をくんで嫁入娘を持つた頑固親爺が「娘は賣物どうかよろしく御取りまはした」と云つて心よく托すべきを頑固一徹に「イヤ平に御断り申す」とてんで人に逢はせないと云つた風の附けにしたもので、即ち句の附である。

二の尼に近衛の花のさかりきく

蝶は春にとばかり泣かむ

なども前句の薄命の宮女暇を乞うて尼姿となれると、後句秋蝶徒に春に惱む風情と、どこかに情趣の契合が想はれる。芭蕉の七部集を見てそれ以前の連句と對照すると殊にこの點が鮮明である。

**にほんえいたいぐら 日本永代藏 (大福**

**新長者教、(又一巻には本朝永代藏ともある)六**

卷二十六話

井原西鶴元祿元年(二三四八)作の浮世草子(小説)で、新興階級たる町人の物質欲の世界を描寫した。近

頃抜抄して教科書にも用ひられて居る。

**にほんえんげきけふくわい 日本演劇協會**  
明治廿二年九月成立、會長は當時の宮内大臣土方久元、文藝委員は尾崎紅葉・坪内逍遙・森鷗外・河竹默阿彌等、技藝員は團十郎・菊五郎・左團次等各方面の名士揃ひで、脚本と演技と兩方面から改良しようとしたが、諸氏の劇の本質觀が一致しないで、依然たる娯樂遊藝視する傾きが強く、爲めに新興劇の礎石を築くまでには至らなかつた。

**にほんき 日本紀**

にほんしよき「日本書紀」を見よ。

**にほんぐわいし 日本外史 二十二卷**

頼山陽の名著で武家時代の歴史を達意の漢文に綴り、一篇毎に「外史氏曰」として評論して居る。この書大に行はれ、幕末尊王の風も一つはこの史論が鼓舞したとまで謂はれて居る。「日本政記」と共に作者の二大史筆であらう。殊にこの書は約二十年もかゝつて起稿して永らく篋底に藏しておいたものを白河樂翁公の懇望によつて公に奉り、それから板行されたものだといふ。大中小各種の刊本があり明治以後にも盛に出、註解の書も出來て居る。

**にほんこうき 日本後紀 二十卷 (二十四卷、**

國史大系本は四十卷)

續日本紀の後を受けて、桓武天皇の延暦十一年(一四五二)正月から清和天皇天長十年(一四九三)二月まで四十二年間の事蹟を記した。六國史の一つで、藤原冬嗣が勅を受けて撰んだ。この書原本の正確なものが傳はらないで現存書は偽本だといふ(國大三)

**にほんこくげんさいしよもくろく 日本**

**國見在書目録 一巻**

藤原佐世が寛平年中の著。當時に現存する群書を易家・尙書家・詩家・禮家等四十に類別し、千五百七十九部一萬六千七百九十卷を載せた圖書目録で、文學史や文化史の考察上度々引用せられる。嘉永四年(二五一)安井衡の序を附して版行したがある。これは續群書類從卷八八四(雜部三十四)に入つて居たものを離して單行したのである。

**にほんしかろん 日本詩歌論**

野口米次郎の著。これより前者者は英の牛津大學の聘に應じて日本の詩歌を講演し、倫敦のジョン・モレー書店から、

“The Spirit of Japanese Poetry”

と題してその講演を出版したものを知人加藤朝鳥氏の勧めによつて更に邦譯し、

- 一、純日本の詩歌
- 二、俳句對英詩論
- 三、默劇「能」の審美上の價值
- 四、日本詩歌週原論
- 五、日本現代詩歌論

の五章をあげ、尙英文にはない餘論十二小篇とアーサー・ランソムのヨネ、ノグチ論とを添へてある。著者の藝術觀を見るにも、日本詩歌を近代的に味はうにも、尙且つこの節盛行する鑑賞批評の模範を見るにも有益な著である(四六判二七八頁、大正四年十月廿日、白日社)

**にほんしゆぎ 日本主義**

國粹保存主義の生長した思想で、日清戦後三十年前後に盛んに唱へられ、その唱道者の主なるものは井上哲次郎・高山樗牛・元良勇次郎・木村鷹太郎諸氏で、その主義の綱領は井上哲次郎氏のあげたものによると、

- 一、國祖を崇拜す
- 二、光明を旨とし生々を尙ぶ
- 三、精神の圓滿と清淨潔白とを期す

四、國民的團結及び社會的生活を重んず

五、武を尙ぶ

六、世界の平和を期し人類的情誼を期す

即ち一頃の歐洲崇拜論者のやうに極端に彼に盲従もしない代りに、國粹保存論者の謂ふが如き極端な自國誇大狂的な思想にもかぶれないで、正しい自覺の下に歩歩健實な國家的發展を遂げようといふのである。中にはその所論の空疎を難じたり、又は「畢竟十年前に國粹保存主義者のいひふるしたことだ」などいふものもあつたが、どう見ても國粹保存主義と同一視すべきもではなく、矢張時代精神をよく代表した主張と觀るべきであらう。

**にほんしよき 日本書紀 三十卷**

神代から持統天皇までの歴史で、元正天皇の養老四年(一三八〇)に成り官撰の國史の始めでもあり六國史の始めの史書でもある。舍人親王を總裁とし太安曆・紀清人などが與つて纂輯した。この書は國史研究上の必讀書たるは勿論、國文の方でも上代文學の研究には是非參考する必要があるし、歌謡の如きはそれ自身文學史の資料である。殊に古事記を研究する上にはしづらくも缺くことが出来ない。註釋は澤山あるが

谷川士清 日本書紀通證三十五卷  
飯田武卿 日本書紀通釋七十卷(この方近頃索引も出來た)

がよい。又本文をやさしく譯した「假名の日本紀」といふものもある。近頃植松安氏が校訂して出された。尙こじき「古事記」を見よ(國大一)

**にほんせいぎ 日本政記 十六卷**

頼山陽天保三年(二四九二)の著。神武より後陽成に至る正史で、記事は簡潔にして正確、史論も齊整外史が青春の情熱ある筆致たるに對して、これはいかにも老熟した條理のある筆致で、よい對照を爲してゐる。明治維新後までも漢學塾でよく教科書に用ひられた(半紙半截の黄表紙が多い)

**にほんそうこくふどき 日本總國風土記**

奈良朝時代に出た古風土記の缺を補はうとて駿河以下諸國の記録を集めたもので、多分は東山天皇の御代何人かの手によつて偽作せられたものであらうとのことである。

**にほんは 日本派**

正岡子規によつて創められた明治の新俳句の一團で、始めその吟草を日本新聞に掲載したので日本派とい

ふ。内藤鳴雪は客將株なり。河東碧梧桐と高濱虚子とは各片腕なり、佐藤紅綠・石井露月・松瀬青々・坂本四方太・村上舜月等は主なる俳人で、これ等諸氏の吟は「新俳句」や「春夏秋冬」に集められた。

**にほんふりそてはじめ 日本振袖始**

近松が享保三年(二三〇八)二月竹本座に書き下した淨瑠璃で、素盞鳴尊のことを脚色す。題名は尊が櫛名田姫の熱氣發散のため兩袖の脇明けを切りさかれたといふ所からつけたもの。これより前、井上播磨掾正本に「日本王代記」といふがあり、近松は之れに基いて脚色した。

**にほんぶんがく 日本文學**

遠くは高天原朝廷より、近くは大正・昭和の今の大御代に至るまで、我が日本國土に發生し展開した文學を總稱して日本文學といふ(此が各時期の分け方並に各期文學の概況は拙著日本文學史提綱について見られたし。同書は從來の通説をなるべく簡明に縮約したものである)

**にほんりやういき 日本靈異記 三卷**

委しくは「日本國現報善惡靈異記」といふ、大和の藥師寺の僧景戒が嵯峨天皇の弘仁年間(一四七〇—一四八

三)の著。日本古來の神佛妖怪についての傳説を集め、内容は王朝末期の雜纂の先蹤とも謂ふべく、文體は漢字の音訓を交へ備うて鎌倉初期東鑑や貞永式目のそれに脈を曳いてゐる(群四四七、日本古典全集第一輯)狩谷掖齋の「靈異記考證」は本書をよむ上に參考になる(これも大日本古典全集第一輯にある)

**にようばうころし 女房殺し**

江見水蔭、明治廿七年五月作の小説。梗概は返子の海岸の潮頭樓に一人變人が滞留してゐる。宿帳を見ると「東京市芝區櫻川町二番地田村方、静岡縣土族近藤堅吉二十三歳、數理學校生徒、脚氣療養」とある。靜かな部屋で相客の無い處々と云ふので、風通しの悪い室で汗をブルブルかいてちつき引籠つてゐる。はたが餘り勤めるものだから此節少々散歩を始めた。而も駿河半紙の綴じたのに木筆で絶えず何かを書く爲めに此二つを放したことはない。「木蔭の茶屋といふのはこんもりと繁つた赤松の下で寔に涼しく好い處だ(五)彼はいつもこゝで一吋休むのを常例とした(この茶屋で好いものは山から引いた清水の噴水に冷してある藤澤桃と、十四ばかりの少女の美しいのと此が返子での評判である(五)少女名を「お柳」と云ひ毎日濱

邊に出て貝拾ひをして之を選び集めて江の島の商人に賣るのが仕事である。無口な堅吉は次第に此少女を愛するやうになつた。何となく死んだ許嫁に似て居ると思つた。其内潮頭樓へは某省の参事官の薄井と云ふのが来た爲に、室が詰まつてやかましくなつて来た。彼はそれを殊に嫌つた。云ふのは彼の父と薄井とは元同僚であつたのが、父は剛直一遍の爲に薄井と激論して辭職し、薄井は益々上官に取入つて今の地位を占めたものだからして、彼は茶屋のお婆さん——お美代が快く承諾してくれたのを幸に、お柳の家に寄寓した。お柳はそれを別に嬉しいとは思はなかつたがさりとして嫌だと思はない。彼が母子と心やすくなるに連れて「お柳を妻に」と思ふ頃にはお美代も「堅吉を嫁に」と思ふやうになつた。實は此お柳については痛ましい暗黒面があつた。それはお柳が十三の時、潮頭樓の泊り客がお柳を見初めて金に飽かせて宿の主人に召させた。主人はお柳の父の恩人で、此茶屋も實は主人の贖煎で出すことが出来てゐる次第なので、お柳にお柳の父と云ふのが至つて愚かだ、僅かに十圓のお金に目がくれて無慘にもお柳を暇ものにしたのだ。お美代は此事を思ふ毎に暗い心持がしたけれども、彼が

滞在中に結婚の約束が成立つた。堅吉は理科大學の選科へ入學した。其年の夏休に逗子を訪ふともうあの茶店は鎖されてゐた。それは又もや潮頭樓の亭主からお柳をば彼の薄井のお伽に起せと要求したのをお美代がきつぱり斷つたからであつた。堅吉は静岡の親類に預けてある僅かの財産を取よせて二人を東京に引きとらうと思つて其事をお美代に告げた。「本當にお嫁に貰つて下さいませか」と冒頭してお美代はお柳の十三の時の悲劇を告白した。彼は一時は驚いたがいやく彼女に罪はないと思つて「どうあつても貰ひませ」と誓つた。半込神樂坂の近くに一家を構へて三年の苦學にやつと選科を卒業した。卒業式間なしに結婚式を挙げた。お美代の悦びは譬ふるに物が無い。聽て彼は陸軍參謀本部の測量隊に加はつて遼東半島へ出張するこゝになつた。「何分よろしく」と云つて托した。お柳は母と二人で又々逗子の別の小家を借りて留守をしてゐる中、あはれにもお美代は老病の爲に亡くなつた。野邊の送り代にも不自由で困つてゐる矢先に、潮頭樓の女中のお鐵が来て十圓貸してくれた。それが引か、りになつて手取り者のお鐵が、無理矢理お柳をば薄井の枕席に侍らせようとした。お柳は堅く拒んで男の部屋

又の部

へは入らなかつた。と其翌日一寸驛まで見送つてほしいと云はれて驛へ行く。「東京へ連れてつてやらう」として遮二無二お鐵と薄井とに引張られて思はずも車中の人となつた……其留守に堅吉は歸つて来た。……二人は箱根に一月餘居てそれから小田原大磯江の島と遊びまはつた。童が淵龍燈の松、「三天の」岩の上の石燈籠……こゝで慘酷にも彼は彼女を殺し續いて彼自身も自殺をした（水蔭叢書一—四九）

にんじやうほん 人情本

徳川末期洒落本が變化した低級な戀愛小説をいふ。洒落本は短篇、人情本は長篇、彼は滑稽を主にし、これは意氣と張と粹と通さの交響樂を主とする。早く寛政十年、梅暮里谷峨の傾城買二筋道、式亭三馬の辰巳婦言、文化十四年鼻山人の「籬の花」などにその萌芽を見るべく、天保三年（二四九二）爲永春水「春色梅曆」の賣行に自ら稱して「東都人情本一流の元祖」といふ。春曉八幡鐘も彼の作である（帝文一〇、梅曆春告鳥・帝文二九、三四、人情本傑作集・國刊一期新群七・大久保龍雪、人情本目錄一）

ぬかだのおほきみ 額田王（額田女王）？

傳記未詳だが、大和の額田の郷に生長して才色共に優れ、始め天武天皇に愛せられたにも拘らず天智天皇の御妃となられ天皇崩御の後再び天武天皇に配せられたことや、天智天皇かつて内大臣藤原鎌足に詔し「春山萬花の艶、秋山千葉の彩を競ひ憐れむの」御題を賜はつた時、額田王が歌を以て判ぜられたといふ有名な長歌などが萬葉の四に出てゐる。

ぬすびとれんが 盗人連歌（連歌盗人）

狂言 三人 シテ 半上下 腰帶  
亭主 長袴 小さ刀  
アド 半上下 腰帶

連歌狂の兩人、連歌會の費用に事を缺き、さる富豪の宅へ盗人に入り、發句を書いた懷紙を見て飲美おく能はず、思はずそれを立句にして二人で連歌を始め、主人が之を見つけたが此亦劣らぬ連歌好きとて却て酒肴をもてなし太刀刀を與へてかへすといふ。

ネの部

ネオロマンチズム

自然主義の洗禮を受けたロマンチズムで、明治末から大正へかけての文學の主流を爲すもの。明治期に於ける代表作家と作品は鈴木三重吉の小鳥の集・千鳥・赤い鳥・山彦等凡べて初期の作品、小川未明の愁人・緑髪・惑星・闇・少年の笛・白痴・魯鈍な猫・廢墟・物言はぬ顔などである。

ねぎしは 根岸派

正岡子規が俳句革新の餘勢を以て短歌の革新を叫び、客觀的寫實を主張して萬葉振を鼓吹し、井手曙覽・平賀元義の歌を推稱したので、當時彼が根岸の寓に出入する歌人の一派を根岸派といつた。伊藤左千夫・長塚節・香取秀真などはその主なるもので、後のアララギ派もこの派の成長したものである。

ねほけせんせい 寢惚先生

なんぼ「太田南畝」を見よ。

ねんさん 年山

ためあき「安藤爲章」を見よ。

春のけしきを

白雲の上より見ゆる足引の山の高嶺や三笠なる

らむ

山里の春の夕ぐれ来て見れば人あひの鐘に花ぞ

散りける

のうがく 能樂

室町時代謡曲に合せて演ずる一種の劇で、その演技は在來の田樂・猿樂・久世舞・亂舞・幸若舞・延舞・宴舞・曲舞等を折衷し、謡曲の文詞・曲節と相待ちて一個偉大なる綜合藝術を構成した。徳川時代には之を武家式樂とし、現代期に入つても譜紳有閑の人々の遊藝としてもてはやしてゐる。今春・寶生・喜多・金剛・觀世の五座があつて、觀世が一番廣く行はれてゐる（正田章次郎能樂大辭典同附圖、大和田建樹 能と謡）

のちのえのしやうくわら 後江相公

ともつな「大江朝綱」を見よ。

のちのすずのや 後鈴廼舎

はるには「本居春庭」を見よ。

のぶあき 源信明

一五七〇—一六三〇、延喜

ノの部

のういんうたまくら 能因歌枕

能因法師の著で、古歌に表れた名所や歌詞の解説考證を記したものである。随分僻説もあるが中古には之を五家髓の一にかぞへ、今日でも古今集などの解に古註の例として引用せられてゐる（歌學文庫卷三）

のういんほふし 能因法師？

平安朝末期の歌人。俗名を橋永愷云とひ、橋諸兄十世の孫忠望の子で、兄肥後守元愷の養子となり、文章生となりて肥後進士と稱す。歌道を藤原長能に學び、剃髪して能因と云ひ、その庵攝津の古曾部に在るより世に古曾部入道と云ふ。その著に玄々集一卷あり、花山院以下の諸詠百六十餘首を集めてゐる。又、歌枕・八十鳥記も彼の作であると云ふ。

歌は後拾遺集に三十餘首、新古今集に十首その他の諸集にも散見してゐる。

都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白河の

關 心あらむ人に見せばや津の國のなにはわたりの

一〇—天祿元、六十一歳

公忠の子、朱雀・村上・冷泉の三朝に仕へ、四位陸奥守に至る。歌は後撰以下の諸勅撰に採られ別に源信明臣集一卷（群二四九、九、六〇八—六一三、續國五五二—五五六）がある。

のぶさね 藤原信實？

鎌倉時代初期の歌人。右京大夫隆信の五男で、正四位下左京權大夫さなり、攝津守に任ぜられ、後出家して寂西と號した。その味は信實朝臣集（丹叢五五）の外新勅撰（二〇）・新後撰（一四）・續古今（二六）等の諸集に入つて居る。彼は又父と共に似繪の名人で後鳥羽院隱岐へ遷幸の際には特に召されてその御肖像を御寫し申した（増鏡第二新鳥もり）その父隆信、その女少將ノ内侍亦和歌を以て聞え、謂はゞ和歌はこの家にとつて父祖傳統の所長であり趣味であつた。

のぶつな 佐々木信綱（竹柏園）

六—

伊勢の人、家學をつぎ十七年東大文科古典科を卒業、孜々として古歌・古典の研究につとめ多くの後進を指導して居る。中にも雜誌「心の花」を機關にして多くの歌人を養成し、斯の趣味を普及したること、自ら穩

健清新の歌範を示したと、和歌史の研究・帝國歌  
學史・近世和歌史の著述及び嚴父の業をついで續日本  
歌學全書や校註和歌叢書の校訂によつて斯道研究の水  
先案内となつたこと、校本萬葉集以下多くの古典の典  
據的なものに體系を解説して復刊したことは永く文學  
史上に残る功績であらう。

**のぶとも 伴信友** 二四三三—二五〇六、安永

二—弘化三、一〇、七十四歳

若州小濱に生れ江戸に住む、本名山岸洲五郎立入、遂  
に本居宣長の學風を慕ひ、その門下村田春門を介して  
名簿を伊勢に送る。中途不幸にして宣長病歿、嗣子大  
平その篤志に感じ特にその旨を宣長の靈前に告げて死  
後の師弟の因みを堅めた。で、その後も度々音信して  
故大人(宣長)の遺説を問ひ大に益する所があつた。  
彼は又平田篤胤とも親しかつたが後、故ありて之と義  
絶した。彼は元來孤獨を好む人で多くの弟子を教ふる  
ことを好まず、獨り書齋に幽栖し、神疲るれば自らそ  
の好むところの茶を煎じて楽しみ、終生コツコツと筆  
を執つた。博覽強記、加ふるに精力家であつたから  
歴史・神道・語學・國文に關し百餘種も有益な述作を遺  
した。

歴史 長等の山風・殘櫻記・松の藤浪・史籍年表  
古文 倭姫世紀古文考證・上野三碑考  
語學 假字本末  
隨筆 比古婆衣

等は殊に有名である(國刊一期、伴信友全集五冊)  
**のぶな 中山信名** 二四四七—二四九六、天明

七—天保七、一一、一〇、五十歳

徳川時代塙保己一の高弟として故實考證家として有  
名。常陸の人、通稱平四郎、字は文幹、號は柳州(本  
所柳原に居たので)本姓は坂本だが文化六年幕府の士  
中山家を嗣いで七十俵五人扶持を頂戴した。幼にして  
強記殊に太平記の如き一字一句も誤らず暗誦したので  
人々は「太平記童」とよんだ。長じて塙保己一の門に入  
り、師を扶けて多くの秘本珍書を探し出し、和學講談所  
で諸生を教授し、群書類從の校正をした。その著約三  
十種多くは考證學に屬したものである。

**のぶみつ 栗原信光**(維新の際は「武田  
姓」を名のつたといふ) 二四四二—二五三

〇、天明二—明治三、一〇、二八、八十九歳

上野の人、早く屋代弘賢の門に入り主として考證學に  
趣味を持つてゐた。十六歳の時東叡山の僧に従ひ、京

や奈良を歴めぐり、古社寺の舊藏にかゝる古文書古器  
物を見て數卷の考證を綴つたが、時勢に適せずして公  
刊の運びに至らなかつたといふ。彼が一代の心血を濺  
いだものは令全部の講義で、鳥津家の庇護の下に浩翰  
な稿を起し、その内軍防令は已に出版せられたが、之  
が全部の上梓を得たならば斯界に多大の裨益を與へる  
であらう。職原鈔私記・大内裏圖・國史年表・鎌倉武鑑・  
日本外史正誤・重修眞書太閤記等専門の著の外に柳庵  
隨筆・柳庵雜筆等その述作四十餘種ある。

**のぶよし 刀利宣令?**

奈良朝の學者、學を以て文武・元明・元正の三朝に仕  
へ、大學博士・東宮舍人に任ぜられた。その詩は懷風藻  
にある(懷風藻目次に正六(群本正七)位上伊預掾刀利  
宣令二首とあり本文に年五十九とある)

**のりと 祝詞**

上代神前に告白する純國文體の祭文で、奈良朝以前の  
散文の代表的なものである。

(一)本質 之に三種の見解がある。

I 祝詞即祭詞 本居宣長

神もがまくるばかりのよい詞を選んで調子を整へ  
た文である。

2 祝詞即政令 鈴木重胤

……「天下の大御政の御制度書なり……眞に天下  
に比類なき古語にして朝家の政令民用の綱紀此祝  
詞に悉く備はれり實に類なき寶文なりかし」

3 祝詞即宣命 平田篤胤

祝詞は「のりた(こま)の約だ(眞淵)とも」「のりま  
き」との約だ(宣長)ともいふが何れにしてもの  
る「宣る」分子があることは否定するわけに行か  
ぬ。武田祐吉氏もその「上代國文學の研究」に「……  
天神もしくは天皇の宣命と解すべく一面から見  
れば祝詞即宣命といふ義も成立する」といはれ  
た。

「宣り賜べ」にしても「宣り説き」にしても語原から謂ふ  
と二の見解が正しいが、歴代朝廷のこの祝詞を扱はれ  
た實例からいふと一の宣長の見解が正しい。要するに  
上代祭祀の時神前に告白する式辭(祭文)と思つて居れ  
ばよろしからう。

(二)淵源としては普通岩戸隠れの時の天兒屋根命の朗讀  
せられたふさのりとこと「太諄詞」に始まるといふが  
尙それ以外左の事項も淵源として考へられる。

I 祭政一致の俗

2 汎神論的信仰 竈にも門にも火にも道路にも一切 萬有悉く各之を支配する神ありとの信仰。

3 神ながらの道と崇祖の俗

4 言靈の信仰 美辭をつらねるまその辭のくしき力 によつて轉禍爲福を得べしとの信仰。

5 従前祭禮の様式化 已に神武天皇が富見の丘で祖 先を拜せられた時何等かのお詞があつたものと思 はれる。もしそのお詞を文字化したならば是れ祝 詞の原始的なもので神武以後の御歴代とても必ら ずさうしたお祭辭をお唱へになつたことであら う。顯宗天皇が御幼時播磨に御齋時、舞はれ た室壽言などは餘程節奏的なものであつたらうが 今傳はらない。けれども在來かうした前驅があつ てそれを統整しそれに様式を附與せられたものが 即ち祝詞であると見るのが最も妥當であらう。

6 運命觀罪穢觀の發達

(三) 種類と分類

延喜式載する所の祝詞は左の通りである。

新年祭・春日祭・廣瀬大忌祭・龍田風神祭・平野 祭・久度古開・六月月次祭・大殿祭・御門祭・六月 晦日大祓・東文忌す部献儀横刀一時呪・鎮火祭・道

饗祭・大嘗祭・鎮御魂齋戸祭・伊勢大神宮・二月 祈年六月十二月次祭・豐受宮・四月神衣祭・六月月 次祭・九月神嘗祭・豐受宮同祭・同神嘗祭・奉入齋 内親王時詞・遷奉大神宮時詞・遷却崇神 祭詞・遣唐使時奉幣・出雲國造神壽詞

(この中よく引用せられる名篇は出雲國造神壽詞・大祓 詞・大殿祭・祈年祭・御門祭等である)

尙これ以外左の數篇も祝詞の部類に入るべきである。

延喜式 十六卷 追儺祭文

石清水文書中 寶龜四年正月十五日和氣清磨の告文 貞觀七年四月十七日の告文

臺記別記中康治元年大嘗會の中臣壽詞

之を分つに

1 製作の新舊により

賀茂真淵は大體左の如く推測した

舒明天皇の御代 出雲國造神壽詞

天智天武の兩朝 大祓

文武天皇の御代 崇神遷却祭詞 大殿祭

奈良朝初期 祈年祭、龍田祭、廣瀬祭

本居宣長も一々は云はないが大祓・大殿祭・御門祭など は神武の御代已に在つたものであらうと云ひ、六人部

等と消極的に災禍を豫防し罪穢を祓除する事を祈 るもの(大祓詞・鎮火祭・遷却・崇神祭等)とがある。

5 祭神により

特殊の一柱の神が皇祖神か天神地祇の全體かによ つて別つこも出来る。祈年祭の如きは祭神三千 一百三十二座となつて居る。

(四) 修 辭

1 形容の莊麗なこと

辭別きて伊勢に坐す天照大神の大前に白さく、皇 神の見はるかします四方の國は天の壁立つ極み國の 退き立つ限り青雲のたなびく極み白雲のおちる向伏 す限り青海原は棹かち干さず舟艫の至り止まる極み 大海に舟滿ちつゞけて陸より往く路は荷の緒縛堅め て根岩木根ふみさくみて馬の爪の至り留まる限り長 道ひまなく立ちつゞけてさき國は廣くさかしき國は 平らけく遠き國は八十綱打かけて引きよする事の如 く……(祈年祭)

2 疊語の多いこと

明妙照妙荒妙。白き馬 白き猪 白き鶏。

神魂 高御魂 生魂 足魂 玉留魂。

3 美稱の多いこと

是香も大祓詞について同様に云つて居る。

(けれども時代の新舊を定めることは今日に在つては 困難である。といふのは已にその曲據たる延喜式その ものに不純の分子があるからで、これが弘仁・貞觀二 式の集成といふに止まるならさにかく撰者の臆測で若 干の新分子を加へたと觀られて居るのだから全く古式 そのまゝ傳へたものとは信ぜられない。唯本文の體 様を仔細に考察するより外時代考證の有力な手がかり がない)

2 告白者により

天皇直接に告白せらるゝものと間接に、臣下をし て告白せしめらるゝものとある。祈年・月次・新 嘗などは定つて臣下がよんだ。

3 文體と告白者と關聯して、

祝詞はその結びによつて分けると「もろく聞こ しめせと宣る」と以ふ宣命體と「……申し給はくと 申す」といふ上奏體とあつて前者は中臣氏が白し て天祖神を祭る時に、後者は齋部氏が白して重に 有形物が神格化した祭詞によむ。

4 内容により

積極的に幸福を祈るもの(出雲國造神壽詞・祈年祭



八束穂 いかし穂 生日足日

4 縁起を祝ふ詞を用ひること（言靈の信仰から）

手？長の御代に

朝日の豊榮登りに稱へごとをへまつらくとのる

5 對 句

朝には御門を開き奉り夕には御門を閉ぢ奉りて。

下よりゆく者は下を守り上よりゆく者は上を守り

谷蝶のさわたる極み 鹽沫の留る限り

又半對句とも謂ふべき、一部對語にして一部共通語

を含んだ句の對偶も多い。

甘菜 辛菜。鮭の廣物 鮭の狭物

奥津藻菜 邊津藻菜。

（鈴木重胤、祝詞講義・武田祐吉氏、神と神を祭る者の文學・次田潤氏、祝詞新講）

のりなが 本居宣長 二三九〇—二四六一、享

保一五、五、七—享和元、九、二九、七十二歳

伊勢の國、松阪の里に數室の平屋建、瀟洒に、赤紐に數顆の鈴を繫いで家づとに頰つ處、是れそのかみ宣長が讀書と述作にあけくれた鈴廼舎の跡である。彼の翁昔書齋裡に没頭し、氣倦み神疲るれば件の鈴を鳴らしてその音に自ら慰めたまふ。

彼が先祖は平家で、池大納言頼盛卿五世の裔小津三四

右衛門定利の子、江戸の通油町に木綿織の出店を開い

て居たが父が病死と共に店運衰へ、遂に店をもたゝん

でしまつた。けれども彼の母村田勝子は非常な賢母で

彼の性格を見貫いて「到底商賣で、立つて行ける人間

ではないから醫師にしよう」さて京都に出して武川幸

順についてその方を學ばせた。宣長の修養はこれより

多方面に亘り、即ち、堀景山に漢學を、森河對馬守章

尹に和歌を（和歌はこれまで國の宗安寺の法幢和尚に

も添削を乞うてゐた後には有賀長州にも習つた）學び

などしたが彼の生涯に至大の影響を與へたのは賀茂眞

淵であつた。それは歸郷の後、三十四歳の夏五月のこ

とであつた。縣居の翁が伊勢參宮のことを傳へ聞いた

彼は取るものも取敢ず翁に會ひに行つたが、往きには

會ひ得ず、還りにやつと一夜の會見を遂げ之より古典

の研究に心を傾け、文書の往復によつて翁の通信指導

を受け、拮据營々三十有五年にして不朽の大著古事記

傳を完成した。古事記の本文解釋は勿論、古語を研究

し古情を察知する上に於て、かばかり精細適確なる好

著ありとは思はれない。彼以後幾多の古事記學者が輩

出したが、今におき古事記傳以上に一步でも踏み出し

得たものは乏しい。

その他源氏物語玉の小櫛・歷朝詔旨解・萬葉集玉小琴・

古今集遠鏡・新古今集美濃の家づと等何れも訓詁の書

として後進を裨益して居る。

又國語學にも一新記録を提供し、「詞の玉の緒」の用言

についての研究、「天仁遠波紐鏡」の助詞論、「字音假字

用格」など文法史上特筆すべき好著である。

古神道に關しては「直日靈」「玉櫛笥」等の著があり、

彼が古典主義的思想・國粹主義的思想を盛つてゐるし、

文章不用意の裡に洗煉の妙味をこめてゐる。

彼は物語和歌に關して従来の勸懲主義以外別に「物の

あはれ説」とも謂ふべき純文學的見解を立てた。「物語

や和歌は主として、物のあはれを寫したもので、儒教の

ためにするに非ず、道教のためにするに非ず、勸善懲惡

のためにすることなくして、作者が物のあはれに感じ

た心持を表現して讀者をして十分にそを感じせしめるも

のだ」と彼の論旨は要するにこれだ。そこで和歌はあ

くまで調を整へ語を美しくせよ、換言すれば新古今集

を目標とせよと謂つた。這般の歌論は石上私淑言にあ

り、國歌八論評・紫文要領等にもある。歌論に比べる

と彼の歌そのものは劣つてゐるとの評があるが、それ

でも味や文章を見ると流石にかいなでの歌人、文人で

はまねられないものがあるのは蓋しその學殖と人格の

せいであらう。鈴廼舎集は即ちこれ等の歌文を載せた

家集である。歌には、

雲と見し花はあとなき有明の月にのこれる峰の

春風

旅まくら夢の名残の鳥の音も都に似たるあかつ

きの空

年のはじめによめる

さし出る此日の本のひかりよりこまもろこしも

春をしろらむ

（還曆の折自畫像に讀して）

しきしまの大和心を人とはゞあさひに匂ふやま

ざくら花

（四十四歳の時の自畫像の傍に花瓶に

櫻をかけた繪を書いて）

めづらしき高麗唐土の花よりもあかね色香は櫻

なりけり

（彼は西行以來の櫻愛好の歌人であつた。彼が櫻を愛

したのはもとより趣味であるが、その趣味の基づく所、

一半は國粹主義的見解から、櫻を以て國民性の象徴と

看做した點にあり、一半は彼が吉野の櫻を度々見た故であらう。彼は吉野、水神社の申し見であつた。

汝が國にこの花ありやとから人に櫻を見せて答  
きかばや  
咲にほふ春のさくらの花見てはあらぶる神もあ  
らじと思ふ

世にあればことしの春の花も見つうれしきものは命なりけり

さすがまた嬉しきふしもまじる世にうきことばかりかぞへられつ、

いとひても物の淋しき夕暮は浮世こひしき山の奥かな

かり〜に遊ぶいとまはある人のいとまなしさて書よまぬかな

雪消えて青むと見えし野邊の色を又も埋むる春霞かな

里遠みたどる末野の夕ぐれにしるべ嬉しく立つ煙かな

(彼の歌集は鈴屋集以外、自選歌・玉鉾百首・枕の山・紀見のめぐみ等がある)

隨筆「玉かつま」は彼の文章を見るによろしく、その

想今日より観ては時に古情に拘泥し過ぎた嫌はあるが大體彼が多年の研鑽から滴らした醍醐味とも謂ふべく近來益々その愛讀者が増しつゝある「述懐」花のさだめ」などは教科書にもよく引用せられてゐる。

(本居宣長のことについては本居豊顯校本居宣長全集七冊・本居清造編本居宣長稿本全集二輯・國學者傳記集成五三六―六五四を見るがよい)

### のりなが 藤原教長?

平安朝末の歌人であり書家である。關白藤原師實の孫に當り父を忠教といふ。久安五年正三位、保元元年左京太夫、殊に崇徳上皇の御信任を得てゐたが、保元・平治の騷ぎに連坐して一時常陸の浮島に流され。後應保二年(一八二二)赦されて歸京、剃髮して高野山に入つたといふ。その著には書法口傳の書として才葉抄一卷・古今集を註した古今集註などがある。最近京都大學の圖書室に入つた古今集註は原本よりも六十餘年、三度目の寫本だとか、尙この書並に教長の傳に就ては同大學の吉澤義則博士の紹介がある(丹叢三九―四一前參議教長卿集吉澤義則氏國語國文の研究一〇一―一一五)のりなが 藤原範永?

後冷泉・後三條の御代の頃の人で、父は仲清、地位は

## ハの部

### はいおう 梅翁

そういん「西山宗因」を見よ。

### はいかい 俳諧

室町時代、山崎宗鑑・荒木田守武等によりて創められた詞形で、在來の連歌と少しも變りなく唯だ用語を自由にし制約を平易にし、つまり連歌を一層民衆化したものである。

徳川時代松永貞徳はこれ等先輩の俳風を集めて「御傘」を書き斯道の式目を示し多くの後輩を導いた。この一派を古風と云ひ別に西山宗因の立てた談林風といふのも盛大となり、元祿芭蕉が出て正風を唱へ從來の詞想の末にすがつて機智滑稽を旨としたものを、改めて情趣の融合、幽玄閑寂の趣致を奨励し以て俳諧の地位を

ば他の高級文藝と同一水準に引き上げた。その門弟各所に榮え嵐雪の雪門・其角の江戸座・支考の美濃派・涼菟の伊勢派など皆一時賑はうたが段々市井惡趣味の月並調に墮落し、一時萎微沈滞の氣味があつたが天明年間谷口蕪村が出て正風を中興し、更に詩趣と史趣と畫趣とをとり容れて新生面を開き大島蓼太・高桑闌更・加藤鳴臺・三浦樗良等幾多の名俳がついで出た。徳川末期天保の頃には櫻井梅室・田川鳳郎・成田蒼虬等が開えたが、調漸くに月次となり復た元祿天明の盛を見る事が出来なかつた。明治に入つてからも其角・老鼠・二堂などは此月並宗匠の衣鉢をついで祭えたものだが、廿二年前後正岡子規が出て始めて新俳句を唱へ之を先驅として數種の俳團が生れ段々盛大になつたが子規は連句には藝術的價值なしとして専ら發句即ち五七五の獨立詩形を作つたので明治には俳句は盛んであつたが俳諧即ち連句は振はなかつた。子規歿後その弟子碧梧桐や萩原井泉水などによつて新傾向句が唱へられ、大正末から現昭和期にかけては連句の研究もだん〜試みらるゝやうになつた(思ふに俳諧の興味は發句より舉句に至る間の風雅な詞藻の路の轉々紆餘するにあると同時、王朝の公卿女官が「西の京は荒れて」さ云へば

直ぐ「瓦に松はありつや」さ出るやうに一分も透かさぬ風流な對話のこつを俳言でこなした點にもあつたらう。俳諧の字義は玉篇に「俳、皮皆の切、雜戲也。諧胡皆ノ切、和也合也、調也、偶也」とあり、史記滑稽列傳東方朔のことを記した處にもこの語があつて滑稽の意がある。我邦の俳諧歌も「なかしみあるうた」の意だから原始俳諧が機智滑稽を旨としたのも左もあるべきだと想ふ。が、用語と作法の束縛から解放された詞形として發生したこの俳諧も、今日初心の人々から見れば可なり作法や用語の束縛がある。その一例をいふと、始めの五七五を發句といひ次の七七を二の句又は脇句といひ、次の五七五を三の句と云ひ以下五十句でも百句でも千句でも續けて最後の七七を擧句と云ふ。二の句の七七は發句にも三の句にも聯接しなければならぬ。

發句 木嵐の身は竹齋に似たる哉  
 二の句 誰そやとばしる笠の山茶花  
 三の句 有明の主水に酒屋つくらせて  
 さあれば之には二首の歌を以て内容づけられたと同じである。

木嵐の身は竹齋に似たる哉たそやとばしる笠の

山茶花  
 有明の主水に酒屋つくらせてたそやとばしる笠  
 の山茶花

連句数の種類は御傘によると

- 一、萬句・二、千句・三、十百韻(別式)・四百韻・
- 五、米字(八句式)・六、七十二候・七、易(六十四句式)・
- 八、源氏(五十四句式)九、四十四・一〇、歌仙(三十六句式)
- 一一、廿八宿・一二、箆(二十八句式)・一三、廿四節・
- 一四、短歌行(廿四句式)・一五、半歌仙(十八句式)・一六、
- 表合(八句式)・一七、三ツ物(發句、脇、第三をいふ千句興行の時は豫めこれだけを作つておいて會席にかけるとあり、殊に多いのは歌仙と百韻まで五十韻之に次いで多い。之を懷紙に認めるにも作法があつて、百韻ならば半紙二つ折を四枚閉ちて第一枚の面八句初裏に十四句第二、三枚目の表裏と第四枚目(之を名残といふ)の表裏は各十四句、名残裏は八句と極つて居り歌仙式ならば二枚閉ちて別表の通りである。
- 一ノ折……初裏 一八

二ノ折……	二表	一四
三ノ折……	三表	一四
四ノ折……	名残表	一四
一ノ折……	初裏	一六

歌仙	二ノ折……	名残表	一六
----	-------	-----	----

(佐々政一連俳小史・岩本梓石・宮澤朱明新撰俳諧辭典の巻頭連句作法 國刊一期新群七・阿誰軒編漆山天童補俳諧書籍目録一  
 古類文學部一、一一七四—一四三一、同一一八〇—一八三俳諧連歌の別)  
**はいかいあきのことゑ 俳諧秋の聲**  
 俳園「秋聲會」の機關雜誌「秋聲會」を見よ。  
**はいかいうもれぎ 俳諧埋木 一卷**  
 北村季吟が俳諧初心の爲めに執筆したもの。内容は俳諧の事・六義・發句の切字・本歌の發句・手爾於葉・皮肉骨の俳諧・親句疎句・十體などである。明暦二年(二三一六)に成り延寶元年(二三三三)版行す。  
**はいかいか 俳諧歌**

萬葉集の戲歌の系統を曳いてなかしみある歌を云ひ、古今集に始めてこの目を立て六十餘首、後拾遺集もこの部分を設けて居る。古今集に「俳諧歌」とある「誹」は甫尾の切で「ヒ」といふ音で「そしる」と訓むから「俳」の誤であらうといふ。

山ぶきの花色ごろもぬしやたれ問へど答へず口  
 なしにして 素性法師  
 これなどはなるほどなかしみがあるが  
 富士のれのならぬおもひに燃えば燃え神だに消  
 たぬ空し頬を きのめのと

などは俳諧歌に入れるのは如何はしいと思ふが、とにかくこの歌態は遙に徳川期の狂歌に先驅するものとして注目に値する(古類文學部一、五八一—五八六)  
**はいかいてさん 俳諧御傘 十卷**  
 おからかさ「御傘」を見よ。  
**はいかいらし 俳諧詩**  
 やまとし「大和詩」を見よ。  
**はいかいらしきもく 俳諧式目**  
 俳諧興行についての一般規定をいふ。もと連歌の式目を適用してゐたが、松永貞徳が御傘を出してから、之を金科玉條とし、以後多少の増減出入はあるにしても

大體この書の規定が襲用せられた。

**はいかいしんしき** 俳諧新式

「芭蕉翁廿五箇條」を見よ。

**はいかいたまもしふ** 俳諧玉藻集

谷口蕪村の編、女流の俳諧を集めたもの。

**はいく** 俳句(發句)

俳諧の最初の發句を獨立させた詩形で、室町期宗鑑・

守武の頃から始まる。

手をつけて歌申し上げる蛙かな

宗鑑

落花枝に返ると見れば胡蝶かな

守武

それから以後俳諧と略同じ様の變遷を経て今日に及んだ(池田常太郎日本俳諧史・齋藤溪舟日本俳諧史)

**はいくわ** 中西梅花

文學界同人の詩人として聞え、「梅花詩集」の著がある。その中「九十九の姫」は殊に愛誦せられた。二十二年から廿四年にかけては小説をも作り、讀賣新聞や都の花に發表した(植紅葉・むとり玉・今は唯・豊年萬作等)(博文館、新體梅花詩集)

**はいくわむじんさう** 梅花無盡藏 七卷

五山文學の一佳作で僧瑞九の詩文集である。卷一・二・三・に七言絶句、四に頌、五に頌並に雜體詩、六・七

に雜文を入れてある。別に自ら之を註したものと及び本光國師の註したものもある。

今續群書類従三三八に入る(同じ名の長田徳本の著にかゝるものは醫藥の處方を記した二卷本で之とは別である。尙「瑞九」を見よ)

**はいげつだらう** 梅月堂

香川宣阿の家の代々の家號である。

**はいしつ** 櫻井梅室 二四二九―二五一二、明

和六一嘉永五、八十四歳

天保の俳匠で加賀の人。名は宣弘(又能充)號は素志・方圓齋・遅速庵・餘花園・寒松庵・相應軒・陸々道人など云ふ。高桑閣更の門に學び京・江戸の兩所に轉々して晩年京に終る。

彼が俳風は所謂月並調の俗惡趣味に墮してはゐるが、その磊落にして他を待つ厚き性格は多くの門下を擁して實勢力はなかく侮るべからざるものがあつた。

この宗匠(梅室のこと)未だ壯年ながら、いかにも道に深切なれば、今の程に上手に至るべし。さて今もはら人に稱せらるゝ事は、かれ甚貧家なるに小兒あまたありて明日の事も覺束なきを、行脚などに尋ねられては、おのが食を分ちても是をとゞめ、他に行

時は妻又是にかはりて主となり、しゐて一夜の草靴を休めしむれば、其志をしるものたれかれ語り繼て其美をあぐればなるべし(栗木雜記)

その著に「梅室句集」「梅室付合集」などがある。

冬の夜や針失うて恐ろしき

日は西に梅ぼるくとこばれけり

**はいしなにしんわう** 祿子内親王?

前齋院とも六條齋院とも申す。後朱雀天皇の第五皇女で寛徳三年三月に卜定せられて賀茂齋院となられた。性和歌を好ませられ屢々その邸で歌合を催された。御歌は詞花・續古今・新拾遺などに入り、歌合としては、

祿子内親王櫻柳歌合 (群二二三、八、九三六)

同 夏歌合 (同八、九三七―九三九)

同 庚申歌合 (同八、九三五―九三七)

(治暦三、九、九) 祿子内親王家庚申歌合 (五番、群一八一、八、四六一―四七)

(治暦四、五、五) 同 歌合 (十二番、同八、四七一―四八) などがある。

**はいしなにしんわうせんじ** 祿子内親王

宣旨?

源頼國の女で後朱雀皇女祿子内親王(世に前齋院又は

六條齋院と云ふ)に仕へ歌文に長じその味後拾遺・新勅撰などに入り、有名な「狭衣物語」も多分は彼女の作だらうと謂はれてゐる。

**はいしやうろん** 梅松論 二册 (一に三卷)

足利尊氏の發展を飛梅に譬へ、その子孫の繁榮を松の干とせに譬へた足利氏諷歌の文學で、此點道長・藤原氏に對する大鏡・榮華といつた趣があるが、語彙に口語を多く交へて戦記物と鏡物(大鏡増鏡等)との間の兒のやうな趣があるが新田足利の戦争については信憑すべき記事に富むを以て、今も史學者が参考として居る。

南方紀傳・櫻雲記と共に南朝三部書と稱せらる。著者不詳(足利方の家來筋であらう)年代は光明天皇の貞和四年(二〇〇九)頃と謂はれてゐる(新釋日本文學叢書第一輯第十卷・百萬塔)

**はいせい** 高瀬梅盛 二二七一―二三五九、慶

長一六一元祿一二、八十九歳

京都の人、歌道に精しく又俳諧の一明星であつた。通稱太郎兵衛、佗心子と號し、後に薙髮して宗入居士といふ。俳諧の方は松永貞徳の高弟である。その著に口眞似草・類船集・早梅集・貞享三ツ物・山下の水・落穂集・木玉集・捨子集・鸚鵡集・俳仙・古鏡・さゞれ石・なな

留・狂遊集・三十六人仙・七十二物諍・道連集などが  
ある。

**ぼいたん 杉浦梅譚** 二四八六―二五六〇、文  
政九―明治三三、五、七十五歳

名は誠、元徳川幕府の士、明治維新後静岡藩公議人。  
開拓判官等に任ぜられたが、十年その職を辭し詩作を  
楽しんだ。蓋し彼は早くより文武の兩道に勵み殊に詩  
の方は横山湖山・大沼枕山等に學んで造詣の深いもの  
があつた。十二年から稻津南洋・石川櫻所・中澤機堂・  
佐々木支陰等と共に晚翠吟社を創始し、吟咏次第に高  
華逍逸の境に達した。遺稿を梅譚詩鈔と云ひ上下二冊  
ある。

**はいぶん 俳文**

俳句の趣味を以て作つた散文で、用語は雅語・漢語・  
俗語を混へ、省略句を繁用し和漢の引き事や引用語句  
を頻發し、これ等素養のある人が見ると興味ある文致  
であり、源氏物語が歌境と歌詞とを併せあげて歌よみ  
の手引に好適なやうに、これは俳境と俳句とを併せ示  
して俳句初心の徒には入門書として適して居る。芭蕉  
の奥の細道・許六の風俗文選・支考の本朝文鑑等があ  
るが、殊に名高いのは奥の細道と也有の鶴衣とである。

(俳諧文庫一九、俳諧叢書五、名家俳文集、古類、文  
學部一、二五四―二五八)

**はいみ 俳味**  
俳句趣味といふこと(禪味、茶味などと並び稱せら  
れる)

**ぼらいつ 杉田望一** 二二〇八―二二九〇、天  
文一七―寛永七、六、五、八十三歳

伊勢山田の人、盲人にして音律(殊に琵琶)に精しか  
つたが深く守武の遺風を慕ひ、傍ら貞徳の説をき、後  
日の伊勢風の先驅をなし、その門からは岡西惟中のや  
うな名俳を出した。

**はうらんわかしふ 芳雲和歌集** 一卷

徳川期堂上派武者小路實隆の家集である。實隆は當時  
最も世に顯れ、靈元院の如きは「古來の歌人と稱すべ  
きものは人磨・貫之・定家・朕弟子實隆のみと仰せら  
れた「芳雲」の題名も勅賜にかゝるもので、實隆は更  
にこの集を四季戀雜と部立して「芳雲和歌集類題」六  
卷を作つた。

**はうげつ 島村抱月** 明治四、一、一〇―大正七  
一一、五、四十八歳

島根縣の人、名は瀧太郎、島根裁判所書記の時代に同所

ドスレ長崎の「よかバツテン」等の類。

**ぼうしう 雨森芳洲** 二二八一―二三六八、  
元和七―寶永五、八十八歳

名は俊良、京都の人、木下順庵の門人、後に對島侯に  
仕へた。隨筆「たはれ草」は和漢混淆文體の佳作と謂  
はれてゐる。

**ぼうしんしふ 卯辰集** 四卷

元蕉門の俳人、楚常の編したものゝをその歿後立花北枝  
が元祿四年(二三五一)に板行した。内容は蕉門諸家の  
句を集めたもの(俳諧文庫一〇元祿名家句集)

**はうた 端唄**

徳川期、長唄に對して短篇の俗語を總稱したもの。例、  
春雨・天津繪・淺くとも・京の四季・鎗さび等。

**はうぢやうき 方丈記**

鴨長明の隨筆で、世の中無常の例として最近の天災地  
變を叙し日野山閑居の次第を記し閑居の室内、軒めぐ  
り、四圍の光景と快適を寫す。  
文雄勁にして流麗、情景共によく寫されて居る。註釋  
には、

加藤盤齋 方丈記澗説  
榎島昭武 方丈記流水抄

の判事島村文耕に見込まれて舞臺子となり、廿七年東  
京専門學校を優等で出、三十六年早大留學生として英  
獨に遊學、美學と演劇を研究し歸來早大に講義をつま  
げ、傍早稻田文學を復活し自然主義を紹介宣傳して一  
世文運の趨向する所を示し、坪内博士を助けて文藝協  
會に努力し、同會解散後藝術座を組織して西歐脚本の  
翻譯・新脚本の創作・劇場主との應待・諸俳優の監督指  
導・舞臺監督と三面六臂の活動をつまげて内地は勿論  
朝鮮滿洲までも打つて廻つた。大正七年松竹合名會社  
と合同の契約成立して少しく時間の餘裕を見るやうに  
なつた矢先に流行性感胃で斃れた。早稻田文學によつ  
て新しい文學運動に盡したこと、深みのある上品な沈  
着な面かも親切的な講義によつて幾多の學生に文藝の趣  
味を植ゑつけたこと、新美辭學・近代文藝之研究(學  
究的のもの)イブセンの人形の家・海の夫人・メーテル  
リンクのモンナヴェンナの外多くの有益な著譯を出した  
こと理論實際兩方面から新劇運動の急先鋒となつたこ  
とは氏の生涯をして光輝あり生彩あらしめる業績であ  
る(抱月全集八冊)

**はうげん 方言**

一國中或地方にのみ用ひられることば、京都の「さう

を始め近頃初心用として多くの述作を見る。この書長明の作でないといふ説もある。尙ちやうめい「鴨長明」を見よ。

ぼうとうに 野村望東尼 二四六六―二五二七

七、文化三―慶應三、一一、六、六十二歳

福岡藩士浦野勝幸の第三女、容姿も美しく歌も書も裁縫も刺繍までも巧みであつた。同藩の士野村貞貫の後妻として嫁ぎ、家庭も圓滿で廿七歳の時から夫と共に大隈言道の門に入つたが、歌は夫以上で言道も深く許して唯一の秘蔵弟子として居つた。四十歳の時家督を先妻の子に譲り、夫と共に福岡郊外平尾の向ヶ陵の山莊に隱遁したが、安政六年七月廿八日（彼女五十四歳）夫歿後は出家して（もと子）の俗名をそのま、望東尼と改めた。時恰かも國家内外多事、彼女は女ながら勤王の事に奔走し、老女村岡・平野國區・僧月照・高杉晋作七卿落の方々など皆深い交渉があつた。そこで幕府は彼女を疑ひ姫島（陸から五里の沖合）なる一室に幽閉したが、高杉晋作に救ひ出されて馬關に脱走しついで山口に迎へられ長州侯の厚き庇護の下に平和な晩年（ほんの暫らく）を送つた。

朝廷その功をめでて特に正五位に叙せられ、靖國神社

に合祀せられ、又彼女が三田尻の墳墓は三條公の御計らひに依て鄭重に手入せられ、向陵の舊居には遺弟山路清子の斡旋に依て記念碑も建てられた。家集を向陵集（註和歌叢書六、五八七―六二六）と云ひ、外に上京日記・姫島日記等の日記文がある、殊にその歌は師言道の影響を受けて趣味の清新なるもの多く、又その憂國の述懐には國士も及ばぬ慷慨淋漓の熱叫もある。

しばしだに物はおもはじそのまにも柳はもえて  
若はつのがむ  
一度は野分の風のはらははすば清くはならじ秋の  
大空

はうめい 岩野泡鳴 明治六―大正九、四十八歳

淡路の人、名は美衛、阿波の鳴戸の渦巻は氏の號でもあり、氏の生涯のシムボルでもあるかの趣がある。明治學院・仙臺東北學院などに學んでも少しも基督教信者臭はなく詩集「露じも」「闇の盃盤」に悲歌し神秘的半獸主義（三十八年）自然主義的表象詩論（四十年）一元描寫論（大正七年）に獅子吼し、小説境に手を入れて、耽溺・發展・斷橋・毒藥を飲む女・實子の放逐などを矢つぎ早に出し、脚本にも足を入れて解剖學者、淺間

の靈などを作り、學究的な述作にも力を入れて新體詩史・新體詩作法の克明な著があるが、之を一言すれば

明治の詩人・大正の小説家と謂つてよろしからう。

蓋しその藝術は天才的な詩味と熱烈な表現欲と強い自信と痛ましい家庭的不幸と人間味豊かな戀愛生活の有機的混融に成るものと謂ふべきだ、泡鳴全集十八冊

はうもつしふ 寶物集 七卷

平康頼の隨筆、治承元年（一一八三七）薩摩湯を出て同二年歸京、嵯峨の御堂に參籠して誰いふとなく「何物かこれ第一の寶なる」から話の緒口が開けて、隠れ簀・打出の小槌・黄金・玉・如意寶珠・子・壽命と色々持出し、結局佛に優る寶はないといふことになつた。なぞに佛が尊いか、女人の間に對して或沙門が三寶・六道・十二門を説く中夜も明け人も散じ沙門もどこかへ行つてしまつたといふ（野村八良氏鎌倉時代文學新論二四六―二八〇）

はうりやくかんき（はうれきかんき）保

曆間記 一卷

著者年代未詳、後白河天皇の保元元年（一一八一六）より光明天皇の曆應元年（一一九八）まで百八十年間のことを記し、保元・平治・平家の諸物語や増鏡などの註

釋によく引用せられて居る。

はうらう 放浪

岩野泡鳴四十三年作（大正八年七月改訂）の小説、氏が樺太で罐詰製造業で失敗し、文無して北海道へ歸つて、そこで放浪の生を送り、再び東京の文士生活に復歸する迄の自叙傳小説で、主人公田村義雄と云ふのが氏で、彼はその舊友の雑誌を經營してある氷峰にたよつたり、もとの友達で今教員をしてゐる所に寄食したり、道會議員の手先になつて北海道を巡視したり、學校の講演を頼まれて「世界の英雄は豊太閤と伊藤博文と僕とだ」と云つて氣ちがひ扱ひをされたり、敷島と云ふ遊女に打こんで耽溺もしたり、悲哀と、絶望と、自暴自棄と、あらゆる慘苦をなめ盡してとゞのつまり二度と東京の土をふむことになつた（泡鳴全集第一卷四一四―六六六）

はうゑん 方圓

ばいしつ「櫻井梅室」を見よ。

はかい 破戒

鳥崎藤村、三十七年から三十八年にかけての作の小説。「信州下水内郡飯山町蓮華寺の二階を借りて下宿してゐる一青年教員瀨川丑松といふがある。彼の素姓は穢

多である。父は彼を師範学校に入れる時「必ずこの素姓をあかしてはならぬぞ、家の爲め父の爲めを思ふならば家を棄て父を棄てて其方一人は人中に出て立派に出世をしてくれよ」と堅く戒めた。その戒めを片時も忘れぬ彼は師範学校卒業間なくこの町の首席訓導として赴任、生徒の信頼もあつく父兄や町方の氣受けもよいところから、いつしか嫉妬の魔がついて、その頃檢定出身の勝野文平といふは郡視學の甥といふので誰もが一目おいて居るのに、瀬川とその親友の銀之助だけが一向さうした敬意を拂はないのが癢でいつか機會があつたら之を陥れてやらうと考へて居る。この校の同僚に風間敬之進といふのが子澤山の貧乏ぐらしな上に郡視學や校長に取入ることもしない爲めに不日「老朽淘汰」の名目の下に減首されようとしてゐる。それを丑松は氣の毒がつて陰に陽に保護をしてやつたが、とど諭旨退職のうき目を見るに至つた。敬之進の暮らし向はいやが上にも困難になつた。それを見かねて丑松はいつも自分の財囊を傾けて救済した。それをまた敬之進の長女おしほがひどく感激していつか丑松と彼女とは戀に落ちた。その中彼は宿直の一夜窓外に父の聲がして「丑松—丑松—」と呼ぶのを幻想

して二度までも飛んで出たが出て見ると一向そんな様子がない。銀之助に云ふとそれは神經のせいだといふ。併しこれは不思議にも一種の凶兆であつてその翌日父死去の飛脚が來た。信州小諸の向町—それが彼の故郷である—北佐久一帯に散布する新平民の中でも彼の家は「お頭」と呼ばれる家筋であつたが彼の入學後父は獨その近くの西之入牧場に牛馬を飼つてそれを身過ぎともし、且つは慰みともして居たのが、或日手におへぬ暴れ牛を、永年手馴れた自信で驅りたてようとしてやり損ひ、追はれて木のうろまで逃げたが、とうとう逃げ場がなくなつて無慘にもその角先の犠牲となつたのであつた。その臨終にかけつけた弟に囑した彼への遺言も實にこの素姓を極力隠して人に語るなといふにあつた。葬式は亡父の希望通り、烏帽子が嶽の麓、この牧場の一角に營んで一切無事に片づいた時、猪子連太郎が丑松を尋ねて來た。猪子は丑松の師範時代の先生で、彼はその後政界に打つて出で今では立派な政治家著作家として知られて居る。そして彼も亦穢多であつたが、少しもそれを恥とせず「吾は非人なり、吾は穢多なり」と前置して述作論議に移るのがおきまりで、それを世間では毫も怪しまないのみか

寧ろそのことが彼の人氣を博する武器かとまで思はれた。丑松は大の猪子先生崇拜でその著述は一つ残らず熟讀して居る。今わざ／＼の訪問を受けて非常によろこんだが叔父は「あの人もこれ（親指を出して）だといふではないか、用心しろよ」といふ「ナニ大丈夫です」と笑つたもの彼は心では「先生にだけはこの事を打ち明けよう、でないとお當に先生と自分とが一つになれない」と思つて居つた、が會つて見れば話したいことや問ひたいことが澤山でついそれを打ち明けるまでに至らなかつた。猪子は近く改選せられる代議士運動の爲めに遊説してゐるので彼の政敵は高柳といふのであつた。丑松は例の郡視學が提灯持をして大威張で學校へ人を集めて空疎な演説をした高柳の風貌を思ひ出した。處が今猪子から聞くとその高柳が彼と同村の六左衛門（矢張り穢多）といふ富豪の娘と結婚するといふ。それは娘が美しいからとよりは運動の軍資に事缺いて物資の補助にありつきたいばかりの結婚であつた……然るに猪子の遊説が到る處効を奏して我黨の作戦不利と看た高柳一派は、卑法にも壯士を驅つて猪子を不意打してつひに絶命せしめた。この猪子の最期は美しい悲壯劇として多大の感動を與へた。そのこと

が丑松をして愈々父の戒を破つて自分も猪子先生のやうに「我は穢多なり」を標榜しようと思ひせしめた。學校に歸ると耳の早い文平の宣傳で「丑松は穢多だ」といふ風説が魔のやうに所々に叫やかれた。親友の銀之助は「ナニそんなことがあるものか」と相變らず純な友情で交はつてゐるし、お志保の誠意はだん／＼熱くなるばかりである……さ或日とう／＼その素姓を告白した（この最終の日、朝からの彼の教壇に立つ心持のところ二十一回—が實にしんみりと情趣に富んだ筆致で表現されてある）彼は告白して後一切を取片づけてこの校を去つた。文平は心筋に凱歌を奏したが、友人は彼を捨てなかつた。戀人も彼に背かなかつた。否な天までも彼を呪ひはしなかつた。やがて銀之助は彼の切ない戀をお志保に傳へると彼女は「穢多でも非人でもない戀をお志保に傳へると彼女は「穢多でも非人でもない戀を受け容れた。猪子夫人や猪子の親友の辯護士や、その辯護士の知人の富豪大日向の後見で彼と彼女はめでたく結婚してアメリカ、テキサス—その大日向所有地の管理として希望に胸を躍らせつゝ、爰にくもる小學校の白壁を見かへり、勝ちに縋を驅つて思ひ出の飯山を出發した」

この長篇を最後まで全身の努力を以て押し進めた作者の藝術的努勉、題材に對する眞摯な態度、主人公丑松の戒を破つてまで眞實を求めようとする近代的動機、信州飯山町地方の趣味ある地方色など多くの美點があつて、自然主義黎明期を代表する傑作と稱せられて居る（新平民を取材した點は後來水人社運動に先驅するものとも謂ひ得る）「お志保」は氏の大正期に入つての長篇「新生」の「節子」と相似た女性で容貌も悪くはないが寧ろ人格……清愛に活きる人間性の美はしい典型と謂つたやうな女性で、紅葉や露伴の描く女性に比べるさずつと複雑で進歩して居る。聞く、氏は之を小諸時代に作りあげたが、出版を引き受ける本屋がないので自費出版にしようと思つて、あの謹嚴な氏が態々神津猛氏を訪ひ、とうとう口で言ひ出し得ないで歸つて手紙で頼んで快諾を得、更に秦慶治氏（函館時代に物語）の幫助をも借りて出版したものだ。而るに一旦世に出ると非常な稱讃を得てどの書肆も出版を懇願した位であつた（藤村全集第三卷一―四六四單行本菊判半截三三五頁大正五年三月廿七日縮刷版新潮社）

はかせ 博士

「博識之士」が原義歟。

愚山人・太榮山人など云ふ。生れは江戸、深川高松通淨心寺の傍で産聲をあげた。父興藏は松平信正の家宰で子三人、彼はその中の季子であつた。

彼が生涯をそが内面生活から考察するに第一期は三十歳頃迄で、小主に仕へて窮屈な思ひをし、十四歳の時一夜、

木枯に思ひ立ちけり神の旅

と出奔、爾來主を換ふる、と數次、皆長持せず、父は病死する。兄は度々言ひきかす、方向をかへて山本宗英に學んで成らず、經を龜田鶴齋に教はつて又成らず、寧ろ小説を書いて一家を成さんと思ひ立ち、京傳の門に入り、寛政三年二十四歳の時「盡用而二分狂言」といふ處女作に師匠を驚ろかし、葦屋重三郎に寄食し、力士になれの妓樓の入婿になれのと勧められて劍れつけ飯田町の下駄屋の寡婦に入婿し、

文化元年 月水奇縁

同二年 石言遺響、稚枝鳩

の出世作に愈々著作専門の志を堅めるに至るまで、動搖から確定に、適たる讀書欲・發表欲から確固たる著作家的自覺にまでの展化を示した時期である。

第二期は彼の壯年期で、三十歳を境として性格急に一

- 一、奈良朝の大學に於ける或學科の教授の主任
- 二、「大學博士」の略稱（その項を見よ）
- 三、「はくし」とよんで明治以後學位令によつて授けられる學位

はぎぞの 芳宜園

ちかけ「加藤千蔭」を見よ。

はぎのや 萩の舎

なほぶみ「落合直文」を見よ。

はぎのやかしふ 萩之家歌集

萩の舎主人、故落合直文の歌集。

たく柴をよそにもとめてかへりけり 軒端の山の紅葉せしより

緋絨のよるひをつけて太刀はきて見ばやとぞおもふ山ざくら花

など、明治の新派短歌の濫觴と看做されるもの約一千首を含む（四六判三六〇頁、明治卅九年六月一日、明治書院）

はきん 曲亭馬琴

二四二七―二五〇八、明和

四―嘉永元、二、六、八十二歳

本名は瀧澤解、字は鎖吉、通稱は倉藏、後に清左衛門

別號は、著作堂主人・玄同陳人・信天翁・蓑笠・閑齋・

變し嚴格方正なる一君子、一學者として、重きを斯界に成し、松平冠山公以下多くの藩主より尊敬せられ蒲生君平・渡邊華山等有爲の交友を増すと同時に、纒かの感情の行き違ひから山東京傳・山崎美成寺と絶交し標致を高くして一世に睥睨した時である。

第三期は彼が五十八歳から晩年までの二十五年間で不幸續出の間に善戦健闘遂に筆の勇者としての閱歷を全うした。子宗伯死し、兄興旨ついで死し、その身も剃髮して篋民と稱し四ッ谷信濃坂に家居し傾城水滸傳を書いて初編花がら阿達が剃髮の辭に自己の感懷を託し、天保十一年の秋には書畫會を催して若干の金を得、家藏の書籍六十餘櫃六千餘卷を賣代して孫興邦の爲めに同心の株を買ひ與へ、文化十一年の正月（第二期の末）から起稿した八犬傳の創作に腐心して視力日毎に弱り段々文字を大きくし後には半紙半枚に四五行の大字を以て記し、更に失明の度進んでは男宗伯の婦土木村路女に代筆させて度々痼癩を起し「ながらへしかひこそなけれ」筆捨の松のことばも「の哀しい述懐をもらしながらも天保十二年秋八月、廿八年振にして百五卷の大作を完成した。

彼の學識は經典・佛乘・諸子・百家・傳記・小説・卜



筆・方醫の各方面に及び、加ふるに記憶力の確實永久なる巷間男女老幼の瑣事に至るまで一々心にとめ機に應じて運用を自在にした。

彼の小説は構想雄大、想像精緻、造るに汪洋の才氣と活脱の靈腕と健雅の筆致を以てし、その文章は光彩陸離・雅俗を折衷して諧調につとめ、抑揚あり、節奏あり、黙讀をして知らず識らず朗誦に至らしめる不思議の魅惑あり(彼が八犬傳を起稿するや、特に八犬傳の部屋なるものを設け、人形をおいて八犬士その他の人物の云爲行動を寫すにつれて丁度將基の駒を動かす様に進めたのであの長篇にも拘らず、一たん死んだ筈のものが又生きてゐたり、同じ趣向が二ヶ處も三ヶ處も出たりする様な長篇にあり勝の病弊を免れたと云ふ。但し之を今日の文學觀から評するなら彼の作品は其想に於て傾向的で餘りに勸善懲惡の作意が露骨過ぎ、彼の文章は餘りに想形二元觀に偏して修辭の爲の修辭に墮し、讀者をして滿飾飾式の美辭麗句に食傷せしむる嫌がある) 彼一代の述作凡て二百六十有餘(聞く東都の某書肆馬琴全集刊行の計畫があつて多年その原版本を集めてゐるとか、大南北全集が出る位なら彼の全集も亦是非刊行さるべきものだ)小説中長篇には南總里見八犬傳・椿

説弓張月一〇・俠客傳・近世説美少年録四・朝比奈巡島記、短篇には南柯夢(前編六、後編八)・皿々卿談六・夢想兵衛胡蝶物語(前編四、後編五)・俊寛僧都島物語二・松染情史七草七、隨筆には燕雜記一・燕石雜誌六・玄同放言六、などがあつてこの方文想共に彼の眞面目に近いものがある。記行と隨筆との合の子のやうなものに羈旅漫録があり、文學史資料に物之本江戸作者部類三卷があり、俳句の季寄に俳諧歲時記四卷があり、皆數版を重ねて廣く讀まれた(明治に入り野村書店から曲亭馬琴翁叢書として五十六種を三冊にして發行した)

はくろ 浦瀬白雨

英文學者で「ウオーヅウオースの詩」などの名譯がある。

はくぎよくしふ 柏玉集 十卷

後柏原天皇の御歌集で卷八までを部立し卷九、十は百首の御製が載せてある。當時三玉集の一として斯界に重んじたものである。

ぼくする 堀田麥水 二三八一—二四四三、享保六一天明三、一〇、一四、六十三歳

加賀金澤の書林で、且つ俳人、通稱を池田屋長左衛門といひ樗庵・暮柳舎等の號があり、始め希因に、中頃

支考に、最後に乙由に従ひ麥水と號した。最も虚栗の調をよるこびそれを自己のものとして一派を唱へたがその調情偏にしてあまり行はれなかつた。新虚栗・蕉門一夜口授・蕉門附句法解抄・俳諧蒙求等の著がある。彼は又博識多才で將基なぞいつも藩侯に召されてお相手申上げた。史傳の著に慶長中外傳・琉球屬和録・三州奇談・南島變などがある。

はくせい 平木白星 明治九—大正四、一、二、四十歳

上總の人、名は照雄、東京英語學校を卒業して、一高を半途で退學し、駒込郵便局長となり、官吏中の文學者として有名。明治卅年代の詩壇に存在を見とめられ四十二年頃「文藝時報」を出したが經營難で間なく廢刊した。釋迦・お小夜新七・耶蘇の戀・平和等の詩集がある。

はくせき 新井白石 二二九〇—二三五八、寛永七一享保一〇、六十九歳

名は君美、上總國久留里藩士新井正濟の男、早くより天才の閃きがあつて四歳の時から字を書き、十餘歳早くも父の代筆をして文も筆も大人に劣らなかつた。長じて經史を修め、天和二年からは古河侯に仕へ奉公十年、去つて甲府の徳川豐綱(後の家宣將軍)に仕へ豐綱

が入りて六代將軍となると共に彼も亦將軍を扶け、策勳第一とも謂ふべく、幕府の弊政を革めること一二に止まらなかつた。彼は一般國史上並に政治上特筆すべき偉人で、且つ近世稀に見る多面的偉人であつたから、その業績の一部を採つても裕にその方面の第一人者たるべき實力があつた。その著を部分けすれば、

- 一、歴史 讀史餘論・藩翰譜・古史通
- 二、故實 本朝軍器考・俳優考・田制考・職官考
- 三、國語學 東雅・東音譜・同文通考
- 四、隨筆 白石紳書・折たく柴の記
- 五、詩文 白石詩草・白石遺文

右の中藩翰譜は徳川諸侯の傳記逸話を記し、折たく柴の記は自叙傳を綴り共に和漢混淆文の上乗なるものとして褒められて居る(國刊一期、新井白石全集、冊廿叢一、白石遺文、白石遺文拾遺)

はくちやう 正宗白鳥 明治一二、三、三一

備前の人、名は忠雄、東京専門學校文學科を卒業後七ヶ年讀賣新聞の記者として評論を書き、自然主義勃興の際に「何處へ」の一篇を早稻田文學に載せて文名頓に上り、一躍文壇の花形となつた……と謂つても氏の作風ははでな點は少しもなく、地味で底力がこもつて皮

肉な深刻な着想をグン／＼荒削り式に表現する。爾來自然主義を代表する大家として藤村・花袋・秋聲と共に第一流と目せられ、大正より昭和の今日に至るまでに微光・二家族・毒・生靈・二階の窓・五月蟻・深淵等幾多の名作を出し、最近脚本をも澤山書いて居るが、小説臭のぬけないドラマと評せられて居る。

**ぼくてんせう 莫傳抄** (無名抄・山木髓 脳・倭秘抄)

むみやうせう「無名抄」を見よ。

**はくやう 白楊**

さうへい「森田草平」を見よ。

**ぼくりん 麥林**

おつゆ「中川乙山」を見よ。

**はくれつてい 白劣亭**

しあん「石橋思案」を見よ。

**はこでんじゆ 箱傳授**

藤原定家以來の和歌の秘説と稱して一切の關係書を箱入にして子孫に傳へた歌道傳授の一つ。

**はこねれいけんいさりのおだうち 箱根**

靈驗覺仇討

芝屋芝夏(近松徳三)享和元年(二四六一)作の時代物

「北條の家臣九十九新左衛門の息女初花、美貌絶世にして瀧口上野に戀ひしたはれ、却て上野の下部三千助に心を寄せ、父の同意を得て嫁取する。三千助實は飯沼勝五郎で兄三平の仇上野を討たう爲に世をしのぶかりの名であつた。やがてそのことがわかつて上野の方から手を廻している／＼と迫害を加へた。新左衛門は己れ切腹して勝五郎夫婦を逃がす。みちのくの永の旅路に勝五郎風病がもとで壁になり、庄屋徳右衛門の情けに壁車を恵まれ、夫は車中妻はその車を引いて箱根の山入……無残にも初花は敵の返り討になつたが、權現の靈驗によつて勝五郎足腰がにはかに立ち出し、忠僕筆助と共に首尾よく瀧口を討つて本望を遂げる」といふ筋。

**はごろも 武島羽衣** 明治五―

東京の人、名は又次郎、大町桂月・鹽井雨江などと同期の帝大國文科出身で、學生時代から歌文に秀で前記二氏と共に優艶な新體詩美文などを作つた「花紅葉」の合著は些やかな本だが多くの讀者に影響を與へた。現に女子大學に教鞭を執り、巧妙な講義に幾多の女學生を惹きつけつゝある。一頃海内をあげて誰歌はぬものなき「美しき天然」の歌詞も氏の作に係る。

**はごろも 羽衣**

謡曲 シテ 天人 ワキ 漁夫

ツレ 漁夫 處 駿河

漁夫白龍、天人の羽衣を得て末世の實に持ち歸らうとするところへ、天女現れ哀願してその羽衣を返してもらひ、そのお禮「ころに所謂「天人の舞」なるものを舞ひ／＼昇天するといふ筋。

資料 古風土記逸文上、近江集、續史籍、南京遺響下、六〇・竹取翁物語、首四六、五ノ四五・和歌童蒙抄六ノ一〇・諸曲拾葉抄「羽衣」・謡林拾葉集七ノ七・太平記大全一一ノ五五・倭訓栞「はごろも」「あまのはごろも」・樞の下枝上ノ二、下ノ一〇・畫典通考五ノ九・日本書紀通證六ノ五二(羽衣社)・和漢三才圖會、六九ノ二ノ一(羽衣社)・廣文庫第一冊、一一二六―一一三〇、第十五冊九五五―九五六。

**はしじやうるり 端淨瑠璃**

段淨瑠璃に對して唯一段から成り立つて居る淨瑠璃の作をいふ。

**はじん 早野巴人** 二三三七―二四〇二、延寶

五―寛保二、六、六、六十六歳

江戸石町に住し夜半亭と號す。其角・嵐雪の教を受け、

中頃上京して江戸風を鼓吹し、雍髪して巴人亭宗阿と名乗る。後、その居を門人凡主に譲り再び江戸に歸つた。一夜松俳諧桃櫻の著がある。安永天明の俳聖谷口蕪村も彼について教へを受けたが、説くに「師の句法に拘泥すべからざる旨」を以てしたことは、群小競うて門戸を張つて居る當時に在つては名言と謂ふべきである。

鳴ながら河越す蟬の日影かな

山姥の二人出あふや清水影

白菊や風に吹かるゝ天の川

**はせき 紀長谷雄** (紀納言・紀家) 一五〇

五一―五七二、承和二―延喜一二、六十八歳

陽成・光孝・宇多・醍醐の四朝に仕へ、文章博士大學頭を経て従三位中納言に至る。漢詩文を能くし、本朝文粹・朝野群載一、二に載つてゐる。又歌をもよくし後撰集に採られてゐる。尙その作には白簪翁傳一卷(群六四、四、三六三―)亭子院賜酒記(群三六八、一二、八八一―八八二、朝野群載三)がある。

**ぼせき 松尾芭蕉** 二三〇四―二三五四、正保

元、一二、一元祿七、二〇、一二、五十一歳

近世俳諧の偉人、否な我邦古今を通じて風雅の堂奥に

徹した自然詩人で、生れは伊賀の國阿拜郡柘植庄村(一説に上野)父儀左衛門三子あり、末子金作(又は半七郎)即ち後年の芭蕉である。

彼が一代は年数の不平均に拘らず左の六期とし、各期毎に代表句をあげることがふさはしからう。

第一期 一歳——廿三歳、正保元——寛文六、出世

より出郷まで、

雲と隔つ友かや雁の生きわかれ

彼が家は、上野の城代藤堂家に仕へてゐた。彼も亦當主新七郎に仕へ、若君良忠の近習となり君臣意氣投合して水魚も密ならぬ有様であつた(藤堂家奉仕の年齢は九歳とするのと十九歳とするのと兩説ある。正否判別しかれるが寧ろ九歳の幼時から御遊び相手として伺候してゐたので趣味の共鳴は竹馬の友情と相俟つて情誼の密なるものがあつたのではなからうか?)

彼は十一歳の時始めて作句したが、その句は今傳はらない。十四歳明暦三丁酉の歳の元旦に

戌と申の世の中よかれ酉の年

の句がある。廿三歳の四月若君良忠卒去。良忠は俳諧を好み蟬吟と號して京都の北村季吟の指導を受けて居つたので、彼も共々斯の道に入り君臣唱和の楽しみ美

しく奉仕を續けてゐたのに突然、この不幸に遇つて悲歎やる方なく直ぐにも殉死しようと思はかり哀しんだがこれより三年前、即ち寛文三年に幕府から殉死の禁令が出て殊にこの藤堂家では幕府より一年前に嚴禁して居た位であつたから、どうしても亡主の後を追ふことが出来なかつた。想へば彼の存在は運命的であつた。この哀傷をして五年以前にあらしめば日本文學史は芭蕉と云ふ一偉人を失つたかも知れない(故佐々政一博士の論文「運命の人としての芭蕉——醒雪遺稿四一九—四二五」参照)そこで彼は四十九日を勤め、主君の遺骨を奉じて高野山報恩院に納めに行き、歸りを京にまはつて季吟に遭ひ、一旦上野に引き返して同役城孫太夫の門に、

くもとへだつ友かや雁の生別れ 宗 房

と告別の一句を残して飄然郷を去つて都に上つた(宗房は彼が十七歳の時元服しての名のりである)

第二期 二十四歳——廿九歳 修業時代 寛文七—

寛文一二、

大日枝やしを引きすてし一かすみ

京に入つた彼は早速北村季吟に入門した。そして師の指導を受ける傍書を北向雲竹に、漢學を田中桐江に、詩

俳友や俳弟子と共に上梓したものに、

春二百韻 山口信章・伊藤信徳との連句

江戸三百韻(江戸三陰) 同上

四吟歌仙 二葉子・紀子・卜尺との連句

二百韻 似春との連句

三歌仙 春澄との連句

夢想俳諧八吟表八章 杉風等と連句

三陰歌仙 千春・信徳との歌仙

延寶廿歌仙(門弟獨吟廿歌仙)

桃青廿歌仙

田舎句合 其角・田夫野人と題する廿五番の句合で

判は彼

常盤屋句合 杉風・青物の句、彼の判

次韻 信徳の七百五十韻に次いだ芭蕉、其角、才丸、

揚水の二百五十韻

松倉嵐蘭・服部嵐雪もこの期に入門し、佛頂老師にも参

禪し、他日俳味に禪味を融合する契機を得た。稱號も

その時々抱負と理想とを示して、

素宣(三十三歳 延寶四年)

天々軒桃青(三十四歳 延寶五年)

華桃園栩々齋(三十五歳 延寶六年)

を伊藤坦庵に學んだ、廿六歳(寛文九年)には太宰府に詣で、橋立にも漫遊した。廿八歳(寛文十一年)の冬には一度歸省した。この頃の名のりは「釣月軒宗茂」「泊船堂宗房」など謂つて居つた。廿九歳(寛文十二年)の正月には「貝おほひ」を上梓した。その内容は上野天満宮奉納二十番發句で判は彼がしたものである。この年九月、季吟の門人、小澤孤陰(踞齋とも卜尺とも云ふ)が江戸に行くに伴はれて下る(季吟はこれより前、幕府に召されて江戸に下つてゐた)「大日枝やし」の句はこの時の道中吟である。

第三期 三十歳——三十八歳 延寶元——天和元、

俗吏より蕉風開眼まで

枯枝に鳥とまりけり秋の暮

江戸に下つた彼は小澤卜尺の家(一説杉風の家に)に草鞋の紐を解き、三十一歳(延寶二年)からは鯉屋杉風から深川の別墅(と謂つても六疊一室)を提供せられて移り住んだ。寶井其角その時十四歳の少年の身を以て入門した。けれども杉風や数人の弟子だけではまだ門戸を張る程の名も傳れないので、或は神田上水の工事にたづさはり、或は筆耕して米鹽の資にあてた(丈早雜考参照)が、併し俳諧の述作は次第に數を増して、當期中

風羅坊・杖錦子・風毛・羊角・羽扇・芭蕉(三十八歳、延寶九年即ち天和元年)

等の呼び名を用ひた「枯枝」の句は確かな日附は別らぬが多分は天和元年彼の三十八歳の時であらう(拙著國文學概説一三三—一三七)

第四期 卅九歳—四十二歳、天和二—貞享二、正風 確立の時代

深川や芭蕉を富士に預け行く

卅九歳の十二月深川の芭蕉庵が焼けたので俳友の山口素堂が「芭蕉庵再建勸化簿」を廻し多くの弟子の喜捨が集まつて苦もなく改築された。

四十一歳からはそろ／＼俳行脚を始め地方の門弟の家々を歴巡ると共に到る處、新入の弟子を得た。第一回の行脚は油屋喜左衛門(千里)と共に連れて、

伊勢參宮—上野—大和—山城—近江、美濃(大垣木因亭)多度—桑名(本統寺)—熱田—名古屋(桐葉亭)

と歴遊して十二月歸江、門弟荷兮がその時の紀行(所所に俳諧の運座をも入れて記したもの以下倣之)を編して「冬の日」と題す、第二回の行脚は彼が四十二歳の二月出發して、

奈良—大津(荷白)—尾張(鳴海の知足亭)—名古屋(桐陽亭)—木曾路—甲斐

を経て四月末に深川に歸つた。この時の紀行を「野ざらし紀行」(又、甲子紀行、草枕とも云ふ)、「深川や」の句は第一回門出の時によんだ。

第五期 四十三歳—四十五歳 貞享三—貞享五(即元祿元)蕉風廣布の時、

古池や蛙飛込む水の音

四十三歳の正月に「初懐紙」が出た。一名を「鶴の歩」と云ひ、門人の百韻で内五十韻は彼が註した。同じ年、荷兮と野水の共編で「春の日」が出た。四月には本間道悦について醫をも修めた。四十四歳の八月には曾良と宗波を同伴して鹿島へ小行脚。鹿島では根本寺觀月亭に、潮來では本間白準亭に杖を留めした。この時の紀行を鹿島紀行(鹿島詩)と云ふ。十月初めに庵(この時は第三回目改築のもの)を舉白に托して第三回の旅に出た。笈の小文(卯辰紀行とも芳野紀行とも云ふ)はその時の紀行で明石でとめになつてゐる。四十五歳の時には第四回行脚、

明石—大阪—大津—岐阜—善光寺

と遊歴して江戸に歸つた。更科紀行といふのがそれ、

「古池や」の句は貞享三年四月、芭蕉四十三歳の時の一大收穫である。

第六期 四十六歳—五十歳 元祿二—六

主觀と客觀と、至誠と大自然と融合調和して

風雅の堂奥に達した時

草の戸も住み變る世ぞ難の家

元祿二年、四十六歳の時、荷兮の編に因つて「曠野」が出た。同三月廿七日からは第五回行脚として奥羽、北陸長途の旅に出た。その紀行を「奥の細道」と云ふ。十月に歸省し、十二月には江州の膳所に行つた。この時園女が入門した。

元祿三年四十七歳の二月伊勢に行き、一旦上野に歸り大津なる珍碩の洒落堂に行き四月石山に籠つた。この住まひが氣に入つて「幻住庵の記」を作つた。珍碩の編によつて「ひさご」が出た。

元祿四年、四十八歳、去來と凡兆が編して「猿蓑」が出た。彼自身には「嵯峨日記」を作つた。十一月には江戸に歸つた。隨行には支考と挑隣。

元祿五年、四十九歳の秋、芭蕉庵第四回目の普請が出来上つた。「閉關之説」を作る。洒堂の「深川」李由・許六の「韻塞」支考の「葛の松原」などが出て蕉門は益々

榮えた。

元祿六年、五十歳「東順傳」を作る。十月には山口素堂の亭の殘菊の苑に招かれた。

「草の戸も」の句は奥州行脚の門出、庵の柱に書きつけたもの。

第七期 五十一歳 元祿七年 終焉

旅に病んで夢は枯野をかげめぐる

この年の始め、野波・利牛・孤屋等によつて「炭俵」が編まれ、子珊によつて「別座敷」が編まれた。

五月十一日第六回最後の行脚の門出をした。

名古屋(荷兮)—京(去來の落柿舎、支考が東山の草堂)—膳所(曲水)—大津(木節)—伊賀上野と經めぐり支考惟然を連れて大和に旅し、二月浪花に入り之道の亭に泊り、同二十八日園女亭に遊び、

白菊の目になて、見る塵もなし

を立句して歌仙一巻の催しあり、主婦園女山海の珍珠を盡して厚くもてなしたが、かれて胃腸を害してゐた處へ葺を澤山よべられたので二十九日の夜から腹部に疼痛を覺え、吐き下しがげしく、今日で云へば急性胃腸カタルのやうな症状なので、胃茶湯を服したが更に險なく、俳弟子にして醫師なる近江の木節と云ふのが

あつて「あれなら余の平生をよく知つて居るから」として特使を馳せて呼びよせ、又「話すことがある」として去來をも呼びよせた。亭が手狭なので新たに御堂前南久太郎町花屋仁左衛門裏座敷を借りて轉宿靜養、惟然・支考・之道は始めからつききりで通知を受けて馳せ集るもの去來・木節・舍羅・吞舟・丈草・乙州・正秀これ等は看護の事に當るが、餘の見舞客は悉くその好意を謝して病褥には通さなかつた。木節が「外の醫者をよびませう？」と云ふと「我は御身の診治に安んじて他に求むる所はないぞ」と云つて可かない。「萬一の用意に辭世の御句を伺つておきたい」と云ふと、

昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は、あすの辭世、我が生涯云ひ捨てし句に、一句として辭世ならぬはなし

と彼の有名な語を吐いた。八日には下痢すること六十回（思ふに病狀は赤痢のやうなものに惡變してゐたのであらう）九日丈草・去來等を床近く招き、吞舟に筆を執らせて、

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる 芭 蕉  
と書かせ「これは辭世にもあらず、辭世にあらざるにもあらず、病中の吟なり。然れども生死の大事を前に

置きながら如何に生涯好みし風流とは云ひながら是も妄執の一つとも云ふべけん」と云つた。この日泄痢度數更に繁く身體は益々衰弱した。十一日に其角がやつて來てその夜は一同夜伽、惟然と正秀とが前夜一つ蒲團を引張り合つたことを思ひ出して、

ひつばりて蒲團に寒き笑ひ哉

と打興するに惹き入れられて芭蕉も珍しく微笑を洩らした。翌十二日強ひて沐浴を命じ、次郎兵衛に抱へられて正座し、其角・去來・丈草を正面に、餘他の門人を左右に置き、惟然・支考に遺言を筆記せしめ、伊賀への手紙だけは自身に認め、今は心に思ひ殘すことも無しさて眼をつぶつて掌を合せ靜かに觀音經を誦し、平和に息を引きとつた。元祿七年甲戌十月十二日申の刻に芭蕉翁逝く。翌十三日遺骸を木曾塚無名庵に移し十四日葬送を營んだが、遠近の會葬者三百人。今、近江の國大津の義仲寺の境内、さゞなみ清き湖面を眺めに一基の石碑「芭蕉翁」と彫られたのが建つてゐる。碑は其角の筆蹟で碑銘には「妙辭奇句、思入風雲」とある。俳諧の風流を知るも知らぬも、この地通過の旅人は大抵この寺に立寄り、この碑に一廻の回向をする。芭蕉の人格の偉大さは、併立し難い「才」と「學」と「徳」

とをその一身に體得具現した點にある。彼と相前後して伊丹に鬼貫あり、浪花に來山あり、江戸に素堂あり、造句の才に於て彼とさままでの逕庭を見ないが門戸を張つて幾多の後進を啓蒙指導する抱擁力に至つては遙かに彼に及ばない。彼の學識は重に青壯年の時期に修め得たもので、

- 國文・俳諧 北村季吟
- 書 北向雲竹
- 漢 學 田中桐江
- 詩 伊藤坦庵
- 醫 學 本間道悅
- 禪 佛頂老師
- 畫 森川許六

など可なり多方面で、後世月並の宗匠連のやうな淺薄なものではないし、謙虛なる彼は恐らく一生涯を通じて勤勉なる學徒として敬虔なる求道者として、自學自彊の心意が備はつて居たものであらう。「定家の骨・西行の筋・樂天の腸・杜甫の胸」と云ふ有名な標語は「曲水に與ふる書」に出てゐて、

遙かに定家の骨をさぐり、西行の筋を辿り、樂天が腸を洗ひ、杜子が方寸に入るべき族、都鄙をかぞへて十

の指をさす。君も即ち十の指たるべし。さある。

若しそれ、彼の徳器圓滿に至つては同門の人々の殆ど一宗一派の開山のやうに崇拜して居るのででも分かつらう。現代名家の中にも沼波瓊音氏は「芭蕉の臨終」さ云ふ劇を書いて翁の終焉は偉人聖者の臨終であると讚仰してゐるし、荻原井泉水氏は「芭蕉は生涯人の長所と美點とのみに眼をあげて暮らした人である」と様に評せられた（この體驗は旅を糧なる人々には容易く背かれよう。旅先で逢ふ人毎に自己が已往の閱歷の最も善きもの美しきものを示してくれるし、我も亦善きもの美しきものを出して彼に接する。翁の生涯は恐らくこの種生活の延長であつたらう）

彼が謙遜であつたことについても様々の逸話がある。彼が俳行脚をして攝津國鳥飼の里で満月の夜を、さある運座に一乞食僧として招かれて、

三日月の頃より待ちし今宵かな

と句して、始めは皆に嘲られ終は一座席を這つて上座に立てられ、名を明かして俳談に時を移したことは、アストンの文學史（二九二—二九三）にも引かれてある。彼又沈黙を守り座右銘にも、

人の短を云ふこと勿れ、己れが長を説くこと勿れ

銘 曰

もの云へば唇寒し秋の風

とした。尙云は彼の徳は大きな深い人間愛に根ざしたもので越人・支考・曾良其他の衆弟子に接する様子から「一つ家に遊女も寝たり萩と月」の北陸旅行の途次遊女に對するとりなしから「故郷や隣の緒に泣く年の暮」と云つた歸郷の感傷から凡てが愛の泉の滾々として盡きない表現である。そしてこの愛は若君蟬吟に殉じて一時拂にすべかりしを五十一年の年賦にして一年毎に尊き體驗と思案の利子を追加したかの趣がある。彼が作風の特徴は、

一、全人格的であること。斷片を以て生活すること人は人間永遠の弱點であり悩みである。全生涯を風雅の大道に捧げて知らぬ他國の泥土に喘ぎ死にをしても悔いがない底の大覺悟を以て作句した彼の真劍味は何よりも彼が作句の強味であつた。

夜に入りて、雷鳴り雨頻りに降りて臥せる上よりもり、蚤蚊にせよられてねぶらす。持病さへ起りて消入るばかりになん。短夜の空も漸く明くれば又旅立ち

ぬ。猶よるの餘波心す、ます。馬をかりて桑折の驛に出づる。遙なる行末をか、へて斯かるやまひおぼつかなしといへど、羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なん、是れ天の命なりと、氣力いさ、か取直し、道縦横に踏んで伊達の大木戸をこす(奥の細道)

この決心を以て旅をつゞけ、詩囊を肥やした。旅も命がけなら、作句も命がけである。

二、唯美的なること。彼が作句の目標は一にも美二にも美「俳句は浅い砂川を清く流るゝ水の趣して作れ」とは常に弟子に戒めたことばである。従來の俳諧が言葉のなかりみや洒落を生命としたのに對して、彼が情趣の俳諧とも謂ふべき「句の附」を主張したのも一段の進境である。殊に彼が俳句の全く非實用的動機に成ることを明らかにしたものは「夏爐冬扇」の語である。

予が風雅は夏爐冬扇の如し、衆に逆ひて用ふる所なし。唯だ釋阿西行の詞のみ假初に云ひ散らされし空なる戯れ事も、哀れなる所多し。後鳥羽上皇の書かせ給ひし物にも、是等は歌に眞ありて、而も悲しびを添ふるものたまひ侍りしとかや。されば此の御言葉を力とし其の細き一筋をたどり失ふ事勿れ(柴門辭)即ち夏爐冬扇は自らを逸つて謂つたものだが同時に彼

也。

(この翁が反都會的傾向を市井に引き戻して盛に人事詩を作つたのは其角である)

四、不易流行を一の誠もて調和したこと。

「不易を第一義と立て、穩健なる着想を失はず、時處の古今東西を通じて萬人等しく稱ふる底の作句をせよ。而かも一處に拘泥せず、その時々々に變化する流行をも忘れてはならない」と云ふのが彼の本意で、もつと簡潔に、

萬代不易あり、一時の變化あり、この二個究る所其本一なり、其一といふは風雅の誠なり

と謂つて居る。去來の解には

不易な無爲の時、流行は座臥行住、屈伸俯仰の形同じからざるが如し

とあり、其角の語にも、

いはゞ情の薄き句は自ら見あきもし、聞きふるさるゝにや。又情の厚き句は詞も心も古けれど作者の誠より思ひ合はせぬる故に、時にあたらしく、不易の功あらはれ侍る。

とある。この藝術觀は紫式部が源氏物語中に述べた詞にも通じ、谷口蕪村が「秀吟は幾度誦しても飽かず」

が藝術觀を披瀝した辭とも解せられる。

三、自然美に沈潜せること。天地の心を以て心とし、山川風物にさびしを味得し(さびしをりは色々に説かれるが大體幽玄閑寂と言ふに當つてゐる)之を俳眼の點眼として一笠一杖の旅路をつゞけることこれが彼の最も本懐とする所であつた。

古へより風雅に情ある人々は、後るに笈か掛け、草鞋に足を痛め、破れ笠に霜露を壓ひて、己れが心を責めて物の實を知ること喜び(送許六序)

と云ひ、

「造化に従ひて四時を友さす。見る所花にあらずといふことなし。思ふ所月にあらずといふことなし。偶々花にあらざる時は夷狄に等し。心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で鳥獸はなれて、造化にしたがひ造化にかへれさなり(笈の小文序)」

と云ひ、一串抄にも師説を解いて、

うき我を淋しがらせよ閑古鳥

翁がうきとするところは世の交なり。樂とするところは閑閑にて即今云へるさびしみなり。故に作意のあるところは集中三四分は閑情より觀相に入る。觀相即幽支體にて是れ翁が性質のひく處、終に一字を爲す基

と謂つた語にも通つてあるが、翁がこの主張に暗示を與へたものは藤原定家が詠歌大概に述べた「詞古想新」の主張であらう。

五、俳材俳想の多様  
このことに就いては故正岡子規の「芭蕉研究」に掲げたものを引用する。

- 一、雄壯 あら海や佐渡に横たふ天の川
  - 二、幽玄 衰へや齒に喰ひあてし海苔の砂
  - 三、温雅 山路来て何やらゆかしすみれ草
  - 四、織巧 吹くたびに蝶の居直る柳かな
  - 五、華麗 四方より花吹き入れて鴉の海
  - 六、奇拔 鶯や餅に糞する縁の先
  - 七、滑稽 猫の妻籠の崩れより通ひけり
  - 八、斬新 送られつ送りつはては木曾の秋
  - 九、寫實 住みつかぬ旅の心や置炬燵
- 芭蕉研究資料 随分澤山あつて玉石混淆の嫌もあるが左に列挙する。

芭蕉翁行狀記(俳家奇人談中一)  
芭蕉翁の一本一  
風俗文選作者列傳  
史籍集覽三、一一七

隨筆 凌雨漫錄  
大觀 奥の細道初  
百家 説林近世逸人畫史 一〇八九  
類聚 名物考一、七四九  
蜀山人 一話一言 一三、三七〇  
全集 燕石墨水消夏錄 三、五五五  
十種 老のたのしみ抄 一〇九  
隨齋諧話 乾二〇

野史 二六一、六〇  
本朝 書畫便覽 一二  
古今 北越雪譜 二編、中、八  
扶桑畫人傳 五、三五  
芭蕉翁の歌(隨齋諧話、坤、十一)  
芭蕉翁其角反古の畫幅(百家説林續編燕居雜話四、三六六)  
芭蕉翁行脚の掟(隨齋諧和 坤一)  
芭蕉堂(拾遺都名所圖會 二、一〇)  
芭蕉庵の址(續江戸砂子 三、二七、江戸名所圖繪 七、二〇)史料 扶桑名畫傳 三五、六六〇、古畫備考 一二、四五三)  
芭蕉翁の義仲寺の僧庵(類從名物考二、四九七)  
芭蕉翁の像 宮川舍漫筆 三、二〇、芭蕉の一本三一)

芭蕉の墳(東海道名所圖會 一、六七)

芭蕉翁の靈(攝西部遊談 下、一四)

芭蕉終焉記(本朝文鑑 九、一)

以上は主として明治以前の刊行にかゝるものだが、明治大正期にかけても多くの編著が出てゐる。

- 芭蕉翁句解大成(月院社、須原屋發行)
- 芭蕉翁行脚怪談袋(著者不詳 今古堂發行)俳諧芭蕉一代集(花の本月の本 今古堂發行)
- 芭蕉全集(俳諧文庫 第一編)
- 正岡子規 芭蕉研究(單行本もあり、子規全集中にもある)

- 沼波瓊音 蕉風(近代文藝叢書の中)
- 同 芭蕉の臨終
- 萩原井泉水 芭蕉文庫 十二冊
- 一條政昭 蕉門頭陀物語附俳家詳傳
- 吉木燦郎校訂 俳聖芭蕉全集
- 黒田源次編著 芭蕉翁傳
- 小林一郎 芭蕉翁の一生
- 内藤鳴雪 芭蕉俳句評集
- 沼波武夫 芭蕉全集
- 早稻田文學大正十四年十月 芭蕉研究號

日本古典全集の中の 芭蕉全集二冊

**ぼせうおうにじふこかてう 芭蕉翁廿五箇條**(白馬輿儀解・俳諧新式・貞亨式)

芭蕉の俳諧に關する家訓で、俳諧の性質、作法方則等二十五ヶ條をあげてゐる(思ふに、は翁の自作ではなく勿體を好む弟子者流のさがしらで書いたものであらう。けれどもその内容はよく俳諧の要諦を盡して居る)(俳文、一五)

**はちかつぎ 鉢被衣**

室町期のお伽草子の一つで、備中守の妻その娘に大きな鉢を被せて、その女十三歳の時、母は永眠、繼母慥にして三位中將の家に奉公に出す中、第四の公達に見初められた處中將の北の方は、彼女の異様なる姿を憎み、我子に思ひ止まらしめようとして四人の公達の嫁ぞろへを催したが、その前になつて鉢突然にとれ金銀珠玉服装までも出た上に、その容貌もいと美しかつたので四郎君は大よろこびで早速それを飾りとも引出物として豫想外の面目を施し、夫婦こと故なくめでたく陸み榮えたといふ。有名な話で今日尙兒女の讀物話し物となつてゐる。

**はちかのだいじ 八箇の大事**

こきんでんじゆ「古今傳授」を見よ。  
**はつけんでん 八犬傳**

「南總里見八犬傳」を見よ。  
**はちしうぶんさう 八洲文藻** 百二十卷

水戸烈公(齊昭)の命により小山田與清が撰んだもので  
平安朝以後歴代の和文を集めた書。

**はちせうじん 八笑人**

はなごよみはちせうじん「花暦八笑人」を見よ。

**はちだいしふ 八代集**

勅撰和歌集中第一より第八までをいひ、之を註したものに北村季吟の八代集抄がある。

一、古今・二、後撰・三、拾遺・四、後拾遺・五、金葉・六、詞花・七、千載・八、新古今。

**はちのき 鉢の木**

謡曲 シテ(前後) 佐野常世 ツレ 常世妻

ツレ 近 臣 狂言 同従者

前ワキ

旅 僧 後ワキ

最明寺殿

最明寺時頼民情視察の爲め旅僧に身をやつし、諸國巡視の途次上野の國佐野源左衛門常世が家で雪の一夜をあかし、主人の身上語りを聴き且又「今にも鎌倉に事

あらば一番に駆けつけむ」忠志をも知り、さて鎌倉に

歸つて兵を集めた時果せる哉、瘦馬さび館の常世が着

到第一であつたので、時頼召して往にし日の好意を謝

し、「アノ時秘藏の鉢の木の梅櫻松を焚いて暖めてくれ

た褒美として加賀の梅田、越中の櫻井、上野の松田の

三庄をつかはす」とあつて常世は大に面目を施し喜び

の眉を開けて歸る。  
**はちまんたらう 八幡太郎**

資料 「義家」の事を記したものは、

大日本史一四三・和漢三才圖會七五ノ一〇・神明鏡上ノ

三九・甘雨亭書滄泊史論上ノ三四・參考源平盛衰記四六

ノ四四・陸奥話記三四。

義家の狐を射たことや宏量であつたことを記したものは、

古今著聞集卷第九、武勇第十二

明治以後のものでは、

漣山人 八幡太郎、博文館

増山氏 八幡太郎、圖書出版會社

**はちもんじやほん 八文字舎本**

西鶴の浮世草紙に倣つて京都から出版した小説本で一

時盛行はれた。經營者は八文字舎書林の主人、安藤

八左衛門(自笑と號す)がなか／＼の才物でうまく江島屋其磧と結托し、其磧と反目中は多田南嶺などにも筆をとらせたものだ。

**はつてん 發展**

岩野泡鳴、四十四年十二月作の小説。梗概は

麻布の我善坊にある田村と云ふ下宿屋で、二十年來物堅いので、近所の信用を得てゐた主人が、近頃病死して、その息子「義雄」の代になつた。彼は父とは違つて詩人・作家・評論家として世に立たうとし、已に世間に

存在も認められて居たので、家業は妻の「千代子」に任せて、自身はまるでお客同様に二階の書齋を城廓として、絶えず筆を取てゐた。彼には三人の子があるけれど

も仲は近頃だん／＼不和になつて來た。妻が夫に對する愛がさめて我子に對する愛のみが強くなるのが可けないと云ふのが近頃彼の標語の様になつた。そこへ義

雄の繼母の姪に當る「清水鳥」(廿二三歳)と云ふのが、紀州の國元から田村の家へやつて來た。裁縫學校へでも入つて、もつと勉強したいと云ふのであつた。彼は此

を友人の小説家に托しようと思ひつゝ、つひ鎌倉で婿

曳の一駒を演じて以來、妾同様にしてしまつた。妻の千代子とは益々不和になつた。ホンの經濟上の扶助者

云ふだけで、夫婦と云ふも戸籍面だけのことになつた。

にも拘らず彼はお鳥を方々に圍つて果ては甲斐の鹽山

などへ連れて行つて、原稿のルビをつけさせ、一枚に

つき五錢宛やつたりなんかして、悪い意味にもよい意

味にも發展を續けた。その中お鳥は彼によつて梅毒を

うつされた。彼女は身も世もあらず悔しがつた。義雄

は妻には怨まれお鳥には治療費の負擔の荷厄介だけに

なつて、性の接觸を絶たれ、お負に此迄幾分の生活

のたしになつてゐた某商業學校の英語の囑托は地位不

安となり、四面楚歌の中に、尙ほ獨自の文藝に精進を

續けたが、遂には文藝のやうな無形なものでは満足し

切れなくなつて事業を思ふやうになつた。丁度いとこ

が樺太に居るので、彼はあちらへ行つて蟹の罐詰を始

めよう、それに限ると思ふやうになつた(泡鳴五部作

の「一、氏が韻文より散文に、文學界より事業界に轉

じた徑路が、仔細に表現されてある)

(泡鳴全集第二卷一九二―五二四、四十五年大阪新報連

載、同年七月單行本として發刊、發賣禁止、更に訂正

して大正十年四月廿日右全集に入る)  
**はつびんせうせつ 撥鬚小説**

明治二十年臺の村上浪六の小説をいふ。二十四年作の



「三日月」を始め、井筒女之助・奴の小萬・鬼奴・破太鼓・夜嵐・深見笠・髻の自休などがある。舊幕江戸ッ兒の義侠を明治でいつたといふ外、別に大した文學的價値はないが特徴の多い悪語交りの文章は、下町情調のブツキラ棒な描寫と相まつて一種の魅力があつて、當時「撥鬢小説時代」といふを作る位の盛行振であつた。

(縮 册浪六全集、十七册、至誠堂)

**ばつぶん 跋文**

文の一體で、著書の末尾にその書についての感想を述べたもの、之にも著者自ら作つた跋と他人がその著書の爲めに作つた跋とある。

**はつまる 尾田初丸？**

近世、江戸の狂歌作者。

おとがひを撫る間も無き歳の暮にひまなけぬき  
や口あくびせん

**はつくわいし 初懷紙 (鶴百韻)**

蕉門貞享四年(二三四六)の百韻(俳諧註釋集上)

**はながみねかうまんをとこ 鼻下峯高慢男**

明誠堂喜三二の黄表紙中の傑作(春町畫)鎌倉前上野や萬右衛門と云ふ富限者の一人息子萬吉は性來鼻が低く

てまるで碁石を一つくつつけたやうだつたから親々は心配して錢金づくで、ウンと萬吉の慢心を煽つてだんだん鼻が高くなつて天狗と競争するやうになつたが、天狗の幻術にかゝつて度々自慢の鼻を低められて復々もとく通り低鼻になつたといふ(續帝三四、黄表紙百種二七―三三)

**はなごよみはつせうじん 花曆八笑人 六卷**

瀧亭鯉文文政三年(二四八〇)作の滑稽本で、彼の作中最も世に行はれたもの、花曆に次のやうな八目を立てて趣向したものの。

春 飛鳥山の花の雲 角田川の花袋

夏 高田の里の螢狩 兩國川の涼舟

秋 百花園の秋七草 海晏寺の楓狩

冬 青樓の夜雪 淺草寺の年の市

(明治に入つて大島屋、金盛堂などから單行)

**はなさかせのぢぢ 花咲爺**

はなさかぢぢ「花咲爺」を見よ。

**はなさかぢぢ (はなさかせのぢぢ) 花咲爺**

資料 鎌通宇計木下八・嬉笑遊覽九ノ五〇・燕石雜誌四ノ三五。

廣文庫 第十六册、二三二―二三三

連山人 花咲爺、博文館

**はなさんじん 鼻山人**

とうりさんじん「東里山人」を見よ。

**はなぞのてんわら 花園天皇 一九五七―**

二〇〇八、永仁五、七一正平三、一一、一一、五十二歳第九十五代に當らせられ、和歌をよくせられ、御親ら風雅集を御撰びになり御製もその風雅に四十餘首お採りになり、玉葉(一一)・新千載(二〇餘)などにも出てゐる。天皇は又厚く佛法を信ぜさせられ、花園離宮を擧げて妙心寺とせられた。今の妙心寺派の本山が即ちそれだ。

**はなのうへのほまれのいしづみ 花上野**

譽石碑

司馬芝叟(近松徳三)筒井半幸天明八年(二四四八)の合作の時代物で「讃岐丸龜の足輕民谷源八回家劍術の指南森口源太左衛門に武勇を妬まれ、暗討にせられたので、一子坊太郎の乳母お辻の忠節により首尾よく父の仇を討つ」といふ筋。

**はなのもと 花下**

連歌の宗匠の勅許によつて稱ふる稱號で、古へ宮中で

連歌の御催あるとき花の下に圓座を賜はつたところから來た名だといふ。室町時代に宗祇が始めてこの稱號を許された。

**はなれきやうげん 放狂言**

たゞ一幕より成る狂言「續き狂言」に對する語「切狂言」と似て居るが放狂言は我邦演劇發達の初期にあつて始めから後も後もなくたゞ一齣として演じたもので、切狂言は續き狂言として毎度演出し、一番の見場といふ相場が定まつてから演ずるものである。

**はまなり 藤原濱成 一三八三―一四五〇、養**

老七―延暦九、六十七歳  
麻呂の子、光仁の御代に仕へて刑部卿・太宰帥に任せられた。天書十卷・歌經標式一卷の著者として知られて居る(「歌經標式」を見よ)

**はまなりしき 濱成式**

かきやう(うしき「歌經標式」を見よ。

**はままつちうなごんものがたり 濱松中**

納言物語 (御津之濱松) 四卷 (丹鶴叢書) 八卷 異本に一卷のものもあるといふ。

菅原孝標女の作で、或左大将の北の方の連れ兒(中納言)左大将の大姫君と相思の戀に墮ち、母北の方ほどち

らも我見のことゝて娶はせたいと思ふのに、大將は今  
 時めいてゐる式部卿の宮に嫁がせようとするので子は  
 失戀の餘夢見によつて亡き母君が今唐帝の第三皇子に  
 生れ替つて居られることを知り、三年の暇を乞うて渡  
 唐、大姫悲歎やる方なく出家して尼となる（以上は現  
 存第一卷以下から推定した筋、藤岡博士による）行つて  
 見れば當の皇子よりは後に思はれ、一夜の契りに一人  
 の若君をあげ色々戀と神祕とこんがらがつた事象に遭  
 ひつゝも期日迫つて若君をつれて歸朝、吉野の尼君は  
 即ち唐土の後の母君なるが後の言傳を告げようとして、  
 一日之を訪ひ、その委囑によつて姫君（尼君と帥宮との  
 仲に生まれた）を引きとり、聖、尼君の師僧の戒を守つ  
 てその姫の二十歳になるを待つて結婚、式部卿は中納  
 言の艶福か美み、姫君の清水參籠の時ゆくりなくもか  
 いまみて恍惚としてその美に魅せられ何とかして「率  
 てかくしてん」とさへ思つたといふ。

日の本のみつの濱松こよひこそ我を戀ふらし夢  
 に見えつゝ、

の歌詞によつたもので大體源氏の模倣ではあるが、人  
 物にも筋にもそつがなく時代も數年間のことにし、纏

締たる情緒を畫いてよく切に年中行事産養ひといふや  
 うな女房の日記の延長らしい嫌ひもなく、源氏模倣の  
 中の佳作と謂つてよからう。

原本散佚今全部傳はらないが、現存の分だけならば各  
 種叢書に取入れられて居る。但し註釋の善本は左記の  
 外まだない。

小山田與清 濱松中納言物語目錄一卷  
 丹叢四二―四九濱松中納言物語（三津の濱松物語）  
**はまおみ 清水濱臣** 二四三六―二四八四、安  
 永五―文政七、四十九歳

近世、江戸の國文家にして又歌人。元、醫を業とし姓  
 は藤原、通稱は玄長、忍ばずの池の畔に住んで、杜甫の  
 句を採つて泊酒舎と號し、（彼に「寄花祝言」の文が  
 ある）又月齋とも號した。幼時より村田春海について  
 古學を學び出藍の譽高き上に、性温厚にして人と争は  
 ず、門人を教ふるには極めて懇切であつたから名聲次  
 第に高まつて、權門の聘を厚くして招くものも尠くな  
 かつた（關宿侯・林田侯など）

彼の最も得意とするところは文章であつて「きぬたを  
 聞く詞」などは國文中、稀に見る雄勁な作品である。  
 その文集を泊酒文藻と云ふ。その編著約三十種他に未

曙

はやひとまひ 隼人舞

上代舞曲の名で職員令に出てゐるし風俗の歌舞を奏す  
 る事は續日本紀養老元年四月以下度々出てゐる。その  
 起源につき記紀の傳ふる所に依れば火々谷出見命が海神  
 から贈られた潮満瓊を以て水を出し、男神、火閼降命を  
 苦しめられたので男神は困つて度々許しを乞はれたが  
 聴かれぬので轆轤（たぐさ）を顔に塗り、足あげてそ  
 の困苦のさまをなし子孫永久この俳優を以て仕へよう  
 と誓はれたこれがその起りでこの神の子孫は世々薩摩  
 にすんで隼人舞に召されたといふ（小中村清矩歌舞音  
 樂略史上二、三）

はやりうた はやり唄

小杉天外が廿八年十二月「二六新報」に寄せた小説  
 で、我邦でソライズムを作品にした最も早いものであ  
 る。

温室で蒸されて下紐切れて  
 狂ふ仇花親の種

といふ俗語が一時、栃木縣下で流行した。歌の主は富  
 豪圓城寺の内娘にして美人なる「雪江」といふ夫人で、  
 彼女が三年前某華族の令息「常雄」を聲養子にして人も

定稿のものも多くあつたと云ふ。大抵は訓詁の書で源  
 氏物語名寄圖考・伊勢物語語解・萬葉集考・後撰和  
 歌集補註・後撰和歌集附考・月詔和歌集標註・唐物語  
 註などである。和歌の方では縣門遺稿と題して縣門歌  
 人の歌文の叢書を發行し、元祿以後の長歌を輯めて近  
 葉菅集を出した。彼自身の家集を泊酒舎歌集と云ひ  
 ひ（續歌八）優雅な王朝趣味を詠じた。

かたがたに春の設の衣くばり色もよしある梅が  
 されかな

董咲き鈴菜はなちる春の雨に心ある人や野路を  
 行くらむ

夏しらぬかげもありけり大比叡や横川に通ふ杉  
 の下みち

ふく風の鞭をおほする夕ぐれは木の葉の駒ぞ足  
 を早むる

御禊せしあと川柳一葉ちり二葉流れて秋風ぞ吹  
 く

閑居秋雨

こほろぎのなく音しめりてふくる夜の軒端さび  
 しき雨そゝぎかな  
 伊勢の海や霞を染めて出る日の潮瀬に匂ふ春の

美む圓滿な夫婦仲であつたのに、夫は展覽會に出す裸體畫のモデルの「お福」といふ宇都宮の藝妓に愛をそぎ、繪は展覽會で賞に入つたがその頃から家庭にひびがいつた。出入の醫學士に石丸達三といふ好男子の情に厚いのがあつて、雪江の心は次第にその方に接近して行く。夏の或日のこと雪江は妹竹代の病氣に石丸を聘し、早風呂を浴びて物數奇に葡萄酒を飲んで體にホテリを覚え、庭に下り立つてゐると石丸も診察を終へてそこへ來合はし、御互の兼ての思ひを語らうとする矢先に、書生の堀田の姿が見えたので、二人とも温室へ駆け込んだ。堀田は何氣なく茶畑の方へ下りて行かうとしてふと温室を覗くと……驚いて「見てはならぬものを見た」といふ顔つきでアタフタそこを驅けて池の岸まで来てはツと息をついた……堀田は間もなく解雇されたが、件の歌は彼の作であつた。常雄は離縁して東京に歸り、醫學士も東京に歸り雪江の姿もいつしか圓城寺から消えたといふ。そして「雪江の家は代々女に淫亂の遺傳があつて中には六十から居つて男妾を三人も抱へて居た人もある」といふことを始めに下衆の口を借りて示して居る。

動くといふゾラの見解を採つて、先づ始めに血統を示しついで雪江の環境を示す。血統の示し方も環境の描き方もよるしいが、この方は近因のみが成功して遠因はやや不十分である。即ち「浴後」といひ「酒をあふつた後」といひ「蒸すやうな温室の中」といひ何れも性欲を刺戟して、はては姦通罪を犯すやうになるといふ徑路は自然だが、この姦通の事象をばらませる既往の境遇が自然の句配で盛り上つたものではない。が、氏の作としては特記すべきで巻頭の序(自然主義宣言)も屢々小説史に繰返されるし、雪江も氏が後來よく描く、「富んだ貴族の、若い、美しい、聰明な……そして愛には恵まれぬといふので惱み通す」女性の雛型を示して居る(菊判二六一頁、明治廿五年一月一日、春陽堂)。

**はりまふどき 播磨風土記**

古風土記で現存するもの、一つ。日本古典全集第一輯。古風土記集下巻に入つたものは、本文は井上通泰博士の校訂で、それに敷田年治の標註と栗田寛氏の頭註とを加へたもので、尙近い將來に右井上博士の註釋の出来ることも附言せられてゐる(史二七〇八四、一—三一)。

**はる 春**

島崎藤村作の小説で「破戒」について發表した多大のセンセーションを起した傑作。それは青春の戀と友情との美はしさを描いたもので、同時に文學界一派の内面史を窺ふことの出来る興多いもの。始めに左の表を頭に入れておく筋がよくわかる。

(傳馬町) 菅時三郎—お君さん(塔の澤)。

岸本捨吉は信州から東京へ飛出した一青年である。兄二人(民助・幸作)は、東京に居て民助の方は可なりに暮して居たので、青少年時代は高輪の小學校や學塾で、ノン氣に暮し、卒業後はその母校の塾(岡見や關根など云ふ先輩の經營してゐる)で教鞭を採つた。その間に女子の高等科の勝子と戀に落ちた。彼女は盛岡の名家で父は代議士をして居て、始終上京もするが主としてはその妹(東京に嫁いで居る)の監督の下にその宅から通つてゐた。そして早くから麻生と云ふ人に嫁ぐべく許婚けられてあつた。岸本のなやみは此から出發した。彼は職に得たへずして家出をした。兄の銀主で、自分も曾て書生のやうにして世話になつてゐた田邊と云ふ大川端の富豪の細君が「ピヤウキトク」の電報が二度まで來

たのにそれをも素知らぬ顔で、彼は親友の宅からさすらひの門出をした。随分あちらこちらを歩き廻つて困苦の果ては、知人の紹介で京都に塾を張つて居る峯子の許に居候をした。峯子は彼よりも年上であつたので何くれ親切に世話をしてくれたが、それでも若い同士の男女の接近して始めに母の如く姉の如く、はては戀人の如くに思はれる頃には彼女の瞳も異様に光り出した。記念の懷劍を貰つて暇を告げて落ち着く先も矢張その戀人の生れ故郷の近江であつた。そこへ東京から友人の手紙が來て、「七月廿二日を期して東海道の吉原で連中が集まらう」とのこと。この連中と云ふのは五六人で、青木・市川・菅・岡見など何れも或文學雜誌(文學界のこゝ)の同人である。小説はこゝから始まつてゐる。

時は明治廿六年の夏、青春の血が沸々き湧き上りさうなりネサンス憧憬の仲間が、街道筋の二階の一室に心ゆくばかり語り興じた。

迫つた眉、蒼ざめた頬、それから雄々しい傲慢な顔なぞの表情は、傷つけ破らざれば休まずとでも言つたやうな非常に過敏な神經質を示した(三)のは青木で、

高等学校の制服を着けて、薄鼠色の夏の上衣に包まれた優雅な體格、短く黒い髪、蒼白く広い額、鷹の嘴か見るやうな隆い立派な鼻——一帯が東京の下町で堅氣な家庭に育つた人(四)

と思はれるのは市川、心の好いこと無類といつたやうな人で、どこかに哲學者のやうな沈著(六)があるのが嘗、

粗く剛い髪、大きな鼻、體軀の割合に幅の廣い肩などは山國の生れといふことを示して居る。傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じ易いと同時に愚圖々々した(一一)

のが岸本である。青木はその頃愛讀して居るハムレットを朗誦した。その聲は言々惻怛の調を帯びて、寧ろ青木自身がハムレットその人であるかのやうに思はれた。

青木は三十歳位で此一座での年長者であり、雜誌同人の音頭取りである。彼の生ひ立ち三九一—四〇八にある如く、随分劇しい情火の内鬨を経て來たのが妻の操を處女の時に見初めてからは、大に慰められ、先方も自分の方も親戚長上の反對あるに拘らず相思の結婚を

して一女兒鶴子を儲けながら、早くも結婚生活を呪はしく思ふやうになつてゐた(三七)

市川の慕つてゐる傳馬町(涼子のこと)の噂も出た。岸本の情人の盛岡の話も出た。夜は湖畔の宿に泊つて、元祿熱に浮かされた當時の文壇を痛論した(四四)青木も立ち、市川も立つて後岸本と嘗と四國の某私立學校に奉職して居る足立と三人は、塔の澤のとある温泉宿へ行つた。女中のお玉もお君も若くて美しかった。殊にお君(十九歳)は、その後嘗の愛人となつて、百方長上の同意を求めたが皆が不賛成なので、時々お君の好みさうな衣裳や帯を見たて、贈つてそれで精神的の愛を満たしてゐた。足立は、

青木よりも少し若い位の年頃であつた。男らしい額には軒昂とした意氣を示して居る。物言ひなどのテキパキとして、且つ大人びたところは、早くから浮世の波に擦まれたらしく見えた。かりそめにも曲つたことの嫌ひな男であると、日頃他から言はれて居たが一面には甚だ氣象の面白いところが有つて西國の人に特有な聰い感覺を具へて居た(五三)

岸本の囊中は空しかった。この拂ひも嘗にして貰つた(五八)八月の末に、青木は東北の旅から歸つて來

た。彼には妻の操の外に一人崇拜して居る異性の友節子と云ふのがあつたが、それが亡くなつたと云ふ日、「知己は多く得べからず、節子の如きは吾生涯に於て有數の友なりしを」

と日記に書いて妻にも見せた(六一)歸るき間なしに岸本の下宿なる鎌倉の某寺を訪うたら、岸本の窮狀は彼の豫想の通りみじめなものであつた。彼は岸本に八戸行を勧めた。そこには文學に理解のある富豪があつて裕に岸本の居を寄するに足る見込であつた。岸本は早速その勧めに隨つて八戸行と決した。荷物と云つても着換の單二枚と、峯子から贈られた懐劍一振とだけである。零丁孤苦眞に哀れの漂泊兒然たる有様であつた(六四)彼は先づ久し振で東京に入り、嘗を訪うた。

山の一件(お君のこと)が起つてから以來、嘗と岸本とは急に別の親密を加へた。二人の友達は互に心の顔を合せたやうな氣がした。(六七)

嘗の家には祖母、妹、叔母、従姉妹など賑かに同居して居つて皆親切に世話をしてくれた。嘗は勝子の在學してゐる麴町の學校(そこは、岸本も先年まで教鞭をとつた處)へ教へに行つて居たのでその好意で岸本の手紙を勝子に言傳へた。「八戸へ行く前に是非一度逢つて

話したい」と言ふのであつた(七三)さうしておいて彼は西京に在る峯子と自分との關係を回想した(七四)七六)勝子の返事には「逢はない方がよいかと思ふ」と云つてあつたに拘らず、岸本の留守中に尋ねて來たりなごした(七八)嘗はお君のことだん／＼思ひ煩ふやうになつた(八〇—八一)岸本の八戸行の旅費は市川の斡旋で傳馬町の岡見から出してくれることになつた。出發の日が近づくと共に彼は勝子に逢ひたいと思ふ情が益々切になつて來た。さう思ふ都度彼は峯子を聯想した。

薄紅い柔軟な、女らしく肥つた手は、暗黒にも岸本の眼に見えた。峯子の手だ。それはまだ世の中の濁れに染みない人の處女らしい手である。その手が勝子の手に彷彿であると、岸本が峯子の前で云つた時に、峯子は微笑み乍ら引込まれたことがあつた。岸本は彼の姉さんらしい女を通して勝子の手を見つけたのである(八八)

さ、さう／＼二人が逢ふ日が來た「同情の深い嘗は食客して居る友達の身を憐んで、

「茶や菓子を出すやうに階下へ命じて置いたかられ。それから僕は一寸用達に行つて來るよ」

と云つて、その場を外した(八八)それは風のない、妙に底熱い何となく氣の遠くなる九月上旬の午前であつた(八九)双方ともに山程も話すことがあるやうで而も何も話せなかつた。師弟の關係と云ふことが、何となく話の發展を妨げた。

入口のところには車夫が待つて居た。格子戸を出て勝子は名残惜しさに岸本の方を見た。二人は無言の思を交換した。其時ばかりは師弟の禮儀を守つたとも言へなかつたのである(九一)

後で考へて見ても格別此と云ふ話もなかつた。女は、昔弟子として笑つて見せた其同じ口唇で微笑んだ。以前の學校の噂でもするやうな調子で彼女は許婚の噂もした。彼女を宗教に導いた森下と云ふ人のことも言つて「一度お會ひになつたら可いでせう」とも勧めた。岸本がこんど寄寓する八戸の酒屋の名を書いてやらうとした時に、丁度彼女の座つてゐる櫃手の菅の本箱の上に巻紙がある。勝子がそれを取つてくれようとする。岸本が立ち上る。思はず二人の手が觸つた。斯う云ふ一寸したことがはつきり印象されてゐた(九三)と間なく彼は岡見を訪うた。清之助は不在で妹の涼子が應接した。連中の中で、傳馬町とは此娘のことで、

下町風の瘠せぎすで、どちらかと言へば小造りの方であつたから、年齢よりは若く見えた。可惜いことには身體が弱かつたが、弱い位だから世の中の歡しいや哀しいも早く解つて伶俐な考へ深い容貌をして居る。普通の女に見せようとして、深く才氣を隠して居るやうなところもあつた(九六)

これは殊に市川とよく合つてゐた。岸本はこゝで夕飯もよべたりして待つてゐると、灯ともし頃に清之助が歸つて来た。

色白な沈着いた額や、男らしく優美な頬は、彼の綿密な性質と相俟つて、他の兄弟と面白い對照を成して居る(九七)

こゝに一晚泊つて旅費を貰ひ、羽織のおふるを貰ひして暇乞した「岸本八戸行」と云ふことを青木は國府津に近い前川村の居で知つた。青木はその頃から又不安と焦躁とに襲はれ出した。彼は多くの物に――それは希望にも、生命にも欺かれたと考へた。これから絶対に自己の獨立、自分の好むことより外には何事も爲すまいと考へた。妻の操は郷方に歸る毎に父母や知人から言ひ知れぬ屈辱を感じさせられて歸つた「すべてものを犠牲にして、愛し愛されてやつと一緒になつたの

だからどうあつても、圓滿にやつて行かなくちや……さうだ私は近所の娘に針仕事を教へて、ちつとでも夫の經濟を助けよう」と健氣にも決心した「彼女は淡泊な方で、斯の貧しい境涯を左程苦にするまでもなかつたが、東京の女達のことを考へると、流石に肩身の狭いやうな心地になる」鶴子が幾らあやしても泣きやまぬと青木は「不思議な怒の情が來て、急に彼の身體を震はせた。思はず口唇を噛んで、嫌と云ふ程抱きしめる

と鶴子は一段高くワツと泣く。勝手の方では操が、かすかに啜り泣くやうなこともあつた(一一一)或日青木は岸本から端書を受取つた。見れば岸本は早や鎌倉へ歸つて來る。さうかうしてゐると菅が岸本を連れて青木を訪うた「岸本君どうしてそんなに早く歸つたんだ」と言はれても彼には何の答へもなし得なかつた。菅は々の序を以て、塔の澤のお君のことに深入した。そして歸る時には「岸本君をよろしく頼む」と云つておいて行つた(一一九)熱狂的な青木と岸本とは暫らく平和な幾日かを過した。その中青木が新作の「蝶の歌」を見せた(一二三―一二六)それは彼自身の結婚生活の體験を語つた悲痛な叫びであつた。操は傍から「運命のそなへし」は「運命のさだめし」になす

つてはどう?…など助言した。詩人のホームらしい笑ひが洩れた(一二七)青木はいろくの稿本を取出して見せた。中には戯曲もあつた。

なにしろ時世が時世で左様新らしいことは許されなかつたからありあまる程の思想を持つて居ても、それを適當な形式に盛ることが出来なかつたのである(一二八)

青木方に居候の第一夜は彼は「實に淡泊として好い夫婦だ」と思つた……とトロ／＼と睡りに落ちたが、青木獨りは眠られない「薄暗い、寂しい古壁の上にあるものは、唯悶きに悶いて居る彼自身の影ばかりであつた。海の音が聞える。

大海怒り、激浪躍るにあらすや。人間何ぞ獨り静なるを得む。

斯う繰返した。彼には自分の生命の火が恐しい熱で燃盡きるやうに感ぜられた(一三一)夜はあけた。彼は蒲原有明の譯歌(一三二―一三三)を歌ひながら岸本と二人で海岸へ出た。

「八戸で錢別に呉れた金は、途中の旅費を差引いて了つても、まだ一月餘りを支へるだけある。其中から彼は東京で寫眞を撮つて、一枚は西京へ送り、一枚

は勝子の許へ送り、餘は友達に分けた。……別に岸本は書籍を一冊買つて世話に成つた禮として、それを西京へ送つた。彼はまた峯子へ宛て、最後の手紙を書いた「弟にあたる人とは長く交際を續けたい」など、も書いた(一四一)

これに對する峯子の返事は極めて尋常で「弟こそは幸福者、末長く見てやつて下さい」と淡泊に認めてあつた。そして問なしに、洗濯物と清心丹との小包を贈つて来た。「恐らく峯子は兄のやうに、岡見を考へ、弟のやうに岸本を考へたのであらう(一四二)

岸本は愈々孤獨になつた(一四三)そして後先を考へる餘裕もなく勝子の宅へ宛て、直接に手紙を出した。それに對する勝子の返事は「まかに眞情が吐露されてあつた。『文學も君故に好きになつた。……君の心を力にして自分も女らしい道を歩みたい。あ、わが身は已に死せるなり。残るはたゞ君を慕ふ心あるのみ……清い交も續け難いものと聞いて居るが……』」など書いて寫眞が一枚添へてあつた(一四六)

彼は一層戀の情に燃えた。勝子がなければ現世に生て居る甲斐が無やうに思つて来た(一四七—一四八)その時彼は青木の論文を読んで「確かに青木は自分と同じ

が啼いて通つた。

その荒い叫び聲は怖ろしく岸本の頭脳へ響けた「ああ——自分の頭腦の内部の聲だ(一六四—一六五)

と思つた。それからブラリと下宿を出て銀座の馴染の時計屋で鐵側の時計を三圓に賣つて新橋の畔の牛屋で一人で一杯飲んで、興奮の餘り勝子の手紙と寫眞さを裂いて捨てた。その心持は、恰も思慮のない少女が、抱いて寝るほど大切にした人形の髪を捻つたり、衣服を裂いたり、手足を振取つたりするのと似てゐた(一六九)そして其夜は圖らずも狭斜の巷に肉の歡樂を追うた(一七二)さめた翌日は限りなき悔恨と慙愧の情に、さある散髪屋に入つて頭をツルリと剃らせた、汽車で鎌倉まで駆けつけて馴染の僧から十徳を譲り受け、それから漂然と、悲哀な——どこか甘いところのある放浪の身となつた(一六七)行き暮れて、さある寺庵に一夜の宿を乞うて斷られ門の寺男に握飯三つと澤庵二切とを恵まれた。これが自由の放浪に於ける第一歩の困苦であつた(一八一)

その次の夜七錢の木賃宿に無いと思つた袂から拾錢の銀貨が出て「明日のことなど考へてゐられない」程疲れた體軀を横たへ、第三日目からは眞の「さすらひの

道の先驅者である」ことを感じた(一五一)そこで青木に逢ひに行つた。青木は自作の新體詩を朗誦した。

ひとつの枝に雙つの蝶

羽を収めてやすらへり

露の重荷に下垂る、

草は思に沈むめり

秋の無情に身を責むる

花は愁に色褪めぬ。

以下凡べて青木自身の結婚生活を悲歌したものであつた(一五八)ついで岸本は鎌倉の寺前の飯屋で赤の御飯でお粗末な天長節の祝ひやうをして東京に行つた「勝子は死ぬかも知れない」など思ひつゝ(一六〇)

身體と言はず、精神と言はず、彼は今崩えて出る木の芽のやうな自分の生氣に壓されて胸の塞がる程苦しい人である。彼は最早自分で自分を制へる事の出来ない人である。ただ、怖しい勢で押出されて行く人である(一六〇—一六一)

市川の寓を問うて涼子との情話を聞いて、其角嵐雪の昔よろしく蒲團の引合をしてやすんだ(一六二)翌日は、池の端の菅の下宿で一晩厄介になつた(一六三)翌朝菅が學校に行つた後で窓によつて居るとその上を雁

人らしい寂しい路を辿つた(一八四—一八五)幾多の忍苦の後、彼は渴して墓に手向けた死人の水を取つて飲み、自殺をするつもりで濱道をトボトボと辿つて行つて突然、

此世の中には自分の知らないことが澤山ある——今こゝで死んでもツマラない(一八九)

と思ひ返して、又後戻りをした。偶然にもこゝは青木の宅のある前川村の隣村と云ふことがわかつて彼は青木の宅をたよつて行つた。青木は近所に行つてゐて不在だつた。それを操が呼びに行つて「西行さんが見えませんでした」と云ふ(一九〇)青木はよく漂泊の希望を云うて「今西行になりたい」と妻に話してゐたのでさう云つたのであつた。この突發の事件の爲に青木は妻と別居の心を變へて苦しいながらも同居して相愛しようと思ふやうになつた。彼の目下の収入の途は麴町の學校、宗敬事業の手傳、陶山の社からのまれた文豪の傳記、などで、外に戯曲にも手をつけたが、とかくまとまりにくい「安珍清姫を逆にしたやうな人」として青木は同郷の知人——私立學校の政治科出身の——に紹介した。青木とその人との間には熱のこもつた時局論が口にせられた。それを聞いた岸本は少し心が開け出した

(二〇二) 切り詰めた生活の中でも青木夫婦は岸本を親切に疵つた。「本當に岸本さんは宅によく似てゐらつしやる(二〇七) こんなことも操は云つた。麴町の學校はその後紛擾続きで青木はとうとう辭職した。かうなる以上創作に専心努力する」とは云ふが、どうもはかがゆかね。こんな所に厄介になつてゐるのも氣が氣でなく、岸本はとうとう上京して、明治座の裏手にある(つひ) 龜河岸の兄民助の宅を訪つた。民助は近々結婚しようと思ふので、家の道具などを澤山集めてゐた。岸本が眞實の告白と剃髪とは意外にも兄の好意を取戻してやがて二人で恩人——大川端の田邊の家に行つた。高い敷居をやつとまたいで叔父の方は寛容に出られたが叔母の方から嫌味だらだらを浴びせられた。けれども結局内入を許された。併し「どうしてそんな旅をする氣になつた」との間ひに對してだけは、何事も云はなかつた。

言へて言はないのではない。言へなくて言はないのである。漂泊のそもそものは民助に告げた通り、彼が勝手に逢つてから、激しい心の動搖を感じて來たのは事實だ。自分の家が自分の家でなくなつて來たのも事實だ。物の奥底に隠れた意味を考へるやうに成

つたのも事實だ。洪水が溢れて來たやうに押出されて行つたのも事實だ。彼が其日まで經て來たことはすべて邊に起つた新生の光景である(二三七) 強ひて聴かうとすると「話したつてわかるまい」と言つたそぶりをするのが叔母には癢であつた(二三九) 久し振に自分の本箱を見た。そこには「叔父や兄には寢言のやうに思はれさうな、新しい思想を書いた、種々の本が一緒に藏つてあつた(二四三) 彼は、こゝで再び書生をして、もう一度世の中を見直さう」と考へた。(二四四) 田邊の家の弘(十歳)は岸本にもよく馴つたが、始終芝居を觀に連れて行つて貰ふので、その眞似が上手と云ふので大勢もてはやした。父は却つて心配をして役者にでもなつちや大變ださ云つてゐる(二四五—二四六) 叔父は岸本をも弘をも、自分も同じ商業の道を歩ませたいと思つてゐる。「叔父の心男知らず、男の心叔父知らず」であつた。民助は銀主(加藤と云ふ)の家を借受けて三輪に引移り、國からは母が姉や孫娘を連れてやつて來ることになつた。そこで岸本は十三年振に母に會つた。

彼が亡父の斃命を受けて東京へ遊學したのは、まだ髪を河童のやうに冠つて居た頃、金米糖を旅の糧に

入れて貰つて勇んで國を出た程の少年の時であつた(二五〇)

その頃になつて青木は元敷寄屋町の自分の宅——それは、しつかりもの、老母が構へて店を切りまはしてゐる——のへ移つた。菅の下宿が地の利を得てゐるのでよく連中の集合場になつた。或日市川と菅と青木とはかうした會合の後、一緒に散歩して谷中の方へ出て愛護精舎の前のごごかの細暖簾を滑つた。その時青木は、僕は世を破る積りで居て反つて自分の心を破つて了つた……一體悟るさといふことが氣にくはん。迷ふなら飽くまで迷ふが可いちやないか、尊氏にしろ、光秀にしろ、何故彼様一生の終になつて、悟りといふ奴に欺されたんだらう。何故清盛や將門のやうに迷ひ盡さなかつたらう(二五四)

など云つて相客に怪訝に思はせた。そしてその歸途動物園の前の處で一人の元の學友——成功した青年紳士の腕車とすりちがつた(二五五) 菅の戀は大分叔母さんに理解されたが、それでも思ひ切つて結婚を許すまでは至らなかつた。

どうせ左様長く美しい夢が續くもんぢやないよ。いつまで君、戀の影なぞに欺されて居られるものか。

唯、誠が残れば可——僕は左様思ふ(二五八) など云ふ。

青木の母は勝氣な未亡人氣質の人であつた。「駿(青木)はまだ獨立の見込が無い癖に結婚を急ぐのは可けない」と云つて、反對したものだつたが、本人の志望が堅いので、やむなくしたい儘に打ちやらかしておいた。それがこの節いけなくなつて自分の宅へ若夫婦が同居するとなると、てつきり自分の豫想が適中したので二人の生活振をぢつと眺めてゐる中に「これはどうしても可けない。遠い行末の爲を思ふと當分操を里へ預けて、青木の經濟上の基礎が確立するのを待つて一緒にするのが得策だ」と思つて或日そのことを持出した。けれど操は飽くまで一身同體の實を盡したいと云ふ考へなり、青木にも又別の心持から分れたくはなし、結局母子の心は阻隔して來た(二六八) かうした家庭の悲劇は青木を驅つて宗教の門に入らしめたが、それでも可けない。年少な節操のない美女の許へ走らせたが、それでも可けない。どうにかして生命の火をかきたてようとして焦つてゐたが、どうにもならない(二七一) 彼は殆ど空想に近い理想に熱狂した(二七六一—二七七) 「人間の靈魂を建築する牧師(二七二)」を以

て自任したものが、或時は身は牢獄に繋がれて、窓からは今にも落つこちさうな石が絶壁にかゝつてゐるやうな悪夢に襲はれもした(二七六―二七九)操は夫の心持とも隙が出来、姑とは無論合はず「私がお氣に入らないんでせう(二八四)」と歎息するやうになつた。青木は戯れに子供をあやしてゐる中途で眞顔に、鶴ちゃん、堪忍してお呉れ。親のつとめも盡さないで済まないね(二八六)など云ふこともあつた。「唯矢盡き、刀折れたんだ。操まあ左様ぢやないか(二八七)」とも云ひ「お前も敗北者なら、俺も敗北者だ――奈何だれ、いつそ俺と一緒に……(二八八)」など云つて妻をあきれさせたりもした。それから家族のものは、みな彼を警戒しかけた。双物なんかを隠すやうにした。

死は近けり。わが生ける間の「明」よりも、今死する際の「薄闇」は我に取りては難有し。暗黒――暗黒――わが行く所は關り知らず、死も亦眠の一種なるかも。眠ならば夢の一つも見ざる眠にてあれよ。をさらばなり。をさらばなり(二九二―二九三)彼は己の此舊稿を見てト胸をつくやうになつた……と或日、夜の十一時頃物干に異様な悲鳴が聞えて彼は出刃で喉を突いて悶えてゐた。操や外のものがかけつけてヤツと双

物を奪つて危く一命を取りとめた。愈々本物の氣狂に見られた(二九四―二五九)朝晩操は夫の爲に祈つた(二九七)

二月が来た。麴町上二番町から五味坂の方へ連接してゐる道路にも草の芽を見るやうになつた。その邊を「青森」と云はるゝ岡見の情人磯子と「盛岡」と云はるゝ勝子と行き逢つた。二人は手に手をとつて勝子の姉の家へ入つた。その手の血汐の躍りあそばいで「二人の處女は互に情の爲めに燃えてゐることを感じた(三〇一)姉の娘達は「お勝叔母さん」「お豊叔母さん」と云つて姉妹を言ひわけて居つた。豊子は勝子の不在中に許嫁の麻布――それは温厚な少壯な植物學者の来たことを告げた。勝子の頬は若々しく紅らんだ(三〇三)無邪氣な學校生活の笑ひ話の羣をそれて勝子は岸本に宛て、やる感想も日記もつかぬ一篇の長文を草し始めた(三〇七―三〇九)

今妹が入つて来た。姉さん、何を其様にお書きなさるの」と言つた。勝子はそれを書いた(三〇八)

勝子の胸には今、三人の人のがある。一人は許嫁の麻生、一人は病んで居る森下、一人は岸本である。時とするとな勝子は博愛といふやうなことを考へて、こ

の三人を同じやうに待遇はうと思ひ煩ふこともあつた(三二二)

菅の好意で岸本と勝子とは再び逢ふ時が来た。つかぬことを少し話したが、その話してゐること以外の心の會話がより以上意味の深いものがあつた(三一五―三二三)此池の端の菅の下宿は市川が来たのと、主婦の人が好いのでよく連中の集會場になつた。シエレイの畫像の前で盛んにリネサンスを論じた時の氣焔はなかつた(三二五)足立が山の日記もこゝでよまれた。それはお君さんの一件で奔走した彼の友情の濃やかさを展開したものであつた。

叔母君は……未だ何處にか、儒教的の思想あれば、戀といふ事の眞の味をば解し給はぬさまなり(三二七)戀とは他性の内部に己を見出すことにして、人間の眞價は、此内部の人の如何によりて定まるものなり(三二八)

人間の眞價は、外面のみにては判じ難からむ。人間の位も、學も、財も、衣服も、容姿の美も、みな擲ちて後、さて残るものはなにかあるべし。この純の純なるものこそ、眞の内部の人間なれと思ふなり。(三二八―三二九)

そも戀は一時の假情なられば、時を經、日を過す程に今は全く精神全體の働きとなり、一個の主義を固定し、遂に其目的を得ざれば止まず、ますます激甚に突進するものなり(三三〇)

など新意見もあつた。彼等の一團は「たゞ若々しい生命を樂しまう」と云ふ意氣(三三五)「胸壁を衝いて湧き上つて来るやうな、活々とした内部の生氣」に押されて、夫を如何ともすることが出来なかつたのである(三三六)菅の従兄弟の栗田と云ふのも来て、蕪村の俳句などを吟じて聞かせた(三三六)岡見の弟の福富(高等學校の學生)も加はつて、此はよく西洋音樂を談じた(三三七―三三八)

勝子が四ヶ月振りに書き溜めた手紙が岸本の許に來た。内容は一帶に姉さんじみて「さうあせるばかりでは可けない。靜かに時を待て、又別種の戀に活きる途もあらう」と云ふ風のこと、事細かに書き立てられてあつた(三四二―三四四)彼も最近の苦しい閱歷で幾分かその心持が汲みとれるやうになつた。彼は其手紙やその他の秘密書類をいつもの手提鞆に入れて、案内を受けた麴町の學校の卒業式に行つた(三四二)その日は過去つた事をいろ／＼思出させるやうな日であつた(三



四三)

「お、岸本さんか」と云つて廊下で立ち話を一寸した。それは岡見であつた。

長めにした癖のある髪、すこし蒼ざめた廣い額、種々な境涯を経て来たらしい頬、其他斯の人の容貌や風采に顯はれたところは、いかにも男らしい沈着を具へて居て、それでも何處かに常道を歩みさうもなささうなところが有る。任侠と云つたやうな豪放な氣風と、隠者に見るやうな用心深いところが、一緒に成つて混つて居るやうにも思はれた(三四五)

卒業式はプログラム通り進行して、彼はいろんな人に久々で遭つた(三四七—三五五)

岸本が市川を尋ねたのは節句の前日であつた。

萬の物は生氣の爲に蒸されて居る。悶えて居る。斯ういふ季節は若いものに取つて堪へ難い(三五八)

吾儕はすこし早く生れて來過ぎたんぢや有るまいか(三五八)

市川といふ男は西洋料理を食つて反吐をはいたやうだ……斯ういふ難有い批評をある大家から頂戴したハ、ハ、ハ(三五八)

と云ふやうな、連中のアトモスフェヤを推測せられる

會話をかした。又市川は傳馬町のお涼の噂もした。逢ふ度に別の人のやうに見えるは彼の女である。あの時は頬の色なども紅味を帯びて、斯うボウと表情に富んだ顔付をして居るかと思ふと、ある時は又「蒼ざめて殆ど血の色なども無いのかの様に見える——あれほど不思議な人はない(三六一、このお涼の人となりは、同氏の作、破戒のお志保、新生の節子とよく似て居る)」

又森下の噂もした。

盛岡や傳馬町が見舞に驅付る位ですから。彼の先生も一度退院して又近頃入つたんださうです(三六三)又勝子の噂もした。許嫁の麻生の前で從來の凡べてを告白して「併し私は貴方の言ふ通りに成ります」と言つたことや、多分は父が盛岡へ連れて歸るであらうと云ふことなどを(三六五—三六六)

其晩岸本は銭湯に浸つて想を纏めて、勝子へ最後の手紙を認めた。結局「許嫁の人の處へ行くやうに」と云ふに落した(三六七—三六八)五月十六日の午後岸本は池の端の下宿を尋ねた。菅だけ居た。そこへ操からの端書が舞ひ込んだ。

駿一こと昨夜死去つかまつり候、とりいそぎおしら

せまで申入候何卒皆様へもお傳へ下されたく候。十日六日朝。

とあつた。早速二人は芝公園へかけつけた(三七三)

白晝のやうに明るかつた月の光の静かさは、青木の魂を誘つたらしい。彼は生の荒廢に堪へられなかつたらしい。庭の青葉のかけで彼は縊れて死んだ(三七五)

新聞は今更のやうに彼の奮闘を讃へた(三七七—三七八)葬式は賑々しく營まれた(三九〇)やがて白銀瑞松寺に一基の墓標が建てられた。

青木駿一之墓。

と書いて(三九〇)

始末のよい青木の遺書は残らず整理して残してあつた。操はその中から彼が始めて彼女に言ひ寄つた手紙が出で来たのを讀むと彼が生ひ立ち並に彼が廿歳前後の青春時代の情熱ある生の息吹が甦るやうな心地がした(三九一—四〇九)

彼の死因は彼女にも解らなかつた。彼の友達にもわからなかつた(四一三—四一四)

岸本の兄の民助は日頃信用して居た男に欺かれて、過つて偽造の公債證書を使用した爲に鍛冶橋の未決監に

送られた(四一六)これから有罪の宣告、控訴、棄却、上告の手締をするまで岸本の周圍には經濟難と、失戀と、零落との陰惨な歲月が流れた。岸本の母や、民助の妻お秋、今一人の兄で廢疾の爲に何も出来ない幸平(これは氏の「家」の「宗藏」に當る人歟)は、唯岸本一人を杖柱と頼まればならぬやうになつた。差押の貼紙のしてある膳で食事をする彼の心持は痛く減入つた(四二八)彼が放浪の記念たる法衣も差押へられた。

お秋には九歳になる女兒お愛と云ふのがあつてまだ下が今妊娠中であつた(四三三—四三四)「十一時三十分」と渾名する周旋屋が輕薄な破産の幹旋をしに來ては、晝飯を喰つて歸りした(四三六)彼は已むなく麴町の學校へ通勤しだした(四三七)或日廊下の處で、ヒョッコリ勝子に遇つた。いよ／＼國へ歸るさ云ふので暇乞に來た處だつた「先生いる／＼御世話様になりました……(四四一)」と云つた眼は涙にうるんでゐた。其後岸本は湯島の手狭な方へ一家を引越した。母は乳癌を病つて入院する。お秋は男の兒を分娩したが脚氣の乳を吞ませたので亡くなる。國からは伯父が財産の整理にやつて來てくれる。不本意な多忙の中に月日はすん／＼たつて行く(四四七—四四九)

そこへ勝子の計報を耳にした。何気なく舎監が「安井さんが亡くなつたさうですが御存じですか」と云つたやうな風で耳にしたのが彼の精神には一大打撃であつた。勝子の臨終は姉から關根校長に宛て、報ぜられた「姪娘の爲めツラリとかゞ甚しく——心臓病を併發し云々」とある。併し彼女が内鬨の苦衷は岸本ならでは知る由もなかつた(四五七) 妹の豊子は「懐舊」と云ふ一文を草して岸本に「直して下さい」と云つて渡した(四六三) それも彼には痛ましい思出を誘ふ勝子の死を哀しんだものであつた。

十二月になつて房州小湊にある日蓮の生地を見に行つた岸本は、鹿野山越で石ころを下の谷川へ落して自分の一生の方向を卜つたりした(四六五) 頃はまだ心が動揺してゐた。

年が立ちかへつた。足立は二十八、菅二十七、岸本二十五、市川二十四、福富二十三と云ふ年が立つた(四六六) 森下は逝き、足立は検定試験に合格して地方の中學に聘せられることになつた(四六七) 菅は大學の選科に入つて、英文學を専攻する。福富は文科、栗田は醫科、岡見の弟は工科と各自の進路は定められた(四六九) 福富の文の一節に云ふ、

ビウス二世が法王の位に上らざりし時、其甥に送るうちに「少年の時はめでたきものなり、人生の五月も歌ばしきものなり。されど學藝はそれよりもめでたく知識はそれよりも歌ばし(四七〇)

と、そして連中は岸本の旗幟が不鮮明だと評し出した。(四七〇) シエレイの畫像も今は以前程興味を惹かなかつた(四七四) その頃の同人には堤姉妹(多分は樋口一葉をモデルにしたものだらう)があつた。和歌から小説に入つて已に一家を成してゐた(四七八)

互ひに若い生命の萌出した時分には同じ様な氣分で居た事もあつたが、梅は梅、柳は柳といふ風に、最早別れ／＼の人に成つて行くのであらうかと考へた時は哀しかつた(四八〇)

岸本もいよ／＼學校をやめて創作に熱注しようと思つた(四八二) 雲に更くる春寒の夜を茶の間で彼は、「母親さんは奈何いふ積りで僕のやうな人間を造つたんですか」

母親は長火鉢の灰をならし乍ら苦笑した。「左様いふことを聞くのは一番親不孝な言葉ださうだ(四八四)

連中は青木と云ふ中心を失つてから頓に惰氣を帯びて

來た。却つて新來の松浦安藤の方が熱心だつた。

自分等の眼前には、未だ開拓されて居ない領分がある——廣い潤い領分がある——青木は其一部分を開拓しようとして未完成な事業を残して死んだ。斯の思想に勵まされて、岸本は彼の播種者が骨を埋めた處に立つて、コツ／＼その事業を繼續して見たいと思つた(四九〇—四九一)

そこへ關根から養子の話が持出された(四九二) 彼は又もやその誘惑に彷徨した。麴町の學校は一夜の失火で烏有に歸した(五一〇) 彼は築地のながし園(陶器畫専門の仕事を見習に行つたが、創作とは大分遠い工藝的技術は一日にしてよしてしまふやうなものであつた(五一—五二二) 空想の記念はその主人がくれた花鳥模様の菓子皿一個あるのみで(五二二)

切通坂のあたりをうろついてボンヤリ過去を追想すると昔高輪の學校で文學・宗教・哲學の講義に聴き惚れた時のことが一番懐しく思ひ出された(五二六—五三三) 其日岡見とでくわして拾圓を恵まれた(五三四) が岸本の一家にとつては燒石に水も同然であつた。思案にあぐんで彼は西京の峯子に宛て、無心狀を出した。(五三八—五四〇) そして死人のやうにグツタリ寢込

んだ(五四一) そして目覺めては又しても自分の幼時「鑄かけ屋の天秤棒」とよばれる程出過ぎてはしやいだ往時を思ひ出しなどした(五四四—五四九)

「我は敗北者なり」など、は小欠にも出したくなかつた。斯ういふ眞惜みの強い、自分を知らぬことの少い、盲と啞と聾とを兼ねたやうな青年が、人生とは何ぞやといふ疑問に逢着しながら、その解決に苦んで寢床の上に震へて居る光景は——丁度深傷を負つて戦場の草の中に倒れ乍ら、まだそれでも抵抗する氣で居る兵士のやうなものである(五五〇)

彼の懐中には黒塗の鞘が秘められてあつた(五五一) うつかりすると第二の青木にでもなりさうな心地のとこへ菅が訪うて來た「溝口よりは君の方がまだと噂したんです(五五三) なども云つた。溝口は腰のぐらつくこと第一等と云ふ青年である。

幾度か彼はあの友達の後を追つて、懐劍を寢床の中に隠して置いて、悶死しようとしたのである(五五四)

それから又漂泊の氣分になつた。親はもとより大切である。しかし自分の道を見出すといふことは猶大切だ。人は各自自分の道を見出す

べきだ。何の爲に斯うして生きて居るのか、それすら解らないやうなことで、何處に親孝行が有らう(五五四—五五五)

と。そこで旅費のつもりをしようと思つて、かつて兩國の古本屋で克明にあさつた木版本の俳書や、淺草で買った唐本などを持つて出た時彼は、この前漂泊の門出に、青木が、

一輪花のさげかしと

願ふこゝろは君のため——(五五七)

と饒別してくれたその句を思出した。

神田の或古本屋を指して行く中途、ふと某耳鼻科の醫院の宅の前を通つた。その主人の弟と云ふのは耳が遠いが嘗て麴町の學校で同僚だつたので、何気なしに寄つて見る氣になつて玄關を叩いた(五五七)と云ふが偶然にも「仙臺の學校から岸本に来て貰ひたいと云ふ話があるな處で彼を待つてゐた(五五八)民助の上告もその頃になつて好都合に前判決を棄却されるやうになつた(五六三)此迄の一族と國許の甥(岸本の姉の長男で太一と云ふ、これは氏の「家」の「正太」のこゝと歟)なども一緒に「とろ、汁」で信州そつくりの暖い團欒の下に送別の催しは開かれた(五七〇—五七六)菅

は八月號の雑誌を投げ入れてサツサと歸つた(五七七)

上野發の車窓をすかして、

あゝ自分のやうなものでもどうかして生きたい(五八二)

斯う思つて深い溜息を吐いた(綠蔭叢書、第二編、四六判五八三頁、明治四十一年十月十八日、上田屋書店)

**はるさと 村田春郷** 二三九九—二四二八、元文四—明和五、九、一八、三十歳

近世、江戸の歌人、豪商春道の男で、眞淵の門に入りて(玉川にうまし玉あり云々と眞淵の稱へた人)和歌を嗜み、家督は弟春海に譲つて閑居し専ら作歌して適樂したが、不幸にして若死した「春郷家集」が彼、唯一の記念集である。

鴉鳥の葛籬早稻田露散りて穂の上に秋の初風ぞ吹く

**はるには 本居春庭** 二四二三—二四八八、寶曆一三—文政一一、二一、七、六十六歳

幼名建造、又建享と號し「後の鈴の家」とも號した。幼より父の志をついで熱心國學を研究したが年四十餘

にして眼疾にかかり、明を失つたので已むなく家學は養子の太平に譲り、己れは醫道の方を繼いだ熱心にして強記その後の進境も著しいものがあつた。

人となり温順篤行にして物に競はず、恭謙よく人に接するので弟子も多く從學したといふ。彼の國語學上の貢獻は活語の學の方面にあつて詞の八衢・詞の通路の價値は眞に不朽である。その他道のさき草・門の落葉・後鈴廻舍集などの著がある。

**はるのひ 春の日**

芭蕉七部集の一つ、貞享三年(二三四六)に成る(俳諧註釋集上)

**はるのや 春廻舍**

せうえう「坪内逍遙」を見よ。

**はるまち 戀川春町** 二四〇四—二四四九、延

享元—寛政元、四十六歳

本名は倉橋格、通稱を壽平と云ひ、別に壽山人と號して居つた。小島侯に仕へ小石川春日町に住んでゐたのでそれをつゞめて戀川春町と號した。早く狂歌に才を暢べ酒上不埒と號して多く味んでゐたが次第に青本の作に興味を持ち、安永四年三十二歳の時「金々先生榮華夢」(續帝三四)を書いて俄に有名になつた。一種の

諷刺的教訓を盛つたもので、滑稽といふ點から觀れば反つてそれ以前の作「馬鹿羅洲ありんす物語」の方が優れてゐるが、

一、從來の草双紙の挿畫本位を文章本位とし

二、從來單に童幼の讀物たりし草双紙を大人の伴侶とし

三、從來戯作者の末技に過ぎなかつた青本の文學的品位を高めた

點に於て劃期的の名作である。その他彼の傑作は、

高慢齋行脚日記 安永五年(續帝三四)

楠無益委記 同 八年(同)

鸚鵡返文武二道 寛政元年

などでその他の作品約三十種以上もある。彼は又繪をも好くした。その師匠は鳥山石燕であつた(一説には勝川春章)

**はるみ 村田春海** 二四〇六—二四七一、延享

三—文化八、二、一三、六十六歳

近世、江戸の國文家且つ歌人として有名な人。姓は平、通稱平四郎、字士觀、號を琴後翁又錦織齋と稱へた。初め漢學を修め服中英・鷗士寧・皆川淇園等に就いて學び、後父、兄と共に眞淵の門に入つて國文・和歌

を學び、兄に家督を譲られたが、彼も亦性豪放で産を治めず、家財を蕩盡すれども少しも意に介せず、専ら心を歌文に傾けた。彼の文は唐床の八家の格を採つて我が古典に融合し天資の敏才よく斧鑿の痕を消して古今に獨歩するものである。又彼は加藤枝直や在滿・宣長の見解をも取り容れて和歌史上江戸派の首唱者となつた。「歌の本義は雅情に在り、この點に於て典據とすべきは古今集なり」と云ふが、主張の根本だが事實味んだ彼の歌は寧ろ新古今に近い華麗體の作だと謂はれてゐる。ともかく彼の唱へた江戸派は彼によつて廣布し、眞淵歿後大江戸の歌壇を取つて代つた趣があつた。彼の歌集であり文集でありするものは琴後集で十五卷申始め九卷が歌後六卷が文である。

あくまでも花見る度に嬉しきは世に營みの無き身なりけり  
あれにけるまがきも春はゆひそへむ董つみにさ  
來ん人の爲  
見し世には只なほざりの一言も思ひ出づれば懐  
かしきかな  
淺間山神のいぶきのきり晴れて雲井にたてる夕  
けぶりかな

花は早須磨も明石もちりにけり浦づたひして春  
やくれゆく  
彼は又長歌の作にも秀味が多かつた（玉昭君、歌琉球來聘使作歌、眞淵の三十三回忌に舊きを懐うた長歌など）その歌論の著には歌がたり（歌學全書一二）與稻掛太平書などがあり、隨筆「とほすがたり」にも散見して居る。彼は尙筆札をもよくし詩文などを録するに至りては米元章に髣髴たる卓筆を抑うたと謂ふ。最後に特記すべきは彼は單なる文章家、歌人ではなくて一家の見識を立てて居た學者であつたといふ一事である。曰はく、

わが國の道さる所は、周公孔子の道を捨て、別に道をわが太古に取るは、われいまだこれを聞かず、故に和字はわが字に非ず、漢字を假りてわが音に充つるなり。衣服冠冕皆隋唐の制度なり。百官有司は皆唐制を學びて稍是を變更したるものなり。律令格式は皆唐制を模倣したるなり。故に和學者とは儒者の本朝の典故言辭に通するを云ふのみ。歌學者は儒學にして歌を作る者をいふのみ。吾儕庸陋といへども又儒者なり。儒にして歌を作る者なり。然るに今の和學者は、わが國別に道なきを恥ぢ牽強附會妄りにわが

古史を引き人を欺き己を欺く。われ寧んぞこれを辨ぜざるを得ん。

と。尙他の編著をあけておく。  
神道志・歌苑類題抄・和學大概・齊明紀童謠考後案・假名拾要・五十音辨誤・明道書・わか、つら・不問語・作文通弊（時文摘批）・歌語・字合稱呼考・字鏡考證・假名大意抄・西土國習考・椿太詣記・恰野集拾遺・錦織雜記・古人贈答歌抄・仙語記・答和泉眞國書・筆のさか。

**はるみち 村田春道？**

近世江戸の豪商で、國文に興味を持ち、その二子と共に眞淵の門に入つて教へを受けた。二子は即ち春郷と春海である。

**はるむら 黒川春村 二四五九—二五二六、寛政一—慶應二、二二、二六、六十八歳**

江戸の人、通稱治郎右衛門、後、主水と改名、號は薄齋・葵園などいふ。幼より學を好み。始め三世淺草庵に狂歌を學び、四世を名のつて居たが間もなく之を笠亭仙果に譲つて和歌に心を傾け、之も益なしとして狩谷披齋の門に入り、考證の學に専心し清水・村田・岸本・塙の諸名家と互に切磋琢磨し清水濱臣・内藤廣前物故の後には都下の物識を以て推されたが、彼は隠者を

以て自ら居り、名利に離離することを好まなかつた。資性篤實、他の依頼を受けては我事のやうに徹底するまで調べてやつた。又その學風は精確で、述作をするのに「一々「某云ふ、某書に云ふ」とその出所を明かにした。彼れ繼嗣についても一個の見解あり、學統さ血統とを別けて學問の方は別に他から養子した。即ち後の文科大學教授黒川眞頼博士がそれで、家職の方は實子に嗣がせて之も其後商賣が益々繁昌した。古物語類字抄（墨水遺稿上）・古集蒐玖波集・集外歌仙傳・萬葉集墨水抄・音韻啓蒙・法華八講會年表・碩鼠漫筆・逸文風土記等有益なる著作六十餘種を遺した。

**はれこそで 晴小袖**

女流小説家大塚楠緒子の小説集で、女史の作風を代表するものは略々この中に收まつてゐる。小説としては離鸞齋・御新造・霜夜・湯の香・水たまり・炎・七色・密會・ひかりもの・白馬の十篇、外に翻譯五篇を收め巻頭に佐々木信綱博士の序歌がある（四六判三六二頁、明治廿九年一月一日、隆文館）

**はんか 反歌**

長歌に附屬する短歌をいひ長歌の大意を歌ひ、餘情を補ふもの萬葉集にこの例が多い「反」は反覆の意と見